
妖狐玉藻伝-幻惑の美狐-

宮座頭数騎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖狐玉藻伝―幻惑の美狐―

【Nコード】

N0055D

【作者名】

宮座頭数騎

【あらすじ】

伝説の妖狐と云われた玉藻美狐。彼女はある退魔組織の少年との出会いをきっかけに、人の可能性に興味を持ち始める。退魔組織、日本妖怪はもちろん。西洋妖怪も巻き込んだ彼女の物語が今、始まる。

プロローグ『ダイブ』

高層建築物が立ち並ぶ、闇夜の都会。

なかでも、ひとときの高さを誇る摩天楼。その頂上で、私は絡み付く風に銀の髪をなびかせながら、黄金色に照り輝く満月を眺めていた。

落ち着く――いつまでもその美しい光を放っていてほしい。そう願いたくなる。

今頃、私と同じ瞳の色をしたあの月を、二人の兄達も眺めているのだろうか。

柄にもなく、そんなことを考えていたその時、私はあることを思い出した。

腰に巻いた黒いウエストバッグから携帯電話を取り出して、時間を確認する――時刻は深夜二時。

「そろそろね……」

携帯電話を手早くバッグに収め、私は駆け出した。行く先は階段ではない。

摩天楼の外側――地上へと、迷いなく飛び込む。

「ハアッ！」

重力に逆らった風が、大の字に広げた私の身体に、強く吹き荒れる。

気持ちいい。目をつむっていても感じる、視界いっぱい広がる街の光は、星の海を連想させる美しさ。だけど着地地点が近付くにつれて、意識と全身の筋肉が研ぎ澄まされていく。目を見開き我に返った私は、身体を丸め回転しながら、より加速をかける。そして脚のバネで勢いを殺し、地を踏む物音すら立てずに着地を決めた。

衝撃でエントランス中央にふわりと風が吹き、屈んだ姿勢から私の銀髪が空にさらわれて、そしてゆっくりと風でいつた。

「ふう、今日はスカートじゃなくて正解だったみたい」

バッグと同色のショートパンツを見遣ってから、立ち上がり周りを見渡す。

人の気配は、全くない。

虚しく人工的な光を放つ街灯だけで、道路にはタクシーすら停まっ
っていない。

「やっぱり深夜に人はいない、か……」

事前に調べていたから判ってはいたが、見物人がいないと今のダイビングパフォーマンスが、無駄に終わったような気がしてつまらない。

まあ、見られたら見られたで後が面倒なんだけどね——苦笑しつつも、今一度唇を引き締めて私はその場を後にした。

殺風景な空間に舞う、淋しげな風を残して。

これから気に入らない奴をぶっ壊しに、私は向かう。

第一話 『気まぐれな彼女』

ビルが囲む様に立ち並ぶ、深夜の中央公園。

公園のシンボルである、中央の泉は、昼の時間帯には噴水が湧き出ているが、今はピタリと止まっている。

それを中心に向かい合う形で配置された二つのベンチも、腰掛けているのは私ひとり。所々に設けられている外灯の明かりだけが、わずかに辺りを燈し、私の影を生み落としている。

「……二時十二分」

携帯電話を開いて、時刻を再確認した後、周辺を軽く見回してみる。お目当ての影が現れる気配は、まるでない。それでも淋しげな静寂に包まれたこの公園で、私はある人物——いえ、正確には“人だった物”が現れるのを待っていた。

都市伝説の一つ。“怪人赤マント”の話聞いたことがあるだろうか？

夕方——ある小学生の男の子が一人、学校からの帰り道を歩いていた。ふと、人気のない路地裏で少年は出会う。赤いシルクハットとマントで長身を包み、人を嘲笑うかのような目と口元が三日月に吊り上がった、白い仮面で素顔を隠す者に。

「赤と青と白……どれが……いい？」

突然の質問。

背筋に寒気を走らせる、しゃが噎れた男の声色。そして薄気味悪い身形に、少年は戸惑いながらも質問に答えた。

「えっと——赤がいい」

「赤……」

マントの男が呟くと、しばし沈黙が続いた。だが次の瞬間には路地を突き抜ける、男の子の悲鳴が響き渡った。

それは男がマントの中から血に塗れた大鎌を取り出し、少年の脳天に振り上げるのと同じ瞬間だった。

「赤は——刻マレテ……血ニ染マル！」

男は狂ったように、大鎌を何度も、何度も振り下ろした。血飛沫がコンクリートの壁に付着し、アスファルトに血の池が広がろうと、その行為は生命の鼓動が止まった後も、限りなく続いた。

翌日、男の子は原型を留めない無惨な姿で発見された。

遺体は全身、血で真っ赤に染まっていた。

蛆の沸いた、肉の塊と成り果てて……。

男は、未だ捕まっていない。だが、この事件と別の所でも全身の血を抜き取られた死体が、また水のある場所では水死体が発見された。これらの事件にも赤マントの男の目撃例がある事から、高確率で同一犯の可能性があるとみなされた。

いつしか、これが噂として人々の間を行き交い、そして拡がり、都市伝説“怪人赤マント”が誕生したのだというが、真相は定かではない。

そして——私は今、その噂の怪人に会う為に、出現がもつとも頻^{ひん}繁^{ばん}だと言われている公園にいる訳だ。

何故、会わなきゃいけないのか、理由は極めて単純な事だった。つい最近、私は奴の被害者の遺体を見た。

夕焼けの公園を散歩していたら、ベンチの周りに人集りがしているのに目が行き、何事かと覗き込んでみた。

私の瞳に映ったのは、多量の血を溢れ流し倒れている少女と、それにすぎるように『お姉ちゃん』と泣き叫ぶ少年の姿。

誰が呼んだのか、しばらくして警察と救急車が駆け付けた……が、結局姉は手遅れ、犯人は捕まらずじまいに終わったと、次の日の報道で結末を知らされた。

後日。姉を殺された少年を公園で見かけた。少年は姉が死んだ場所、噴水の手前にあるベンチに腰掛けていた。俯き加減の顔。その目尻から頬へと伝い、雫はぼたぼたと太股に、煌めきを残して落ちてゆく。涙を流す少年を、周りは誰も気に留めない。日常茶飯かつ場景の一部分、所詮は他人事か……これでは、少年が哀れだ。

どうにも放ってはおけず。柄にもなく私は彼に声を掛け、姉が殺された事について尋ねてみた。

怪人赤マントの都市伝説を知ったのはこの時、少年の口からだ。そして彼の姉を殺した犯人が、その赤マントだということも――

事の顛末を聞けば、公園でよく出ると噂されていた赤マントの質問に答えてしまったのは少年であり、姉は彼を庇って死んだのだという。

自分が助かったのは、騒ぎに人が駆け付けた事により、奴がその場を立ち去ったからだ、少年は語った。

この出来事を警察に事情聴取の際にも話したのだというが、信じられなかったと、問う前に教えてくれた。

そして少年は私に、話を真剣に聞いてくれてありがとうと礼を言った後、夕焼けに染まり始めている空を睨み、小さく呟いた。

「警察は信用出来ない。お姉ちゃんの仇は……必ず僕が取る」

それが、私が聞いた彼の最期の言葉だった。

次の日。私が奴に――赤マントに会いに行く“きっかけ”が出来た。

街中を散策していた時のこと。

あの少年が殺されたのだと、ビルの電光スクリーンに映し出されたニュースで報じられていた。

死因から、奴が殺したのは明白で。少年の遺体には、右手に一本のナイフが握られていたとも付け加えられていた。

……返り討ちにあったのね。

少年の報われない無念――思うと、私の中で言葉に言い表せない苛立ちが渦巻いた。

「赤マントか……。気に入らない」

スクリーンを睨みながら、無意識に言葉は漏れた。いつの間にか唇も噛み締め、拳を握っている自分に気付いた。

この噂の怪人とやらに、会ってみたい。いや、会いに行こう――そんな吹き募る衝動が、私の心と体を突き動かした。

そして現在に至る。

私が今いる公園は、姉弟が殺された場所。

深い理由は要らない。

ただ調子に乗ってて生意気でムカつくから、原型を留めない程に、お前の血で更に赤く染め上げてやろうか？ と、内に潜む獰猛な血

が突き動かしただけ。

「——だから私は、あなたに会いに来たのよ。赤マントさん」

ベンチから腰を上げ、私は諭す。待ち遠しく思えた分の喜々からか、自然と口角が吊り上がって行く。

合わせるかのように、暗闇の奥から悪質な気を漂わせ、赤マントは姿を現した。

「赤と青と白……どれがいい？」

奴は私に歩み寄りながら問う。マントで身を隠し、足音を立てることなく、ゆったりとした足取りで。

無機質——でも、どこか危機感を煽るしゃが唸れ声と雰囲気を持つこの男だが……それだけだ。

「……ねえ、必ず答えないと駄目なの？」 両腕を胸元に組んだ状

態から、口元を覆うように右手を当てて、如何にも思索に耽る。そんな芝居がかった仕草をした後、奴を小馬鹿にするように、軽々しい口調で問い掛けた。

「赤と青と白……どれがいい？」

しかし返答は同じ質問。

「ちよっと、無視するわけ？」

全くの無反応。

「赤と青と白、どれがいい？」

更にはくどくなる一方だ。

やれやれ……答え以外に返事は受け付けないってわけ。じれったいわね。

呆れから、ため息混じりで頭を振るかぶりった私は、声色を強めて返した。

「全部！ 赤と青と白、全色よ」

答えてやった後に、悪戯な笑みを見せ付ける。全色だったらどう反応を示すかという好奇心と、してやったりとおちよくった意味も兼ねて——するとだ。

赤マントは怒気の込められた唸りを発した。

駆け出す際に翻したマントをはためかせ、右手に大鎌を握り締め
て襲い掛かってきた。

へえ、怒るのね。

知能が低くそうだし、挑発にも無反応だから、あまり期待はして
なかった。けれど、怒ると言う感情は人並みにあるようだ。

ククク……面白いわね。予想以上に狩り甲斐がありそうだわ。

ワクワクする。久しぶりの戦闘に興奮しているのが、武者震い
なり身体全体に伝わってくる。自然と唇が狂喜に歪む。それは私の、
凜猛な本性の表れなのかもしれない。

などと思っている間に、奴は振り上げた。右斜めから銀色の煌め
きが迫る。太刀筋はなかなかの速さだが、避けられない速度ではな
い。

私は身体を逆方向に反らし、切っ先を難無く躲す。すると赤マン
トはすぐに切り替えて大鎌を振り上げ、刃を当てようと突き出すが、
それもバック転で避ける。しかし攻撃は止む気配を見せず、自棄に
なったのか、赤マントはがむしゃらに大鎌を振り回す――が、私は
全てを回避してみせた。

そして真横に薙ぎ払う刃を赤マントごと飛び越え、空中で宙返り、
外灯の上に立つ。

大鎌を振り終えた赤マントは、何が起こったのか理解出来てない
のか、周りをキョロキョロと見回して私を探す。

「どこを見てんのあんた。目が悪いのかしら？」

私が声を掛けると、怪人はピクリと反応して私の方を振り仰ぐ。
そして呻き声を上げながら、威嚇するように私を見据える。首を斜
めに傾けるその身構えは、『お前は何者だ？』と問い掛けているの

だろうか。

——ふうん、なら答えてあげる。

仕掛けて来ないところを見て、そうだと解釈した私は、待ちわびている赤マントを見下しながら、奴にとって最初で最後になるであろう自己紹介を始めた。

「私の名前は、玉藻——玉藻美狐たまもみこよ。知能があるなら覚えておくといいわ」

腕を組み、右手で自分の髪を弄りながら存在感をアピールし、私は名乗りを上げる。それが癪に障ったのか、赤マントはいきなり駆け出し、私の佇む外灯を大鎌で切り倒した。

外灯の柱は鋼鉄で出来ているため、並の刃物では傷跡を付けることすら難しいはずだ。それを軽々と両断するのだから、奴の怪力と太刀筋のキレのよさ、大鎌の硬度と刃の鋭さ、凄まじさが容易に理解できる。

ふうん——成る程ね。最初の斬撃は様子見だった訳。……舐められたものね。

そう思いながら、外灯が完全に倒れる前に私は飛び降り、赤マントから離れた所に着地した。

はずだった……。

「——ッ！　しまっ！」

奴は着地を狙っていたのか、私が振り向く頃には大鎌を水平に薙ぎ払っていた。

横に過ぎ去る赤い血染めの一閃。

二つに切り離される私の胴体。

そして、意思に逆らい崩れ落ちる上半身。

世界がスローモーションで動いているように見えた。

こんなところで私は死ぬの――

なんて、そんな悲劇のヒロイン地味たことを思ってみたりする。

「ッ！」

ここで驚いたのは赤マントの方だ。

切り裂かれた私が、煙の様に消えてしまったのを前にして――

あまりの予想外な出来事に、流石の怪人も啞然とした御様子。しかしすぐさま気を取り直し、辺りを見回し始めた。

フフ、探してる探してる。

その慌てた姿は妙にシニール、笑いが込み上げてくる。

さて、私は何処からあいつを見ているのかというと――実は噴水の手前にあるベンチに腰掛け、のんびり寛くわぎながら傍観くわんしていた。

最初の一撃目を回避した後、私はベンチから自分の幻を生み出し、遠隔で操作していた。馬鹿な怪人は幻術に掛かったのも気付かずに、ずっと幻相手に大鎌を振るっていた訳だ。

「クク――アツハハハハ！」

――本当、相手を化かすのは愉快ったらありやしない。

まんまと奴を化かした事で、抑えきれず私は吹き出してしまった。
「ッ！」

「驚いた？ そりゃそうでしょうね。あんたがやっと切り裂いた私が、煙の様に消えちゃったもんね。ドンマイ」

笑い声に反応してようやく気付いた赤マントに、私は蔑みの言葉を掛けてやった。

思惑通り赤マントは声を唸らせて、今まで以上の殺意をこちらに

向ける。よっぽど悔しいのだろう。大鎌を握る手に力が入っているのが解った。

だけど、それは間違いだ。こいつが抱くべき感情は、怒りではない。

こいつが抱くべきもの、それは――“恐怖”だ。

私は腰掛けていたベンチから立ち上がり、赤マントに歩み寄りながら言った。

「あらかじめ忠告しとくわよ……。勘違いしないで、あんたは狩る側じゃない……。私が狩る側よ！　そして、私が攻めに入る以上。ただじゃあ済まない……」

赤マントを指差しながら告げると同時に、私は勢いよく妖気を放つ。

「ッ！」

「さあて、始めようかしら」

真紅のオーラを纏う私の睨み据える眼光に威圧され、赤マントは一瞬だけ身を震わせて後退り、間合いあとすきを取った。

私も笑みを浮かべて姿勢を低くして、攻撃の構えをとる。

周辺が緊迫した空気に包まれる。

今にも張り裂けそうな程の張り詰めた雰囲気、公園全体に漂い始めた。

第二話『想定内の苦戦』

満月は美しく金色しんじきの輝きを放っていた。

まるで、私達の様子を眺める瞳の様に――

殺気と狂気が入り交じり漂う、真夜中の公園。そこで、私と怪人赤マントは睨み合っていた。

お互い相手の出方を窺い、硬直状態に入っている。もっとも、私はたいして緊張や警戒もしてなく、どちらかと言えば焦じれていた。なら攻撃を仕掛けないのは何故か。それは私の戦い方は、つねに後手ごてに回るからだ。

相手の流れに乗るように攻撃を受け流し、倍にして返す。これが私の得意戦術であり、基本戦闘スタイル。相手を化かすという妖狐の概念――もとい本質だ。とはいえ、このままでは埒らちがあかない。烈狐丸さんじゃないけど、ここは自分から攻める方が良さそうね。

一瞬、頭の中に長兄の微笑む姿が浮かんた。

行方不明の二人の兄。長兄の烈狐丸は、陽気で人懐っこくて、誰とでも親しくなる妖狐だった。そんな彼の得意戦法は私の柔と静とは逆の、烈火の如く相手を攻め続ける、武道を型にした剛と動の戦い方。

今から私は兄特有の格闘術を、この実戦で取り入れてみようと思う。

「来ないなら、こっちから行くわよ！」

緊張した雰囲気解くように叫び、私は駆け出す。そして身構え

る奴へと距離を詰めていく。

お互いが攻撃の間合いに入った。先に動いたのは赤マント。私の首を刎^はねる気か、両手に握る大鎌で薙ぎ払おうと素振りを見せる。

私は屈んで避け、そのまま奴の懐にまで潜り込む。勢いを殺さず利用し、鳩尾を目掛けて肘打ちを、続けて腹部に掌打^{しょうだ}、そして奴の腰が折れ曲がり降りてきた顎先に膝蹴^{ひざげ}りを決める。

見事に入った連携攻撃。奴は呻きを上げて背中から倒れそうになるも、踏み止まり体勢を立て直す。切り返しざま、殴られた仕返しにと、こちらに目掛けて拳を振るう。得物を使つての反撃は、あっさり躲されて手痛い返しを受けると判断したのだろうか？

良い判断だけど、それでも――

「甘い！」

奴の右拳を難無く左に逸らし、がら空きになった右脇腹を、炎を纏^{まと}った両手で鷲掴^{わしづか}み――そして、掌一点に蓄積させた妖気を、炎を破裂させるッ！

「吹き飛ばす！」

掌で起こした爆発が、奴を吹き飛ばす。これが、烈狐丸兄さんのおはこわざ十八番技、名は爆炎掌^{ばくえんしょう}。

本来は片手で行う技なのだが、私には兄さん程の反動を抑える力が無い為、両手を使ってやっとなの威力と精密さを引き出せる。

手応えは十分。

赤マントは煙を纏いながら、外灯の柱に体を打ち付けた。衝撃により、理不尽にもくの字に傾けられた柱から、奴の体がずり落ちる。炸裂した技の威力に抗えず、手放した大鎌が遠くの地面に刃先から突き刺さった。

奴の赤いスーツには所々焦げ跡が生じて。特に胸部の方は肌が見えるほど破け、焼け爛れた皮膚を曝け出している。

有り様からして戦闘続行は不可能のはずだが――それは普通の“生物”ならばの話。

あの怪人は、何が原因でそうなったのかは解らない。しかしこれだけはハッキリしている。奴の身体は“死体”だ。現代にして解釈をするならば俗にいうゾンビ……いいや、この場合は肉人形とでも定める方が妥当か。

動く死体——だとすれば、アイツに痛覚はない。殴る斬るなど、人体の構造上攻撃によつてはたじろぐだろうし、体の切断や損傷もある。けれど息切れの心配も無く、死という概念から除外されている訳であり。

『グウウアアッ!』

そうなるとやはり、唸り声を荒げて、怪人がすつくと立ち上がるのは当然のことか。

「だからって、そんなあつさり立てるのかしらね。手加減はしてないはずなんだけど……」

喉の器官を通つて溢れ出る鮮血を物ともせず、内に籠もる憤りを露わにする。仮面の目許辺りが崩れ落ち、既に光を喪われた眼がこちらを覗く。予想はしていたが、こうも平然と立ち上がるのは面白くないものだ。

訝しさから赤マントを睨むも、奴には私の都合など知ったことではなく。お構いなしに、咆哮を上げながら突進してきた。

大鎌を回収せず向かつて来た赤マントは、馬鹿の一つ覚えと言わんばかりに私へと拳を繰り出す。それは至極単調なのだが、同時に奴の特性に最も適した戦法でもあった。

疲労が無いこと。つまり呼吸を整える必要も皆無ならば、攻撃の終わりが訪れることは無い。加えて溜めや予備動作の無い攻撃がこう無限に繰り出されては、反撃の機会を得にくい。更にこちらは体力を削がれ、奴が優勢に傾く利点を持つ。

一旦離れて手を打とうにも、奴は必要以上に追い掛けて間合いを詰めて来る始末。挙げ句の果てにはペースを上げて攻撃に磨きも入っているのだから、幻術を掛けるタイミングすら掴めない。

今は躲し続けているが、この状況が続けば、いずれは美味しくもない攻撃を喰らってしまう。

「ちい……」

苛立ちから舌を鳴らした。

そんな時だ――

「ん？」

視線を感じる……どこから？

反射的に私は、一旦辺りを見渡して探り出そうとした。攻撃的な視線は、今にも仕掛けて来そうな殺意が込められていたから――結局、そのよそ見が仇となってしまったのだけだ。

「ぐあっ！」

目線を赤マントに戻した時には手遅れ。金槌のように振り回された拳が、私の首に当たってしまった。

濁った呻きが喉から漏れた。目に写る世界は明滅し、回転する視界は瞬く間に完全な闇へと染まり、身体全体に激痛が駆け巡る。最後には冷たい石の感触が肌に訪れた。

どうやら、私は地面にうつぶせで倒れている様だ。よそ見なんかして、頭から地面に叩き落とされるとは、なんて笑えない話だろう。「ぐ、くう」

呻きながらも倒れた身体を起こすけど、視界がぼやけて意識が朦朧とする。

脳内を締め付ける痛みを堪え、思いきり殴られた首に手を添えながら、片膝から立ち上がった私は前を見た。

いや、そんな暇があったら、さっさと動くべきだったのかもしれない。

アイツが既に拳を振り上げたまま、目の前まで迫って来ていた。気付いた頃には時既に遅し、振るわれた拳を避けられず、眉間に直撃を受けてしまった。

殴られ怯んだ私だが、それだけでは終わらない。無慈悲にも怪人は間髪入れず容赦なく、そして畳み掛けるように何発もの拳を私の

身体に叩き込む。

的を顔だけに絞らず胸、腹、そして身を守ろうとした腕と、見境なく殴り付けた。

狂気の暴行を受ける度に、上半身の骨が軋み、悲鳴を上げる。内臓の筋が切断され、追いつきに撃ちこまれる音が伝わる。

まるでサンドバッグのように殴られるがまだまだだったが、やはりトドメは訪れる。

最後に奴は私の首を掴み上げ、地面に叩き付けるなり大きく拳を振りかぶると、顔を目掛け、槌の如くありつたけの一撃を振り下ろした。

視界が朱く染まる。衝撃で割れた果物らしき音が、石器の碎ける音に混じり公園に響いた。

不気味な沈黙が漂う。

暫くして、赤マントは私の顔面に押し当てていた拳を離し、勝ち誇るかの様に倒れている私を見下ろす。体を動かさない私の有り様に満足したのか、背中を見せて立ち去ろうと歩み出す。

まさか、ここまでやられてしまうなんて、思ってもみなかった。

とは言っても、この程度では私を殺せはしない。まあ、すんごく痛いのは確かだけど。

とにかく、ここまでやられて仕返しをしないってのは、私の性に合わない。やられたら倍にしてやり返すのが私のモットーだ。

と、言うわけで。

「まったく、遊びがすぎたわね。……いつつ」

返しは倍だ。八つ裂き決定。

仕返しの具体的内容をイメージしながら私が起き上がる。声に氣付いた赤マントは立ち去ろうとした足を止め、すぐさまこちらへと

振り返った。

立ち上がる私を目の当たりにしたら、まるで「ありえない！」と言いたげに後退り、驚愕を露わにする。あしずさ

「まあ、驚くのは無理もないわよね。あんなに殴ったんだから、殺したって確信はあったんでしょうけど」

腫れのある頬を摩りながら微笑んだ私だが、あれだけ力いっぱい顔面に拳を放られたのだから、顔はもう酷い有様なだろう。あんなの様になっていないだろうか？

——鏡は見たくないわね。

そんな冗談事をほめかしつつ、私は体中から妖気を放ち、真紅の色を放つオーラで身を包む。

「生憎ね。私は痛みには馴れてんのよ」

次の瞬間、身体に刻まれた負傷の痕は次々と消え去り、私の体は見る者の目を疑うほどの治癒を体現してみせた。

自己再生——私の体内には、膨大といえる量の妖力が血液と等しく体を駆け巡っている。莫大であるため、人間の姿をしている時はそれが無駄に溢れないよう、常に制御を行わねばならないが、この面倒なありふれた力も、使い方によっては妖術などの攻撃だけではなく、こうして傷を癒すのにも回せるというわけだ。

元々私も赤マントとは大差ない存在だ。何せ妖怪、それも妖怪のマジシャンこと妖狐であるならば、これくらいのこととは当たり前。チャチな肉人形風情と一緒にされてはたまったものじゃない。

「けどまあ、予想以上にやってくれたわ。でもね……もう油断しないし、手加減もしない」

傷は完全に癒えたことだし、そろそろ幕を降ろすでしょう。

妖気を今まで以上に解き放ち、私は赤マントに鋭い視線を向けてゆつくりと指差し、殺意を込めて告げてやった。

処刑執行の開始宣言を——

「遊ぶのは飽きたから、そろそろ……終わらせる」

刹那、私は一気に獲物の懷まで踏み込み、そのまま勢いをつけた

まま、炎を纏った手刀をがら空きの喉元へと突き刺した。

さらに指が喉の奥まで入ったところで、私は中の肉を一掴みし、思い切り引きちぎってやった。

すると肉が削がれた喉から大量の血が噴き出し、中の脊髄が表へと曝け出す。

「言ったでしょう。“ただじゃあ済まない”って」

赤い飛沫の勢いが止まらず喉を必死に押さえている赤マントに、冷ややかな言葉を送り、私は追撃を開始する。

「そらっ！」

がら空きになった腹部に拳を叩き込み、腹を押さえうずくまったところで顔面を蹴り上げ、最後は心臓目掛け胸を手刀で貫き、内部で炎を爆発させた。

爆風により吹き飛ばされた赤マントは、内臓をぶちまけながらベンチに落ちた。その衝撃に、破碎したベンチは派手な音を鳴らして破片を散らす。

ここまで豪快に打ち付けた以上。損傷は軽く無いはずだ。まず、器官が機能せず。立ち上がる事は出来ないだろう。

だが……音が止み、間をおいて、赤マントはゆらりと立ち上がった。

内臓をだらし無く垂らしながらも、身体をよろめかせるが、戦意は喪失していない。

「しぶとい……」

私は口をすぼめて奴を睨んだ。

こうなったら、原型を保てないくらいに燃やしてしまおうかと考えていた。その時――

「グウウ……」

突然、赤マントは周辺を見回し、唸りながら夜空を仰ぐ。そして不気味にも茫然と沈黙したかと思えば、私に背を向け、草木が目立つ林へと逃げ去った。

「あ、ちょっと待ちなさいよ！　これからって時に逃げないで！」

急いで追い掛けたが、林に入り込もうとした辺りで私は追跡を諦めた。

奴の気配が一瞬にして消えたから。

追い付ける距離だったはずなのに――気配もさっきまで伝わっていた。何より、奴の匂いも解るから、逃すはずはない。なのに、それが一瞬にして消えた。

「でも、何で忽然と消えたの？」

それに赤マントの奇妙な行動。あれは、何かを“聴いている”ようにも見えた。更に戦闘中で感じたあの視線も気になる。

もしかして、赤マントは誰かに操られた怪人？

推測にそんな考えが浮かんだが、目的がイマイチ解らない。何故人を襲うのか、そしてさっきの逃走。釈然としない点が多過ぎる。

「はあ……ムカつくわね」

頭を掻きむしりながら、苛立ちの溜息をついた。

こういうのは嫌いだ。何かと後で面倒になってくるし。なにより楽しむ為以外には頭を使いたくない。

とはいえ、今回は自業自得か……。ついつい感情的になって動いたのがいけなかったな。

そう自分の行動に反省して、私は公園を立ち去った。

中央公園の泉付近には壊れたベンチ、切断され倒れた外灯。そして地面に刺さった大鎌。それらは激しい戦闘を物語ったままに残されている。

きっと、朝には人が多く集まるだろう。

だが、どうせ何があったか知る事など不可能だ。

例え聞いても信じるはずはない。

こんな悪夢のような出来事なんてね——

第三話『スカウト』

学生やサラリーマンがそれぞれの戦闘服に身を包み、雑踏の中を行き交っていく、朝の交差点。だがそれも日曜や祝日になると、奇怪な衣装で着飾った若者たちで溢れ返る。

怪人赤マントとの戦いから、二日が経ったその日。私は駅前に面したショッピングモールの広場をうろついていた。

ここはいつも十時を過ぎると、ダンサーやミュージシャンの卵たちが、自分たちの技を披露しに集まる。

いわゆる“路上ライブ”と呼ばれるものだ。

趣味だけのやつもいれば、本気でその道を目指す者もいる訳だが、私はこの場所が好きで、時間があいた時によく来る。

昔から、音楽や踊りは好きでよくやっていた。若い頃と比較すれば感覚は変わってしまったけど、現在も悪くはない。

平安時代から生きて、時を歩むこと現在^{いま}は二千五年。私は今年で千十一歳になる。

妖怪は寿命が長い。妖狐もまた長寿であり、余りの長生き故に、寿命で世を去った妖狐がいるのか解らない程だ。

大半は千歳を越える前に、霊能力者や他の妖怪に殺される。しかしそれも自然の摂理だから仕方ない。弱い生物は、己より劣る生物を喰らう事で進化を遂げていくものだ。そこには人が持つ情や道徳などのモラルすら、何の価値も示さない。

ただ生きる為に親をも喰らう。そんな冷酷で獰猛な本能だけが、自分自身を強者へと育て上げていく。それこそが食物連鎖の真理と私は思う。

千十一年——少なくとも、私はそうして生きて来た。それはこれからも変わらないだろう。

まあ、近頃は狩りに対する認識が、“生きる”為から“楽しむ”事へと変わってしまったが、それはいつ頃からだろうか。全く覚えていない。

とは言っても、それは気にする程でもない。人が食事という生きる為の事柄から、料理という名の娯楽を得たのと同じく、その移行への経過を問う者など誰が 있을까？

余程の暇人くらいだ。そんな些事にこだわるのは。そのような探求心を、私は持ち合わせていない。興味も無いし、面倒臭いから。

さてと、話が逸れてしまったが、先も話した通り、私は踊りや歌が好きでよく踊る——というか、もう踊っている。

ブレイクやポップス等、とにかく激しく爽快に動く、一言で言い表すならスタイリッシュなダンスを私は好む。

そして今、そういうダンスを私は現地のダンサー達と共に披露していた。

メロディーに乗り、リズム感あるステップを巧みに行い、ここぞと言うところでダイナミックにスピンやジャンプ系の大技を決める。次第にギャラリーが集まり、最後に音楽が終わりキメポーズを取った時には、辺りを大歓声が包んだ。

そしてギャラリーもいなくなった昼過ぎ頃。

「ふう、終わった」

「美狐ちゃんお疲れ。今日も凄かったね」

私が広場の階段で一息付いていると、一緒に踊っていたダンサーの一人が声を掛けて来た。

矢がハートを射ぬいたマークのニット帽をかぶった少年——彼の名は伊坂奏夜^{（いかへいそうや）}。

奏夜はこの広場の常連者で、私が初めてここに来て、ダンスを観

ていた時に誘ってきたのも彼だった。

「ありがと。奏夜もなかなかよかったわよ」

「いやあ、まだまだだよ。美狐ちゃんには負けるね」

私が賞賛すると、彼は照れ隠すように頬を掻きながら否定した。

「一年前は俺がここのトップだったけど、すっかり追い越されちゃって——今では美狐ちゃんがトップだもんね」

「ふうん。もしかして私に嫉妬しているの？」

頭を振りながら言う彼に、私は意地悪な笑顔で茶化してみた。このやり取りも毎度のことだが、その都度奏夜はこう返す。

「そりゃしてるさ。だけどそんなものは、踊っている時に楽しくて忘れちゃうよ」

「ふふ、そう」

「それにさ、上には上がいるっていうし、それを追い越すって目標が出来ていいじゃん」

怒る事なく、澄ましたように穏やかな笑みを浮かべて奏夜は言った。彼はまだ十八だが、だらしない若者が多い御時世の中ではしっかり者で向上心があり、年齢のわりには大人びたところが見られる。将来は環境保護関連の仕事に就こうと、平日は勉強に勤しんでおり、こうしてダンスを楽しんでいる合間も参考書に目を通してユーマもあり、責任感が強く人柄も良い。だからこそ周りは彼を慕い、リーダー格にしているのだろう。

ストリートダンサーのほとんどはマナーが悪く、ゴミを散らかして解散する奴らが多い。けれど奏夜が中心となっているこのグループは、ちゃんと後片付けに加え、様々なボランティア活動も行っている。

まあ、彼率いるこの面々は、もともと良識のある者達だ。こうしてボランティアを積極的に取り込むことは当然なのかもしれない。

そしてこういった人間達だからこそ私は、不快無くこいつらと遊べるのかもしれない。時折、そんなことを思う。

「んじゃ、そろそろ私は行こうかしら」

時刻がちょうど一時を告げた頃、私は居座っていた階段から腰を上げた。

「またね、美狐ちゃん。暇があったらいつでも来てよ。そんな時はメールして」

「判った。暇があった時ね」

笑顔で見送る奏夜に軽く手を振り、私はこの場を後にした。

天つから、太陽は微笑む。^{あま}

この昼下がり、私はちよつとした目的を成すがため、飲食店の連なる通りを歩いていた。

見渡せば手を繋いで歩くカップル。みんなで寄り添い、ペチャクチャ喧しく店を指差してうろつき回る女の子達など、若者を中心に多くの人で埋め尽くされている。そんな人込みの間を、特に気にも留めず進んでいたら――

「ねえ、君！」

後ろから大きな声が上がった。こちらに向けて発しているようだが、自分とは関係ないだろう。そう思い、私は振り返らずにいた。

「ねえ、君だよ。その銀髪の娘！　ちよつと待って」

……残念ながら、対象は私であつたらしい。

いやいや違う、私じゃない。だいたい私は銀髪じゃない、白銀だしね――うん。

尚且つ自分ではないと言い聞かせて、私は飽くまでも無視を徹底する。止める事なく歩を進めるのだが、その人物はすかさず私の正面へと回り込んで来た。

「ちょっと、いいかな？」

やっぱり私か。本当に残念だ。

不愉快——そんな気持ちが私の心を濁らせる。

見ればそいつは男。金髪をオールバックに撫で付け、黒のサンダラスを掛けていた。剥き出しの耳には十字架のイヤリングが揺れていて、いかにも怪しい出で立ちだ。

「何か？」

上から下まで眺めると、紅いスーツが目を引きいた。まるでホストかヤクザだ。

「まあまあ、そう嫌そうな顔しないで。怪しいように見えて、そうでもないんだよ。俺」

私が不快な気持ちを態度と目で示すと、男はサングラスを外しておどけて見せた。

「ね？ 恐くないし、むしろカッコイイでしょう？」

サングラスの下に隠れていた蒼い瞳は、意外にも澄み切った、細く優しげなものであり、顔立ちからしても精悍で、育ちの良さそうな気品さが溢れている。先程とは真逆の、爽やかな雰囲気を感じた。一言でいうならハンサム……とでも言うのだろうか。飽くまで人間の見解での話だが、確かに周りがちらほらと視線を向けている。私と男の横を通り過ぎた女の子達からは、『ねえ、あの人格好良くない？』と、恍惚な好感の声が聞こえてくる。

「ねえあの娘、すんごいかわいくない？」

「本当だ！ かわいいっ！」

「お人形さんみたい！」

また別のところから好奇の眼差しと共に、話し声が耳朶じだに触れた。厭わしいことに、今度は私も対象に入っているようだ。

何で私まで注目されているのやら——

しかも男女問わず、この男よりも視線を集めているような気がする

る……何にせよ、この男が好青年でナイスガイな奴だと周囲が認めるとしても、私にとって興味の対象にはならない。

それに――

「カッコイイなんて言うけど、それって怪しくない“理由”にはならないでしょう？」

「あ、そうか！ いやあ、一本取られたなあ。ハハハ！」

私が何の一本を取ったんだろうか？

眼を細めて訝しげに見据える私を尻目に、ナルシスト男は笑いながら頭を掻く。

私はこういう胡散臭くてナンパ紛いな奴は嫌いだ。話しているだけで疲れが溜まってしまう。

こんな輩は徹底的に無視するに限る。
やから

そんな当たり前の所業を忘れていた自分に後悔して、私は早足で男の横を素通りした。

「あ、ちよつと待ってよ！」

だが男はなおも駆け寄ってきて、『君に話があるんだ！』と私の興味を引こうとする。

「私は用事があって急いでの。あんたの話なんかに興味ない」
冷たく言い捨て、先を急ぐ。

用事があるのは嘘ではない。私はいつも一時過ぎには、常連の喫茶店でミラクルイチゴパフェという、巨大パフェを食べに行く予定があるのだ。だから、こんな奴の相手をしている暇は無い。そう思っていた。

この男がこんな科白を口にしなければ――

「ダンス以外の用事って、二日前の赤マントみたいに化け物を狩り

に行くことかい？ 玉藻美狐ちゃん」

唐突な、それでいて研ぎ澄まされた刃のような言葉に、つい歩みを止めてしまった。

私の名前を知っているだけならまだいい。

だけど何故、二日前の事を知っている？

警戒心から、自然と体中の血が沸き立ち、眉間に力が入った。

「あんた……何者？」

「ファンだよ」

横目に振り返り一瞥^{いちべつ}するが、男は相変わらず軽い態度でふざけた答えを返す。

「ファン？ ストーカーの間違いでしょう。もう少しマシな嘘つけないの？」

「ストーカーよりはマシさ」

さらに眉を吊り上げて怪訝を示すも、男は涼しげに惚けるばかりだ。

——もしかして、コイツはあの時の？

ふと、一つの可能性が脳裏をよぎる。赤マントとの戦いの際に感じたあの視線だ。しかしこの男からは殺気を感じない。あの視線には背筋が凍るような、明らかな殺意が籠められていた。そう、憎しみと怒りが入り交じった、深淵の殺意。

推測だが、視線の主は私に何らかの怨みを抱いている者だろう。ならば少なくともこの男は違うはず。

仮に視線の主がこの男だとして、私に対してこんなふうに接触するだろうか？

私なら、まずしない。きっと感情を抑え切れず、殺意を滲み出し

てしまうだろう——男からはそんな素振りはおろか、小さな気の乱れすら微塵も感じない。とはいえ、こいつがシロかと問われたら、可能性がゼロと言い切れないのも事実。

「考えているって事は、興味を持ってくれたのかな？」

あらゆる可能性を模索していた私に、男はさりげなく歩み寄り、にまにまといやらしい笑みを見せる。

仕方がない……ここは、奴の素性を確かめてみよう。

性癖上、私は考えに耽ると唇に指を当てる癖があった。気が付けば今回もそうしている。それに関して昔、烈狐丸兄さんに甘えん坊だな、などと言われたことがある。心理学上、唇に触れる者は精神的な未熟さを表すようだが……今思うと、あれは侮辱だったのかも知らない。

何だか腹が立ってきた。再会したら、出会い頭に一発殴っておくでしょう。

ま、とりあえず今後の方針も定まった訳だし、行動に移るとしますか——そうして唇をなすっていた指を離し、私は男に向き直った。

「……聞くだけの興味は沸いた。ただし、条件がある」

「何？」

「それは——」

「うん、美味」

条件に行きつけの喫茶店の品を奢らせることを提示した私は、一時間もしないうちに九皿目のパフェを食していた。

口の中全体に拡がるこの甘味。美味と言わずに何と言おうか。その美味しさには、思わず笑みが零れてしまう。

「……よく食べられるね、君」

その様子を啞然と眺めていた男は水を刺すが、気にも止めずに食を進める。

「そんなに食べて、太らない？」

「あんた。よく女性にデリカシーないって言われるでしょ？」

言い捨てると、男は過剰に頭を下げて『すみませんでした』と謝った。どうやら凶星のようだ。痛い所を突かれたらしい。

「まあ、そんな事よりも。そろそろ話つてのを聞こうかしら」

やり取りの間に九皿目を食べ終えた私は、スプーンを皿に戻して男の話に耳を傾けた。

「その前に自己紹介しておこうか。俺の名前は、崎原亮さきはらりょう。以後おみしりおきを、玉藻美狐ちゃん」

テーブルの上で三角形に両腕を立て、崎原は私に微笑む。

「ああ、あんたの名前なんて興味無いから、さっさと話して」

「えっ、ちよっ……ひ、酷くない」

「……早く」

そう意義を申し立てる彼を、私は脅すように睨み付け、話しを始めると眼で急かした。

「わ、わかった話すよ。実は、君を俺……いや、俺達が所属する退魔組織。『支魔』ほくまに入ってもらいたくてスカウトに来たのさ」

「退魔組織？ 私は妖怪だから、あんた達から“狙われる対象”のはずじゃない。それが何でスカウトなの？」

あまりにも不可解で意外な用件に、私は眉を顰めて訊ねた。

「他とは違ってね。支魔は妖怪とも仲良くやる組織なのさ。力の弱い妖怪や、君みたいに知能が高くて人間社会に溶け込む妖怪っているだろう？ そういう妖怪を天敵の妖怪から守る為に保護したり、また力がある妖怪は、協力してもらうためにスカウトしているんだよ」

成る程、本来相入れない退魔師と妖怪。例えるなら狩人と猛獣の関係だが、この組織には“保護”と“共存”が含まれている訳だ。

しかし、それはおそらく利害が一致するものか、人畜無害を限定としての事だろう。

「それで、私をスカウトしに来た訳は——二日前の赤マントとの戦闘が、あんた達の目に留まったから？」

あの時の戦いで見せた私の力。スカウトの理由はこれかと思ったが、崎原が答えたのは、まったく予想外なものだった。

「半分正解。もう半分の答は、君が伝説の三大妖狐。たまもさんてんこ“玉藻三天狐”の一人だからだ」

第四話『忠告と拒否』

「あんた。今なんて言ったの？」

ドスの利いた声で問い掛け、私は睨みを凝らす。

「半分の理由は、君が“玉藻三天狐”の一人だからって言ったの」
にも拘らず、崎原はテーブルに肘を乗せ、半握りの手を頬に添えて薄笑いを浮かべながら答えた。脅し口調には慣れている、ということか……。

それにしても、玉藻三天狐——久しぶりに聞くけど、同時に聞きたくもない、忌々しい言葉だ。

「君を含め三兄妹の妖狐である“玉藻三天狐”は、あの伝説の妖狐である“九尾の狐”の忘れ形見だと知られている。妖狐はもちろん妖怪でもその名の強かさ^{したた}を知らないやつはいない程だと、退魔組織の間でも伝えられている」

崎原は博識を披露するかのように淡々と説明するが、私としては興味の無い内容だ。それに聞いて良い気分がしない。

「長兄の玉藻烈狐丸。次兄の玉藻絶狐丸。^{たまもぜつこまる}そして彼らの妹である君、玉藻美狐。玉藻三天狐の名前の由来は、君達が天狐と呼ばれる上位クラスにも拘らず。その実力は天狐以上の最上級妖狐、空狐クラスをも超える力を持っている事から名付けられた」

こいつ今、何て言った？

名の由来は、実力が空狐クラス以上ですって？

「フー——」

馬鹿らしい。

「ん？」

実に、馬鹿らしい話だ。

「ククク——アッハハハハハ！」

私の笑い声が店内に木霊する。

周りの客や店員が驚いた様子でこちらを振り向くが、知ったことか。それも気にせずに私は、高らかに笑ってみせた。

まさに狐につつまれた表情で崎原も私を凝視するが、これが笑わずにはいられない。何せ間違えだらけなのだから――

「どこの馬鹿？ そんなデマ流したの」

「え？」

忘れ形見などとほざく時点で誤謬ごびめうを犯している。初っ端から萎える話も耳にすれば、流石に指摘する気も失せる――が、言ってやりたい事がある。

「フンッ……あらかじめ忠告しておいてあげる」

崎原を鼻で笑う事で嘲りを示した私は、椅子から腰を上げて奴に顔を近づけ、そのアホ面を指差した。奴の蒼い瞳に映る私は、ニヤリと笑みを浮かべてはいるも、金色の瞳こんじきめは笑っていない。冷たい光を宿している。

当然だ。私は今、目の前にいる馬鹿の発言にイライラしているのだから……。

「玉藻三天狐の名は、私達兄妹の間では禁句タブーなのよ。私や烈狐丸兄さんは一言、二言くらいは許せる。けど、もし相手が絶狐丸兄さんだったら、あんたは今、この場で殺されてるわよ」

突き刺すように、声色に圧力を掛けて脅すと、威圧された崎原のこめかみから、一滴の冷汗が頬へと伝う。飲み込む音を喉から鳴らすと、息苦しそうに身を引いてそのまま背もたれた。同時に、店内の全ての人間が苦しみ出す。

腰掛けている客は後ろからテーブルに押さえ付けられるように倒れ、歩いていた店員と客は膝を折る。所々から呻きが、グラスや皿が割れる音が鳴り響いた。

私が放つ殺気から生まれた、この異様な光景の中で、威圧の対象である崎原だけが唯一屈せずに、じっと私を見据えていた。

「み、美狐ちゃん。お、落ち着いてよ。このままだと、店の店員や

お客さんに迷惑だよ。だからさ、ね？」

苦笑と困惑気味ながら手振りの動作も加え、崎原は私に制止を頼む。

この状況でまだそんな軽口を叩けるとは、この男も大したものだ。先程の冷汗はとうに消え失せ、表情も息苦しいのとは打って変わり、口調のわりには妙に落ち着きを払っていた。

私の圧力に潰されないよう気を引き締めて支えるのではなく、まるで相手にせず、いとも簡単に受け流すか……。

永年生きている私には解る。崎原の涼しげな態度は、強者の極致に達している者特有の余裕だ。この男——相当な修羅場をくぐり抜けている。

「……わかった」

確かに、この男の言う通りこのまま殺気を放ち続ければ、周りの人間達を死に至らしめ兼ねない。

誰がくたばろうと知ったことではないが、私はこの店の常連客。

行き付けの一つを潰すのは、正直好ましくない。他よりも出来の良いいスイーツが食えなくなる。

不本意ながらも私は、殺気という刃を理性の鞘へと納めた。すれば周りの緊迫した空気は緩み、店内の客や店員は圧力から開放された。しかし彼らは、自分達に何が起こったのかをよく解っていない。仕方のないことだ。自身の本能が私の殺気に反応してそうなったことなど、昔の武家者ならいざ知れず。現代において一般人の彼らには、それを知る術はないのだから。

まあ、それはおいといて——

「一応、念入りに言っておくけど、二度は言わないで。……あんたが思っている程、この名の持つ意味は軽く無いのよ」

崎原を鋭く見据え、私は強く言い聞かせた。

「わかったよ。以後気をつける」

などと緩い返事をするが、どこまでその気があるのか怪しいものだ。まあいい、口で言っても分からないなら、その身に刻み込んでやれば良い話だ。

うっかり口走らないよう、気を付けておくことね。

そんな私の悪意を察したのか、笑みを零す私を見やり崎原は、尻込みながらも引きつった笑顔で再度頷きを見せた。まあ、釘を刺すことも出来たから、そうそう口にはしないだろう。それはそれで甚^{いた}振^{たふ}る機会が減って、詰まらない気もするけどね。

「ところでさ、話は戻るけど――」

話――つまり本題か……面倒だ。

「悪いけど、止めておくわ」

崎原が本題へ入る前に、私はさらりと話を断った。

「え？　ちょ、ちょっと何で！」

そうなれば、やはり慌ただしげに崎原は私に理由を求めてくる。

まあ、パフェまでおごっておいで断られて、それで“判りました”と納得できるはずもないか。私のスカウトも任務でということもあるだろうから、尚の事焦るのは当たり前。引き下がれはしない訳だ。とは言っても結局は他人ごとで、私にはどうでも良いこと。

情緒のかげらなど、一ミリたりとも在りはしない。心の内に在るのは『とにかく、諦めて帰ってくんないかな』という、こいつに対する煩わしさだけだ。

「あ、もしかして、さっきのタブーがいけなかった？」

当惑しながらも尋ねる崎原に、私は素っ気なくこう答えた。

「単純に興味がないのと、誰かに束縛されて生きるのが嫌なの。例え良い地位が貰えたとしてもね」

私達兄妹は、誰よりも自由気ままに生きる事を信条としている。

悪く言ってしまったえば自己中心的で不遜だが、これが私達の性だ。例え兄妹の絆であったとしても、束縛するなら構わず断ち切る。

それだけ私達は、自由とわがままに貧欲かつ従順なのだ。

「——だから、組織には入らないし、協力もしない。そのかわり、そちらに一切合切手は出さない。人畜無害は通すつもりよ。……わかったかしら？」

髪を指で巻いて弄りながら、私は澄まし顔を向けて答えた。対して崎原は腕を組み、渋った表情を見せる。

「困ったなあ……あっ！ それじゃあさ、交換条件付きは？ 協力する毎に君が好きな物や情報を要求出来るってのだけど。んでもって、君が暇な時に協力ってのはどうかな？」

考える仕草を見せたかと思えば、唐突に交換条件などという餌を撒いて来た。しかし、残念ながら私にその餌は通用しない。興味も無く、腹が減ってもいないのに食いつく程、私はがめつくはないからだ。

これ以上、話しに付き合うのも時間の無駄だ。帰りたくなったら、さっさと店から出よう——と、私は思った事柄を実行に移す。

「……う！」

「どうしたの？」

お腹を押さえて立ち上がる私に、驚き声を出す崎原だが——

「トイレ」

「なっ！」

次には椅子からズルリと滑り落ちた。女性がトイレと口にするのには、些か抵抗があるのか？

きっとこいつの中での私のイメージだと、ここは『御手洗いに行く』と言う女だと、そんな勝手な上品さを描いていたのだろう。生憎だが、この年になるとそんな氣遣いとかは失せてしまう。

それにどう表現しようと、行き先には変わりはないだろうに——

「ごめん。すぐにすませるから」

そんな彼のずっこけは無視して、私は席を離れてトイレを目指す。
「あ、ああ」

啞然とした様子で見送る崎原に、私は一旦振り返った。一言、伝えたい事があるのよね。

「空狐は妖狐ではなく神に近い存在、天狐もまた然りよ。正確には妖狐に位置付けられない」

「え？ う、嘘お」

「ちなみに、私は天狐と呼ばれているだけで、実際は妖狐だから、そこんところは覚えといてちょうだい」

判りました——と、羞恥心がくすぐるのか、崎原は気恥ずかしげに頭を掻く。まあ、判らなくもない。あの博識ぶった説明の後ではね。そんなあいつを鼻の先でせせら笑いながら、私はトイレへと向かった。

にしても退魔師のわりには、妖狐に関しての知識が浅い気がする……いや、退魔師だから知識が多い少ないは関係ないか。私だって退魔師については、聞きかじり程度にしか知らないしね。

単に興味が無いから、知識を得ようとも思わない、というのもあるけど。

「——さてと、撒けたかな？」

私は今、店から遠く離れた交差点。その横断歩道を渡っている。実はトイレに行くふりをして、その窓から外へと逃げ出した。あいつは今頃、『美狐ちゃん遅いなあ』などとぼやきつつ、店内の時計でも眺めているだろう。ま、後でパフエの勘定も払う事になるでしょうね。奢るって約束だったし。

私がいないと分かり、あたふたと勘定を支払うあいつの姿が思い浮かぶ。実に滑稽で愉快だ。

人の不幸は蜜の味、まさに心のスイーツよね。

それにしても、口振り身振りといい、いろいろと不愉快な男だった。生理的に受け付けないって程でもないけれど、あまり関わりたくない相手なのは確かだ。しつこいのと、あのべったり感が特に嫌だ。

「正直、うざったいと思ったらありやしないのよねえ……ん？」

信号が赤になる頃。横断歩道を渡り終えた私が溜息交じりに呟いていると、何者かの鋭い視線が肌に触れた。

この感じは確か、あの時の？

そう、赤マントとの戦いの際に感じた殺気と同じ視線……近い。

視線の正体らしき気配を、強く感じずにはいられない。目だけを動かして見渡すも、私の周辺にはそれらしき影はどこにも無い。買い物に向かおうとする主婦や、帰路につくサラリーマンに、散歩している老人などを見掛けるが——どれも違う。

おそらく相手は、横からではなく上から私を見下ろしているはず。周りの店や会社などの建物の上にいると思われるが、不用意に周りを見回すのは返って私の行動を悟られてしまい、相手の警戒心を高めてしまう恐れがある。

ここは敢えて気付かないふりをするべきだ。殺意からしてどうせ戦うのも時間の問題だし、それなら時間を作って秘策を練った方が戦いは楽になる。

私は、何食わぬ顔で歩を進めた。戦いに相応しい場所を探すのを踏まえて。

歩くこと夕方。私は人気がない廃ビルの屋上で、先程までいた都

市を眺めていた。

「綺麗ね……」

夕焼けが立ち並ぶビルの窓に反射して、煌^{きら}びやかに朱く染まる絶景——なのだろう。私には、それほど和めるものでもない。人間にはそうなのだろうけど、生憎ながら私は妖狐だ。自然好みの私にとって、人工的な物には純粹さを感じない。濁った違和感ばかりが、穢れとなり心に残る。

これから先、私がこの光景を好きになることはないだろう。

「人間は、自分より力がある存在を常に恐れて、自分より弱い者には牙を向ける。揚句には、食物連鎖の枠から出かかっているし。他にも森林伐採や埋め立て、戦争や犯罪。数え上げたら、切りが無いエゴの数。この都市も、人間のエゴの一つよね……そう思わない？」
私はゆっくりと、後ろを向いた。

「ねえ、ストーカーさん」

屋上と室内廊下を繋ぐ階段の入口を横目で問い掛けると、暗闇からうっすらと、人影が現れた。

「……気付いていたか」

ずっと聞き耳を立てて、佇んでいたのは判っていた。

だから私は、聞こえるように声のトーンを高くしていたのよ。

入口を抜けた人影を、夕焼けの光が正体を曝す。

短く癖のある黒い髪に、同色の刃のように鋭い瞳。顔付きは崎原よりも若く幼い。一言で言えば童顔。崎原が二十代なら、この男は十代くらいといったところか。しかし着飾りの無い漆黒に染まったコートやスラックス等の服装か、あるいは常に気を引き締めた、真面目そうな面構えが醸し出すのか、少なからず崎原よりは大人びた印象を持つ。

「……見たところ。あんたまだ子供でしょ？ 学校とか行ってるの

？」

「余計なお世話だ。お前に言われたくない」

冗談での問い掛けに対し、男は答えた。

律儀で面白いやつだ。滑稽に思わず笑みが零れてしまったじゃないの。

「冗談よ。それと私は外見はこんなんだけど、かれこれ千年以上は生きてるわよ」

そんなかぶりを振りながら言う私を、青年は『そんなこと、どうでもいい』とでも言いたげに睨む。その眼光からは私に対する憎しみと怒り、そして殺意が感じられる。紛れも無く赤マントとの戦闘中に感じた視線と同じものだ。

こいつで間違いないようだ。

「一応聞くけど、赤マントの時といい、今といい。何で私に憎悪の視線を向けるわけ？ 何か恨みでもあるの？」

態度から見てもそれしかないのだが、身に覚えが全く無い。多少は恨みを買う事はあったが、それは妖怪の間でのことだ。人間に恨まれた事が無い訳ではないが、それは昔の話である。今の時代では、皆既に故人。子孫すら残っていない。

冷静に過去を思い返して男を睨み据えていると、男は重く閉じていた口を開く。

「お前の兄貴に……俺の兄貴は殺された」

私を指差しながら、憎しみを吐き捨てるように男は語る。

「お前と同じ顔、同じ髪と目付きをした——玉藻絶狐丸にな！」

「絶狐丸兄さんが？」

「そうだ！——俺達兄弟は、ただ妖怪と人間の共存の為に、支魔への協力を頼んだだけだった。それなのに、あいつは俺達にいきなり攻撃を仕掛けて来た！」

男は私を指していた右手を胸の前まで持ってきて握り拳を作ると、怒りを露あらわにして叫ぶ。

どうやらこの男も崎原と同じ支魔の人間のようなようだ。それにしても、

まさか絶狐丸兄さんに話掛けるとは——絶狐丸兄さんはある出来事が原因で、人間は地球を汚すゴミと、殺意を抱くほど非常に嫌悪している。それなのに共存等と訴えれば、当然そうなっても納得がいく。

寧ろ、そんな科白を口にした方が愚かだ。

「その結果兄貴は死んでしまい。俺は右腕に大火傷を負った！ それだけの仕打ちしたあいつが何て言ったかわかるか！」

「……さあ？」

男はどうでもよさげにかぶりを振る私を睨み据え、唇を噛み締める。

握り締めた拳に、より力を込めて。

「今のお前のように、俺を見下した目でゴミくず扱いして笑っていやがったんだ！」

憎しみを乗せて言い放った男。

その表情は怒りだけでなく、悲しみも入り交じっているようにも見えた。よほど、仲のよかった兄弟だったのだろう。その様子から、兄を失った悔しさが窺える。

「まあ、兄さんならありうるわね。——んで、あんたが私を狙った理由は？」

「……お前から絶狐丸の居場所を聞き出すこと、そして——」

男は助走もつけず滑らかな地面を蹴り、颯爽と私の懷まで間合いを詰める。

「絶狐丸の双子の妹であるお前を、殺すことだ！」

言い放つと共に、男は私の顔を目掛けて、握り締めた右拳を放った。

襲いくる剛拳は徐々に大きくなり、私の視界を覆い尽くす。

轟音が紅の空へと響き渡り、闇の火蓋が切り落とされた——

第五話『復讐の退魔師』

槍の如く突き出された男の拳。それは確実に私の顔を捉えていた。迫り来る拳が徐々に視界を覆い尽くす。その拳からは凄い威圧感を受けた。並みの相手なら、足がすくんで動けなくなってもおかしくない。いや、避ける事自体が無理に近い。

——これは、避けるのは難しいわね。

刹那の間に身を守ることを決断した私は、咄嗟に後ろへと身を引き、そのまま十字に交差した両腕で身を固め、かろうじて受け止める——が、防御した際に来た衝撃は、私の予測を遥かに上回っていた。

正直ふざけている。人間の放つ一撃とは思えない。あまりにも重く、衝撃を完全に吸収しきれない驚異的な破壊力だった。ガードは崩れなかったが、それは人間でない私だからの話だ。

怪力が自慢というわけじゃないが、私は過去にスピード違反と余所見運転をセットに突っ込んできた軽自動車を片手で止めたことがある。それだけの力は備えていると自負している。

なのにこの男の一撃は、軽自動車の突進や怪人赤マントの拳を遥かに凌ぐ。いや、比較すること自体が愚かなのかもしれない。何にしても、こんなものを普通の人間や並みの妖怪がともに食らったら、高所から叩き付けられた果物のように、グロテスクな肉片へと変わり果ててしまう。

「ぐうっ」

私は弾き飛ばされるような形で一旦後ずさり、ガードを解いた。厄介だ……腕がビリビリ痺れて、骨の髄まで痛みが伝ってくる。

「ちっ……まさか受けられるとはな。ほとんどはこいつでダウンか即死だったのによ。伝説の妖狐の名は伊達じゃないってことかよ」

結果に不満げな口調で、男は拳を突き出した状態から姿勢を変え、フットワークからして、ボクシングを想わせる構えだった。

「もったいないわね。それだけ良いパンチ出せるなら、退魔師なんてやらないでボクシングやってた方がよかったんじゃない？ チャンピオンになれるわよ」

私が冗談めかして言ってみせる。

「ふん。俺はボクシングなんてやったことねえし、興味もねえよ」

男はそう言葉を返すと素速く間合いを詰め、ワン・ツーのリズムで拳を打ち込んできた。

「へえ、天賦の才ってやつじゃない？ 潰すにはちよつともったいないわね。まあ、人間にしてはだけど」

受け流しながら皮肉を言う私。

「ハッ！ 言ってる！」

それを黙らせるかのように、男はハイキックを繰り出す。屈んで回避した私だが、ハイキックは実はフェイクだとすぐさま見破り、頭上から垂直に落ちてくる踵を横に身を反らすしてかわす。

降り落ちた踵は、そのままコンクリートの地面を打ち碎いた。拳と同じくとんでもない破壊力だ。スベスベだったコンクリートが亀の甲羅のように、丸く窪んでひび割れを起こしている。

とは言っても、これだけ無理やりな動き方をすれば、当然隙ができる。このチャンスを逃すほど、私は甘くは——なっ、回し蹴りですって！

「オラァ！」

男は踵落としに使った右足をそのまま踏み込み軸にし、中段の回し蹴りを繰り出してきた。

「くっ！」

辛うじて反応できた私は、直撃しそうになった脇腹を守り防ぐ。しかし蹴りの重圧、衝撃までは押し止められず、私の体は間合いから弾き出されるような形で離される。

「——まったく、ふざけた蹴りを出すわね。ハイキックから踵落としまでは読めていたけど、次の手があるなんて思ってたわよ」
少し後ずさるように踏みとどまり、軽く溜め息混じりで防御を解

く私を、男は相変わらず不服な面立ちで睨む。

「ふざけやがって、本気でやりゃあ避けられただろお前」

む、これはちよつと意外。まさか気付いていたとはね。

「……そうね。油断してたのは確かだけど、それでも当たらない自信はあったのよ」

「ふん……。そりゃ過信だろ」

男は言い捨てすると右拳を私に向けるように握り締めた。今にも挑戦状を叩き付けて来そうな雰囲気醸し出している。

「本気出せよ！　じゃねえと意味無いんだよ」

私を指差して、男は剛胆に言い放った。

それにしても、意味が無い？　……ああ、なるほどね。

今の言葉——コイツの意図が解った。この男は本気の私に勝つことにより、絶狐丸兄さんにも勝てると言う確信を得たい訳だ。

確かに私に勝つということは、絶狐丸兄さんを倒す可能性があることを伺わせるものだが、それは私と絶狐丸兄さんの戦闘能力が同じだと勘違いしている証拠でもある。

双子と言う理由もあるからそういう見解になるのだろう。あなたが同等の戦闘能力というのは嘘ではない。しかし性別の違い、生き方の違いから戦術は大きく変わる事をコイツは解っていない。

それに、ちよつと自分のペースに入っているとと思って余裕面してるのは氣に入らない。

——少しイジメてやる。

そんな気持ちからか、つい私の表情が含み笑いへと変わってしまった。

「判ったわ。でも、その前に名前を訊いていい？　人間で本気の私

と戦うのはあんたが初めてなのよ」

きりしまこうが

「そいつは光栄だな。俺の名は霧島光我。よく覚えとけよ、お前を殺す男の名を——」

「粹がるな小童！」
こわつぱ

私は霧島の話をかき消すように怒鳴った。

突然の怒気の籠もった叫びに、霧島は眉をひそめる。

まあ、別に本当に怒ってる訳じゃない。気合い代わりの叫びと、ちよつとした威圧も加えての怒鳴りだ。

「この世に生まれて十数年程度の糞餓鬼が、軽々しく私を殺すなどと口にするなよ」

「なっ！」

久しぶりに本来の喋り方で妖気を放ちながら脅してみたら、予想通り霧島はたじろいだ。

当然だろう。今出している妖気の量は、赤マントの時とは桁が違うのだ。威嚇しないはずがない。それでも本領の三分の一も出しちゃいない。だからといって、全ての力を解放する気もない。それ以上を越えてしまうと許容量オーバーで人間の姿を維持できなくなってしまうからだ。

言うなれば現状は風船がパンパンに膨らんだ状態。いつ破裂して隠していた正体が現れるか解らないってところか。

それでも私は、人間の姿を出来る限り維持したままで勝たないといけない。これもプライド故の一種のこだわり——と答えようか。けれど本気で相手をしない訳じゃない。“全力”を出さないだけだ。

霧島は“本気”を出せとは言ったが、“全力で来い”とは一言も言っていない。

「……さて、これから仕掛けるけど、あらかじめ忠告してあげる」

私は霧島を指差し、不敵な笑みでこう告げた。

「あんたに私は殺せない」

「な、何っ！」

ふわりと不気味な横風が、私の銀髪をなびかせる。空はもう闇に染まりつつある。このシチュエーションは、奴に緊張を与えるに適した状況。私の威圧感を高めてくれる。

光私の瞳に写る私の瞳が、闇夜の月光に当てられ妖しく眼光を彩る。夜間に活動する野生動物の瞳は獲物に対しては威圧にもなる。私にも同様の、それ以上に年季が入り研ぎ澄まされたプレッシャーが備わっている。

視線に刺された今の霧島は、意識とは裏腹に緊張しているだろう。警戒心を剥き出しに、冷や汗伝う表情で身構えるその姿が、より深く確信を強めた。

「今のあるたと私の力量差が、解るかしら？」

「……うるせえ。まだ終わってもいねえのに勝ち誇るな。戦いに百パーセントの勝率はねえんだよ！」

「そうね……。勝率が百パーセントの戦いなんてない。必ず残りはある。とはいえ、あなたの勝率はあまりにも低すぎるわよ」

そう告げてみた私だが、霧島の眼には戦意の衰えがみられない。寧ろ氣を引き締めるかのように眉間にしわを寄せ、氣を高めてゆく。いい眼をしている。

例えかなわない相手を前にしても臆さない眼差し。私の好きな目つきだ。勝利は生、敗北は死と心得た者が見せる。生きる為に戦う者の眼だ。

だけど――。

「死ぬ覚悟が無いのに、勝ちを取りに行くつもり？」

「まさか……。俺は常に命懸けだ」

なる程、神経が研ぎ澄まされていくのが解る。その覚悟が伝わってくる。これ以上は御託を並べる必要はないだろう。

「そう……なら、いくわよ」

私は這うように駆け出し、霧島との間合いを瞬時に詰めた。そして攻撃範囲に入ったと同時に、先手を打つ。

その先手はコイツにとってはかなり意外な戦法。いや、拍子抜けな“眼眩まし”だっただろうが、だからこそ通用した。

シグナルのように空気を張り裂く音が、私の開手から生まれ、辺りを劈く。

「な——！」

目を強く瞑って顔を守るように怯む、霧島の姿がそこにあった。

——フフ、効いたみたいね。

猫騙し——相撲などで相手と立ち合う時、相手に両手を突き出して掌を合わせて叩くことで目をつぶらせる奇襲戦法の一つだ。知識不足だとなかなか対処できない手口故に、初めて食らう者には眼潰しより厄介な技。しかし、並みの者が使ってもそれほど相手に脅威となる技ではない、私が使うからこそ性能は上がる。

どうしても怯んでしまうその理由が、鼓膜を破り兼ねない音、振動だ。こいつは耐え忍んだが、普通の人間や耳の良い小動物ならば確実に意識が飛ぶ代物だ。平然とはいられない。

霧島が聴覚と視界を狂わされたこの瞬間、気付かれないように気配は殺したまま素速く後ろに回り込み、そのまま腰に腕を回してから裏投げを食らわせた。

「ぐがっ！」

垂直に足を上げた私は、追い討ちで倒れたままの霧島の顔面に踵を叩き付けようとしたが、すんでのところで横に除け返って避けさられてしまい。そのまま地面を踏み碎いてしまった。

「この馬鹿力が！」

起き上がりざまに霧島は駆け出し、右拳を打ち込む——が、私は眼前に迫り来る拳をするりと抜けるように避け、同時にその手首を掴んで関節を外す。

「なっ！」

「迂闊に拳を突き出すもんじゃないわ——よっと！」

霧島が驚愕と苦痛が入り混じった表情で叫ぶ刹那。私は関節を外

した手首から上腕に掴み替えて一本背負投げに移行する。

背中から地面に叩きつけられた霧島は苦痛から呻き声を出す。けれどそれも束の間、霧島はすぐさま切り返し立ち上がる。

正直これには驚いた。受け身もろくに取れてない状態でまともに食らったはずなのに、この男はあっさりと起き上がったのだから。

もしかしたらコイツはまだ、力を隠している？

思わず表情を渋めて見定める私に対して、霧島は不敵に笑う。

「生憎、打たれ強さは並じゃないんだよ。俺はな」

「みたいね。普通なら、今で死んだっておかしくないのに……」

そうだ、死んだっておかしくはない。そうでなくても立てないはずだ。地面には亀裂が出来ている。それだけの力で叩き付けたのに、ケロリと佇む霧島に違和感を覚えずにはいられない。

それにこの男。未だ息が乱れていない。おかげで途中から不審に思っていたことが、今はつきりした。

「あんた。人には本気出せと言っというて、自分は本気を出さないのはどういうつもり？」

そう、本気を出してない。コイツは退魔師だ。なら多少の霊氣くらい出せるはず。にもかかわらず、戦闘中に一度も放出していない。随分と舐められたものだ。まさかこっちが逆に手を抜かれていたとは。

「……どういうつもりだと？ 俺は本気で殺しには来たぜ。そういうお前こそ半妖怪にすらなっていないクセに何が本気だよ。妖術だって未だに使ってこないじゃねえか」

外れた手首の関節を治しながら、霧島はそっくり言葉を返す。同じ理屈で返されるってのは少々頭に來たが、まあ、私にも非はあるか。

「悪かったわね。でも、あんたがもう少し強いところを見せつけてくれないと、要望に応えられないわ」

「そうかよ。だったら……その気にさせてやる！」

霧島は氣の入った声を出し、体を横に向ける形で構える。刹那、

一気に靈気が疾風のように吹き出す。

空気が張り詰めている。

その靈圧は半端なかった。私がさっき放った妖気の比ではない、明らかに上回っていた。

靈能力者を数多く見てきた私だが、若くしてこれだけ強い靈力を持つ者に会ったのは初めてだ。

——見くびっていたわ。まさか、これほどとはね。

私は唇を噛み締め、自分の見誤りを反省した。同時に、久しぶりの強者を前にした嬉しさからか、武者震いが納まらない。いつの間にか笑みもこぼれていた。

「その気になったかよ」

蒼色の靈気のオーラを身に纏い。霧島は私に訊ねる。

「ええ……」

うずうずする。だんだんと私の中にある、どす黒い闘争心が“戦え”と掻き立てる。

「上出来よ」

返答と共に私も妖力を解放していく。

私の体が、腰と耳が軋みを上げる。そして、腰から徐々に四本の尻尾が飛び出し、耳は狐の耳へと変わる。毛色が銀から白銀へと輝きを放ち始める。

「……それだ。その白銀色の毛色に黄金の瞳。その顔。全てアイツと同じだ!」

「当たり前でしょ。双子なんだから」

沸々と怒りを沸騰させるかのような口調で、霧島は私を睨み据える。

「俺は復讐を果たす! お前を殺して、絶狐丸に兄弟を失った悲しみを味あわせてやる!」

握り拳を胸の前に、霧島は宣告する。

「生憎だけど、仮に私が殺されても。絶狐丸兄さんは何とも思わないわよ」

「何……？」

「それに、復讐心で戦ってるあんたに……私は倒せない」

——少なくとも、本当に強い人間は復讐心で戦わない。

「見せてあげる。憎悪で私は殺せないことを！」

私は真剣な眼差しで霧島を指差すと、合わせるかのように風が強く吹き荒れ出した。

まるで、楽しむかのように。

第六話『幻影乱舞』

廃ビルの屋上で、私と霧島光我は互いを睨み据えて様子を窺う。もう夕刻から月夜が照らす時間帯へと変わるまで続くこの戦い。その内のほとんどは、こうした威嚇が多く、時間を奪っていた。

「どうした？　でかい口たたく割には、全く仕掛けてこないじゃねえか？」

「あんたこそ、悪たれ口たたくなら仕掛けてきなさいよ」
お互いに罵り合いながら隙を窺うが、私も相手も仕掛けられないのは解っていた。

先に仕掛けた方が不利だと――

無益とも呼べる時が流れ、月が半分に欠けた頃。

「……いつまでにらめっこするつもり？」

流石に苛立ちが疼いてきた私は、その気持ちを声に出して問いかけた。

「お前が仕掛けてくるまでだよ……」

同じくイラついた態度を露わにして、あいつは言葉を返す。

ふざけやがってクソガキが――あいつの生意気な態度のおかげで、私の怒りのボルテージは、止まる様子なく上昇し続けるばかりだ。

昔から私は皆にクールなんて言われるが、それは違う。

私はこうみえても熱くなりやすい性質。だから我慢が一番嫌いだし、当然こんなちんたらしていれば、流石に腸も煮えくり返ってくる。それでも今の私は、人一倍に忍耐強くこうして堪えているんだ――などと、ここまできたら自賛もしたくなってくる。

まあ、私は人じゃないけどね。

なんて一人ツツコミを入れている場合じゃない……自賛とか何を言ってるんだ私。

とりあえず、気を取り直して行くとしましようかね。

さてと、こいつは飽くまでも先制に来る気は無い。確かにそう促すことを言い切った。ならば、敢えてこちらが先攻に移るしかない訳だ。

先に動いた方が不利ではあるが、このままだと気が緩み、動きにまで表れてしまい兼ねない。

だったらこちらから出向いた方が幾分マシ。我慢するのも、飽きてきたところだ。

「お望み通り、こちらから行ってやるわよ」

再開の火蓋を切り散らした私は、軽い足取りで地面を蹴った。一秒の時を流す間も無く霧島との間合いを埋め、その顔面に爪を立てた右手を振り下ろす。

狙いは首筋——切り裂けば一瞬で勝負は決まるのだが、如何せん。功を焦るあまり、攻撃が単調過ぎた。

これでは見切られてしまう。案の定、対する霧島は左腕で私の一撃を受け止めた。時同じくして、辛辣な怖気が肌を伝う。これが警戒信号だと云うのを、私は十分に理解している。そして危険の発信元は足下、ここから脅威が襲い来ることも察知していた。

「ちい！」

脇腹に迫って来た霧島の蹴りを、私は左膝を上げてどうにか凌いだ。しかし、嫌——やはりとも言うべきだろうか。霧島が繰り出した蹴りは、解放した靈力で強化されていた。

あっさりと私を間合いから弾き出し、その衝撃力を強烈に誇示してみせた。

「そう簡単に、間合いに入れてたまるかよ！」
くそっ！

私の体は地面を滑るように、後退りを強制させられた。摩擦から生じた煙りを巻き上げる踵に、無理やり力を込めて私は踏み止まる。そして脇腹のガードを解き放ち、再度、霧島へと駆け出した。

「そう簡単に引き離せるとも、思わないことね！」

獣すらも叩き伏せる、そんな勢いで私はもう一度猛威を振るい、畳み掛ける。

「ぐっ！」

私の突き出した右手を、霧島は両手で掴んで止めた。それでも私はそのムツツリ顔を驚掴み、そして握り潰すため、力任せに押し出す。しかし驚くことに私の腕は、指先が僅かに届かぬところから、全く前に進まなくなった。

力が拮抗している……いや違う、僅かに私が力負けしているようだ。手は抜いていない。私とこいつの足場がピキピキと、ヒビ割れから悲鳴の軋みを上げているが何よりの証拠であり、事態を体現している。それにしても、どれだけ力を加えても一向に私の手が奴の顔に届く気配が無い。力を込めれば込める程、足場は崩れ、破片が砕け散り宙に跳ね上がるだけ……。

とんでもない馬鹿力だ。こいつは本当に人間か？

訝しながら更なる圧力を掛けたが、対する霧島は、それを無理に止めようとはしなかった。

「なめんなッ！」

一瞬の出来事だ。

叫ぶと、霧島は掴んでいた手を放し、横に沿うようにして私の右手を避け、懐へと潜り込んだ。そして僅かに身を縮めると、勢いを付けて私の鳩尾みぞおちに、鋭い肘打ちを突き立てた。

内臓が圧迫し、かき上げられる。

「がはッ！」

正確に捉えた強烈な一撃に、たまらず私は喉から呻きを漏らした。けれどこの一撃は、ほんの序の口に過ぎなかった。

意識を繋ぎ止め、痛みの引かない鳩尾部を押さえて前を仰ぎ見れば、霧島が大気中に漂う僅かな靈気を右手に集約しているではないか。右手に吸い込まれていく靈気は次第に強力な靈圧へと変わり、それが電撃と成って右手に迸る。ほとばし

マズい！

最初の肘打ちは飽くまでも牽制。次に放つ、この追い討ちが本命だったのだ。

気づいた私は“く”の字に折れ曲がった体から体勢を立て直し、霧島から離れようと地を蹴った。

が、次の瞬間。不可解なことが起こった。

信じられなかった。確かに私はバックステップを試みたはずだ。

なのに、体が吸い寄せられる！

逃げたくても逃げられない。このままでは危険だと、頭の中では赤信号を発しているのにも関わらず。目に見えない力が私の体を強引に、霧島の右手へと引き寄せる。

唐突に起きる予想外の連続と、その身に襲い掛かるであろう脅威に、私は驚きと戸惑いを隠せずにいた。

「食らええええ！」

このままじゃあ、死ぬ——く、ううっ！ ま、間に合えええッ！
死中に活を求める中、霧島が覇気を込め、雄叫びを上げた。

そして雷を纏った拳は割れるように開口され、雷光を引いて私の胸部を薙いだ。

「雷龍爪！」
らいりゅうそう

「——がッ！ ああ、そ……んな」

迅雷が一閃する。

切り裂かれた私の胸から、鮮血が噴水のように噴き出す。同時に

私は、後ろに力無く倒れた。

沈黙が虚しくも支配する――

霧島は僅かに乱れた呼吸を整え、雷龍爪と言う技を放った右腕を押さえながら、私へと歩み寄る。

「俺の……勝ちだ」

仰向けで血染まった私の様子を見やりながら、霧島は虚しそうに呟き、私に背を向けて立ち去ろうと歩を進めた。

この様子からして、霧島は勝ったと思い込んでいるようだが……。

生憎、私はまだ死んじやいない。勘違いしないでもらおうか。

「ぶはっ！」

溜めていた息を吐き出しながら、私は勢いよく上体を起こした。

「ふう、ほんと死ぬかと思った」

あいつは声に反応するとすぐさま振り返り、あぐらを組んだ私を見て、その黒い瞳を丸くした。

「ふふん。どうだったかしら、私の演技。まさに迫真ものでしょ？」

「そ、そんな馬鹿な。何で生きてやがる！ それに――」

「何で傷一つ無いんだ！ かしら？」

困惑気味の霧島が言いかけた科白を、私はしてやったりと笑みを浮かべて代弁してやった。ピンと人差し指を立て、得意気な趣を包み隠すことなく。

「正直、驚いたのはこっちよ。あんたの雷龍爪だっけ？ あの技が出た時はホントにヒヤッとしたわ」

感想を溜息混じりに伝えた。

まったく、あんなとんでもない技を繰り出してくれちゃって――と、内心はそんな愚痴を呟きつつも私は立ち上がる。煩わしく感じた前髪を軽く掻き揚げて。

「何故だ。絶対にありえない。あの距離で雷龍爪を避けるのは無理だ！」

怪訝そうに腕を横薙に振るい、私の生存を否定するクソガキ。

はいはい、納得いかないのも判るけど、ものには順序ってもんがあるから、私の話はちゃんと聞きましようね。そんな気持ちを嘲笑に含めて、私は言葉を発した。

「避けてないわよ。てゆうか、避けられなかった。だからあんたに、攻撃を“ハズして”もらったの」

「な、何」

「幻術よ……」

お互いの不可解を種明かしすればこうだ。

まず最初に雷龍爪。

この技は大気中にある微弱な霊気を右手に集束し、それで相手を薙ぎ払うように切り裂く、至極単調な技だ。しかし集束中に起きる吸引力は、相手に纏わり付いた僅かな霊気でさえも吸い取ろうとする特性がある。

それにより、対象者は身体ごと引きずられ、無理やり攻撃の間合いいに入れられてしまう。

逃げられない、そして避けられない。

そこで私は、ならばあいつ自身に攻撃をハズしてもらおうと、幻術を掛けた。

その時のあいつは幸いにも、しっかり私を睨み付けていた為、なんとか幻術を掛けることに成功。結果、幻術により距離感を失った霧島は空振りしたにも関わらず。あたかも私に攻撃が当たったかのように惑わされてしまった訳だ。

「――無傷で服も破けてないのも、そういう理由^{わけ}よ。理解した？」
私は霧島に対して悪戯な笑みを浮かべ、自分の頭をツンツンと指を差しながら、挑発をかましてみせた。

「く、味な真似しやがって。だがな……」
忌々しげに、それもより剥き出しの敵意を眼光に宿し、霧島は述べた。

「雷龍爪は一発だけしか放てないわけじゃねえ」
そして拳を前に突き出し、続けて言い放つ。

「当たるまで、ぶち込むまでだ！」
意気軒昂^{いきげんこう}に構えをとってみせたが、残念ながらここから先、私に攻撃を当てることは不可能だ。

「生憎^{なげ}だけど、あんたの攻撃はこれから一発も当たらないわよ」
それを言葉にして伝えてやり、私は行動を開始する。

「見せてあげる。私の十八番技」
「なに？」

そよ風の様にゆったりとした足取りで踏み出し、霧島に歩み寄る。
本人は身構えて警戒しているようだが、私の幻術がとくに発動してる事には気付いてないようだ。

徐々に距離が詰まって来るにつれて、あいつの表情は険しくなっていく。

攻撃の隙を窺っているのだろう。

そうして、お互いが間合いに入った刹那。

霧島が踏み込み、先手の右拳を打ち出した――が、右拳は当たらず私の顔をすり抜ける。

「な――！」

既に判っていた結果だが、霧島の方は驚きを隠せないようだ。一瞬だけ表情を曇らせると齒軋りを立て、すぐさま姿勢を切り替えて足を狙った下段の蹴りを繰り出す――が、これもあっさりすり抜けて空を切る。

「そんな馬鹿な！」

どうやら、まだ気が付いてないみたいね。

内心嘲笑を抱き、私は霧島を見据えた。

本当なら、今の空振りのタイミングに何発か攻撃を入れられたのだが、先ずは相手が幻術に掛かっているかの確認を取らせてもらった。

――まあ、様子見は済んだから、そろそろ攻撃に移ってみましようか。

そうと決まればと、さっそく回し蹴りをお見舞いしてやる私。

こめかみを目掛け放った一撃は、見事にツボを捉えた。

「ぐあっ！」

鞭で叩くような爽快な音が響く。

これは効いたのでは、と期待を抱いたが、霧島は軽く怯む程度で、大して効いてない様子。

やっぱり打たれ強いわね。だけど、まだ攻撃は始まったばかりよ。

「――く、このアマあ！」

思っていた矢先、霧島は吼えて殴り掛かるが――無駄だ。どれだけ仕掛けようと、豪快に振り回した鉄拳や、風を切り裂く音を振り撒いた乱雑な蹴りは、闇雲に放っても全て私の身体をすり抜けてしまうのがオチ。

そしてこちらはその度、間髪を入れず舞いを披露して打撃を打ち込んで行く。

死角からゆらりと現れ、殴り込む私。あいつがそれを本物と見做して反撃を試みようとも、それは鏡花水月の如し。残念ながら、当

たることは叶わない。

全ては幻に歪み、消えてゆく。

「ちくしょう！ 何で、何で当たらないんだ！」

息を切らしつつ叫ぶ霧島の表情には、深い焦りが見えてきた。

何度試みたのだろうか、一心不乱に攻撃を繰り返していた。

それでも拳は霧を殴っているかのよう、ただ空を切るだけだ。

それにあいつ自身は私の攻撃を悉く受け続け、劣勢に陥っていた。

疲労と焦りが蓄積されるのは無理もない。心身へのダメージは、唯ならぬものとなっているはずだ。

けれど――フッフ、ここからが本領よ。

舞踊のような身振り足取りは止まることなく、寧ろ躍動感が脳裏に流れる奏度を加速させ、高揚感が鼓動のベクトルを上げて行く。私は霧島を囲むよう円周に舞う。くるりくるりと、色彩は鮮やかにゆらゆらと、踊りは観る客を釘付けにし、心の闇に惑わせる。

「み、美狐が六人……いや、十人。ど、どんどん増えてッ！」

徐々に蒼ざめていく霧島を余所に、私の数は増してゆく。思いの外、廃ビルの屋上が狭く感じる。まあ、それもすぐに消えゆくだろう。何せこれは、あいつ自身が作り出した私の幻に過ぎないのだから。

けれど、今は幻じゃない。

この術は、相手が“いる”と認識していた時に“具象化”する。本人の意識が途切れるか、或いは時間が経過するか、本人が“存在”を完全に否認するまでは、絶対に消えることはない。

『そろそろ、終わらせてあげる。もちろん、私の勝ちでね』

「く、くそが……ッ！」

私が弱気に呻く霧島を指差し告げると、周りの私達も全く同じ動

作で発言をハモらせる。

言い終わった後、私に続き全員が一斉に霧島を目掛けて駆け出した。

『これがッ！』

最初に霧島に踏み込んだのは私を含む四人。囲む形で前方の二人が脇腹と顔面を目掛け、後方の私ともう一人が太股と脊髄を狙う。

「ぐあ！」

『私の――！』

フラつくその身体に、更に四方八方から三人ずつで打撃を食らわせて行き、攻撃を終えた者は風に撒かれた煙のように消えていく。具象化されたとはいえ、所詮は幻。僅かな衝撃であいつの意識が少しでも飛べば、“いる”と認識した幻は順番に沿って消滅してしまう。

具象化した幻を操る権限は私が持つ。そして順番はしっかり把握していたから、こうして序列に従って仕掛けさせた。でなければ攻撃していない幻が消えてしまつて勿体無いし、カラクリを気付かれてしまう可能性も考えられる。

まあ、今のあいつ自身、そんな冷静になれる状況か？ などと問われたら、おそらくは無理だろう。出来たらとつくの昔に、この幻達は消滅している。

何にせよ、ここはスパートをかけるところだ。油断禁物、最後の決めは私が担わねばならないのだから。

幻達は激しさを増し、入り乱れ、踊り狂うように、霧島の身体に次々と刻み込んで行く。袋叩き同然のリンチを受け続ける霧島からは、微かな呻き声すらも消え去っていた。

『幻術奥義の一つ！』

言い放つと共に最後の三人が三角形に霧島を囲み、そして蹴り上げる。

宙に打ち上げられた霧島の身体が、後ろで光照らす満月と重なった。その合間に最後に残った本体である私が、霧島と同じ高さまで跳躍――

「幻影乱舞！」

空中で身体を縦に一回転させ、霧島を目掛けて勢いに任せた踵を落とし、フィニッシュを決めた。

腹部に直撃すると共に霧島は悲鳴を絞り出し、バレーのスパイクを想わせる勢いで叩きつけられる。衝撃により、亀裂が瞬く間に生じ、地盤は派手に割れた。

破片は飛散し、辺りに小石が散らかる。

そんな様子を見やりつつ、私は着地を終える。あいつはうつ伏せのままピクリとも動かないが……まあ、死んではいないだろう。耳を済ませばまだ呼吸は聴こえるし、生命力を表す気の流れも感じられる。

けれど、あれじゃあもう立てないわね。

勝敗は決した、私の勝利で。そう確信を得ようとした瞬間だ。

「まだ……だ。まだ、終わらねえ……。俺は……負けるわけには」
呻きながらも霧島は立ち上がった。

立つのが精一杯なはずだ。震える足で、ボロボロの身体を必死に支えている。服の中も打撲と擦り傷に塗れているだろう。にも関わらず、その瞳の闘志は未だ燃え尽きていない。

しっかりと私を睨み据えていた。

「あんたの負けよ。身体を支えるだけで精一杯のあんたなんて、指一本でも殺せるわよ」

「うる……せえ！」

それでも歯ぎしりを立て、だらしなく垂れた腕を引っ張り上げる霧島に、私は呆れの溜息を禁じ得なかった。

倒れた方が楽な時もある。けれど、そういうのは嫌いじゃない。

かく言う私もまた同じく『倒れるのは自分が死ぬ時だ』と、決意を内に秘めて戦っているから、こいつの意地も解らなくはない。

面倒臭いけど、仕方ないか。

「じゃあ、お望み通り続けましょう」

上着を着直して、私は返答を出す。意志を汲んでやったその言葉を前に、霧島は不敵に微笑む。口には出さないが、その眼はしっかりと語っていた。

『きやがれ、ぶっ殺してやる！』と。

要望に応え、一呼吸し終えて私は、行動を開始した。颯爽に石地を駆ける。

霧島は迎え撃つため、右手に靈気を集め始めた。

相討ち狙いを目的とした、最後の雷龍爪を繰り出すつもりだろう。

望むところだ。

距離は徐々に縮まる。

「うおおおお！」

お互い間合いに入ると、霧島が咆哮を上げて一步、力強く踏み込んだ。

「雷龍爪！」

玉砕上等。そんな愚かな意志がひしひしと伝わる叫びと共に、雷を帯びた右手を動かそうとするが――

悪いわね。無理なのよッ！

私は四本の尻尾を霧島の両手足に巻き付け、四方に締め上げた。すると霧島の体は大の字に開き、がら空きとなる。

完全に動きを封じ込めた。

「なッ！」

驚き様からして、私がこうして尻尾を使い仕掛けに来ることなど、微塵も思わなかったようだ。尻尾のある妖怪を前にしたら、最も懸念を抱くべきところだというのに。

やはり疲労困憊で思考力が鈍っていたか。しかし、戦いに惜しいも卑怯も無い。死後に恨もうが、それは筋違いだ。見破れず引っ掛かる奴が悪い。何よりも私は、勝つためならあくどいカードを、躊躇うことなく手札から引ける。

「これで終わりよ。ガキは大人しく寝んねしてなさい！」

絶望感に満ちた霧島に、私は最後の一撃、爆炎掌を胸部へと打ち込んだ。

「ぐああああッ！」

爆風により、煙を纏いながらいつは吹き飛ぶ。一応、威力は極力抑えたから、死にはしないだろう。一々躍起になって生意気なクソガキを殺すつてのも、性には合わないしね。

そんな配慮とは裏腹に、予想外の事態は起きた。

吹き飛んだ霧島が屋上から落ちてしまったのだ。

し、しまった！

胸の奥で、急激に深い鼓動が鳴った。

驚きのあまりに私は急ぎ駆け出し、彼を助けるために屋上から飛び降りた。

第七話『決着の後に…』

霧島に打ち込んだ爆炎掌は、殺さないつもりで放った技だった。それがまさか、十階建て廃ビルの屋上から落としてしまう事になるなんて、思ってもみなかった。

そして今、私は霧島を助ける為に屋上から外へ飛び込み、地面へ急降下している。

私は霧島を掴もうと必死に手を伸ばす。

けれど、伸ばした手は僅かに届かない。もう少しだと言うのに。地面までもう半分しかない。そんな焦りが渦巻く中、必死に思考模索をフル回転で行った末、私はある助命手段を閃いた。

それなら——こうよ！

手が届かないなら尻尾を伸ばせば良い。

私は腰の、白銀色に輝く四本の尻尾を伸ばし、尻尾の二本は霧島の腰に、残り二本は両手に巻き付けた。

「よしっ！」

巻き付けて固定した後は、私が廃ビルの壁を手刀で突き刺す。そうすると、ビルの壁を突き抜いた私の腕がフックの代わりになり、私達の落下はガクンと止まった。

「ふう。まったく、ヒヤヒヤさせないでよね」

ため息混じりで呟いた私は、こめかみから流れた冷や汗を片手で拭いながら、安否の確認をするために、懸念の元凶である糞餓鬼を見下ろしてみた。

うなだれていた奴も顔を上に見上げ、私と視線が合う。

「……何で、助けた？」

「あら？ 意識飛んでなかったの。呆れるくらいのタフさね」

「答える……何で助けた」

霧島は訝しげに私を睨み据えて、執拗に問い詰める。

何で助けたですって？

……そういえば、何でだろう。

助ける理由など、これといって無かったはずなのに。

だけど、何故か霧島が屋上から落ちた時や、そこから助ける時、自分でも不思議なくらい動揺していた。認めたくはないが、霧島を助けた今、安堵の波が穏やかに私の心を撫でつけている。

昔は平然と命を奪ってきた私だったが、時々こうして感じるこの気持ちと感覚は、一体何だろう。

“あの娘”と出会ってから、ずっとこびり付いているような、形容の出来ないモヤモヤするこの感じは――。

「解らない……」

「え？」

「解らないのよ。あんたを助けた理由が……何でなのか」

問い掛けるように呟いた私を、霧島は茫然と眺めていた。

しばらくして、私は廃ビルの入口前に霧島を降ろした。

都会から少し離れた、それも川沿いの方に建つ廃ビルだからか、外灯の設置などは施されてはおらず。代わりに月夜の光が照明灯の役割を買って出てくれていた。

霧島を見れば、腰を落としたまま深く呼吸を重ねている。致命傷の深手とはいかずも、ダメージは満身創痍の域に届くだろう。

もう、抗う力も大して残されてはいまい。一瞥した後、立ち去ろうと背を向けた私だったが、歩を進めながら半妖から人間の姿へと戻したその時――。

「待て！」

霧島は私を呼び止めた。

振り返って見れば、よろめきながらも立ち上がり、奥歯を噛み締め、怒涛の覇気を睨みに利かせて私を差す。あんなに叩きのめされて些かも衰えのない気迫をぶつけてくるとは。

まったく、赤マントよりもしぶとく、そしてしつこい奴だ。

「どこへ行くつもりだ」

右腕をだらしなく垂らし、左手で腹を押さえ、苦悶の面立ちで私を睨み据えて問い掛ける霧島。

「どこへって、帰るのよ。今日は疲れたからね」

「ふざけるな……。まだ、決着は着いてないだろ」

頭を軽く掻きながら答えた私に、相変わらずの敵意を剥き出す霧島は一步力強く踏み出し、喉の奥から絞り出すように返事を返す。

「決着は着いてるって。あんたの負けよ。認めなさいよ、往生際が悪く悪い」

「うるせえ！ 俺は、負けてねえ」

手のひらを返ししながら済ました態度で言う私に、負けず嫌いな霧島は納得の意を示さない。右手で握り拳を作って闘争心を引っ込めずに喚き散らす。本当に面倒くさい奴だ。

「言っただけだよ。復讐心で戦ってるあんたに、私は倒せないってね。ついでだから理由も教えてあげましょうか？」

「何——！」

「妖怪のほとんどはね。憎しみや怒り、闘争心とかが妖力の源、糧になっているのよ。にもかかわらずあんたは復讐心で戦っている——」

霧島の表情がハッと驚愕の色に染まる。話の意味に気付いたのだろう。そう、自分の復讐心が私を含め妖怪達の絶好の餌になっている事に——。

「ついでに、鬼って妖怪がいるわよね。あれの大半はあんたのような霊能力なんかを持ったやつが憎悪で我を無くした、なれの果ての

姿よ」

話を続けるに連れて、霧島の表情から戦意が消え、脱力していくのが見られる。

「もう解ったわよね？ あんたは復讐心で、自分で自分の首を絞めてるの。ましてや、復讐心をばらまいて妖怪を強くさせるなんて、退魔師が聞いて呆れるわよ」

両腕を組み、強腰で言い捨てた私に返す言葉もないのか、ただ霧島は俯いて黙り込む。

しかし、少し沈黙の後に、霧島は口を開いた。

「それでも……。それでも俺は、お前ら兄妹が許せないんだ」

気持ちを弁え切れないのか、霧島は自分の意思を声にして絞り出す。その顔には苦悩の色が滲み出ていた。

「お前ら兄妹ってねえあんた。私や烈狐丸兄さんは無関係でしょう。さっきから言おうと思ってたんだけど、逆恨みじゃないの、それ」

「……くっ、判ってるよ。そんなくらい判っているんだ。……だけど」
迷った表情で齒軋りする霧島だが、その様子を見ると、どうもねちっこくてイライラする。

「ああもう。付き合い切れないったらありゃしない」

いい加減うざったい——そんな煩わしさから一刻も離れたくて、私は踵を返し歩き出した。^{きびす} またも後ろから霧島がしつこく呼び止めるが、今度は振り返ることはせず、代わりに言葉を送ってやった。
「あらかじめ忠告しておくわ。自分の負けを認めてその偏った復讐心なんか捨てちゃいなさいよ。あんたの兄のことを忘れるとは言わないけど、そうしないとあんた。憎しみに捕らわれていつか自滅するわよ」

そのまま霧島に「じゃあね」と素っ気なく軽く手を振り、私は廃ビルから立ち去った。

それから夜遅く、私は帰りに通る人気のない住宅街の路地を歩いていた。

街灯がポツンと地面を照らす。

付近には幾つもの家やアパートが建ち並んでいた。

特に気にもとめず。ただ歩みを進めていた私だったが――。

「痛つつう……」

押し寄せてくる激痛に、私はたまらず胸を押さえ、うずくまって呻いた。

霧島の前では平然を装っていたが、実を言うと、これがけっこう効いていたりする。

みぞおち目掛けての肘打ちにはかなりこたえた。霊力を加えた一撃ゆえに、その与えるダメージは何倍にも跳ね上がる。にもかかわらずあんな馬鹿力の一撃を諸に食らってしまったのだから。

お陰様でこの様だ。

肘打ちですらこうなるのに、もし雷龍爪を食らってたらどうなっていたことか――。

「考えたくもないわね……」

背筋を寒気がなぞる。今後またあいつと戦う機会があれば、あれを封じる手を用意せねば――などと、いずれ訪れるであろう再戦に懸念を釘打つなか、私の後ろから忍び寄る気配がうっすらとだが、確かに感じられた。しかし怪訝にも敵意が無い、けれどちよつとした不快感と、感受を避けたくなる異様な雰囲気放っている。

……要するに、だらしが無い程気が緩い。

相手の後ろにひっそりと佇むわりには、敵意どころか、やる気そのものが無いのだから、そりゃ邪推も溢れてくる。とは言っても、私はこの後ろに立つ者を知っていたからこそ、こんな不愉快な気分になっているのだけだね。

「大丈夫かい？」

聞き覚えのある声。やっぱりアイツか。まさか今頃にして声を掛けてくるとはね。

面倒な奴が現れたものだ。気付けば口から溜め息が漏れていた。

「まったく、いつまでストーキングを続けるつもり？」

鬱陶しく思う気持ちを隠さず、私は立ち上がり後ろを振り向いた。当然、後ろにいる相手がどんな顔をしているのかも解っている。

「崎原亮。だったわよね確か？」

予想通り、奴はニコニコ顔でそこにいた。

「正解！ よく解ったね。正解者の美狐ちゃんには俺のケータイのアドレスをプレゼントさ」

この期に及んでこの馬鹿は何を言ってるのだろうか。

右手を頭に乗せ、溜め息混じりでかぶりを振って呆れる私の姿を目にしても、まったくお構いなしに好感を面に出し、崎原は胸のポケットからケータイを取り出して開け閉めを繰り返していた。

早く受け取ってと急かしているのだろうか？

「判ったわ。赤外線で送受信するからケータイ貸して」

「お！ ノリがいいねえ。はいはい どうぞ」

無言で受け取った私は、崎原のケータイを開いて、画面の部分とダイヤルボタンの部分を握り締めた。ギチギチとプラスチックのボディが悲鳴を上げる。

「えっ？ み、美狐ちゃん？ 何、何してんの？ ねえ、何してんの！」

「逆——パカッとね」

そして声に合わせて、一思いにケータイをへし折ってやった。

「のぎあああああ！ 美狐ちゃんあああん！」

惨憺たる殺戮を目の当たりして慌つ崎原。ムンクの叫びを連想させる裂帛の叫喚が、町内の夜気を虚しく震わせた。

しかし私がこいつに哀れみなどの情緒を抱くはずもない訳で。

「うるさいわね。近所迷惑よ」

寧ろ余計に冷めた私はさらりと告げ、力いっぱいケータイを地面に叩きつけて『黙れ』のサインを、踏み碎いて止めを刺すことで『殺すぞ』と嚇し付けた。

「さ、最新機種が……」

流石に私の殺意を察したのだろう、もはや何も口にはせず、異議申し立てを唱える気力すらも消沈した崎原は、ただ悄悄しやうしやうと碎け散ったケータイを眺めていた。

「ありがと。溜まってたストレスの発散になったわ」

「す、ストレス発散って！」

自分のケータイでしてくれよと言いたげな崎原だったが。フェミニストだからなのか、必死にぶちまけたい気持ちを堪え、半泣きの苦笑いを浮かべていた。

「本当なら八つ当たりであんたをボコボコにしところかと思ってたけど、ケータイに代わりをやってもらったわ。ケータイに感謝しなさい」

「美狐ちゃんそんなに俺のこと嫌いッスか？」

私が即刻無言で頷くと、目元から滝のような涙を流し、自称フェミニストはガックリと肩を落とす。

「そうッスか……ハハハ」

「それはそうと、あんた霧島のことは、ほっというて大丈夫なの？」
私の問いにピクツと反応を見せた崎原は、沈んでいた顔を上げて目を丸くする。

「あれ？　もしかして俺が戦い観てたの気づいてたの？」

意外だったのか、キョトンと目を丸くさせ崎原は私に訊ねた。

「ええ、一部始終観てたくせに、全く手出ししなかったわよねあんた？」

「ふふん。そりゃあ真剣勝負には手出し無用っしょ。――それにさ、

いくら君が強いからって、あいつに加勢するつつうのは。俺のフェミニズムが許さないんだよね」

鼻を鳴らして得意気に語る崎原に、私は『あっそ、だから何』とばかりに冷ややかな視線を送るも、本人は気にせず話を続ける。この男は糸並みの繊細に見えて、内面にはヒビロカネのプレートを兼ね備えているみたいだ。図太い奴は嫌いじゃないが、限度を過ぎればウザいだけだというのに。

取り分けこいつは“超ウザい”に拔擢される。うん、逝ってよし。「それに俺。あいつに手出し無用って言われたから、どっちにしろあの場で俺が乱入することはなかったつつう訳さ」

よく言う、この嘘つきめ。

本当は助けに行きたかったくせに。

私は知っている。霧島が危険な状態に陥り始めてきた時、コイツは出るべきか出ないべきか躊躇っていた。

戦闘中、僅かに流れていたコイツの気の乱れを、私は何度となく感じ取っていたから解る。特に幻影乱舞の最後の一撃や、爆炎掌を霧島に食らわせた時なんか、私に殺気を放って注意を逸らさせ、威力を半減させたくらいだ。

今だから済ました笑顔を見せているコイツだが、仮にも霧島をあの場で殺したなら、崎原はすぐに飛び出して戦いの第二ラウンドを始めていたに違いない。

見掛けによらず、けっこう仲間思いな奴だ。そういう熱い奴は嫌いじゃない、ただヘラヘラしているだけなんかよりはずっとマシだ。好感を持てる程ってわけではないが、認めてはやろうか。

「まあ、そういうことにしてあげる。一応、アイツはあんたの後輩なんですよ?」

「ああ、死んだ兄貴と違って融通が全くきかない熱血バカだよ」

「融通がきかない馬鹿……ふうん。確かにね」

崎原はしょうがない奴だよと鼻で笑う。

確かにあいつには、思うところが幾つかある。あいつは、昔の私

にそっくりだ。くだらない蟠りや、しがらみに捕らわれている。負けず嫌いなところは特に似ていた。いや、しがらみや過去を引きずっているというところは、今の私も同じか。

結局は私もあいつと同族って訳だ。

破顔微笑とは言ったものだ。思えばいつの間にか崎原にならない、私も唇の端をつり上げていた。

その時だ。

「あ、ところでさ美狐ちゃん。支魔に入ってほしいか、或いは協力してほしいって件なんだけどさ。やっぱり無理かな？」

崎原が苦笑いを浮かべて尋ねた。こめかみを人差し指で掻きながら、上目遣いで私を見据えていた。

「いや、まあ美狐ちゃんが興味無いのは判ってはいるんだよね。さっきの光我の横暴、美狐ちゃんなら軽くあしらえるだろうと思っただけ承したことだしさ。実力も再確認したかったんだ。まあ、気を悪くしたなら謝るよ」

ペラペラと口八丁とばかりに言葉を並べて、両手を重ねて頭を下げたり、手をあたふた動かしたりと手振り身振りの一つ一つを大袈裟に崎原は語る。いろいろと無駄に忙しい奴だ。にしても、私情も入れて任務を行うのは些か問題があるだろう。

自由業にしても、度が過ぎる。とはいえガチガチのお堅い規律を突き付けそうな組織とも思えないか。少なからずこいつを見ていれば、そういう賑やかで緩い所だと解る。仲良し小好し甘ちゃんの集まりってところか。

「だけどこれも任務でさ、ウチのボスがどうしても美狐ちゃんを仲間にしたって言うててね。せめて協力してくれるだけでも良いんだ。だから――」

そういう組織ならば、それなりに利用できるかもしれない……よし、決めた。

「その件なんだけど……、正式にじゃないけど協力してもいいわよ」「う、やっぱり無理だよねえ……って、え？ えエ！」

諦めムードで呟いた崎原が、私の了承を聞いた途端、歓喜が入り混じった声で驚いた。

「ま、マジで！」

「うん」

「本当に？」

「うん」

「嘘じゃないよね？」

「しつこいわよ……」

「ごめんなさいい！」

苛立ちから殺気を籠めて睨み付けた私に、調子に乗っていた崎原は冷や汗を流してジャンピング土下座を決めた。誠意を込めての謝罪をするなら、もう少しまともな礼儀作法を出来ないのかこいつは。「いや、本当にありがとう美狐ちゃん！ あ、でも、何で支魔に入る——嫌、協力する気になったの？」

土下座から飛び跳ね、無駄に興奮する崎原。

子供みたいにはしゃいで、更には馴れ馴れしく私の右手を両手を掴み、暑苦しいアホ面を近づけて訊ね寄るものだから、心底煩わしい。憤りから、顔面に張り手という名の印を叩き付けてしまった。

「何となくよ。ちょっと興味が湧いただけ。それに、タダで協力はしないわよ。ちゃんと喫茶店であんたが話した通り、交換条件付きでじゃないとダメだから」

「え、交換条件付きって？」

私の手形を刻まれた顔面を押さえて、ふらりと起き上がる崎原。

私を見るなり、何食わぬ顔で惚けた。

「……もう一発食らいたい？ 次は焼くわよ」

掌の開閉を繰り返しながら炎を発火させ、殺意を目線に込めて嚇す私に、崎原は本日二度目のジャンピング土下座を披露した。

絶対楽しんでやっているなこいつ。

まあ良いか。この一日でいろいろ面倒に遭ったが――何にしてもこうして、私は支魔に協力することになった。一人、何となく気に掛かる奴がいるからってのもある。

けれど……。

これは崎原には結局話さなかったが、私が協力する本当の理由、それはある目的で支魔を情報源として使わせてもらうこと。

その目的とは、行方不明の兄達を捜し出すことだ。

どうしても、あの兄達を見つけ出さねばならない。

私の計画を成功させる為に。

第八話『訪問者』

霧島光我、崎原亮との出会い。そして二人が所属する退魔組織“支魔”に協力をしてほしいという頼みを了承してから二週間。

あれから全く連絡がない。

多分、私の協力が必要になる任務がないか、単に霧島光我が嫌がって私に協力を要請するのを却下しているか、または有り得ないことだが、遠慮しているのだと思う。

何にしろ、こない方が楽だ。

今更だが、私は支魔に協力する気は、更々ない。

私が協力すると了承したのは支魔ではなく、組織に所属している崎原亮だ。

だから、私に協力を頼める権利はアイツにしかない。

これでアイツ以外の者が私に協力しろと言ってこようものならば、私はソイツを半殺しにして支魔に返還するつもりだ。

それに私が支魔に協力すると言ったのは、飽くまでも情報収集の為だ。崎原亮は支魔では高い地位にいるらしく、それだけ情報通であり、支魔の機密情報も持つてる程なのだと本人は語っていた。

その時は自分でそれを言うのもどうかと、半ば呆れながらも半信半疑で崎原を見据えていたが、コレといったデメリットも無いのでとりあえずは期待してみる事にしたのだった。

それからは先に話した通り、二週間経っても連絡は未だにこないままと言う訳だ。

——午前六時。丁度夜明けの太陽が出始めた頃。

家具が何一つ無い、殺風景な六畳間の真ん中に敷れた布団の上で、

私は浴衣掛けで毛布を被らず横になっていた。

——ん……朝。

重い瞼を少しだけ開けると、大きく開いた襖の外にある、朱色に染まった和風な庭園がぼんやりと写る。

庭樹の枝に止まる小鳥が、朝を伝えるかのように囁り止まない。

徐々に目が冴えてきた私は、だるい体を起こし、朝風呂を浴びるため廊下に出て風呂場へと足を運ばせる。

それから欠伸をしながらゆったりと廊下を歩いていると、着物姿の少女がお茶を載せたお膳を両手に、曲がり角から出てきた。

「あ、おはようございます美狐様！」

視線が合った少女は、大きくて澄んだ黒い瞳を細め、優しく微笑んだ。

「おはよう、みはな心花」

私も彼女に、しもやなぎみはな下柳心花に微笑み挨拶を返す。

「あったかいお茶を部屋に持って行こうとしてたのですが、お飲みになられますか？」

黒く艶のある、腰まである美しい長髪をなめらかに揺らし、彼女は私に歩み寄り、お膳の前に差し出してお茶を勧める。

「ありがとう、もらっておくわ」

受け取った私は暖かいお茶を喉へとゆっくり流し込んだ。

美味しい——

匂いも良く、うっとりしてしまうお茶だ。

飲み終えた後には、自然と気持ちのいい溜め息が出た。

「美味しいですか美狐様？」

そんな私の様子を、彼女は嬉しそうに見据えて訊ねる。

「ええ」

そう答えながら彼女が前に出したお膳に空の湯呑みを置いた私は、風呂場に行くため歩を進めた。

「あの、美狐様」

すると心花も後ろに続いて、声を掛けてくる。

「ん、何？」

私は歩みを止めずに、後ろの彼女の声に耳を傾ける。

「実は、三十分前からお客様がいらっしゃって。美狐様が寝ていまずからお引き取り願うよう断ったのですが、起きるまで待つと言いますので……」

「待たせてるってわけ？」

「……はい」

心花は困り入った表情で頷いた。

これは少し意外だった。まさか家に訪問者が来るなんて、それもこんな朝早くとはご苦労な事だ。

しかし、一体誰なのだろうか。

私は知り合いにケータイのアドレスや番号なら教えてはいるが、自宅の電話番号と住所までは教えてないはずだ。

——まあ、考えるより会った方が早いわね。

待たせているのも悪いし、ここは朝風呂を後にして、先に用件を聞くため会いに行くとしよう。

そう唇に指先を添わせながら考えてた私は、彼女から訪問者を待たせている部屋を聞き出し、風呂場とは逆の方向に足を進める。

「美狐様。その姿で会うんですか？」

「ん？　そうだけど、どうしたの？」

首を傾げて訊ねる私に、心花はどこか不安そうな表情を見せる。

「相手は黒い背広姿で、品の良さそうな方でしたよ。いくらなんでもその格好は……」

「別に気にする必要無いわ。だってここは私達の家でしょ。気を張

る場所じゃないわよ」

私が軽く前髪をかき上げながら、笑みを浮かべて言い張ると、彼女は仕方なさそうに溜め息混じりで微笑み、そして頷いた。

「判りました。とりあえず私は新しく茶菓子を用意してきますね」

そう言って彼女は、私とは逆の角を曲がって台所へと向かう。

「ありがとう心花」

彼女にお礼を言った後、私も男が待っているという応接間に向かう事にした。

「どうも。誰かは知らないけど、待ったかしら？」

そう言いながら障子を開き応接間に入った矢先、私が目にしたのは――。

「やあやあ美狐ちゃん。全然大丈夫だよ」

座布団の上で胡座を組んで、私に軽く手を振る崎原だった。

「……何であんたがいるの？」

「もちろん君に用があってね」

不快感丸出しで訊ねる私に対し、崎原は腹立たしくなるくらい明るく微笑む。

「そうじゃない。どうして私の所在地を知ってるのかを聞いているの」

両腕を組んで襖にもたれながら、私は崎原に問い掛けた。

「支魔にいる限りはある程度の情報は入るからねえ。それで組織の情報部に頼んで君の家を調べてもらったのさ」

済ました笑顔で崎原は答えた。

「じゃあ、どうやって調べたのかしら？」

「それについてはノーコメントと言うことで」

加えて訊ねた私だが、崎原は惚けたような態度でそれを断った。

崎原の返答に私は露骨に眉をしかめて不満を面に出したが、当の本人は苦笑気味に両手を合わせて謝るだけだった。

「しかし、美狐ちゃんがこんな広い家に住んでるなんて驚いたよ。最初見た時は旅館と勘違いしちゃったからねえ」

部屋の周りを見渡しながらか、崎原は感想を言う。

「そんな事はいいいから。用件は何？ さっさと済ませて朝風呂入りたいんだけど」

「えっ！ それじゃあ、風呂場でゆっくり話そうか？ 背中を流しつつこしながらさ」

「叩き出すわよ……」

拳をパキパキと音を鳴らして睨む私に、崎原は慌てて冗談と平謝りするが、表情が戯笑ぎしょうしていたことから、明らかに悪いとは思っていないだろう。

「まあいいわ。とりあえず用件を言って」

怒っても仕方がないので、私は顔を渋めながらも本題を要求した。

崎原は一旦頷いて話し始める。

「用件は一つ。君に今回の俺達の任務に同行。協力をお願いしたい」
さっきのへらへらした態度とは打って変わって、真剣な顔付きで崎原は言った。

「ふうん……遂にきたってわけ。私の協力が必要になる仕事か？」

「ああ……。何せ今回の任務は、もしかすると厄介な妖怪を相手にするかもしれないからね。戦闘にしろ、説得にしろ、美狐ちゃんの手が必要なんだよ」

いつになく重い雰囲気を漂わせ、崎原は語る。本人が言うように、それだけの難儀な内容なのだろう。

「詳しい話を聞かせてくれるかしら、内容によっては協力する」

「俺としては、絶対してほしいんだけどね」

崎原は微笑すると、内容を語ってくれた。

崎原達の任務は、山奥にある土木作業現場の傷害事件を調査する

こと。

何でも、現場で作業をしている作業員が突然得体の知れない何かに襲われたり、作業用の機械が突然暴走したりして大怪我を負ったそう。

その事件には上級の妖怪が絡んでいる可能性があり、森を荒らされて怒っているのではと支魔側では推測されたらしく、その調査及び説得か退治に崎原達を選ばれたのだという。

しかし、山奥に住み着いている妖怪と言うのは、都会の妖怪より人間に対する理解が薄い。支魔側としては話し合いで解決したいのだが、人間の崎原達では話しすら聞いてもらえない可能性があるため、最悪の事態にも対応できる私の協力が必要になった訳だ。

「——どうかな美狐ちゃん。協力してくれるかな？ 報酬はあるし、ちゃんと君が欲しい情報。玉藻烈狐丸と絶狐丸の所在も付いてくるけど」

そう含み笑いを浮かべ、崎原は話を持ち掛けきた。

私は両腕を組み頬に手を添えて考えていた。確かに、聞けば妖怪の協力が必要不可欠とも言い難い。しかし私でなくても妖怪なんて支魔には結構いるはずだろうに。

気になった私がそのまま訊ねてみると、崎原はこう答えた。

「確かに美狐ちゃんの思うとおり支魔には協力してくれる妖怪がいる。ただ、戦闘に関して協力できる程の力を持った妖怪が少なくね。言ってしまうえば人手不足ならぬ妖怪不足なのさ」

要するに、今は他の妖怪達も退魔師達共々に出払っていて、支魔内には頼れる力を持った妖怪がいないわけだ。

なるほど、それなら私を訪ねて来たのも合点がいく。

「それで、美狐ちゃん。もう一度聞くけど、お願いできるかな？」

——特に断る理由も無いわね。

そう判断した私は、考え耽って俯けてた顔を上げて崎原に目を向け答えた。

「判った、協力する。一応確認するけど、ちゃんと報酬と情報はくれるわね？」

「もちろんさ、俺は女性には嘘はつかないよ」

そう私に向けて親指を立て、ウインクしながら笑顔を見せたフェミニスト。

そんなフェミニストもとい崎原亮に、私は半ば呆れかぶりを振った。

「とりあえず、朝風呂済ますから待ってて。心花が茶菓子を運んで来るはずだから」

「うん、判ったよ美狐ちゃん」

「あ、それと」

応接室から出ようとした私だったが、これから起こるであろう事を防ぐ為、一旦立ち止まって崎原に振り返り、こう告げた。

「あらがじめ忠告しておくけど、心花に変な真似しないようにね。あの娘を怒らせたら大変な事になるから」

「大丈夫だよ。俺ってそんないやらしい奴に見えるかい？」

「見えるから言ってるのよ。とにかく、忠告はしたからね」

怪訝な気持ちを声に出して応接室から立ち去る私を、崎原は満面の笑みを浮かべ軽く手を振りながら見送った。

——絶対何かやらかすわねコイツ。

そう思いながら応接室を出たら、廊下でタイミングよく心花と会った。

「あ、美狐様。もしかしてお風呂に？」

「ええ、せっかく茶菓子を持って来て悪いけど、私のは心花が頂いてちょうだい」

「あ、それじゃあお客様と一緒に頂きますね」

「くれぐれも、あの馬鹿には気を付けなさいよ」

「え？ は、はあ……」

何だかよく判らないと言った様子で惚けた心花の肩をポンと叩いて、私は朝風呂を済ましに向かうのだった。

この後、私の予感を裏切らず崎原は心花に何かしでかしたらしく、風呂上がりに着替えて部屋へ戻ってきた時、崎原の頬には赤い手形の跡がくっきり浮かんでいたのだった。

第九話『白き小鬼』

なだらかな緑の映える山道を、白いグローリアが一台。けたたましいエンジン音を響かせながら走っていた。

後部座席から眺める大自然の山間は、移り行く四季折々の色彩で、まさに絶景。素直にそう感じた。

——いい眺め。

廃ビルや摩天楼の屋上から一望できた、現代都市の街並みも悪くはなかったが、やはり私が心から安らぐものは自然の中にしか無い気がした。

昔のトラウマのせいで川や湖の水には多少抵抗を感じるけれど、もう在りはしない故郷に帰ってきたような、そんな郷愁にさらわれる格別の心地よさがあった。

それは元来、妖狐が自然と共存する生き物であるからなのかもしれない。

「あのさ——」

そんなしみじみと山並みを眺めていた時、運転席でハンドルを握っていた崎原が口を開いた。

「何か喋らない？ 俺ってこんな沈黙ムードは苦手なんだよね」

唇をとがらせ不満をこぼす彼の頬には未だに赤い手形がくつきりと残っている。

「ほら、光我！ ムツツリ黙ってねえでなんか喋ろ！」

「何で俺が……」

「いいから。なんか些細な事でも話せばそこから盛り上がるもんだよ。ほら早く」

私に背中を向ける形で同様に景色を眺めていたらしい光我は、呆れた様子でバックミラー越しに崎原を見据えてたが、やがて何かに気づいたように眉尻を上げた。

「じゃあ聞くけど崎原さん……さっきから気になってたけど、その

赤い手形は何だ？」

「う！　そ、それは聞くな！」

光我は盛大に溜息を吐く。

「自分で話振っというて打ち切るなよ……」

「とにかくノーコメントだ！　頬が疼くんだよ」

決まり悪そうに話を断とうとする崎原に、冷や汗がこめかみをつたう。

きっと私の家に来た時の事を思い出しているのだろう。

あの時私は、朝風呂に入る為に崎原を待たせた。当然彼は心花と二人きり。彼女には手を出さないよう忠告はしたはずなのだが、戻って来た時には、頭に血が上りきった心花と、全身ピクピクと引き攣らせて倒れている崎原の姿があった。

心花には昔から男が大の苦手で、引っ叩く癖があるのだ。特に馴れ馴れしい態度で接する輩には、過剰に反応して条件反射でやっってしまう。

崎原は口説こうとして、肩に手でも回したのだろう。

容易に想像できてしまうから滑稽で仕方なかった。

「フフ……」

私はその光景を思い浮かべてから、改めて新緑の風景へと視線を戻した。

外観が山から森へと緑が深くなってきた頃。流石に私は見飽きて車内に視線を戻した。

すると視線は外を眺めている光我に辿り着く。

——コイツは私が同行する事に疑問はないのかしら？

「……何だよ？」

視線に感づき、光我は顔をこちらに向け素っ気なく呟いた。

「別に……少し気になってね。あんた私の事嫌ってるみたいだから、

てつきり私が同行するのに反対すると思ってたのよ。じゃないにしても、あんたは行かないと思ってた」

「フン……反対はしたさ。俺はアイツの妹であるお前が信用出来ないからな。だけど――」

“支魔では上の命には必ず従え” ってルールがあるのさ美狐ちゃん」

このタイミングを逃すまいと、崎原は楽しげに解説する。

「コイツは支魔での位は高い方だが、最高幹部の俺より一つ下なんだ。だから俺の命令には意見できても、拒否権は無いって訳さ」

「ふうん。つまりあんたが光我に私達と同行することを命令したから、仕方なく付いて来てるってことね」

「そゆこと」

疑念が解消されると、光我はふて腐れ気味に「フン……」と鼻を鳴らしてまたそっぽを向いてしまった。

その後には会話らしいものはなく、私はただ車の揺れに身を委ねていた。

「そろそろ着くぜ」

どのくらい走行したのか、崎原の言葉に再度私は車窓から景色を眺めようと目を向けた。そこには先程まで見てきた穏やかな空間は無く、異様な光景が広がっていた。

――木々が倒れている？

全てではないにしろ、数カ所で巨大な樹木が無惨にも根本からへし折られていた。だが注目すべき点はそれだけではない。それらに纏わり付く妖気だ。明らかに強く、濃い。陰る木々の闇影がさらに負の気を高めているようにも感じる。

嫌な予感がするわね――。

妖気にせよ靈気にせよ、生命力とも匂いとも言える気というものの質と量は、そのまま相手の強さと性質を表す。きっとこの妖気の主は獯猛で大型の、強靱な肉体を持つ妖怪だ。

得体の知れない不安が黒い霧となり、私の心に覆い被さる。しか

しそれ以前に――。

「美狐ちゃん。光我」

「判ってる」

「あんた達も気づいたようね」

漂う妖気以上に、懸念する要素があった。

「見られているな。俺達」

「ああ、倒れてる木も気になるが――」

「今はこっちの方が気になるわね」

視線の主と思われる妖気は、漂う妖気よりも近い。しかもその気配は、私から寸分も離れる様子がない。見えざる影はおそらく、猿のように木々に跳び移りながら追ってきている。一つの考えを固めた私は、周囲の木々に目を凝らした。すると右斜め前方。葉々が僅かに揺れる間に、それらしき姿を捉えた。

――あれは、鬼？

僅かな瞬間に正体を見極められたのは、その頭部から突き出た角のためだった。短い白髪から生えたそれは一角、己の強さの証。

人間の子供ならば小学生くらいか。小柄な体格に山伏装束が森の闇によく溶けこみつつも、袖から伸びた腕は白く映える。紅く澄んだ瞳は私を鋭く見据えていたが、目が合ったことを恐れてかそれきり追うことを止めた。遠ざかる小鬼の視線を感じながら私は呟いた。
「追うのを……止めた？」

白い小鬼を見失ってから間もなく、私達は目的の工事現場へ到着した。

「ふう、やっと着いたなとお」

背筋を伸ばして息抜く崎原。その隣りに立つ光我が、落ち着かない様子で辺りを見回していた。

「……着いたのいいが、こいつらは俺達が来た理由を知らないの

か？」

怪訝に呟く光我だが、それには私も同意見だ。

さっきからずっと現場の作業員達が不審がり、この地へと赴いた私達に視線を向けている。多分、こちらの目的と素性を知らされていないのだろう。

まあ、不審がられる要素はそれ以外にもあるが——例えば私達面々の服装が全く統一感が無いとか、外見上仕事をやる者には見えな
いなど——そんなところか。何にせよ、今は依頼人だ。さっさと現
状と更なる詳細を聞き出さないと事は進まない。

「依頼した人は？」

「ああ、今から来るよ。——と、来たか。ほらあれ」

崎原が指差す先にクレーン車が止まっていた。そこから、肌着姿
の肩幅も胸板もガッチリした厳つい男が、こちらに手を上げて近付
いて来た。

「よう、よく来てくれた」

男がそう言って崎原に声を掛ける。

「どうも、依頼を請けて来ました。崎原と言います。そして、こち
らが——」

「霧島だ。同じく、支魔の退魔師だ」

「玉藻。……私は協力者よ」

いしおかかずお

「そうか、俺はこのチーフの石岡和雄だ。まあよろしく頼むわな」
私と光我の不躰な態度を気にする様子も無く、男は爽やかな笑顔
で自己紹介する。印象とは違い、意外と気さくで明るかった。

「にしても、依頼した退魔組織からきた退魔師達がこんな若いとは
思ってたかったな、俺はもっと年寄りの婆さんかと思ってたぜ」

案内され、工事から少し離れた林付近を進み行く中、前を歩く石
岡は意外そうに感想を述べた。だが、口調は怪訝そうではない。軽
視とも違う目を私達に向けた。それに関して癪に障ったのか、彼の
後をついていた光我が、ムツとした表情で鋭い声を出す。

「おいオッサン。俺達を疑ってるのか？」

「こら光我！ すみません石岡さん。コイツ生まれつき口が悪いんで」

石岡を睨めつけて詰め寄る光我を、崎原が手で制止させ頭を下げた。石岡は気にするなと首を横に振るう。

「いや、こっちも悪いな。別に疑ってる訳じゃない。俺は妖怪や退魔師ってのを良く知ってるから……。こうして依頼するのも、そこにある」

謝罪の意を含めて語る石岡は苦笑の横顔を見せ、歩みを止めることなく林の奥へと足を進めて行く。さっきの言葉は、私達に対する懸念からではなく、ちょっとした好奇心からの言葉らしい。察した光我は、ばつが悪そうに舌打ちを鳴らした。

「既に内容は知っていると思うだろうが、実はここ最近で機械が暴走してお互いを壊し合ったり、立ちションするって林の奥に行った作業員が突然後ろから襲われたりと、奇怪な事が相次いで起こっているんだ」

「襲われた作業員は無事なのか？」

林を過ぎた所で光我が訊ねると、石岡は足を止めて頷いた。

「ああ、襲われた作業員はみんな後頭部を殴られて気絶した程度で済んでるよ。ただ、機械がな……ほら」

石岡が指差す先には、ブルドーザーやパワーショベルだったはずの残骸が、瓦礫の山と化して一箇所へ集められていた。

「うわぁ……。こいつは酷いなぁ」

崎原がマジマジと気の毒そうに眺め、顎に手を当て呟いた。

「驚いたろ。他の場所にもあって計七台だ。一応これだけ被害が多いと、業者側としてもこちらとしても困るんだ。……どうにかならねえかな？」

渋った表情で石岡は両腕を組み、小さく唸る。そのわりには、それ程困っている感じがしない。口とは裏腹にどこか余裕のある態度には、矛盾とも言えよう妙な違和感を覚えた。

「……気に入らねえな、あんた」

そんな石岡を腑に落ちない様子で見据えていた光我が、相変わらずの仏頂面を隠すことなく口にする。

「オッサン。これが妖怪の仕業だって解ってるんだろ？」

「ああ……」

光我が視線から避けるように、石岡は複雑な表情で頷いた。二人のやり取りを私と崎原は黙って窺う。

「だったら、見当はついてるはずだ。何で妖怪がこんな真似をするか？　そして解決策が何なのかくらい」

「ああ、解っている。俺達が工事を中止して、この山から去れば良い。……だがな、そういう訳にはいかんのさ」

石岡は溜息を付くと、深刻そうな顔付きでポケットから煙草とライターを取り出し、口にくわえ火を点けた。

「この山にゴルフ場を造ろうとしてる馬鹿な金持ちがいる限り、工事は止まらねえんだ。俺一人がいくら訴えても、あの馬鹿な社長さんの耳にすら届かねえ」

そう言って、どこかやるせなく眉を釣り上げ、石岡は一服する。

「馬鹿な社長って？」

私もふと訊ねてみた。すると皮肉めいた笑みを浮かべ、石岡は語り出す。

「ゴルフ場設計者は有名な石油会社の社長さんなのさ……だから、この社長さん何とかしねえと、工事は止まらねえよ」

最後は憎らしげに舌打ちして、煙草を吸い直す。心無しか、吸う勢いが早くなっている。見る見るうちに先端部分の灰は増して行く。まるでこの男の不満を表すかのように。

ふと私は思った。何故この男は工事に対して、こんな気乗りがしない態度を示すのだろうか。

「あんた、工事に関してはあんまり良いとは思ってないんだな」

同じ事を光我也思っていたのか、訝しげに石岡へと問い掛けた。先程までの敵意はどこへやら、打って変わった表情をしている。

「ああ……。俺は十八まではずっと山が近くにある田舎町で暮らし

てた。それから親父の後を継ぐようにこの仕事に就いてから二十二年。今じゃ妻子持ちのオッサンだが。今でも自然の山なんかには愛着があるんだ。だからいつも思うんだよ。俺は本当にこんな事を続けていいのかなってな」

虚しそうな表情で呟くと、石岡はくわえていた煙草の火を指で摘んで消し、ポケットへと突っ込んだ。

「ポケット汚れちゃいますよ？」

崎原が訊ねると、石岡は優しく微笑み――。

「ポイ捨てするよりかはマシだろ？」

そう受け答えると、笑顔から真剣なものへと表情を一変させ、どこか意を決した感じで小さく頷くと、横一文字に引き結んだ口を開いた。

「とにかくだ。俺はここの妖怪には悪いとは思うが、どうにか邪魔しないよう説得してほしいんだ。俺ができることって言ったらこれしかねえからさ。あんたら支魔って退魔組織は妖怪を退治するだけじゃなく、説得や保護もやってるんだろ？　できるだけ穏便に事を済ましたいんだ。頼む！」

そして石岡は、私達に深く頭を下げた。

彼の最後の言葉には、妖怪や自然に対する、争いを避けたいという強い願いを感じた。解っていてもどうするべきかも見いだせないから、支魔に助力を求めるこの男の考え。人間ってのは、つくづく愚蒙な生き物だ。ヒューマニズムを美化して自分達の都合を語るのはどうも頂けない。それを理由にして人任せなのが特に。けれど向き不向きを考えれば、これが彼のできる妥当な判断か――まあ、石岡の自然に対する誠意は認めよう。どちらにせよ、私は崎原達に協力するだけだ。それ以外には、此処にも周りの都合にも興味は無い。「大丈夫です。依頼された以上。こちらも出来る限りの事はしますので」

問題ないと言わんばかりに、崎原が笑顔で答えた。

「とりあえず。まずはその工事を妨害する妖怪を見つけないとな」

光我も意気込みを発し、私達がさつき来た道へと引き返した。そんな光我の後ろに続き崎原と石岡が付いて行くが、私はその場を動かずにいた。

かく言うのも、私にだけ向けられた視線を感じていたから。

背後を振り返ると、やはりそこにはあの小鬼が、少し離れた木の上から私を見下ろしていた。

しばらくお互いに見据えていたが、私が威圧に睨め付けると小鬼は畏怖を抱いたのか、驚いた表情を見せ、逃げるように木々を飛び移り、森の奥へと姿を消した。

「何かあるわね。この森には……」

一波乱ある——確証の利いた思いを胸に、私は髪を靡かせる風が差す山へと目を向けた。

第十話『紅蓮』

石岡を先頭に、最初に来た打ち合わせの場に戻った私達だが、どうも様子がおかしい。やけに騒がしくなっていた。

その原因と思われる所へ向かうと、黒い背広姿にサングラスを掛けた若い男女が、作業員と何やら揉めるかのように話しをしていた。「なんだありゃ？」

石岡が眉を顰めて男女へと近付き、揉めてた作業員に代わって話し合う。

そして――

「何だと、どういうことだ！」

目の前にいる二人の男女の言葉に、石岡は驚きの声を上げた。

「聞こえませんでしたか？ 私達は退魔組織“紅蓮”^{ぐれん}の者です」

退魔組織“紅蓮”と名乗った、長い黒髪を後ろにまとめ上げた男は、サングラスを外して細く吊り上がった目を晒すと、石岡に名刺を差し出す。

見ると名刺には、平賀翔平^{ひらがしょうへい}と名が記されていた。

「依頼により、工事の邪魔をする妖怪を退治することになりましたね。それで私達が派遣されました」

黒い背広の男こと、平賀は細い目をさらに細め。不敵で狡猾そうな笑みを浮かべた。

「馬鹿な、俺は支魔以外の退魔組織には依頼はしてない。何かの間違いだ」

「いえ、間違いではありません。そして依頼主はあなたではなく、このゴルフ場設計者である岩倉昌^{いわくらあきら}さんです」

石岡が声を荒げて平賀の発言を否定すると、平賀の横にいる金髪の女がサングラスを外し、まっすぐな青い瞳で石岡を見据えて答え

を返した。

この女は観る限り、日本人らしくないくつきりとした目鼻立ちをしている。ハーフか西洋人と窺え、スラリとした長身とスタイルの良さ、無表情からくる独特の雰囲気からは、棘のある薔薇を彷彿させる。

「岩倉だと？ そんな馬鹿な！ あの石頭が妖怪の存在を信じたって言うのか……？」

呟くなりふらりと後退る石岡。その表情は有り得ないと言いたげに強張っていた。

「とにかく、私達は岩倉さんの依頼により来ましたので、此処の調査をさせて貰います。良いですね？」

平賀は丁重に伝えると、今度は様子を見ていた私達の方へと歩み寄る。私達の前に佇むなり平賀は、光我、崎原、そして私と、横から順当に面を拝む。

気のせいだろうか？ 私に定めていたその視線には、僅かながら間があったような気がする……そんな疑問を覆い隠すかのように、平賀から私達に対しての第一声が放たれた。

「あなた方が支魔の退魔師ですか。直接お会いするのは初めてですよ」

「へえ、支魔を知ってるのかい？」

「ええ、あなた方支魔は有名ですよ。妖怪と仲良くやる変人の集まりとね」

崎原の問い掛けに、そんな嫌味を平賀は口にする。小馬鹿にするような見下した笑顔と明らかに喧嘩を売ってる台詞に、光我が憤慨して何か言い返してやろうと前に動き出すも、光我の前に立つ崎原が遮断機がわりに腕を水平に伸ばし、制止させる。

「そりゃあお互い様さ。お宅ら紅蓮も有名だよ。相手にいろんな事をふっかけて法外な依頼料を取る意地汚い守銭奴だってね。今回も金になると思って、自分達から首突っ込んできた口だろう？」

崎原も平賀に負けず劣らず、ニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべて

言葉を返す。それに対して表情は平静を装う平賀だが、体は僅かに揺れ、反応を示した。

どうやら痛いところを突かれ、癪に障ったようだ。場の空気の冷たさで、何となくそれが解る。しかし……何でか解らないけど、崎原コイツの嫌らしい笑みを観ていると、味方側であるにも関わらずこっちまで苛ついてくる。へらへらと笑う奴を見てみると、嫌に腹が立ってしまう。

「心外ですね。これはビジネスなんですから、依頼料を取るのは当然では？ それに、我々は何もしてませんよ。今回の依頼も依頼主の意思ですよ」

平賀はやれやれと頭を振り、溜め息混じりに話す。そして崎原をしばらく品定めするように見つめた後、口を開いた。

「まあ、こちらの邪魔をしないよう、お願いしますよ。支魔の方々」
嫌味な笑みを絶やすことなく私達から背けると、平賀と金髪の女は、私達が見てきたクレーン車等の残骸がある林の奥へと消えた。

「チッ……ふざけやがって。ムカつくぜ」

「まあ、そう熱くなるな光我。今に始まったことじゃないだろ」

崎原は齒軋りを立てて苛立ちを見せる光我の肩に手を乗せ、気にするなと宥めるようにすました笑みを浮かべた。

「今に始まったことじゃないって……こういったことがよくあるの？」

「ああ……」

崎原の話によれば、退魔組織同士がこういった形でいがみ合うのは良くあることらしい。理由としては、思想、方針や流派等の違いが主らしいが、支魔は同業者の中では最も嫌われている組織だとか。

特に慈善事業的な取り組み方や、妖怪の保護や共存と言った思想が、金に煩い奴や妖怪を恨んでいる退魔師にとっては目の上のたん瘤こぶ、目の敵とされている故に、支魔はこういった他の退魔師達との

いざこざが絶えないのだという。

「まあ、中には支魔と考えが似た組織や退魔師がいて、そういったものとは仲が良いんだよね、これがさ。だから、周りが敵だらけてわけじゃあないのさ」

「なる程ね……」

馬鹿なものだ。共通の目的を持つくせに纏まらず、下らないポリシーなどで壁を作るなんて。その挙げ句、こうしたいがみ合いか……。

——まあ、人間が纏まらないのは今に始まった事じゃないわね。人間は昔からそうだ。

仲間と言う割には私利私欲の為に利用しようと思える者が必ずいて、それがまた火種となり仲間内で争う。

争い合うことは、お互いの向上に通じるものなど良いところもあるが、良い点よりも、寧ろ悪い点が多いだろう。

それについては、戦争などが例になる。

考えてみれば普通に解るはずだ。争いは事を悪い方に傾けるマイナスに過ぎないと。にもかかわらず、遠い昔から未だに人間はお互いで終わらない争いを続けている。

歴史は繰り返す。

誰かがそんなこと言ってたけど、まったくだ。愚か極まりないと私は思う。

——絶狐丸兄さんの気持ち解る気がするわね。

『美狐。人間は動物の中でもっとも汚い生き物さ。地球を汚すゴミに過ぎない。烈狐丸兄さんは人間も自然の一部と見ているけれど、僕には到底そうは思えない。あいつらは汚物以外の何物でもないよ。自分達以外の生き物を格下と見ているような奴等を、自然を我が物顔で汚し壊して、奪っていくあいつらを、僕は絶対に許さない』

絶狐丸兄さんはその言葉を最後に行方を眩ませた。私達が玉藻三天狐と呼ばれるようになった、あの事件を境に……。

「どうしたの美狐ちゃん？」

「ん……ああ、何でもない」

遠くの空を眺めて、深く思考を巡らせていた私だったが、崎原の声により現実に戻された。

「そう？　なんか思い詰めたような顔してたけど」

「ちよつとね。昔のこと思い出してたの……話すような事でもないわ。気にしないで」

まあ、今となってはどうでもいいことだ。それよりも、これからどうするかが大事であろう。思いながらも私は、さっさと事を次に進めるよう崎原に言葉を送った。

「そっか、んじゃあそろそろ俺達も本格的に行動を開始しますか——石岡さん！」

石岡に歩み寄り呼び掛けるも、当の本人は上の空。先程の平賀の言葉が腑に落ちないのか、未だに思い詰めた顔付きで俯き、黙り込んでいた。

「石岡さーん！」

もう一度トーンの高い声で崎原が呼ぶと、ようやく石岡はハッと顔を上げて私達に目を向けた。

「あ、ああ、なんだ？」

私と同じように、彼もまた社長こと岩倉と言う男や、紅蓮などについていろいろと考えていたのだろう。そんな石岡に親近感を覚えなければならぬが、私は何気なく訊ねてみた。

「平賀が言ってたことが気になってるの？」

「ああ……しかし何でまた。別の退魔組織に依頼を？」

「いんやあ、紅蓮ってけっこう強引な組織なんですよね」

眉間にしわを寄せて呟く石岡に答えようと、崎原が紅蓮の連中についての説明をし始めた。

「相手側に無理やり自分達をアピールして信用を植え付けますから、やり方が押し売りや脅しに近いんですよ」

ついでとばかりに崎原は、『きっと紅蓮の奴らは岩倉って社長さんに、刺激的なモノを突き付けてそそのかしたんじゃないですかね？』と、自分の推測も付け足す。

オブラートに包しんですらいらない、営業妨害に触れそうなストリート発言だ。紅蓮側に非があったとしても、発言はもう少し自重しろこの馬鹿。などと注意でもしておくべきなのだろうが、どっちみちこの組織も違法スレスレの曖昧な境界線で汚いことをやっているものだ。

銃刀法があるにも関わらず、構わず武器を使っている退魔師も多い。私は過去、それを利用して警察に捕まえさせた事がある。『離せお前ら！ 俺は退魔師だ。離せっ！』と、必死に警官に訴えながらもパトカーに引きずり込まれる間抜けな退魔師を建築物の上から眺め、腹を抱えて笑ったものだ。

まあ、私が人間の法律をとにかく言っても仕方ないし、無駄な横槍を入れるのは止しておこう。

「そうか……まあ、こういう組織がいてもおかしくないわな」

石岡は何度か頷くと、両腕を組みながら僅かに唸り悩む仕草を見せる。しばらくすると俯けた顔を上げ、私達へと向けた。

「まあいいさ、俺が依頼したのは支魔。あんた方だ。別に俺が気にする必要は無いわな。俺はあんた達に期待する。頑張ってくれ」

「もちろんだ。あんな奴らに好き勝手させねえ」

光我が強気な口調で返し、拳をパキパキ鳴らした。

「まあ、支魔は支魔のやり方でいくとしますかね、っと。んじゃあ石岡さん。俺達もその辺を調べさせてもらいますよ」

そう崎原が話を締めると、私達は個々に分かれて調査をする事にした。

それにしても、退魔組織紅蓮か……。私個人にとっても無関係ではない分、注意は払っておくでしょう。いずれは私が戦う相手になるかもしれない。そんな予感がする。

それから一時間近く経過した頃。

私は現場からある程度離れた林道を彷徨うろついていた。

この林道に来るまでに、一度見たクレーン車の残骸の山も含め、幾つかの被害に会った場所を見て回った。途中、紅蓮の男女と何度かすれ違うこともあったが、たいして声を掛けられることはなかった。

だけど、あの女。

不可解にも、あの金髪の女はすれ違う度、視線をこちらに向けていた。背中越しに何度あの視線を感じたことか。私が気付いてないとも思っているのだろうか？

それとも――私を妖怪だと知って、狙っているの？

あのしつこくてじれったい感じが、それを伝えている気がしてならない。

「……まあ、別にいいか。気にすることじゃないわね」

今は気掛かりな、あの理不尽に折れた木々を調べに行くことにし

よう。調べる場所がなくなったら行ってみようと思っていたことだし。そんな思考を切り替えた頃に、殺気が私の背筋を通り抜けた。やっぱり戦りに来るわけ。まさかとは思っていたけど、私にも狙いを定めていたとはね。

そう思うなか、私の後ろにある木影から、さっから感じられる気配が動き出した。姿を現したか。振り返った先にいたのは、金髪之女ただ一人。

「あら、平賀ってやつは？ あいつもいると思ってたんだけど」

「平賀は、依頼を優先するビジネスマンだ。だから調査に専念している」

「そう……それで、私に何の用かしら？」

白々しく訊ねる私に対し、金髪の女はサングラスを外すと、無表情のアンティック・ドール並に感情が籠こもらない表情を向ける。

私を見詰める真っ直ぐな蒼い瞳。しかし、石岡の時と違い、今は攻撃的で氷のような冷たさを宿している。

「何の用だと？ 白々しいやつだ。判っているくせに。貴様は妖魔だろ？」

「そうとも呼ばれているわね。でも、イギリス人にそう呼ばれるのは初めてよ」

「ほお、妖魔のくせによく解ったな。人間は全部餌程度にしか見えない妖魔の貴様でも、人種の見分けはつくのか？」

当たりだったの？ 適当に言ったつもりなのに。しかし、何とも言いがかりだ。あながち間違いではないが、妖魔の全てが人間を餌と思っているのだろうかこの女？

それにしても、堅苦しい喋り方なこと。加えて日本語が妙に上手ね。

などと私が、この状況ではどうでもいいことに感心を示している間に、女はスーツのポケットから警棒のグリップ部分のような物を取り出した。

「だんまりか……まあいい。私もこれ以上話をする気はないから……

…なあ！」

女は言い放つと共に、私に目掛けて握ったグリップを力強く振るう。

するとグリップの先が飛び出し、電気を纏った鞭となり私に襲い来る。

おっと、危ないわね——迫り来る鞭を、胸を斜めに反らして私は躲す。相手としてもそれは予想の範疇はんちゆうに入っていたらしく、既にグリップを引き上げていた。

鞭はしなりを鳴らして私の背後から奇襲を掛ける。

後ろからの脅威を屈んで過ぎた後、再度払うように振るった女の鞭を、今度は後ろに跳躍して避け。そのついでに空中で三回転ひねりを加えながら木の枝へと身を移した。

「まったく。予感当たるの早すぎよ」

悪い予感ってのは、ほんと当たり易いものだ——そんなこと思いつながら、私は敵意を抱く彼女を見下ろした。

第十一話『美狐の本性』

「食らえ！」

危ないわね。

襲い来る電流を纏った鞭を、隣の木の枝へと飛び移り回避する。飛び移ると同時に、私がいた枝は鞭によりあっさり両断された。

「当たったら痛そうだわ……」

実際、普通の人間が食らえば“痛い”で済むものじゃないが、私にとってはその程度にしか過ぎない代物だ。

一応、注意はしておくべきか。

「この、ちょこまかと！」

募る苛立ちを声に出して、女は機敏な身のこなしで鞭を振るう。

螺旋を描くように回転させて私に飛ばす鞭は、まるでとぐろを巻いた後に飛びかかる蛇を想わせる。まさしく変幻自在とも言える、実にしなやかな動きだ。

だけど、そんなものを食らってやる程、私はお人好しではない。

飛んで来た鞭を、また木の枝から飛び移ることでやり過ごした私は、次の木の枝でぶら下がり後方支持回転を行い。鞭が迫り来ると共に枝から手を放して体を丸め、回転しながら落下。

屈む姿勢で着地した瞬間、ふわりと来る優しい風が、私の銀髪を靡なびかせた。

「ふっ、ヘタクソ……」

立ち上がりながら女を横目で見やり、ワザと聴こえるよう私は呟く。

「なっ！」

当て付けの嘲笑を差し向ける私を前にして、遂に女は苛立ちから憤慨を曝した。

「見え見えなのよ。あんたの動きがね」

「なに！」

伊達に千年も生きてはいない。

その類いの武器使いの相手は、とっくの昔に経験済みだ——こういうリーチのある武器は、持ち手の初動の次に攻撃が襲い来る。ならば振るう動作で事前に鞭がどうしなるのかを予測し、見極めた後はタイミングを見計らって避ければ問題ない。さてと、遊ぶ時間も無いし、さっさと終わらせるとしましょうか。

行動を決した私は即座に、敵を目掛け颯爽と駆け出す。当然、握り締めた拳を叩き込む前提で。

「馬鹿め！ 自分から食らいに来たか！」
遅いわよ。そんなんで私を捉えられたりはしない。

顔を目掛けて襲い来る鞭を、屈むように身を低めてかわし、一気に詰め寄る。このまま胸に拳を叩き込もうとしたが……ここで女があんな行動を見せるとは、私は微塵も思わなかった。

「——なっ！」

「死ね！」

女が何も手にしていない右手を上げると、袖の中から手のひらサイズの拳銃が飛び出し、それを手にすると同時に素早く私の頭に向け、引き金を引いた。

銃口が火を吹き、乾いた音が弾ける。

私は咄嗟に横へと身を反らすことで脅威を免れたが、その判断に若干遅れが生じ、頬を掠めてしまった。

少々甘く見過ぎていたようだ。自分の迂闊さに込み上げてきた苛立ちを齒軋りで押し止め、私は冷静さを取り戻して思考を切り替えた。

「くっ——」

頬を生暖かい水滴がくすぐる。

傷口から僅かに血が滲み出たのだろう。けれど今は、そんな瑣末な事を気にしている場合じゃない。

私はすぐに後ろへと身を引いた。僅かな時差で、足に当たるはずだった弾丸が地面を撃ち抜く。

「逃がすか！」

初弾に拍車を掛け、女は執拗に銃を連射してきた。

私は飛んでくる弾丸を、バック転や側転と、アクロバティックな動きを駆使してかわす。彼女の後ろへと回り込むように。

とは言っても、何時までも同じ方向を定めたままの馬鹿はいない。亀やカタツムリだって旋回はする訳であり、女も当然ながら回り込むのを阻止する為、私から目を離さず正面を向いている。それだけでは納まらず、鞭で薙払いながら銃を撃つという、巧みな連携も行う。

正直、弾が無くなるか、弾詰まり（ジャム）が起きるのを待つのは厳しそうだ。とりあえず、私をしっかりと睨み据えている訳だし、ここは幻術の活用を試みるとしよう。

「一気に片を着けてあげるわ……」

前転飛びで五発目の弾丸をやり過ぎし、その後で右斜めに振るって来た鞭は逆方向に身を伏せて去なす。刹那、足腰に力を加え、放たれた矢にも負けぬと自負する勢いで私は駆け出した。

「こちらとてそのつもりだ！」

女は銃を撃ち続けながら後ろへ下がるが、それでも距離は縮む。何故なら私が直進を止めずに弾道を予測し、体への直撃を僅かな動きで逸らしているからだ。

女の顔が驚きと焦りで頻りに歪む。

「クソッ！ 舐めるな！」

女は鞭を真横にしならせ牽制した。単調なその攻撃を跳躍で避けてみせると、これを待っていたと言わんばかりに、不敵な笑みを浮かべた。

「空中なら、逃げられないだろう？」

女は銃口を空中にいる私に向け。

「私の勝ちだ！」

トリガーを引き、放たれた弾丸が私を撃ち抜いたのを目にして、勝ち誇った笑みを浮かべた。

「な、何！」

けれど、それは儚くも、すぐに戦慄へと変わってしまう。

当然だ——何故なら、策に掛かったのは私では無く。

あんたなのよ！

そう、先にも予定していた通り、私は幻術で跳躍して避けた偽物——つまり幻を見せたのだ。おかげで彼女は、弾丸がすり抜けて消滅した私を目の当たりにして、度肝を抜かれていた。

気付いた頃にはもう遅い。

本物の私は——。

「あんたの足下よ！」

「ッ！」

足下まで滑り込んでいた私は、そのまま地面に手を付き水面蹴りで彼女のくるぶしを蹴り飛ばす。宙に浮いたところをトーマスフレア、さらにそこからウインドミルへと移行。ブレイクダンスのパワームーヴで勢いづけ、ラストはハンドスプリングで足を槍の如く突き出し、落下してきた彼女の腹部を蹴り上げた。

「おぐえ！」

苦悶の表情で嘔吐するかのような呻きを上げ、くの字に折れ曲がったまま更に空高く打ち上げられた彼女に、私は跳躍してトドメの一撃を決める。

「ハアアッ！」

覇気を込めたオーバーヘッドキックを彼女の脇腹に叩き込み、そ

のまま茂みの中へとゴールインさせた。

後は着地――。

「っと。ま、ざっとこんなものね」

なかなか強かったけど、光我や赤マントと比べるまでもない。三下妖怪なら倒せる輩だろうが、生憎こっちは伊達に上級妖怪を気取っちゃいないのよ。

さてと、さっさとあの折れた大木について調べに行くことにしようかな――と、その前に。

「う……うう……私は？」

「目、覚めた？」

「お、お前！ あっ……な、何だこれは！」

まあ、動揺するのも当然だろう。何せ彼女は今、手足を自分の持ち物だった手錠に掛けられ、その身を拘束されてしまっているのだから。そんな体をへの字にしてもがく女がどうにも滑稽で、私はクスクスと笑いながらそれを観望していた。

「き、貴様あ」

羞恥心が沸々と浮かんでいるのが解る。私を上目で睨み付けてはいるが、頬は赤い。

「くくく、良い顔よ」

「ふ、ふざけるな！ くそお……こんな真似してタダで済むと思っているのか！」

「へえ。そういう口聞くわけ。ふうん」

怒りを露わにする女の後ろに、私はゆっくり回り込む。何をすつもりだと目で追い掛けて問い掛ける女に、私はある物を腰のウエストバックから取り出した。

「悪い子はお仕置きと行こうかしらね？」

「なっ！ 待て、お前それは私の！」

「ふふっ」

そう、あんたが私に使っていた鞭だ。まあ、電流は流れないようにスイッチは切っているけど。

「まずは、軽く試し打ち」

「あうっ！」

軽く鞭をしならせて背中を叩いてみる。スーツに切れ目が入らないよう、力加減は徹底に抑えつつ叩いているが、彼女は思いの外、よくもまあ良い声を鳴らしてくれた。

「さて、ここから私の質問に答えてもらおうわよ？ もし黙秘したら——もう判るわよねえ？」

高揚感から笑みが零れた私を見て、女の表情が真っ青になる。冷や汗をこめかみに垂らす女を無視して、まずは最初の質問だ。

「あんたの名前何て言うの？」

突拍子な質問だったのか、女は眉をしかめるも答えた。名前を知らないのもなんだし、とりあえずはね。それに名と言うのは、意外と多種多様に使い道があるものだ。

後々に何らかの役には立つだろう。

「私に名前は無い。だから、紅蓮ではジェーン・ドウと呼ばれている」

ジェーン・ドウ——名無しの権兵衛？

まんまじゃないの。まあ、別にいいか、本題に入るとしよう。

「それじゃあ次の質問。何で私が妖怪……いえ、あんたは妖魔って言ってるからそっちにしましょう。何で私が妖魔だと解ったの？」

僅かながら気掛かりがあった。

この程度の者が私の正体に気付くには違和感を禁じ得ない。私が妖怪だと知るだけで、そいつは相当な実力者と見ても良い。だいたい、私の素性はカモフラージュを徹底的に施しているから、まず

知られることは無いはずだ。支魔ですら私の事を調べるのには四年も掛けたと崎原は語っていた。

加えて崎原は、その後は情報操作で私の事が他の退魔組織には知れ渡らないようにしたとも述べていた。支魔特有、妖怪の保護と共存の一環らしいが、正直な話、有り難迷惑だ。情報操作など私にとって雑作もない事だというのに。勝手に弄くられたらどこまで偽装が変更されているのか、把握と整理に手間が掛かる。

とにかくだ。私が妖怪だと知るには、直接私を見極める必要がある。そうになると、改めて彼女が見極められたのかと、疑問が浮かぶ。

その答えを聞こうと訊ねたのだが――。

「黙秘するわけ？」

「当然だろ……名前は意味を持たないから教えた。だが、今の質問には意味がある。だから、下劣な妖魔に話す気はな――」

「はい、バチーン」

「うぐあっ！」

ちよっとイラつときたので、スリムなその背中を軽く叩いてやった。情けない体勢のくせに何カッコつけたこと言ってるのやら、さつさと吐けオラ。

更にもう一撃を加えてみる。今度は安産型なその尻だ。

「あう！」

おお、なんか楽しい。

「痛いッ！」

何だかゾクゾクしてきた。もっとやってみよう。

「アアッ！」

尻に足を乗せ、私は背中に鞭を与え続けた。その都度この女は艶めかしい悲鳴を上げて、ビクビク体を震わせる。次第にベクトルを上げていく私に、止めてくれとジェーンは悲痛に訴えてくる。ヤバい、もっと虐めたくなくてきた。こんなことならロウソクくらい持って来れば良かった――と、いけないいけない、これは時間の浪費

だ。

夢中の余り、目的を忘れてつい癖が出てしまった。

雑念を振り払い、一旦調教を――ではなく、鞭を納めて私は再度問い掛けた。

蓄積する羞恥心と痛みからか、涙目のジェーンは激しく首を振る。
「さっさと吐いた方が良いわよ。私さ、こういうシチュエーション
けっこう燃えるのよね。ヒートアップする前に答えた方が身のため
よ」

くるめた鞭を両手で引っ張ってしならせ、攻撃的なその音で脅し
を掛けてみる。しばらくして観念したのか、一旦齒軋りを立て、ジ
ェーンは語り出した。

「平賀だ……アイツの目は、どんな妖怪の正体も見極める特殊な力
がある」

「特殊な力？」

「それ以上は、知らん」

はい、ビシッとウィッピング！

「痛ったあぁッ！ く、くそ……どうせ知ったところでお前にはど
うする事も出来ん！」

だから話したと、ジェーンは不敵な笑みで付け足した。これはつ
まりあれか、この情報は知られても仲間を売る行為では無い、無価
値の情報を押し売りしてやったぞと、してやっつたりの笑顔を差し向
けている。そう解釈すべきか？

実にちんけな抵抗だ。気に障ったからとりあえず、尻にスパンキ
ングならぬスパークキング、蹴るッ！

「うぎゃあァッ！」

にしても、平賀がねえ。

まあ、あの男は崎原のような得体の知れない雰囲気を出してたら、何となく予想は出来ていた。

「つまり、あんたは平賀から聞き出して、私を狙いにきたってわけ？」

悶絶寸前でピクピクと蠢いている女に、私は思考の結論を問い掛けた。悶えていたジェーンは、今にも飛びそうな意識を無理やり振り払うことで取り戻し、私に憎しみを乗せた睨みを差し向け――。

「そ、そうだ。平賀は無関心だったが、私は見逃さん！ 妖魔を滅ぼすこと。それが、私の使命だ！」

誇らしげに言い放った。

「……ぶふっ！ クク、ブアッハハハハハハ」

駄目だ、堪えきれない。そんなアホな体勢で、あんまりにも真面目な顔で言い切るから、面白くて込み上げてくる笑いが止まらない。

「な！ 何がおかしい！ 笑うなあ！」

それでも顔を真っ赤にして怒るジェーンを尻目に、私は腹を抱えて笑った。

全く、いろんな意味で片腹痛くてしょうがない。まあ、どういった経緯でその使命感に辿り着いたのか知らないが、私にとっては興味の無い話だし、否定や肯定をする気も更々無い。

情報はこれ以上得られそうにないし、そろそろ切り上げるとしましようか。

込み上げてきた涙を指で拭いながらも、私は木の根本付近に行き、湿った土を掘っていく。

「な、何だ。何をするつもりだ？」

「ま、ちよっとした罰よ。お仕置きの仕上げってやつ」

訝しげに私を眺めていた彼女だが、私が土から取り出したある物を見て、小さい悲鳴を漏らした。

「な、何だそれは！」

「何って、カブトムシの幼虫」

「馬鹿をいえ！ そんな両手で抱える程の幼虫がいてたまるか！」

まあ、そりゃあ当然だろう。だってこれは幻術でデカく見せているだけなのだから。実際は何も持っていない。いくら季節が春だからって、こんな山にカブトムシの幼虫がいるにしても、それは稀だ。その辺を掘ってすぐに見つかったら世話ない。それは別にいいとして。お仕置きタイムを再開しましょうか。

「お、おい。何でこっちに来る。はっ、まさか……止めろ！ く、来るな！」

無視して彼女の正面に立ち、不敵な笑みを向けてやる。寒気が襲ったか、ジェーンはガタガタと歯が震わせていた。

「ち、ちち近づけるな！ わ、わ私は虫が駄目なんだ！ お願い止めて！ いやああああああアアッ！」

そうして彼女は、ここ一番の悲鳴を山一面に木霊させた。

「さて、そろそろ行きましようかね」

徹底的に虐めた結果、恐怖のあまりにジェーンは失神した。口から泡を吹き出して、白目を剥いたままピクリとも動かない。そんな彼女を近くの木に背中を預ける形で寝かせ、私はこの場を後にする。無論、手錠で拘束はしたままで。

ま、後で作業員とかに言って助けに行かせれば良いだろう。しばらくはのんびりお昼寝でもしておくといい。

第十二話『倒れた木々の謎』

紅蓮の女退魔師を軽くあしらってから、私は当初の目的の場所へ向かった。

しかし、私が着いた時には、既に先客がいた。

「……お前か」

霧島光我だ。

私を横目で一瞥するも、再び目前の木々へ視線を戻した。

羽織っている丈長の黒ジャケットのポケットには両手が突っ込まれたままで、光我の表情は何かを悩んでいるようにも不機嫌そうにも見える。

まだ、光我は私が気に入らないらしい。まあ、私自身馴れ合いたいわけでもないから別にいい。

それよりも――。

「あんたもそれが気になるの？」

「ああ……」

光我の隣りにまで歩み寄り、私も大木に目を向けた。

改めて近くで観察しても、やはりこの木々の倒れ方は不自然だ。でも、これだけは確信している。

「明らかに大型の妖怪である可能性が高いわね」

遙か昔からこの大地に息づく植物の力は偉大なのだ。生半可な妖怪では、ねこそぎ倒すなど到底かなわない。

「だろうな。それも地を進むやつだと言うのがまた面妖だ……鬼熊おにくまか？」

「それは、ないでしょうね」

鬼熊は年老いた熊が突然変異で妖怪化した、妖獣や神獣などと伝えられている。だが妖怪化したとしても、熊の生態までもが変わるわけではない。

仮に鬼熊だとして、木々を倒すこの行為は自然の摂理に反するし、

足跡を付けずに歩くなど不可能。よって論外と言える。

「わかってる。ただ他に浮かばないから言ってみただけだ」

苦し紛れに悪態付く光我を無視して、私はもう一度木々の周囲に眼を凝らした。やはり、熊の足跡も見当たらないかと思ったその矢先。何かが視界に入った。

足元に気を配りながら“それ”がある木の根元に歩み寄り、屈み込んだ。

「これは……」

それは、大きな鶴嘴つるはしを打ち付けたような跡だ。湿った土が、くつきりと不可解な形に窪くぼんでいる。倒れた木々の根元付近にあることから、何かの足跡なのだろう。通過した際に付いたのか――。

「おい、どうした？」

「……光我。この辺に小動物の死骸がないか調べてみて」

「あ？」

「いいから」

振り返らず光我に伝え、私も調査のためにさらに奥へと進んだ。

それから数分後。

光我と共に倒れた木々に沿って移動しながら探りを入れた結果、ほとんど原型を留めていない小動物の死骸を幾つか発見できた。

この時、私の予想は確信へと変わる。

「おい、小動物の死骸に何があるってんだ、そろそろ答えろよ」

死骸の中でも特に損傷の激しいものを確認し、一つの答えを思案していた私に、光我が苛立った口調で問い掛ける。

仕方なく、口元にやっていた右手を下げて、私は答えた。

「この山には……“わいら”がいる」

「わいら？　なんだそれは」

退魔師の光我でも知らないのは無理もない。

わいらは、遠い昔に絶滅したと思われた獰猛な妖怪だ。牛のような大きな体に、前足は太く鋭い鉤爪を持ち、山奥で土竜などの小動物を捕食して生活している。

体格のせいで、身を引きずるようにして移動するのが特徴だ。そのため、わいらの通り道は殆どが現状のような有り様になる。

「なる程な……だが実際にそのわいらが木々を倒したとしても、こいつはこの工事妨害と関係は持たねえだろ？」

「そうね……」

確かに足跡はわいらのものだが、工事の妨害をしたのもわいらであるなら、被害はもっと大規模のはずだ。だが実際は小規模な事件。機械が勝手に暴走して壊れ、作業員は気絶程度。

わいらは獰猛な妖怪だけれど、剛力なだけに不器用な面がある。力を加減するなどわいらには出来ないだろうし、この場所から工事現場までには距離がある。事件とは直接的な関わりは無いだろう。

でも……。

「無関係とは、言い切れないわよ」

「なに？」

濁る程に不可解だ。わいらの迂回ルートが、余りにも第三者の加入が意図されている気がして。

理由の一つ、そして一番の懷疑が奴の進路変更地点だ。光我は見落としていたようだが、ここまで私は全て確認して来た。間違いない。明らかに奴が工事を行っているポイントに“直進しているはず”のルートが幾つか存在していた。そして、そうなるルートだけ、変更が為されている。先導、いや誘導が正しいだろう、そんな推測を促せた。

そして事件と何らかの繋がりを持つ可能性も、まだ断定は出来ないけど、少なからず私は睨んでいる。

全ては一つに繋がっている……そう思えてならないのだ。

それに――。

「調べものが、まだ残っているわ」

「……あの鬼の事か？」

そう、白い小鬼だ。あれとは二度も会っているが、あの傍観に徹する行動を始め、謎が多い。こっちの方はわいら以上に事件との関わりは深いと思われる。

「確かに、あの山伏姿の白い鬼は何か知ってそうだな。この事件の犯人の可能性高えし――」

光我がそう呟いた時、私達の後方にある木の上から、僅かな気配と視線を感じた。――この感じは、あの小鬼ね。

やれやれ、噂をすれば影がさすとは、よく言ったものだが。まさか、こう都合よく現れるとは思ってもない偶然だ。

「まあ、せっかくあちら側から出向いて来たみたいだし、いろいろと詳しく聞いてみるのもいいかもね」

「ふん、それが手っ取り早えだろ」

私が済ました態度で口にする、光我も同様の表情で、その方角へと振り返った。

「おい、聴いてんなら降りてこいよ」

数メートル離れた樹木に顔を上げた光我が声を掛けるが、気配は反応を示さない。

「もう判ってんだよ。早く降り――」

光我は途中で言葉を切った。

立木の上を緑で包む葉から、握り拳くらいの石が光我の頭部を目掛けて飛んで来たからだ。

とっさに首を反らして躲した光我は、一步後ろに下がって睨み据える。私も警戒して石が来た方に目を向けていたが、こちらには全く攻撃は来なかった。どうやら、敵意は光我だけにあるようだ。相手の殺気がこちらには向いてない。

「やろう――とんだ挨拶だなおい」

悪態付く光我の都合などお構いなしに、また石が飛んでくる。

「ちいつ、喧嘩売ってんのか！」

光我は舌打ちざまに裏拳ではたき碎き、怒声を上げた。同時に、木を覆う葉の中から小さい影が飛び出す。

やはり影はあの小鬼だった。空中で数回体を捻って回転を加えてから光我の背後に降り立ち、すぐさま地を蹴り襲い掛かる。

「ハアッ！」

覇気の籠められた発声。共に足刀蹴りが後頭部を目掛けて繰り出されるが、光我はすぐに反応して振り返り、直撃する前に右腕で防ぐ。

小鬼には予想の範疇だったのだろう。続けざまに、今度は旋回による勢いを加えた蹴りを脇腹に打ち込む。より鋭い一撃が、光我の脇腹に刺さるようにめり込む。

一見、食らったかに見える光景だが――。

「ぐう、てめえ」

苦痛に顔を歪めつつも、光我は繰り出された右足首を、両手で押さえつける形で捉えていた。

「オラアッ！」

「うあ！」

右手を脹ら脛に掴み替えると、光我は背負い投げの要領で軽々と小鬼を投げ飛ばす。

あらら、私だったら投げないで地面に叩き付けて関節決めるのに――。

などと思いながら私は、こちらに飛んできた小鬼を軽く身を反らしてかわす。

「ぐあっ！」

私とすれ違い、小鬼は大木に背中から勢いよく打ち付けてずり落ちるが。少し間を空けると、よろめきながらも立ち上がり光我を睨み、齒軋りを立てる。

「ざけんなよてめえ。勝手に喧嘩ふっかけてきて悪態付きやがって

……どういうつもりだコラ」

光我が苛立ちを露わにして問い掛けるも、小鬼は聞く耳持たずで再度攻め立てる。颯爽と駆け出し助走を付けて跳躍すると、飛び回し蹴りを繰り返す。

加速が加わったキレのある一撃が、こめかみを襲う。

「ぐっ！」

光我は小鬼の右足を肘辺りで受けたが。まだ宙にいる小鬼はそのまま左の足刀突きでガードをこじ開け、がら空きになった顔面を蹴り上げる。

「うあっ！」

そして最後に光我の胸を蹴って後ろへ跳び、空中で宙返ると、妖気で練り上げた水色の気弾を掌から放つ。

完全にバランスを崩し、背中から倒れそうな光我の胸部に、後押し気弾が直撃する。

「ぐあっ！」

直撃後の爆発も受け、光我は地に叩き付けられる。同時に、小鬼は着地を済ませ、もう一度光我のいる前方に跳躍し、追撃で踏み潰そうとする。だが、光我相手にその手は詰めが甘すぎだ。

「いい加減にしやがれ！」

そう、もともと打たれ強い光我だ、あの程度で弱りはしない。にもかかわらずそんな空高く跳躍していたら回避が不可能になり、迎撃して下さいと言っているようなものだ。当然、光我は切り返すだろう、すぐに体を跳ね起こし、拳に霊力を集束する。

「食らいやがれ……」

次第に右拳に集まった青白い粒子が、力強い輝きとなり雷鳴を唸らせる。そして集束が絶頂に達した刹那、光我は急降下しつつある小鬼に目掛け、拳を突き出した。

「紫電拳しでんけん！」

突き出された拳から蒼い稲妻が放たれ、小鬼の体を射抜くように走り抜ける。

「うぐあ——！」

呻きを上げ、小鬼は仰向けで地に落ちた。そして体を何度か痙攣を起こした後、動かなくなる。

「……生きているわね」

歩み寄って首に手を添えて生死を確認した私が呟くと、光我がこちらに足を進め、溜め息混じりで口を開いた。

「たりめえだ……ちゃんと力抜いてる。お前だったら容赦なく力入れるがな」

「なんか、あの技は私に食らわせたかったと言っているように聞こえるんだけど。あんたまだ私を殺す事を諦めてないの？」

「何今更なこと言ってやがる。当然だろが。言っただぜ……俺は絶狐丸の妹であるお前は信用出来ないってな」

相変わらず、不機嫌そうに眉を斜めに吊り上げ、光我は私を睨み据える。黒き瞳に輝きを宿すも、その奥には私に対する疑惑の意思が強く含まれているのがみられた。

「ちっ……崎原さんの命令が無かったら、今すぐにもてめえの顔面に打ち込んでやるってのによ」

そう吐き捨てるように言って、光我は私から小鬼に眼を逸らす。

はあ……——やれやれ。困ったお子様なこと。

前も言ったように私は無関係だと言うのに。

だいたい、絶狐丸兄さんが憎いなら、絶狐丸兄さんだけを狙っていればいいのだ。にもかかわらず私が双子の妹だからとか、だから危険だとか言う解釈や偏見で狙われるのは、こちらとしてはかなり理不尽である。まあ、現段階では崎原の命令がある以上、その心配もないから問題ないだろう。

不本意だけど、とりあえずあいつに感謝はしておこうと思う。それよりも——。

「何でこいつはあんただけ狙っていたのかしらね」

この小鬼、不可解にも私にはまったく目もくれずに光我だけを集中的に狙った。私は二度小鬼と接触はしたが、二度目の際は私を畏怖した様子で逃げ去ったことから、勝機は無いと思ったのだろうか？

だけど、光我也強い。戦闘能力は一端の退魔師から明らかに並外れている。そもそも、生身で正面から私とともにやり合うくらい頑丈さと破壊力を持っているのだから、これで素早さが加われれば、退魔師最強に位置するに相応しい実力を有していてもおかしくない。小鬼としても解るはずだ。自分の勝てる相手ではないと。

なのに何故、光我だけを狙ったのか。それも、まるで試すように……。それにあの戦いで繰り出した飛び四段蹴り。烈狐丸兄さんの蹴り技、紅四閃脚くれないしせんぎやくに似ている。本来烈狐丸兄さんの紅四閃脚は、炎を足に纏った状態で相手を蹴る。更に追撃では小鬼がやったような妖気の気弾では無く、妖気で作り上げた炎弾数十発を瞬時に放つ技なのだが、手口は全く同じだ。

やっぱり、この小鬼、謎が深い。

「何にしても、こいつが起きてからじゃないと話が進まない。起きるのを待つしかねえ」

「そうね。——って、言いたいけれど、起きているでしょ。あんた」

「何……？」

私の意外な言葉に、光我は眉をしかめて小鬼を見やる。

すると——。

「バレてましたか……」

小鬼は呟いてゆっくり目を見開く。光我の紫電拳のダメージがまだ体に残っているのか、苦悶に顔を歪めつつも上体を起こすと、視線を光我に向けて透き通った優しい声で喋り出す。

「人間。光我と呼ばれていましたね。先の無礼は失礼しました。ですが、改めてあなたが強者で、そして信用できると思いました」

「それはどういうこった？」

「僕は、あなた方、支魔の退魔師がここに来た時からずっと見ていました」

表情を曇らせる光我に、小鬼は一旦呼吸を整え、口を開いた。

「いきなりですが、お二方へ单刀直入に言います。僕に……力を貸して下さい」

小鬼は告げると、私達に頭を下げた。

第十三話 『白鬼の真実』

「何だと……?」

意図が読めないと光我が眉間にしわを寄せ、頭を下げたままの小鬼を睨むように見据えている。

「すみません。突然こんな事を言われたら、訳が分からないのは当然ですよ」

顔を上げた小鬼は、自嘲の笑みを浮かべていた。

「先ずは、順を追って説明しなければなりませんね。——つと、その前に」

そして忘れてたとも言うように頷く仕草を見せると、小鬼は真っ直ぐな眼で私達を見つめ、自分の胸に右手を当てた。

「自己紹介がまだでしたね。僕の名前は白鬼びやくきといいます。以後、そう呼んで下さい」

そして、白鬼は手を光我に差し出す。対する光我は顔を難色に染め、投げやりな態度で握手を交わした。まあ、光我があまり気乗りしてないのは判らなくもない。いくら白鬼が先の無礼を詫びても、いきなり攻撃されたのだ。あっさり納得は出来ないだろう。何よりも、まだ信用したわけではないと、その陰湿な態度と雰囲気物語っていた。

それを察したのか、白鬼は困った顔で苦笑し、両手を重ねて再度謝罪の意を示す。

「本当にごめんなさい。でも、わいらと戦える実力の持ち主かどうかを知りたかったんです」

「何?」

俯き加減に言う白鬼に、光我の表情が今度は疑問へと変わる。だが、逆に私はその意味を察した。

「やっぱり、そういう繋がりが……ふむ」

「は? どういうことだ美狐」

自分だけ置いてきぼりを食らっているのが腹立たしいのか、口元に右手で覆って思索する私に、光我は苛立った口調で問い掛けてくる。

「私は言ったでしょ——」

面倒に思いながらも、私は口元を覆っていた右手を下ろし、隣で少々いきり立っている光我へ冷ややかに目線を送りつけて、次の言葉の口にした。

「わいらが“無関係”とは限らないって」

白鬼の言葉に、大方の見当がついた私は、光我から当人へと視線を移した。

「白鬼って言ったわね？ あんたが工事の妨害をするのは、わいらと関係があるんでしょう？」

問い掛けると、やはり白鬼は表情を険しくさせ強く頷いた。

「そのとおりです。今から説明します」

白鬼が工事を妨害する理由^{わけ}。すべては“わいら”が原因だった。

詳しく聞けば、白鬼はこの山を護る土地神の代理らしい。土地神は本来なら何処にでもいるはずが、この山には何故か土地神が居なかった為、代わりに彼がこの山を護っていた。ところが、近頃人間が山に入り込み、そして工事を拡大し始めた。

わいらが眠りから目覚め、森を荒らし始めたのはそんな時期であった。

「わいらは、僕が土地神代理としてこの山に居着く前から洞窟で眠りについていました。しかし、数百年近く経っても、わいらはずっと眠りから目覚めることはなかったのです。ですが……」

「それが、人間が工事した時期に目覚めたんだろ？ だとすれば、悪いのはきっかけを作ったと思われる人間だな」

「いえ、それだけとは言い切れないんです……」

顔を渋め呟く白鬼に、光我は訳が判らず眉をしかめた。

「そりゃどういうことだよ」

「あのわいらは、どこか様子が変なんです」

「変？」

私が聞くと、白鬼はより深刻な面立ちで一旦頷き、話を続けるのだが――その内容は実に私の興味をそそるものだった。

「何て言うか、正気がなくて意志が感じられなくて。思い切って言えば、“誰かに操られてる”と言った様子でした」

「何ですって……」

そのことを耳にした私は、思わず口から言葉を漏らしてしまった。誰かに操られてる――この一言によって私の脳裏から、ある男が浮かび上がった。

そう、怪人赤マント。

アイツも様子がおかしかった。どこか計画性が感じられる殺人、そして誰かに従っているようなあの逃走といい、あまりに疑問が多いのだ。

もしや今回のわいらは、赤マントと何か繋がりがある――と考えるみるのは、現段階では憶測なのだろうか？

そんな思考を張り巡らせていたその時――

「おい美狐」

「あの、大丈夫ですか？」

二人の声により、私は我に帰った。

白鬼は心配そうに、光我は相変わらずの仏頂面でこちらを見据えていた。どうやら知らずの内に私は、深く考え耽っていたみたいだ。

「ん、ああ。大丈夫よ」

とりあえず、まだわいらを直接目にしてしていない以上、赤マントとの関連性については保留にしておこう。そうして私は白鬼に話を続けるよう、軽く手を振って促せた。

「では、話を続けますね。それで僕はわいらによる被害の拡大を防

ぐため、出来るだけ小動物や木々の被害を最少にするルートへと、僕自身が囃となることでわいらを誘導していたんです」

「そう……じゃあ、あんたが作業員を襲った理由はやっぱり——」

「はい、わいらの通るルートに近付いていたからです」

一人での調査中、私は襲われたことがある作業員から詳しく話を聞いていた。話によれば襲撃に遭^あって意識を失った作業員は、次に目を覚すと何故か襲われた森の奥ではなく、工事現場付近にいたと証言していた。これはつまり、白鬼が後ろから気絶させた後、作業員を出来るだけわいらの進行ルートから切り離していたわけだ。

「工事の機器の暴走も、あんたが念力で操ってたんでしょ？」

少なからず、わいらには無理だ。人間に対してそんな気配りはないだろうし。何よりも、わいらなら直接壊しに来るはず。

「そうです。人間がわいらをより刺激することによって被害が拡大するのを阻止する為——」

「そして、工事による自然破壊を止める為——ってわけね」

「はい！」

付け足した私をまるで賞賛するように、白鬼は満足げに頷いた。とは言っても、これは話を纏めていればすぐ解る。それほど難しい事でもないはず——なのだが……。

「なる程な……これでもう、何で工事を妨害していたのかハッキリしたな」

どうも、おつむの回転が乏しい馬鹿がいたようだ。

「今更判ったの……鈍いわよあんた」

その言葉に光我がむっとした顔を作り、やれやれと頭^{かぶり}を振るう私を憂さそうに横目で睨むも、私は氣にとめないで先刻の発言に、こう付け加えてやった。

「もっと頭を働かせなさい。そんなんでよくこの仕事出来るわね」

「……いちいちうるせえよ。糞狐」

どすのきいた声で、光我は吐き捨てた。

「ふん、言ってなさい糞餓鬼」

それに対して私が冷淡に言い返すと、光我はより不機嫌そうに小さく鼻を鳴らし、私から顔を背けた。

——まったく。相変わらず私に対して悪態付くんだからこのガキンチョは。まあ、無駄に憤慨して喚き散らすよりはマシかもしれないわね。

そんな私の軽蔑と感心が入り混じった心情など知る由もなく、光我はひねた子供のように目を逸らしたままで、角張った態度を崩さない。

「あ、あのう……話続けていいですか？」

そんな私達の険悪なやり取りを前に、白鬼は気まずそうに訊ねた。
「ん、構わないわよ。続けて」

「あ、はい。それで、改めて話を戻しますが、協力を頼みたいんです。わいらと工事の両方を止めるのに」

「ま、最終的にはそこに行き着くわね」

何となく髪の毛をいじりながら私が言葉を漏らすと、隣りにいる光我が首を鳴らしながら前に出る。

「それで、どう動くんだ。わいらが先か？ それとも工場を止めんのか？」

やる気に満ちた声で、光我は白鬼に訊ねた。

「え……協力してくれるんですか？」

「ここまで話して何を今更……たりめえだろ。支魔を他の理解のねえ退治退治言ってる退魔師と一緒にすんな」

白鬼は意外そうに、拳をほぐして鳴らす光我をまじまじと見据えていた。どうやら、ここまで事情を説明して頼んでおきながら、あまり良い返答を期待してなかったらしい。そんな後ろ向きな気持ちになるのは判らなくもないが、ちよつとマイナス過ぎないだろうか？
「あ、ありがとうございます光我さん！」

その反面か、白鬼はとても嬉しそうに光我の手を取り、御礼を口

にする。

にしても――

「あんたが言っても全然説得力無いわね……」

少なからず。私の場合は問答無用で退治だったんだからね光我こいつは。

「うっせえよ。てめえと絶狐丸は別だ」

「そう……烈狐丸兄さんの方は問題ないわけ？」

「そっちは会ってから判断する……悪い噂は聞かねえからな」

ふうん……一応それなりに相手を見極めようとする心得はあるみたいね。

私はその感心を表には出さず、冷やかな態度で光我を流し目に一瞥した。

「ま、私は別にどう思われようと構わないけどね」

そう澄まし態度で髪を梳すく様にさらし靡かせてた私に――

「あの……今、烈狐丸って言いましたよね？」

白鬼がどうにも不思議そうな面立ちを露わにして、私に問い掛けてきた。

「そうだけど……っと、その事についてちょっと聞きたいことがあったのよ。あんたが光我に繰り出したあの蹴り。あれ、烈火神破拳れつかしんはけんの技の一つ、紅四閃脚よね？」

「はい、烈狐丸師匠から習いました！ まだ未完成ですけどね」

どこか照れくさそうに白鬼は呟く。それにしても烈狐丸兄さんを師匠って……。

「あんた。烈狐丸兄さんの弟子なの？」

「そうです。師匠は、僕を救ってくれた恩人なんです！」

妖狐だから“人”じゃないわよ――何て内心ツツコミを入れる私の心境など知らず。白鬼はウキウキした調子で私と烈狐丸兄さんの関係などについて、いろいろと訊ねて来た。

――にしても、あの兄に弟子ね。あのキャラで師匠って、何か似合わないわね。

絶狐丸兄さんが聞いたら、きっと私と同じように思うだろう。そ

んな滑稽さに、思わず私の口元は綻びるのだった。

——それから、私達は雑草が生い茂る薄暗い獣道を歩いていった。白鬼との話の途中に光我が『歩きながら話せよ』と苛立った声で訴えてきたので、とりあえずわいらの洞窟を見に行ってみようと、こうして木々の深く色づいた道を通っているわけだ。

「そうなんですか……やっぱり美狐さんは師匠の妹なんですね。実は初めて会った時、外見は似ているのに、全く師匠と違った雰囲気を出してるんで。戸惑ってました」

「外見が似ているからって、中身まで一緒なわけないでしょう……」「で、ですよ。すみません。でも、最初は冷たい感じがしたのに、話してみても安心しましたよ。あなたが良い妖狐で」

「良い妖狐……ね」

はあ……見る目無いわねまったく。私は、少なからず良い妖狐なんかじゃないのに。

天狐は本来善狐である——が、私はどちらかと言えば悪狐だ。天狐であるのは所詮見かけだけに過ぎない。生まれた時から、私達兄妹は異端の妖狐だった。何よりも、あの女狐の子だ。その身に流れるのは、どす黒く汚れた血。

私は否定したいが、血は争えないのかもしれない。例えあの女とはやる事が違おうとしても、進んだ道が違えども、私達の内に潜むものは悪質なのだ。

少なくとも、私は思い知った。私達が玉藻三天狐と呼ばれるようになった、あの事件で。私達は奪うことは出来ても、救うことはできないと。

——でも、それでも。私はあの人間の少女の為に、初めてできた友の為に私は背負った。彼女の命を奪い、彼女の業も全て背負い引

き継ぎ、そしてその身に刻んだ。

彼女（あの娘）の為、私の為に――

いつか時を越え、また出会えると信じて――

「美狐さん？」

俯いていた私に、白鬼が顔を覗き込んで来た。

「どうしたんです？」

「……何が？」

「いえ、何だかとっても暗い顔してましたけど……」

「気にしないで、ちょっと昔の事を思い出してただけよ」

どうも腑に落ちないと白鬼が懸念する。私がそれに居心地悪く感じ、話を変えてやり過ぎそうとしたその時――

「おい、そんな話している場合じゃねえみてえだぞ」

ちょうど木々も減り、道が広くなったところで光我が歩みを止めて口に出した。光我の声に私も立ち止まり、異様な気配のする正面に目を向ける。すると、意外な人物がそこにいた。

「見つけたぞ貴様！」

あのイギリス人の女性にして退魔組織紅蓮の退魔師。ジェーン・ドウだった。

第十四話『平賀の瞳』

「さっきはよくも恥を欠かせてくれたな！」

怒り心頭に発してジェーンはこちらを睨んだ。

私の横で唾然とする光我や白鬼など蚊帳の外で、怒りの矛先は私にだけ向けられている。私に敗れた後に受けた恥辱を思い出しているのか、透き通るような白い肌は朱に染っていた。

「まったく……」

面倒な奴が現れた——そんな気持ちから頭を振って溜め息付いた私は、胸元で腕を組み、彼女に言った。

「あんなことされてもまだ私に楯突くわけ？」

「当たり前だ！ あんな屈辱を受けて黙っていられるか！」

忌々しげにジェーンは憤慨した。そのきいきい喚く姿がまるで、リスなどの可愛らしい小動物を連想させる。そんな彼女がどうにも滑稽で、どうにも口角がつり上がってしまう。

「笑うなあ！」

「ふふっ、まあまあ、そんな怒んないの。せつかくのお人形さんのような可愛い顔が台無しよ」

口元を手で包み隠しながら私が賺すと、ジェーンは先ほどとは違う意味で頬を赤く染めて後ずさった。

「か、可愛い……わ、私の顔が可愛いだと！ ふ、ふふふ。そんな可愛いだなんてえ——って、違あぁう！」

デレデレと照れた顔を振り払い、ジェーンは再び憤慨すると私を指差した。

「誘惑しようたってそうはいかないぞ妖魔！ そんな言葉に惑わされる私じゃない！」

「……半分掛かってましたよね？ 光我さん」

勝手に暴走しているジェーンに痛々しい目線を送りながら、白鬼は光我に耳打ちする。

「俺にふるなよ。つか、誘惑してねえだろ。馬鹿じゃねえのか、こいつ？」

煩わしそうにジェーンを見据え、光我は呟く。同感だ。光我の言う通り、私は別に誘惑するつもりで言っていない。からかったつもりだったのを、勝手に真に受けて、勝手に勘違いしている。

「ば、馬鹿って言うな！ 馬鹿って言ったやつが馬鹿なんだぞ！」
私に差してた指を光我に替えて、ジェーンは慌ただしく声を荒げた——にしても、なんとも幼稚なこと言う。

それが自分の愚かさに拍車を掛けていることに、気が付かないのだろうか？

「おい……こいつって、こんなやつだったか？」

ジェーンを指差しながら、眉を顰^{ひそ}めて光我は私に訊ねた。まあ、そんな反応を示すのは無理もない。ジェーンの第一印象は、優雅で凛々しく煌^{きら}びやか、俗にいうクールビューティーといったイメージだった。

しかし石岡との対話の際は丁重で堅実そうな物腰だった彼女の上っ面が、実は感情豊かで子供じみていた——なんて二面性を見せつけられれば、光我みたいに呆^き気にとられるのは仕方のないことだろう。

「まあ、人は見かけによらないって言いますから、あれも“あり”なんじゃないでしょうか？」

「かもね。見えて飽きないわよ」

「うるさい妖魔共！ 好き勝手なことを言うなあ！」

苦笑する白鬼と失笑する私にジェーンはより熱^いり立った。

「はいはい、わかったから。猿^いみたいにきいきい騒がないの」

「猿じゃない！ だいたい猿はきいきいじゃなくて、“ウキー！”
だろ！」

「……本気で言ってるのかこいつ？」

アホか——なんて言いたげに光我は啞然とした表情でジェーンを眺めていた。光我。悪いけど、そのリアクションは飽きたからもう

いいわよ。

それよりもまず、気になることがある。ジェーンとの戦闘に勝利した後、私は彼女が所持していた手錠を使って拘束した。それから少しお仕置きをして、気絶したジェーンをその場に放置していたはず——なのに、彼女はこうしてここにいます。

「——ってことは、お仲間があんたを助けたのかしら？」

彼女を放置していた場所は、工事の作業員が通りかかることのないくらい現場から遠く離れている。そう、戦闘でジェーンが拳銃を使用していても銃声が届かないくらいに——とすれば、当然作業員が彼女を助けに駆けつける可能性はない。そして自力で枷かせを外したとも思えない——となると、彼女の拘束を解いたのはあの男か……。

「そうですよ」

ちようど疑問が纏まった頃、ジェーンの後ろから肯定の声が聞こえた。

聞き覚えのある男の声だ。

「私が彼女を助けましたが、それがなにか？」

黒い背広の男がジェーンの隣りまで歩みより、私達に嫌味な笑顔を見せた。

「デメエは！」

その男を見るなり、光我が憤りの声を発した。

黒い背広の男——長い黒髪を後ろに束ね。か細い輪郭と鋭い細目からくるその笑顔は、狡猾な爬虫類を想わせる。この男の名は——

「確か……平賀翔平ね」

私がそう呟くと、平賀は感心とも皮肉とも取れる片頬笑みかたほえをこちらに向けた。

「ほほお……これはこれは、伝説の玉藻三天狐の一体である玉藻美狐に名前を覚えてもらえるとは、実に光栄ですよ」

「いきなりのご挨拶ねあんた。相手に喧嘩を売るのが好きなのかしら？」

「いえいえとんでもない。私はどちらかと言えば、平和主義者です」

平賀は相変わらず不快感ある笑みを崩さない。顎を撫でつけながら、見下すような視線を送る。

そんなこいつを睨めつけたまま、光我が私達の前に立つ。

「おどけてんじゃねえよ。何が平和主義だ。この営利主義野郎が……だいたいテメエといい、その馬鹿女といい、いったい俺達に何の用だ？」

「な——っ！」

自分を指差す光我が癩癩を起こしたジェーンが食って掛かろうとするも、前に出掛かったところで平賀がその手前に腕を伸ばし、制止を掛けた。

「平賀——！」

何故止める、と言うかのように平賀を睨むジェーン。しかし平賀の澄まし顔を目の当たりにすると、ジェーンは悪態づくような息を漏らし、しぶしぶ後ろへと下がった。

その様子を確認してから、平賀は目を細めてこちらに視線を移す。「用件は判っているでしょう？ 私達は退魔師。物の怪は退治せねばなりません。そう、特にその白い鬼はね」

「えっ！」

ゆったりとした動きで白鬼を指差し、平賀はニヤリと笑う。まるで、獲物を見つけ出したとほくそ笑む狩猟家ハンターのように。

「判っていますよ。あなたが今回の事件の犯人であることは」

「ちよっと待てよ。何でテメエがそれを知ってんだ！」

「私の力の一つ。visionですビジョンよ。瞬間的にですが、相手の過去や未来を写し出し、幻覚を見破り、本質を見極める目です」

自分の左目を指差しながら、平賀は細目の瞼まぶたを開く。開封された瞳は桜桃の色に輝き、私達を映し出していた。

あの瞳には見覚えがある。

「あんたのその左目、淡紅眼たんこうがんね？」

「ほう、やはりご存知でしたか」

「淡紅眼？」

「ええ……」

世の中には、生まれもって特殊な力を受け継いでいる者、自力でその領域に行き着く者が存在する。それらは具体的な定義や理由は様々で異なれど、自然の理を逸脱した力を手にしている。そう、一般でいう超能力、特異体質と呼ばれているのもそうだ。

「退魔師が持つ霊力もか？」

「そうね」

詳しい話をすれば半日くらい掛かるから、今は伏せておこう。とにかく、平賀の左目はそういった力の一つだが、それより疑問がある。

平賀の力が生まれもってのものならば、片目だけというのはおかしい。淡紅眼を持つのは例外なく、両目とも同じ眼のはずだ。それに瞳孔の大きさが右目と全く一致してない。ということは――

「その左目は、移植したやつ？」

もしかしたらと思ひ、私は訊ねてみた。すると、平賀の表情は今度こそ感心に染まった。どうやら、その反応は肯定のようだ。

あの眼を持つ者は私の知る限りでは一体しかない。私は過去にその眼を持つ狼と対峙したことがある。だが、千年生きた間で耳にする機会はあっても、実物を目にすることがあるのは、後にも先にもその狼のだけだ。しかし、平賀の左目に埋まっているあれは何だ？ 考えられる答え……それは決まっている。

「眼を……殺して奪ったのね？」

何となく、こいつはやりかねないと私は思った。どちらにしろ、こいつは気に入らない。この気持ちだけは確かだ。見ているだけで、すこぶる機嫌が悪くなる。

そう私が一方的に印象付ける中、平賀は更に印象悪くさせることを吐いた。

「ほう、驚きましたね。ここまで頭の回転が早いとは。いや、勘が鋭いと言うべきでしょうか？ さすがは伝説の玉藻三天狐の一体。

“幻惑の美狐”と畏れられるだけではありません――」

平賀の言葉が途中で途切れる。同時に、やつの隣りに立っていたジェーンは吹き飛ばされるように尻餅づく。周囲の草木も突風にさらされるようにざわつき、木々は落ち葉を撒き散らす。

「な、なんだ……」

「み、美狐さん……」

私の後ろにいる白鬼も、ジェーンと同じくどぎまぎと声を震わせていた。平賀はこめかみから冷や汗を垂らしながらも、興味深そうに含み笑いを浮かべている。ただ一人、光我だけが平然と私を正視していた。

「このクソ餓鬼が……。さっきからへらへらへらと。口の聞き方に気をつけろ……喰い殺すぞ」

そう、この異様な雰囲気は、私が殺気を放つことで作り出していた。

やつの戯言に耳を傾けるのは、そろそろうんざりしていた。いや、うんざりと言うよりも、禁句に禁句を重ねるこいつには半分頭にきていた。

「ふ、ふふふ。さすがですね。その殺気……良い、実に良い顔だ。美しいですね。いきり立つあなたも」

ここまでは怒り気味の私だったが、やつの熱意が込められた眼差しと、称賛的な発言のおかげで冷めてしまった。気持ち悪い、実に不愉快だ。

こいつ、私に気があるのだろうか？

「キメエなテメエ。美狐に用があるのか、白鬼に用があるのかどっちなんだよ」

「き、決まってる！ 両方だ！」

光我も不快感を露わにして、苛立った口調で問い掛けた。するとさっきから尻餅づいていたジェーンが思い出したように慌てて立ち上がり、私と白鬼を交互に指差した。

「そう、先に述べたとおり、私達の目的は妖怪の退治です。ですから――」

「やるってわけね？」

続けて口にする平賀に私は付け足し、鼻で笑った。

「いちいち回りくどいのよあんだ。戦いたいならさっさと仕掛けてくれば良いものを」

「へっ、悪いがよ。白鬼をやらせるつもりはこれっぽっちもねえぜ。こっちは急いでんだよ。邪魔すんなら……」

私に続けて光我が言い、右手を正面に翳した。って、私はいいのか？

「ぶっ飛ばすぜ！」

光我が口にした瞬間、右手に電撃が迸り輝きを放つ。徐々に霊力を解放しつつあるのが解った。それはそうと、やる気なのはいいが、私はともかく、光我はそんなことをしている場合じゃない。

「ちょっと待ちなさい」

私は光我の襟首を掴んで引き止めた、本人から僅かに情けない呻きが漏れるが。それは気にとめないでおく。

「て、テメエ……何しやがんだ！」

咳き込みながら振り向いた光我は、私の胸倉を右手でつかみ上げて怒鳴るが、特に気にせずそれをあっさり払いのけ、言うべきことを伝えた。

「あんたは白鬼と先に行きなさい」

「ああ？」

「こいつらは私が引き受けるつつってんのよ」

「ざけんな。こいつらは俺がまとめてぶっ飛ばす」

お前には譲る気はないと言わんばかりに私からそっぽ向き、光我はまた前に出る。光我の融通のきかなさに呆れつつも、私はもう一声掛けた。

「あのねあんだ。目的を忘れたの？」

「なんだと？」

ピタリと足を止めて顔をしかめる光我に、私は呆れつつも淡々と話を続けた。

「あんた退魔師でしょう？　今はこいつらと戦うよりも、白鬼と一緒にわいらの住処に行って、わいらを止めるべきでしょ？」

今は紅蓮のやつらに時間を費やしてる暇はないはずだ。こうしての間にも、わいらが行動を起こすかもしれない。

「——だから、こいつらは私が引き受けてやるって言ってるのよ」
私としても紅蓮のやつらは気に入らない。故にこんな面倒役を、私にしては珍しく引き受けてやると言っているのだが——。

「うるせえよ。テメエの指図はうけねえ」

光我は頑として譲らない。

まったく——事態は一刻を争うかもしれないのにこいつは……。こんなところで意地を張ってどうする。

融通のきかない光我の態度に、私は内心苛立ちを感じずにはいられなかった。思わず食って掛かりそうになったが、それでは今の光我となんら変わらないし大人気ない。無意味ないがみ合いも余計に時間を費やすから、ここは不満を飲み込んで考え直すことにした。

ようし——嫌と言うならば、その気にさせてやるまでよ。

表面は平常心を装いながらも、心の中は意気地を奮い立たせ、私は光我へ詰め寄る。

「ふうん、そう……んじゃあ、わいらはほうっておいてもいいわけ」
「む……っ」

私が投げ遣りな物言いで言うと、光我は一瞬だけたじろいだ。意外な対応だったのだろう、顔をしかめて光我は唸る——が、そんなことお構いなしに私は話を続けた。

「それなら別に構わないわよ、私はね。でも、退魔師であるあんたにとって、これは職務放棄なんじゃない？」

威圧を載せて言い寄ってみると、光我は押し黙ったまま、睨み返すように私と眼を合わせた。とりあえずはちゃんと話を聞く気になったようだ。後は詰めに入るとしよう。

「石岡や白鬼に事件の解決は任せろみたい在意気込んでいたのは、なんだったのかしらね？」

「それは口にした以上、嘘にはしねえよ」

決まり悪そうに呟く光我に微笑み、私は得意気に言い張った。

「じゃあ行きなさい。ぼうつとしてたら取り返しのつかないことになるわよ？」

私としても、わいらが暴れて自然が壊されていくのは放ってはおけない。

だから光我には急いでほしい——というのが私の本音だが。言ったところでそれは光我にとって知ったことでもないから、口には出さないでおこうと思う。

「光我さん……」

懸念に目を細める白鬼を見て、しばらく険しい顔を俯けて沈黙していた光我だが。間が過ぎると観念したように溜め息を漏らし、忌々しげに横目で私を睨みながら口を開いた。

「わあったよ。だがな、テメエの言うこと聞いたわけじゃねえからな美狐。俺は、退魔師として仕事を優先するんだ。そのためにテメエを囷として利用する。それだけだかな」

だから勘違いすんなよ、と光我は不満げに付け足し、白鬼の元へと歩き出した。

やれやれ——ほんと、意地っ張りなこと。

光我がまだ青臭いガキだと改めて実感したせいかな、なんだか笑いが込み上げてきた。いつの間にか私の唇が三日月の形につり上がっていたのを、あいつは知らないだろうに。

そんな光我の背中を一瞥した後、私は気を取り直して平賀達に焦点を当てる。二人が妨害してこないか、目を見張りつつ、いつでも対処がとれるよう、私は戦闘態勢に入る。もっとも、会話の間も警戒は怠っていない。だから手出しされることはなかった。

とはいえ、今はより気を引き締めている。紅蓮側はこの険悪な空気を肌で感じたのか、こちらに殺気を向けて威嚇し始めた。そろそろ仕掛ける気のようなのだ。

「よし、行くぜ！」

「はい、光我さん！」

光我の声に白鬼は頷くと、二人は森の奥へと駆け出した。どうやら、少々遠回りのルートでわいらのところへ向かうようだ。まあ、近道である正面の道には、紅蓮の退魔師達がいるから致し方ない。“急がば回れ”だ。

「待て！ 逃がすか！」

当然だが、すかさずジェーンが光我達を追い掛けようと動き出す。おあいにくさまけど御生憎様。みすみすそれを見逃すほど、私は甘くない。すぐに空気を吸い込み、指笛の要領で白い煙幕を紅蓮の奴等に吹き付けた。「ぬわあっ！ なんだこれは！」

間拔けな声を出しながら、ジェーンは足を止めて、両腕で顔を隠すように身構える。平賀の方はジェーンと同様の体勢で、口惜しそうに舌打ちしていた。

巻き起こる強風と撒かれる煙幕に、紅蓮の退魔師達は瞬く間に飲み込まれていく。

「さあて。いくわよ……」

そんな中、私は戦闘開始の合図を小さく漏らしつつ、煙りの中へと飛び込むように駆け出した。

第十五話『激怒』

颯爽と駆け出してわきあがる白煙の中へと潜り込んだ私は、そのまま紅蓮の退魔師がいるところまで気配を読んで突き進む。

「げほっ……くそ、あいつはどこだ！」

忍び寄る私の存在に気付かず咳き込むジェーン。

「ここよ」

そんな彼女の右肩にそっと手を添えて、声色なまめかしく私は耳打ちする。

「え……うわぁ！」

背後から不意を突かれて取り乱す彼女に、私は会心の笑みを浮かべているのを自覚しつつ――

「隙がありすぎるわよ。あんた」

彼女の右腕を掴み上げ、螺旋を描くように捻る。

「うげっ！」

その身をひっくり返されて、地面へとうつ伏せに叩きつけられたジェーンは、奇妙な呻きを漏らす。

まだまだよ。ここから関節を――極める！

更に間髪をいれず、私は彼女の右腕をそのまま放さずに引っ張り上げ、制圧した。

その頃には辺りを埋め尽くしていた白煙は風に流されて過ぎ去り、視界は良好になる――と、ちょうど晴れていく視界の中、平賀を捉えた。

「ジェーン……やれやれ。いきなりですか」

平賀は四つん這いで拘束されているジェーンと、そんな彼女の右腕を引っ張り上げ、頭を片足で踏んづけて拘束している私を見やると、かぶりを振る。

「まあ、私を狙うよりも彼女を拘束して人質にすれば時間も稼げますから、当然ですね」

「迂闊に攻撃も出来ないでしょう？」

「痛っ！」

私は軽く力を入れ、極めている右腕の関節に無理をきかせた。苦痛に顔を歪めてジェーンが呻く。しかし、そんな痛々しく悶える彼女を目にしても、平賀は動揺を示さない。それどころか、この状況に不適切な嘲笑を見せた。

「何が可笑しいの？」

次第にクスクスと肩を揺らすと、平賀は細い瞳をより深く伏せた。怪しく吊り上がった口元を掌で覆い隠しながら。

「いえ、ねえ……あなたは双子の兄、絶狐丸よりも。長兄の烈狐丸に近いように見えましてね。意外でしたよ、こんな甘いとはね」

「あんた。その口振り……」

もしやコイツ。兄さん達と面識が……むっ！

思考を働かせるのも束の間。平賀が伏せていた目を見開き、唐突に殺気を滲み出した。それと同時に後方から異様な気配を感じた。背筋から冷ややかな寒気が通り抜けた。

これは、振り返っている暇は無い――

「わねっ！」

「ぐはっ！」

瞬時に判断を下した私は、ジェーンの脇腹を蹴り飛ばしてから、すかさず後ろへ跳びずさった。

蹴り飛ばされて宙に浮くジェーン。後ろへと下がり、地に足を着けた私。この刹那の間、上から斜めに掛けて銃声が小刻みに鳴り響く。すると、私とジェーンがいた所は、瞬く間に穴だらけ……いや、蜂の巣となった。後少し反応が遅れていたら、私とジェーンがなくなっていただろう。

それにしても、これって遠距離からの射撃？

狙撃手でもいるのだろうか？　しかし、狙撃にしては瞬間的に発

射された弾数が多すぎる。何よりも、狙撃手の気配は無い。私は半径十二キロ以内なら、僅かな視線や空気の乱れも逃さず感じとることができる。だけど感じた気配は、数メートル内の、それも空からだった。

周りを見ても狙撃できる高所はないし、あってもすぐに見つかる。なら気配の正体は——思考を張り巡らし、私は空を見上げた。

「うぎゃ！」

前方ではジェーンが林の方に背中から落ちて悲鳴を漏らしていたが、そこは敢えて気に掛けないでおく。

「あれは——」

考えていた通り、見上げた先に“それ”はいた。

空中をフワフワと、二つの拳銃が風船のように浮いている。両方ともマガジンが長く、グリップ先端部からはみ出していた。

「ほう……かわしますか？　とはいえこの銃の弾速は、ジェーンがあなたに使っていた銃に劣りますからね。かわされやすいのは当然ですか」

二つの銃は照準を私に定めつつ、不敵に笑う平賀へと下がり、彼の肩より上の辺りで浮遊しながら待機する。

それにしても、不思議な力だ。物に触れず操るということよりも、力そのものに訝しさを覚えた。妖怪の持つ妖力、人間など一部の動物の持つ霊力などとは全く異なる性質の気を、平賀は放っている。

「ふふっ、珍しいですか？　私から放たれるオーラは」

気、俗にいうオーラには、それぞれ色合いがある。基本的に霊気は蒼か紫。妖気ならば朱か黒などだ。

しかし平賀のは違う。どす黒い紫色のオーラを揺らめかせて、悪意に満ちた威圧感をこちらへと押し寄せてくる。

この感覚は、絶狐丸兄さんとあの女に似ているわね。

九尾の狐と呼ばれていたあの女、玉藻前。たまものまえあいつも邪悪とも言える悪質で膨大な妖気を身に纏っていた。周囲に戦慄と絶美を焼き付けてしまうくらいに……なんだか、あの女を思い出すとだんだん腹

が立ってきた。ただでさえ、今は平賀のせいで不愉快なのに。

不愉快と言え——

「あんた。どういうつもり？」

気に入らない。

仲間ごと相手を撃つ。私からしてみれば、もっとも下等な行為だ。
「何もためらいなく仲間ごと狙い撃つなんて、随分根が腐ったまねをすんじゃないの」

草むらからジェーンが呻き声を交えてふらふらと起き上がる様を一瞥し、私は平賀に問い掛けた。

すると平賀はそんなことを訊ねる私が変に思ったのか、怪訝に眉を顰めるも、次にはゆったりと、ニヒルな笑みへと変貌する。

「仲間？ 紅蓮にはそんな甘っちょろい意識はありませんよ。それにね——」

滑稽そうに肩をすくめていた平賀だったが、今度は不気味なほど落ち着いた様子で、含みのある冷たい視線をジェーンに送りつけた。それが合図となつてか、肩の上で浮遊している銃が私から彼女へと照準を切り替え——

「役立たずの足手まといは、不要です」

平賀が言い捨て指を鳴らすと共に銃口から火が噴き、弾丸の雨が彼女を襲った。

「うわっ！」

咄嗟の反応が間に合って、そばにあった木々に隠れて難を逃れたものの、私に蹴られた右脇腹を押さえている彼女の表情は、苦悶に歪んでいた。

「く、なんの……なんのまねだ平賀！」

木陰に背を預ける形で僅かに顔を覗かせジェーンは叫ぶ。その横顔は、平賀の突然の裏切りが信じられないと、驚愕の色に染まっていた。

「言ったでしょう。役立たずの足手まといは、紅蓮には必要ないんですよ。捨て駒としてすら使えない屑を処分しておくのは当然でしょう?」

「なんだと——ふざけるな! お前それでも人間か!」

「普通の人間ですよ。テレキネシスやビジョンを使用できると言うのを除けばね。それに私は、本当はあなたと組む気などありませんでしたよ。紅蓮は二人一組以上がルールですからね。特に上の者は新入りと組むようにされている。私はそれに従っているまで」

なるほど、見た限り平賀とジェーンは正反対な部分が目立っていた。この二人の組み合わせが変に感じたのはそういうことか。

上の者と新入りの組み合わせ——そういえば崎原が言っていた。退魔組織は基本的に最低二人一組かそれ以上、そして実力のある者は新入り、あるいはまだ実力の伴わない者と同行し、彼らのサポートなどをするのだと。

崎原と光我の組み合わせも、まさにそれだ。階級が高くとも、精神的に未熟者の光我だと、周りと衝突して支障を来したりすることがある。そんな光我を抑制させ、打ち合わせなど、出来る限り支障をきたすことなく、綺麗に仕事をこなすのが崎原の役割という訳だ。だが崎原がいないと、光我は違う方向へと突っ走ってしまう。特にあの時、私が止めていなければ、いちいち平賀とジェーンを相手にしていただろう。

新入りや未熟者揃いでは無駄に失敗や被害を増やすから、育つ退魔師の数も限られてしまう。故にこの組み合わせが必須となったわけだ。まあ、編成としては当然だろうけど。

「ぐ……今回はあの方に頼まれたから、仕方なく組んだんだろ?」
皮肉を込めてジェーンが問い掛けると、平賀はあしらうような素振りで顎に指を添え、涼しげな表情で頷く。

「ですね。とはいえ彼はあなたを丁重に扱ってほしいと言いません

でしたし……盾くらいには使えるかと思ひましてね。仮に死んでも、妖怪に敗れたと伝えれば問題ないでしょうしね。余計な金も配分する必要ありませんから。何よりも——」

平賀は一旦言葉を区切ると、彼女を嘲るように目元涼しく吊り上げ、口を開いた。

「前々からあなたは紅蓮にはいらなと思うってたんで、消すのにちように良い機会だと思ひましてね」

「なっ……貴様！」

「何の力も取り柄も持たない屑。いりませんよ……あなた」

黙って話を聞いていればこいつ——やっぱり気に入らない。妖怪にも利己的なやつはごまんといはする。だけど、こいつのような奴、そうはいない。最低だ。

私の中で熱い何かが疼く。そろそろ不快感も、限界を超えそうだ。「ん？」

私が睨み凝らしていると、クスクスとすました顔で笑う平賀が、こちらに気付いた。

「あんた……」

「おや、気に入りませんか。ですが、あなたもこうして周りを利用しているのでしょうか？」

横目で視線を合わせ、煩わしげで不服そうに言い捨てる平賀。

カチンときた。

会った時から今まで感じていた、こいつに対しての不思議な苛立ちと不快感。

ジェーンに向けた言動から、はつきりとした。こいつは私の母、玉藻前に考え方がそっくりだ。少しでも使えないと思ひつてしまえば実の娘の私ですら捨て駒にし、自分以外の存在は身内ですら目的のための道具としか見ていなかったあの女に。

今でも覚えている。私を平然と裏切り、嘲笑に醜く歪むあの女の

横顔。

ジェーンを罵る平賀の姿が、あの女狐と重なって見えたのだ。

こいつやあの女と同類扱いされるなど、たまったもんじゃない！

私の中で疼いていた熱は、怒りの蒼炎となり、烈しく吹き荒れた。

「一緒にするな……屑が」

私を中心に妖気が、旋風の如く舞い上がる。

「なっ！」

さっきまで不敵に微笑んでいた平賀の顔に動揺が浮かんた。殺気立った私に圧されたのだろう。後退り、威嚇を含んだ眼孔を向けている。

「私は一度利用すると決めたら、最後まで使い切る。絶対に捨て駒になんて使わず、有効に活用する……」

私なら、あの女やこいつのように捨てたりはしない。例えば、それがどんなに嫌いなものだったとしてもね。

そう、それが――

「それが私とあんたの格の差よ」

ドスの利いた声色をきかせ、私は威し掛けるように妖気をより解放していく。

「あらかじめ忠告しておくわ」

平賀を指差し、私はこう告げた。

「今からでも遅くない。とっとこの土地から失せろ」

体が軋みを上げて、私の体は半妖体へと変貌していく。生えてくる四本の尻尾で大地を瞬く間に切り裂き、平賀の足下まで亀裂を作り上げた。この威しに平賀は動じることなく、私に不敵な笑みを向ける。

「失せろ？ 冗談じゃない。私の目的は玉藻三天狐、最初からあなたなのですよ。玉藻美狐」

「なんですって……？」

「もともと、あの白い鬼やら工事のことなど、ついででしかありません。私はあなた方、玉藻三天狐に興味があったから、その一体であるあなたがこの地に現れたからこそ足を運んだ。それだけです」

今までの態度からして、平賀は玉藻三天狐に妄執している。多分、兄さん達との面識があるような口振りから、関心を留めたきっかけは出会いにあるのかもしれない。もっとも、詳しいことは本人から聞いてみなければ解らないが。

何にしても、そこから推測すれば淡紅眼についても合点がいく。私の情報を探っているうちに眼の持ち主である狼に辿り着き、そして情報を聞き出すついでに眼を奪い、殺した。

「——そんなところかしら？」

私が言い終わると、平賀は感心と肯定の色を示した。そして片口を吊り上げ、奪って移植した淡紅眼を指差し、満足げに語り出す。

「ええ、当たりですよ。あの狼は目を抉られても、両手足を潰しても口を割りませんでした。子供を殺すと脅せば吐いてくねましてくね。得られたのはあなたとの関係程度ですが。代わりにこうして眼を貰いました」

えげつないやり方をする。そんなことせずとも、もっと穏便なやり方くらいあるだろうが。

あの狼もだ。私のことなど気にせず、いくらでも吐いてしまえば良いのに。無駄に義理堅いのは損するだけと、別れ際にも忠告したはずだ。

「ああ、それとあの狼と子供は一匹残らず蜂の巣にしました。殺したのは数月前ですから、もう土に還っているんじゃないでしょうかね？」

「そう……」

いきなり襲ってきいて、子供を救ったことから勝手に私を友と認めて、私に親しかった狼、悠^{ゆう}。私もあいつが嫌いじゃなかった。その子供達も、とても愛嬌があつて。

それをこいつは……ジェーンを屑などと罵っていたが、私からみれば、こいつの方がゴミ屑だ。

露わにしないが、内面は果てしない憤りで渦巻いていた。人間、それも個人に怒りがここまで沸いてくるのは久しぶりだ。今回は、狩る。光我みたい寸止めなやり方はしない。

気持ちが戦闘状態になったことからか、興奮が膨らんできた。戦いを急かす気持ちを抑えられない。だけれど、それを抑える気はない。

「本当は、時間稼ぎ程度のつもりだったけどね……止めた。弔い合戦ってのは性に合わないけど、一応親しかったしね。潰すわ、あんた」

だから、狂喜に歪み吊り上がる口元を隠すことなく。殺気に乗せて倒すべき敵を睨み凝らし、私は鋭く声にだす。私を中心に渦巻くように溢れる出る妖気により、周りの木々も突風で大きく揺さぶられた。

対する平賀は狂喜に歪む顔を隠すように右手を当て、指の隙間から薄暗く光る淡紅眼を覗かせていた。

「ふふ——さて、伝説の玉藻三天狐の一体、幻惑の美狐。あなたの力、見せてもらいますよ」

第十五話『激怒』（後書き）

どうも、書いててちょっとミスをしました。銃を細かく書きたかったのですが、いろいろ問題があったために、曖昧な描写にしました。すみません。

第十六話『尻尾の使い方』

森の静寂を銃声しんせいが劈く。

二つの銃は私に狙いを定め、空中を浮遊しながら追いかけてくる。その照準を振り切らんと、私は乾きの濃い草地を駆け回っていた。敵である平賀を中心に、コンパスで円を描くかのように。

「どうしました。威勢が良かったのは最初だけですか？」

追尾する二つの銃は、荒々しく火薬が弾ける金属音を小刻みに轟かせ、執拗に仕掛けてくる。振り返って見れば、弾丸によって貫かれた地面の穴が私を追い掛けてくる――などと、錯覚を抱かなくもない。

弾切れを狙って疾走を続けてみたが……。

「残念ですが、弾切れの期待はしない方がいいですよ」

弾切れを起こした瞬間――平賀はスーツの懷から装填済みのマガジンを取り出し、ナイフ投げの要領で二つの銃へと投げ付けた。

対して私を追尾する銃の方は、カチッとプラスチック音を鳴らし、グリップ先端部から差し込まれている空マガジンを、地面へと落とす。そして一直線に飛んできた装填済みのマガジンの方向へ、空洞になった先端部を傾け、空中で見事にリロードを完了させた。

超能力特有の変変わったパフォーマンスを見せつけてくれる。さながら大道芸だ。

私も負けてられないわね。大道芸には大道芸ってね。

対抗心を内に秘めて、私は跳躍する――と、そこで二つの銃は縦と横に別れて十字を象った軌道から私に攻撃を放つ。だけどお生憎

様。当たってやるつもりは毛頭ない。

空中に逃げ場無し——と、ワンパターンな捉え方ならば、それは悔りかつ愚考というものだ。

だったら目に物見せてやる。

意気地を奮い立たせ、私は実行に移る。素早く四本ある尾のうち一本を伸ばし、近くの木の枝に巻き付かせて勢い良く引っ張った。

そうすれば空中にいる私の方が、木に引き寄せられるわけで。その作用により、私は銃の弾道から逸れる事となる……が、まだ終わらない。

パフォーマンスは、ここから見せ所だ。

私は木の枝に乗り移ることはせず、尻尾を巻き付けたまま振子のように一回転し、更に奥にある木の、丈夫そうな太い枝へと飛び移ってみせた。合間、空中で捻りやスピンなどのアクロバットも加えて。

そして着地後、リズムカルに振り返り、枝の上から威丈高に平賀を見下す。『どうよ!』と口で言わずとも、私の態度が挑発を示している、十分に伝わっているはずだ。

さて、感想は如何に？

「まるで猿ですね……」

あらら、まったく随分な物言いだこと……けど。

「あんたよりも、ずっとマシなパフォーマンスよ」

「あなたのよりは上品ですよ」

減らず口を……最近の退魔師は何でこう、デカイ口を叩くやつが多いのやら。まあ、生意気なのは私もだけどさ。

「やっぱりあんたとは、気が合いそうにないわね」

枝から飛び降り、着地して屈んだままの姿勢から、私は平賀を睨んだ。

「残念ですね……私はあなたに興味を抱いているのに」

肩を竦めて、あいつは鼻で笑う。

「うざいのよあんた」

対する私は一言文句をぶつけ、屈んだ姿勢から突撃を開始。その爬虫類面を今すぐぶっ飛ばして黙らせてやる——そんな気概を表に奮い立たせ、風すら切り裂く速さで地を蹴り、駆け抜ける。

「私にあんたには——」

平賀は近付かせまいと、一方は私の頭上後方へ、もう一方は自分の手前へと銃を移動させて射撃を指示。

「興味ない！」

それに臆するまでも無く、私は反復横跳び応用のステップで正面から来る弾丸を躲けていき、平賀へと距離を縮め行く。頭上から来る弾丸は軽くホップすると同時に体をスピンさせ、硬化させた四本の尻尾で弾丸を叩き付けるように弾いて対処する。

平賀の細い目が、大きく見開いた。まさか尻尾が伸縮だけでなく、硬化も可能とは思ってなかったのだろう。そんな合間に私は攻撃の間合いまで詰め寄り、炎を纏った右手の鉤爪を立て、平賀の首を目掛けて振り下ろす。

「かつ切る！」

「ちい——させません、よ！」

平賀は叫ぶと共に右腕を伸ばす。すると、スーツの袖口からグリップが飛び出た。ジェーンが持っていた鞭の、初期状態と同じ代物だ。

奴が即座に手に収めると、グリップは先端から金属を突出させ、警棒の形となる。同時に、警棒を迫り来る私の右手へと振り上げ、

私の攻撃を受け止めた。

ぶつかり合い、一瞬だけ火花が私と平賀の間で激しく散った。

「くっ！」

突如として刺すような鋭い痛みが、指先から全身へと通り抜けた。痛みから思わず眉間にしわを寄せた私だが、今は平賀をぶっ飛ばすために噛み締めて、力を入れることに意識を持って行く。

「ハアアッ！」

「ぐう——」

呻きに顔を顰める平賀。一撃を受けた反動により革靴は地面を擦り、土埃を巻き上げながら体は後方へと滑るように下がっていく。七、八メートルくらい不本意な後退りをさせられた平賀だったが、不愉快なのは奴を押し退けた私の方だった。

「ムカつくわね……」

無意識に歯軋りまでしていた。しかし苛立ちを抑える以前の問題がある。あの警棒に触れた瞬間、体中に電撃が走った事だ。

それだけじゃない。感電した時、妖気までも分散させられた。現に手に纏っていた炎は消えてしまっている。あの警棒のおかげで、必要以上の力を平賀にぶつけてやる事が出来なかった。

どうやらあの警棒には、電流だけじゃなく、妖気などの力を纏った攻撃を分散させる細工も施してあるようだ。

「防御されるだけでも腹立つのに……邪魔ね」

私は痺れる右手に軽くスナップをきかせて、少し離れた先にいる平賀を睨む。

「言いますね。こっちは必死だったのですよ。あなたの攻撃を止めるのにね。淡紅眼で対処法を見いだせなかったら、このスタンスટેイックがなかったらと思うと、ぞっとしますよ」

余裕綽々のくせによく言う……そういう割には、顔に笑みを浮かべてスタンスティックとかいう警棒を、まるでペン回しのように振り回しているじゃないか。

ふん、戦慄の域には達していないってわけ。

やはりいい好かない。けど奴は、全てのまやかしを見破り、先を見いだす力を持つ淡紅眼の持ち主を倒している。

侮ると痛い目を見るだろう。

油断は禁物……今一度、心を落ち着かせて集中しよう。何にせよ警戒するに越したことはない。

今のところ、あいつの二つの得物は仕掛けて来ないけど、先程から射程圏を維持したまま私に照準を定めている。それに、後方の木々に隠れているジェーンにも気を許してはいけない。今は平賀の裏切りで困惑しているようだけど、私を敵と見定めていることには変わりないのだしね。

さて、もう少し本気^{マジ}になってみましようかね。

気構えと共に私は、姿勢を低め、いつでも対応できるよう精神を研ぎ澄ます。

周囲に気を張り巡らせた。

「ふふ……随分と慎重ですね」
相変わらず笑みを絶やさない平賀だが、隙は見当たらない。笑顔だが、眼は笑っていないし、スタンスティックを握る手が力んでい

るのが判る。慎重なのはお互い様というわけだ。

「あんたこそね」

私も言い返す。出来るだけ奴から眼を離さずに。

「玉藻絶狐丸はいつも余裕を見せていましたが、あなたは警戒心が強いですね。双子とは思えないくらいですよ」

「知らないわよそんなこと。それに私と絶狐丸兄さんは、昔から馬が合わないしね」

ついでに烈狐丸兄さんともね。

あれは馬鹿がつくほど甘過ぎるからだけど。

「おや、仲はよろしくないわけ？ 双子なのに」

絶狐丸兄さんは昔から何を考えているか解らない妖狐だったし、兄さんの方も私が何を考えているか解らないと言っていたことがあった。

双子はお互いの気持ちを通じ合う何てよく聞くけど、あれは嘘っぱちだ。その証拠に私と絶狐丸兄さんはまったくと言って良いほど通じないのだから。

んなことよりも――

「あんたには関係ないでしょ。戦闘中にヘラヘラと――」

私はひとたび身を屈め、足腰に力を一気に加え、飛び出すように平賀へと駆け出す。

「喋ってんじゃないわよ!」

風を切る速さで間合いを詰め、炎を纏った右爪で切り裂くように薙伏せるのを試みた――が、平賀は一步後ろに下がり攻撃を逸らし、スタンスティックを私の頭へと振り下ろす。

私は頭上から迫り来る一閃をターンステップを踏んで避ける。そしてスピードを殺さず加速させた後ろ回し蹴りを、平賀のこめかみ目掛け放った。対する平賀は武器を振るった勢いに身を任せ、そのまま屈み込むことで直撃を寸前のところでかわし、そのまま足払い

の水面蹴りへと移行。片足だけの体勢だった私は、くるぶしにこの一撃を受けてしまい翻ってしまう。

だが、この程度で私はダウンするつもりはない。

視界が逆さまになり、頭を地面に叩きつけそうになったところで私は地面に手を着き、両脚を開脚させて身を逆さにしたまま螺旋を描くように回転し、平賀の右脇腹に蹴りを叩き込む。

「ぐう——」

手応えのある一撃に後退を余儀なくされた平賀は、攻撃を受けた脇腹を押さえつつ舌打ちする。

その合間に私は逆立ちの姿勢から、透かさず追撃を行う。腕の力で飛び跳ね、宙に舞い上がり、四本の尻尾の先を針のように鋭く硬化させ、空中から平賀を貫くために突き放つ。

更に三日月を描くような変則的な動きも加えて翻弄を試みたが、平賀は難なくスティックで尻尾を四方に受け流す。おかげで私の四本の尻尾は、平賀ではなく地面深くへと突き刺さってしまう——が、これが本当の狙いだ。

尻尾を通して感電するのは嫌だったのだが、死ぬ程の電流ではないから大丈夫。ここは敢えて受けてやる。

だけど、仕返しは数倍痛いわよ——

この刹那、私は尻尾をより深く地面に食い込ませ、中でくの字に曲げて外れないよう硬化させて固定する。

そして地面から出ている部分はゴムのように軟化させ、一気に縮ませるように腰に力を入れる、すると引力により、宙にいる私の体は勢いよく尻尾が刺さっている方角、つまり平賀の方へと放たれるように引き寄せられるわけだ。

私はその勢いに身を任せ、突撃を仕掛けた。

まさかこんな単純で特攻じみたやり方で来るとは思っていなかったのだろう。『この程度か?』と少々嘲りの笑みを浮かべる平賀だったが、その表情はすぐに驚愕へと変わる。

「な——」

平賀は『そんな馬鹿な!』とでも言いたげな顔で声を漏らした。

ようやく気が付いたみたいね。私が尻尾で突いてきた本当の理由を。

今の平賀に逃げ場はない。何故なら、受け流した四本の尻尾は、自分を囲むように地面へと食い込んでいるのだから。

更に後方二メートル先には大木があり、枝も邪魔で飛んでかわすのも不可能。

何よりもこの瞬間では、跳躍動作が間に合わないし、私の尻尾を切り裂いて横に逃げている時間もない。つまりは八方塞がり。

そう、尻尾は追い詰めるための罠であり、全てはこの一撃に繋げるための伏線だ。

気づいた頃には、手遅れよ。

「死ねっ!」

加速に身を任せて、私は平賀の胸部を目掛け、渦巻く風を纏った掌底を繰り出す。これはまずいと平賀は表情を強張せつつも、辛うじてスタンスティックで防御を成立させた——けど。

「悪いわね……」

「な、何っ!」

次の瞬間、気流の波が溢れ出すと疾風が巻き起こり、平賀の体は弾けるように吹き飛んだ。

「受け止めるのは無理なのよ」

生半可な防御では受け切れない。

この技は打撃だけではなく、風の力も加えて吹き飛ばす技。名は

風波掌ふうはしょうと言う、私が四百年も前に編み出した技だ。

本来は幻影乱舞などで攪乱しつつ使うのだが、生憎平賀の淡紅眼には幻術が効かない。だから今回は単発型で、それともかなりの容量の力を込めて放った。

つまりは渾身の一撃。スタンスティックがどれだけ威力を分散させようが、大ダメージは必至である。

「ぐああっ！」

吹き飛ばされた平賀は、勢い良く大木に背中から打ち付けられ、初めて悲鳴を上げた。

そして呻きを漏らしつつ、半分折れ掛かった大木に背中を預け、腰からずり落ちる。衝撃の拍子にヒラヒラと落ちる葉っぱが頭や肩に被さっていく。

同時に、私に照準を定めて浮遊していた二つの銃も、力無く地へと落ちた。

僅かに沈黙が支配するも、それは私の嘲笑が破る。

「くくく――」

やはり嫌味な奴をぶっ飛ばすのは爽快だ。

愉快的な気持ちを抑えることなく、私は声色なまめかしく、無様にうなだれた平賀に言っただけだった。

「なかなか良い声で鳴くじゃない、あんた」

第十七話『願望』

「すごい……」

ジェーンの眩きが私の耳に入った。

林の方に目をやると、私達の戦いに釘付けの様子で彼女がこちらを眺めているのが見えた。

それにしても――

「ずいぶんと、のん気なものね」

「え……」

私か平賀、どっちが勝っても自分に得は無いつていうのに。

「さっさと逃げたらどうなの？」

「なっ……。ふ、ふざけるな！ お前を倒すために私はいるんだ。敵前逃亡なんてしてたまるか！」

いきり立ったジェーンは、林から一步前に踏み出して握り拳を私に向けてかざし、力強く叫んだ。だけどその割には声が震えているし、ちよっぴりへっぴり腰な様子。無理に強がっているのが判るから、なんだか見てて笑える。

「ふざけてんのはあんたでしょうが。どこの軍人の真似よ、それ」

「う、うるさい！ それに、仮に逃げようとして背中を見せたら、お前攻撃とかするつもりなんだろう！」

「よく解ったわね」

「ええっ！」

悪戯な笑みで頷いて見せると、『本当にそのつもりだったの！』とツツコミたそうに顔をひきつらせ、一歩だけ後退ったジェーン。リアクションが大袈裟なのも面白いわね。

もうちよつとだけからかってみようか？

「冗談よ。あんたのような雑魚にいちいち構うわけじゃないでしょう」
「んなっ！」

「ほら、さっさと失せなさいよ、しっしっ」

「この性悪女。人を野良猫みたいに……」

一瞬でも怯んだ気恥ずかしさと、からかわれて舐められている悔しさからか、顔を真っ赤にさせてジェーンは私を憎らしげに睨むが――

「ん？ 私は蠅のつもりで言ったんだけど」

彼女の憤りなどお構いなしに、私は馬鹿にした口調でもう一度追いつかぬように手首を振るって見た――と、ここで遂に彼女は爆発した。

「ぐぬぬ、コケにしてえ！」

今にも頭から蒸気を噴き出してしまいそうな怒りの形相で、ずかずかと荒い足取りでこちらへと近づいてくるジェーン。

「ぶっ倒す！」

さっきまで弱腰だったのに、もう闘争心が芽生えている。なんて言うか、コロコロ変わって本当に面白いわね。

でも、今はこの女の相手をしている場合じゃない。だから、私は右手を前に出して『止まれ』と意思表示を示す。

「悪いけど、こいつとの決着がまだ着いてないのよ」

「え？」

「あんたも、いつまでそうしてるわけ？」

解りきつてはいるも、敢えて私は後ろを振り返った。

ジェーンも気付いたのか、ピタリと足を止めて驚きに眉を顰めた。

「平賀……！」

そう、平賀はまだ気絶すらしていない。あれだけ勢いよく背中から大木に叩き付けられたのに、意識は断たれていなかった。

ぐったりと腰を落としたままだから、うなだれた顔を私に仰ぐ。見ると今の表情は先ほどまでの笑顔とは打って変わり固い。

「淡紅眼が……、何故」

忌々しげな面立ちで、平賀は呟いた。今の自分の有様が納得できずにいるようだ。

「淡紅眼が役に立たなかったのが、そんなに意外かしら？」

黙したままで、相変わらずの細い目をこちらに向ける平賀。視線から、疑問を私に投げかけているのが感じとれる。

「教えてあげましょうか？ 淡紅眼の弱点を――」

淡紅眼は瞬間的に相手の過去や未来を写し出し、幻覚を見破り本質を見極める力がある。

平賀がビジョンなどと勝手に命名しているこの力だが、意外と多くの落とし穴が隠れているものだ。

その落とし穴の一つが、あくまでも瞬間的にしか発動できないこと。

いくら脳裏に先の光景を写し出せるとしても、それは未来の光景を写し出した写真の一枚一枚がパツパツと浮かび上がる程度だ。

つまり長い先読みができない。瞬間的に写し出される分、見極めるにしても一手、二手くらい。

それに、解っていても体が反応できないのでは意味がない。本来の持ち主である狼、悠の身体能力だからこそ相性が良いわけであって、人間の平賀には狼以上の機敏な動きや反応はできるわけがない。だから最後に放った三手目に当たる風波掌も対処できなかったわけだ。

とは言っても。例え解ったとして、あの状況とタイミングで防げる代物じゃない。だからこそその風波掌であるけどね。

さて、話を戻して落とし穴の二つ目。これが私の尻尾の包囲を見破れなかった理由でもある。

これは淡紅眼の本当の持ち主だった狼、悠自身がもっともよく解っていた最大の弱点。淡紅眼の効果範囲――つまり視界だ。

いかに見極めるやら、予知をするやらにしても、その効果を生み出すための対象が視界に入っていないんじゃないだろうもない。

だから平賀は私との格闘中、後ろの木に追い詰められていたことに気付かなかったし、私が突撃して来るのを淡紅眼で読めてても、受け流した尻尾の位置やその狙いを見破れなかった。

「ま、すべては淡紅眼の力をしっかり把握して使いこなせていなかったあんたのミス」

「そして、的確に弱点を突いたあなたの作戦勝ちと言うわけですか。なるほど、流石ですね」

ふらつきながらも立ち上がりこちらを睨む平賀。私は胸元で両腕を組みながら横目で流すような一瞥で返し、話を続けた。

こればかりは言ってるやりたいと思っただけのことがあるから――
「それにね、落とし穴は別にあるのよ。もっとも大きな落とし穴がね……」

私の言葉に、平賀は怪訝そうに細い眉をしかめる。

ふん……まだ解んないの？

軽く嘲りの溜め息をついて、私は答えてやった。

「もっとも大きな落とし穴……私に決まってるでしょ」

私は過去に本来の持ち主から淡紅眼について教えてもらっているのだ。

「あいつをよく知っている私が、あんたより弱点を知らないわけないじゃないの。ばーか」

あまりにも突飛な答えだったのか、開いた口が塞がらないでいる平賀。

そんな奴に私はファックサインを突き出して、出来るだけ見下した目線を送ってやった。

すると平賀の顔から笑みが消え、こめかみから青筋が浮かび上がり爬虫類顔が僅かに怒りを表す——かと期待していたのだが、反応は意外にも予想と反していた。

「ふふ……くくくく」

笑っている。肩を揺らし、さぞ楽しそうに唇を三日月に歪めて。

「頭でも打って、おつむのネジ外れた……？」

これで『たりらりらーん』とでも口走るなら面白いのだけど、まさか本当には言わないわよね？

呆れと怪訝を抱いた私の意思などお構いなしに、平賀は右手に持っている“く”の字にねじ曲がったスタンスティックを投げ捨てる、好奇の目をこちらに向けた。

「相手をコケにするその態度、申し分のない実力……、やはり玉藻三天狐はこうでなくては」

話す合間にサングラスを懷から取り出して掛ける。そしてネクタイを締め直し、左手の袖からもう一つのスタンスティックを取り出すと、胸の高さで水平に構えた。

「懐かしいですよ。絶狐丸と烈狐丸、彼らと出会ったあの日思い出します」

次の瞬間、スタンスティックが眩い雷光を放ち、激しく雷鳴を轟かせる。

「うっ！」

私の後ろからジェーラの呻き声が聴こえた。おそらくスタンスティックの雷電に威喝され、眩しさから腕で顔を覆い怯んでいるのだろう。だけど、私は眼を背けない。その隙を突かれてしまったのは元も子もないからだ。

「私は紅蓮ではエリートでしてね。退魔師はおろか、並みの妖怪ですら私に膝をつかせる相手はいなかった」

粗暴に火花を散らし、電流を迸らせるスタンスティックを私に向

けて、平賀は語る。

「しかし今から二年前、私はある上級妖怪を捕獲する任務で現地向かい。玉藻絶狐丸と出会いました——ねっ！」

吐き捨てるように、平賀は勢いよく一步踏み込むと、サイドスロ―（横手投げ）でスタンスティックをこちらにぶん投げた。

飛んでくる奴の獲物は回転を繰り返すにつれて電圧を強め、激しく発光する。電流を纏い円形に回転するその様は、まるで稲妻の光輪だ。

速い——それにこの質量は危険だ。光我が私に使った雷龍爪と同じくらいの威圧感だ。

予想以上の脅威が、私の内にある危機感をあおり立て、回避を急かせる。

「く、それで——絶狐丸兄さんに完膚無きまでに叩きのめされたってわけ？」

「ええ、そうです」

寸前のところ、どうにか屈んで避け、私は平賀に言葉を返す。過ぎ去ったスタンスティックを眼で追うと、その脅威がジェーンにも迫っているのが見えた。

「しゃがめ馬鹿！」

人間である彼女が直撃したらバラバラになるのは必至だ。他人事なのだが、目をぱちくりさせてあまりにも呆けた表情だったので、思わず怒鳴ってしまった。

「へ——うわっ！」

気づいたジェーンも慌てて屈み込む——と言うより、正確には後退った際に転がっている木の枝を踏んでしまい。バランスを崩して尻餅をついただけなんだけど。

とはいえ、不幸中の幸いか、光輪は頭スレスレで浮上して通り過ぎ、間一髪で彼女は難を逃れた。

「あ、危なかった……」

へなへなと脱力してジェーンは呟く。あの様子から、腰が抜けたのだと思う。

あのままぼけーっと突っ立っていたら、首ちょんぱだったわね。何て言うか、見てて危なっかしい。まったく。何で私が他人事でヒヤヒヤしてんだか……

「私が選んだよりすぐりの優秀な部下達は瞬殺され、私自身は左目をえぐり取られました」

そんな私のどうでも良いはずの懸念など余所に、平賀は話を続けている。しかし、私にだけ視線を向けているところを見ると、やはりジェーンのことなど眼中に無いみたいだ。

やっぱり気に入らないわね、こいつ。

それにしても左目か——淡紅眼を移植した経緯が少しだけ分かってきた。

「両手足をへし折られ、弄ばれ、トドメを刺されそうになったところ、玉藻烈狐丸が現れ、彼に救われましてね……」

相変わらずのしたり顔ではあるも、平賀の声のトーンは低くなっている。そして寸刻の間を置いて、歯軋りを立てると再度語り出した。

「屈辱でしたよ。あそこまでコケにされたのはね……、絶狐丸からは圧倒的な力の差を思い知らされ。倒すべき妖怪であるはずの烈狐丸には助けられてしまう始末。心身共にズタズタにされましたよ」
平賀は胸元で右拳を握り締めると、今度はぐいっと引く動作を行う。同時に、後ろから嫌な気配を感じた。

「ですが……。それ以上に、私は魅了された」
後ろを振り返ってみると、案の定スタンスティックは私に來襲してきていた。

「ちい——！」

紙一重——跳躍がコンマ一秒でも遅れていたら、足首を切断され

ていたかも。

「玉藻三天狐の強さに、美しさに惹かれた！」

そう強調した声を高らかに上げ、平賀は空中にいる私へと左手を翳^{かざ}した。

「なっ！」

次の瞬間、私の体から重力が消えた。比喻とかではなく、本当に体が宙に浮いてしまっている。可能性の予測はしていたけど、まさかこのタイミングで私をテレキネシスで浮かすなんて。

「烈狐丸対絶狐丸。彼らの戦いは言い表すならば一つの芸術。大地を砕き、雷雲は瞬く間に晴れ、世界が歓喜に震えたかのような、それでいて何者の介入も許さない空間を作り上げ、激しくぶつかり合う。白銀に美しく輝く二体の天狐！」

平賀が両腕を交差させると、私の体は胸から勢いよく右側へと引っ張られた。

その辺の木々や地面に叩き付けるつもりなのだろうかと思っていた。けど“あれ”が視界に入った時、その考えが浅はかだったと気付かされた。

正面からこちらに飛んでくる光。あれは、スタンスティック——マズい！

あれと私をぶつける気だ。まともに身動きも取れないこの状態で当たったら、致命傷は避けられない。

「あの戦いを目の当たりにした日から、私の頭から玉藻三天狐が離れない。あの日から、私は望んだ。伝説の玉藻三天狐を倒したい、超えたい。それを私の誇りにしたいと！」

だんだん距離が縮まっていく、来る。稲妻の光輪が——

「まずは、あなたからだ……玉藻美狐！」
「っ！」

狂喜に顔を歪ませ平賀が叫んだ時、紫色の光が私の視界を覆い尽くした……

第十八話『幻惑の炎』

「ちい……」

空気が静寂へと沈んでいくなか、額に手を当てて、口惜しげに平賀は舌打ちする。合間、後ろにふらりと身体が崩れそうになるも、踵へと体重を移し踏み止まった。

こめかみから脂汗が滲み出ていることから、体力を消耗しているのが解る。しかし、それでも奴の表情は不敵に微笑んでいた。

何故なら、その苦痛に苛まれるだけの収穫があったからだ。

「やってくれんじゃないの……この糞餓鬼が」

悪態をつかずにはいられない。思うよりも先に、私は平賀を一目睨んで、心に抱いた憤りを鋭く発していた。

顔だけを横に向けてジェーンの方を見やると、彼女が青ざめた顔でたじろいでいるのが目に映った。原因は、その足下に転がっている腕。私の右腕だ。

斬れ先から色濃く鮮血を噴き出し、血の池を作り出していた。私の右脇腹と二の腕からも、血は止め処なく切り口と切断部から溢れ出ている。

まさか、ここまでやられるとは思ってもみなかった。

平賀のスタンスティックが私に直撃する直前。私は光我との戦闘の時よりも大量の妖気を瞬発的に放ち、奴のテレキネシスの束縛を強引に破った。

念力の類は念じることで起こす力であるが故に、必ず身体の内部主に脳への負担が掛かる。平賀のテレキネシスというのも例外じゃない。

さらに思い浮かべてみると、平賀は物体を二つしか操っていない。最初は二つの銃。次にスタンスティックと私だ。

私を浮かせた時に限っては、いちいち手を出す動作まで行ったことから、質量と数の制限もそれなりにあるとみた。

だとすれば、私を無理やり浮かせて動かすには、通常よりも倍の力を念ずる必要があったのだろうし、その分だけ破られた際の、奴の念力を介して脳へと流し込んだ妖気の反動、つまりダメージはかなり大きいはず——その咄嗟によぎった閃きをいざ実行してみれば、結果はまさに重畳ちようじようの至り。

先程でも話した通り、平賀は頭痛に苛まれたように苦しみ、テレキネシスによる拘束も解除された訳だ。

とはいえ、破ったには破ったけれど、平賀よりも私の方が大きな痛手を被ったことには違いない。

拘束を破った後、どうにか腰を捻って迫り来るスティックをかわすことにより、胴体切断は辛うじて免れた。けど、代わりにこの有り様だ——

「まったく……」

痛いわね、本当に。私じゃなかったら、無様に地べたを転がって悶え苦しんでいるわよ……

こんな傷を負うことは、今日が初めてじゃない。生きてきた時代も時代だったし、戦いに巻き込まれることも非常に多かったから、身体の負傷や部位切断の経験なんていくらでもある。

酷い時など、体の随所を骨折して今よりも深い傷も負った状態で、多勢に囲まれた死地を一人で切り抜けたものだ。

ああ、そういえば確か、あの時は毒にもかかってたっけ？

がむしやらだったからどう脱したかはあまり覚えてはいないけど、今思えばよく生き残れたものね、私。

懐かしい記憶を浮かべながらも、私は腰の尻尾のうち一尾を素早く、そしてきつく右の二の腕に巻き付け、止血を行う。脇腹の方は、赤マント戦でも使った自己再生を発現させて塞いだ。

にしても、自己再生なんて自分で名付けておいてなんだけど、能力を発現すると疲れは取れるどころか、妖力の消費で疲労してしまうつてのも考えものだ。

それに、切れた腕をトカゲの尻尾みたいに生やせはしないってのもね——後で回収してくつつけるしかないわね、私の右腕。

それほど万能でもないこの能力に少々嫌気を感じつつも、私はジエーンから平賀へと視点を切り替えた。

見れば、奴は気怠そうに猫背の姿勢で左手を額に添え、小さく呻きを漏らしてこちらを見据えていた。

サングラスをかけてはいるが、レンズ越しにもしっかり伝わってくる。悪意や闘争心に狂喜、様々な負の感情が絡み合った視線が。

「くくっ……、さすがですねえ。ですが、そんなのですか、玉藻美狐？」

息苦しそうではあるも、平賀の口元は愉快そうにつり上がっていた。

「出し惜しみしすぎなんですよ、あなたは。ジェーンとの戦いに限ってもね」

ふう、と一旦溜め息づいてから落ち着きを取り戻すと、右手を正面に掲げて中指を私に向けるように立て、くいくい引き始めた。

「彼女を適当に言いくるめてあなたとぶつけさせ、あなたの手の内を知るついでに、彼女を消してもらうはずでしたか——」

動きから意図はすぐに読めた。こちらの頭上後方で回転を止めず

浮いているスタンスティックを、引き戻しているのだと。その軌道は私に直撃するよう、後ろから襲い掛かってくる図式になっているのが、振り返らずとも判る。

「あなたは彼女を殺さなかった」

屈んでやり過ぎ、平賀へと停止せず戻っていくスタンスティックを見送りつつ、私は素早く後ろへ跳びずさり、いつでも次の回避行動が取れるよう、姿勢を低くし身構えた。

「なかなか上手いかないものです、ほんと。予定では、彼女はあなたに殺され、依頼の金は独り占めで一石二鳥のはずがね」

ほくそ笑んだ平賀は中指だけ立てた右手の掌を広げ、戻って来るスタンスティックを掴み取ろうとする形へと切り替えた。

「ま、あなたを殺した後で、彼女も始末すれば済むことですし。問題はありませんか」

スティックは次第に回転の速度を弱めていくと、吸い込まれるようにその手の中へと収まる――と、そこで平賀は空いている左手でサングラスをズラし、ジェーンを細い目つきで横目に捉えた。その嫌味を含めた視線に対し、彼女はわなわなと怒りに身を震わせていた。

「平賀……、お前は、どこまで腐っている。依頼を私情のために利用しただけじゃなく、気に入らないなどと勝手な理由で私を騙してまで始末しようなどと考えて……。依頼を承諾した時、依頼人に“困っている人々を妖魔から助けるのが退魔師”と言ったのも、嘘だったのか！」

抑えることなくジェーンは怒号を散らすも、平賀は『それがどうした』と言わんばかりに顔色を嘲笑に染め上げ、冷めた態度を見せる。まるで彼女の怒りを、より触発させるのを楽しんでいるかの様だ。

「それは嘘じゃありませんよ。妖魔を倒せば、私の退魔師としての名も上がり、お金も入りますからね」

「結局は欲じゃないか……退魔師は、人々を理不尽な悪から守るためにあるんだ！ 金なんかじゃない！ 人を守るのに見返りを求めるなんて、そんなものは正義じゃない！」

前に一歩踏み出して右手を斜めに振るい、全身で異議を唱えるジエーンだが。平賀は呆れた様子で軽く溜息づいて、首を横に振るった。

「やはり始末に終えませんか、あなたは。だから目障りなんですよ……戯言ですよそんなものは。退魔師も所詮はビジネス。結局、社会というものは金と名誉です。心とか正義感など、反吐がでますね」

言葉の最後で平賀は勝ち誇ったかのように鼻で笑うと、ズラしていたサングラスをかけ直す。

「それに、私情で退魔師をやっているのは、あなたも同じでしょう？」

平賀の棘のある言葉を聞いて、ジエーンは何故か動揺を見せる。そこから追い打ちを掛けるかのように、奴はすかさず皮肉の籠もった口調で彼女に告げた。

「ましてや、力の無いあなたには、それを語る資格はないでしょう？」

「く、うう……！」

ジエーンは何も言い返せないのか、悔しげな表情を俯けて、齒軋りを立てた。きつと心辺りがあるせいで、納得できないのに否定を訴えることができないのだ。

不甲斐ない自分にもどかしさを感じているのだろう。しかし、確かに、平賀の言っていた言葉は道理だ。間違いではない。

けど……

「気に入らない」

「……ほう」

吐き捨てるように発した私の声に気付いた平賀は、こちらに視線

を戻し、訝しそうにこちらを見定めた。

「意外でしたね。あなたもくだらない精神論などを語る口ですか？」

両腕を天秤のように広げて、理解不能と怪訝を表現する平賀に、

私は鼻で一笑してみた。

「まさか……、そんなつもりはないわよ。単にあんたのニヤケた顔が、ウザくなってきただけよ」

こいつらの論理なんてどうでもいい。けど、やっぱり平賀はコイツ氣に入らない。

「そうですか。では、そろそろ決めるとしましょうか、あなたを仕留める形でね」

「ふん……」

腹立たしいけど、コイツは強い。慢心と油断から受けたとはいえ、私にこれだけのダメージを与えた以上、認めざるを得ない。何よりも、力をより解放してしまったことが一番のミスだ。そうしなければ危機を脱せなかったとはいえ、やってしまったのには苛立ちを感じずにはいられない。

「言っておきますが。全力を出さないと私には勝てませんよ。もつとも、出したとしても、勝つのは私ですがね」

私は光我との戦いでも『飽くまでも、私は人間の姿を維持したままで勝たないといけない。これも一種の“こだわり”だ』という理由から、本来の力を解放しないようにしていた。

そう、こだわり……のつもりで解放しないでいた。しかし実のところ“こだわり”とは“制約”であり、本意は別にある。私が解放しない理由は、本来の力、“本当の自分”に戻ってはいけない身体になっているからだ。

解き放った時間がほんの僅かだったから何も起きてはいないけど、これ以降からは必ず後に響く。私の体に、魂に刻まれた、親友（あ

の娘）との“絆の痛み”が、呪いが――

だから、現状では半妖体以上の力を解放してはいけない。あくまでも、今のレベルでコイツを倒す。

「どうしました。随分と表情が深刻そうですが？」

「別に……」

何にしても、そろそろ決める必要があるわね……あの術を、発動する！

戦闘開始から、既に予定していた術式を――まさか私がやってきた今までの行動の全てが、ある術を発動するための伏線だったなどと、平賀は思いもしなかっただろうに。

発動させるための“陣”は完成している。発動するまでは何の力も持たない、地面に描かれただけの陣であるから、淡紅眼で見破れることはない。だから後は奴を上手く陣へとおびき寄せ、トリガーを引くのみ。そのトリガーとなる妖術を、今この場で使う。

「そうですか。では、先手を取らせてもらいますよ」

何にも知らない平賀は、余裕のある様子でサングラスを左の中指でクイックと押し上げた。何らかの合図というくらい、先のスタンスティックの奇襲から既に読んでいる。

生憎だけど、今の私は小さな気配も逃しはしないわ。私の空間知覚を甘く見るんじゃないわよ。

糞餓鬼が……私の左手の草原に転がっている銃で牽制することくらい、とっくにお見通しなのよ――案の定、銃は僅かに浮いてこちらへと銃口を傾けていた。

発砲のタイミングに合わせ、私は後ろへと下がり、こめかみ目掛け飛んで来た弾丸を難無く避ける。しかし、それだけでは終わらせはしない。計画の実行は、障害を消してからだ。

まずは――邪魔な“物”を取り払う！

そうして、私を狙った銃を目掛け、左手を横薙に振るった。

次の瞬間には、膨れ上がるように現れた爆炎が銃を瞬く間に包み込む。そしてまだマガジンに残っている弾薬が、熱による膨張で内部から爆発を起こし、破裂と共にパーツを飛散させ、あっという間に無残なガラクタ――否、塵カスへと変貌を遂げた。

「な、なに！」

驚愕に声を出す平賀。

避けられたことに驚いていたのではない。私が左手で薙ぎ払う仕草を見ただけで、いきなり銃が爆発したことに不可解を覚えたのだろう。だが、私は構うことなくもう一つの余っている方――そう、平賀が木に叩きつけられる際まで奴のそばにいた銃。私にぶっ飛ばされてからは、そのポイントですっと寝そべっている得物^{それ}も、同じ要領で破壊する。

「もう一つも？ バカな――何故だ。何をした！」

だんだん冷静さが薄れ、慌ただしい声を出す平賀。先程の余裕な態度とは打って変わり、右手に持つスティックを中段で水平に構え、警戒し始めた。

これで、奴の武器はスタンスティック以外は無いはずだ。

ジェーンから武器を借りるという手もあるけど、あんなやりとりの後では無理だろう。

仮にまだ隠していたとしても、この妖術を使う以上、出す暇は与えない。

「残念だったわね。不意を突けなくて……」

ネタばらしをするでしょう。

銃を爆破したのは、私の炎だ。しかし、私の左手に炎が映ることはない。代わりに、陽炎のようにゆらめく歪がこの手を纏う。

「な、なんだあれは？」

発現させた妖術は、私のオリジナル。二百年かけて完成させた、絶対幻惑の炎。

「色の無い……炎」

——名は、無色炎。むしよくえん

「そろそろ、勝たせてもらおうよ」

第十九話『私の描く未来絵図 前編』

「炎の色が、見えない……」

歪を纏う左手に注目を当て、ジェーンは驚き顔で呟いた。

「何故だ。何故淡紅眼でも実体を直視できない」

平賀に限っては、憎らしげに歯軋りを立てている。眉間にしわを寄せて、鋭い目つきで私の左手を睨んでいた。

何故、淡紅眼でも見えないって？

決まっている。

「これが、実体だからよ」

「実体……、そんな馬鹿な、有り得ない。妖気を練り上げて作り出した炎だとするならば、色を消してごまかしているだけのはず」

「悪いけど、伊達や酔狂で無色炎って名付けたわけじゃないのよ」

平賀の言いたいことは判る。この無色の炎が妖気の練り上げで生み出されたのならば、当然私の妖気の色が入り混じる。私の朱に染り、邪悪に満ちたオーラが。

淡紅眼ならば、その色を目視することが可能なのだ。

なのに、見えない。

不信任を抱かずにはいられないだろう。奴の脳裏には、疑問符ばかりが浮かび上がっているに違いない。

答えを導き出してくれる自慢の奪った眼が、謎を目の前にしておきながら、能力を発揮してくれないのだから。

「ですが、完全に見えない炎ではありません。僅かに陽炎のような歪が見えているのですからね」

歪が見えている……？

「ククク——アッハハハハッ！」

愚かしい。実に大愚だわ。

「何が、可笑しいのです」

炎を消した左手を額に添え、空を仰ぎ傲笑する私を前に、平賀はこめかみから汗を滲ませ数歩後退り、警戒心を剥き出しにする。今の私の表情は、きつと端から見れば畏怖心を抱く程、狂喜で歪んでいるのだろう。

ジェーンの方は顔色を青ざめて身が硬直している。恐怖に支配されていた。

「目を凝らせば、かわせるとでも思っているのなら……」

額に被さった掌の影から瞳を下目に覗かせて、私はこれから狩る獲物へと視線を送った。

「それは、浅はか過ぎるわよ」

「なッ——！」

私と目が合うなり、平賀は小刻みに体を震わせた——と、そこで私は左手を頭上に掲げ、指を鳴らす。

次の瞬間、平賀の足下で真っ赤な爆炎が燃え広がり、奴を襲う。だが面白くないことに、奴は咄嗟に後ろへと下がったおかげで、辛うじて火傷を負わずに済んでいた。

「これで決まれば良かったのにね」

「淡紅眼が未来を映し出していなければ、危なかったですよ」

「そう、けど、まだまだいくわよ。ほらっ、後ろ」

宣告通り私は指を鳴らし、平賀の後方で爆発を起こす。

「くっ！」

後頭部付近で発生した小さな爆発を、平賀は屈んで避け、右手に跳ぶ。しかし、今度はその移動先の手前で爆発を起こして、私は奴の逃げ道を塞ぐ。

「まだまだよ」

直撃すれば死とはいかずとも、決定的なダメージを受けてしまう。そんな何も無い所から唐突に巻き起こる爆炎に翻弄されつつも、必死にかわし続ける平賀。息は乱れ、疲労が露わになっていき、苦悶に色を滲ませていく。

原因は淡紅眼の連用による精神の負荷、そして呼吸を整える暇もない回避行動による酸欠だ。さすがの平賀も精神力と体力の両方を削られ、反撃の隙も窺えずにいるが、それは私にとって“狙い”ではなく、飽くまでも“ついで”だ。目的を達成させる念押しにしか過ぎない。

その前に平賀が何故、淡紅眼を使っても無色炎を目視できないのかを、そろそろ説明しよう。

無色炎は、わざわざ炎に迷彩効果を施したものではない。先程、無色炎を眼にした平賀は『色を消してごまかしている』と口にしていた。

平賀は気付くべきだった。自分が短絡的な見落としをしていたことに。私は最初に言ったはずだ——“実体”だと。

色素を消してごまかしていても、私の妖気の色が入り混じる。淡紅眼は私の朱に染ったオーラを見ることが出来る——だったら、見えないようにするには、どうすればいい？

単純なことだ。根元から“透明”に変えてしまえばいい。要するに無色炎とは、私自身の妖気の色を透明に切り替えた影響による代物。

奴は視点を変えてみるべきだったのだ。なのに単純な答えに気付かず、逆に難しく考えてしまっていた。

“分別過ぐれば愚に返る”とは言ったものだが、それどころか淡紅眼に頼りすぎたのが仇となり、答えすらも見失っている。

まあ、知ったところで奴に目視する手段はない。故に淡紅眼で無色炎の正体を無理に探らず、私の遠隔操作による爆炎を回避するた

め、未来予知の力を使うという選択をしたのは、中々の英断と言える。しかし、それすらも私の掌の上で踊らされているに過ぎない。

今までの近接戦闘中、私は小さく練り上げた妖気を所々に切り離し、様々なポイントに設置していた。

犬のマーキングみたいなものだ。私はこの大気中に分泌させた妖気を使い、発火現象を引き起こしていた。これが何もない所から発生していた、爆炎の正体である。

加えて今は無色炎と同様、淡紅眼による直視は不可能。この利点を率いて、平賀を目的地まで到達させるよう爆炎で誘い込むのが、作戦の第一フェイズ。

「さてと、そろそろね」

少し傾いている大木へと奴を誘導した今、第一フェイズは終了だ。

「……こ、ここはっ」

平賀は後ろを振り返り、戦慄に震えた声を漏らす。さすがに本人も気付いたようだ。この大木と立ち位置は、自分が少し前、風波掌による手痛い一撃を食らったポイントだと。

だけど、本命はまだだ。作戦は第二フェイズへと移行する。

「いくわよ、ほらっ」

左手に妖気を集束させて無色炎へと変換、そして地面へと振り上げるように放ち、平賀へ向かうように炎を這わせた。

地を突き進む無色炎は刻々と迫る。対する平賀は大木を背に身構えていた。後退は不可、この場合は右か左のどちらかに、すんでのところで避けるのが当たり前だが、生憎どちら側に身を寄せようと待っているのは地獄だ。右も左も細工は施してある。

まさに八方塞がりの逃げ場は無い状態。さあ、どうする平賀。

そのまま死を待つか？

それとも、動いて死ぬか？

どっちにしても、待つのは丸焼きだけだね。クククー——アッハハハハッ！

「フフッ」

「ん？」

不可解なことに、息を切らている平賀が、この期に及んで不敵な笑みを零した。

「もう、お遊びはお終いですよ」

そして呟き座間に右手に握り締めたスタンスティックを軽く振り下ろし、放電し始めた。その合間に私の地を這う無色炎は、奴の手前で飛び跳ね、襲い掛かる。ここで色が現れ、深紅の炎がくつきりと姿を見せた。その様は、水上の獲物に水しぶきを上げて食らいつこうとする鯨そのものだ。

今更、何をしようがもう遅い、炎に飲まれるのがオチだ。目に焼き付けて、死ぬ。

「この私とスタンスティックの力を、甘く見ないでもらおう！」

次の瞬間、平賀は異様な行動に出た。

火花を散らすほど激しく放電させたスタンスティックを、正面に突き出して構えたのだ——すると先端を中心に、渦状に電気が広がり、平賀を包み込んで球体と化した。

炎が奴を飲み込んだのは、ちょうど青白い光の球体が完成した直後だった。

平賀を飲み込んだ炎は、そのまま後ろの大木へと当たり、激しく燃え立つ。

この時、私は気付くことができなかった。奴のアレがただの防御膜ではないことに。

一瞬のことだった。突如として、炎の中から紫色の光が飛んできたのだ。

鋭く、射抜くような、駆け抜ける胸の痛み。後に響く轟音は、まさしく雷鳴を想わせる。

気が着けば、私は大の字に倒れていた。

妙に体が焦げ臭い……、何故か体中から煙りが出ている。どうやら、ヤバいのを食らったみたいだ。

右胸を見て気付いた。スタンスティックのグリップから先の、電流が流れていた部分が突き刺さっていることに。

なるほどね……、あの光は、こいつだったわけ。

背中にまで痛覚があるってことは。そこまで突き出ているってわけね。んで、体中から出てる煙りは、感電によるもの……か。

「く、ククク——フハハハハッ！ ヒヒヒ、ヒハハハハッ！」

品のない笑い声が聞こえる。低くか細い、実に不愉快な雑音だ。にしても、ここにきて——

「や、やってくれんじやないの……」

上体を僅かながら起こして見れば、醜い爬虫類面が、燃え立つ大木を背に歓喜を上げて立っていた。スーツの片端などが僅かに焦げてはいるが、肌に火傷を負った痕は何一つ残されてない様子から、最初にスタンスティックから展開させた電撃の殻で、炎から身を防ぎきったようだ。

予想外だった。まさか、攻守両立の利いた、こんな厄介な技を使ってくるなんて。

しかし……自分の胸が少し邪魔だ。なんか上で奴が立って笑っているように見えて、無性に腹が立つ。どちらにせよ、今はのんびり寝ている場合じゃない。痛む体に入活を入れ、歯を食いしばり、私は

起き上がった。

「ははは……切り札とは、こういうところで使うものでしょう？
そう、逆転を狙う時にね」

胸に刺さった金属を引き抜く途中、平賀が愉しげに口を弾ませる。耳障りだ。喋るな。そう頭の中で毒を、口からは血を吐きつつ、私は抜き取ってから傷の治癒を行う。傷を塞いだ後は、直撃のせいで服が破けて露出した右胸を、尻尾で覆い隠した。

「しかし、残念ですね。本当なら、この一撃でバラバラになるはずでしたが、私の体力が不足していたのが、幸運でしたねえ。玉藻美狐」

話しの所々に息のもつれが見られる。笑ってはいても、青く苦悶に満ちた表情が決して演技ではないと、素人目でも明らかだ。奴にも余裕は無いのだろう。それに立ち位置もそのままだ。動き回る力は、殆ど残されて無いとみた。

ならば、勝機はまだある。

第二フェイズは終了した。そろそろ、最終フェイズに入り、決着をつけるでしょう。

「ふふふ、分かってましたよ。この大木まで追い詰めたら、次は左右のどちらかに回避行動を取らせるとね。淡紅眼が見せてくれましたよ」

なるほど、逃げ回る途中、淡紅眼で先の更に先を視たわけね。

「だから、ここで勝負に出たのです。あの技はスタンスティックが無いと使えません。そして使い物にならなくなりましたが、まだこれがあります」

グリップを投げ捨ててニヤリと唇を歪ませ、平賀はスーツの懷から拳銃を取り出し、私へと照準を定めた。

「流石に、あなたも体力は限界に近いでしょう？　ならばこれで事足りるはず」

「確かに……ね」

「ふふふ、あなたの」

「ええ、私の――」

私が虚ろに眩くと、平賀の表情に勝ち誇った笑みが浮かんだ。私の敗北宣言を聞き取ろうと、次の言葉を微笑ましい顔で待つその様は、実に――

「勝ちよ」

愉快だ。

「なっ！」

私の唇は湧き上がる感情に合わせて、三日月につり上がった。笑顔から一変し、驚愕に染まる平賀の後ろに“在る”ものを、私は突つつくように指差し、愉快的気持ちを声に乗せて発した。

「う・し・ろ」

「えっ？」

この時、後ろを振り返った平賀の表情はどんなものだったのだろうか。

多分、顔を最大にまで引きつらせていたに違いない。

それはそうだ。何せ自分の後ろに在るものは、あまりに脅威なのだから。戦慄を覚えずにはいられない。

そう、平賀の後ろにあるものは――燃え盛る大木だ。

元々、あれは平賀に当てる炎じゃない。その後ろにある木を、倒すつもりで放った炎なのだ。あの木の下部は、平賀が叩き付けられたことで僅かに傾いていた。そこに高い火力を持つ炎をぶつければ、丈夫で太い大木も――

「そうして、倒れちゃうわけよ」

あんた目掛けてね。

「う、うわあああああっ！」

大木は徐々に軋みを上げ、倒れてくる。必死の形相で離れようと駆け出す平賀だが……気付くには、遅過ぎた。

既に勢いのつく所まで倒れ掛けていたのだから。

そして、大木は完全に地に横転し、地響きを奏で、砕け散った。

「がっ！」

砕け散る大木の破片が、ぼーっとしていたジェーンの頭部にぶつかった。

「避けなさいよ。ばか……」

「は、ハラヒレほれはら——」

目を回して無骨なフラダンスを踊るジェーンを余所に、私は平賀に視点を直す。そろそろ、最終フェイズの仕上げに掛かる為に。

「そろそろ、幕引きよ」

第二十話『私の描く未来絵図 後編』

「そろそろ、幕引きよ」

真っ黒に焦げて砕け散った大木へと視線を送りつけ、私は呟いた。火の粉が風に流され散りゆく。

そんな中、大木のそばでは平賀が息を切らしつつ、地べたに腰を落としていた。

大木とは一歩ほどの差か——まったく、運が良いわね。

ペしゃんこになれば好都合だったのだが……まあいい。私の作戦フェイズは、支障なくフィナーレへ進んでいる。抜かりはない。

それに表情からして、奴の心境に余裕が無いことも読み取れる。にしても、尻餅付いた姿勢で荒々しく呼吸するその様は、なんとも——。

「無様ね」

一言、私は平賀を見下し目線で呟いた。本人の耳に届いているのかは解らない。

ただぼかんと、私を眺めていた。

沈黙の時間が、悠然と流れ出す。

風が緩やかに森を撫でゆくなか、辺りを燃やしていた移り火が、渴いた音を残して虚しく消え去っていった。

もともと私の妖気による炎だ。移り火による山火事の可能性も考慮の視野に入れ、対象外のモノに着いた火は自然消火するよう調整しておいた。故に深く気に止める必要はない。

だが、こちらを見据えている糞野郎を地獄へ叩き落とすためとはいえ、自然の一部を犠牲にしてしまったことに関しては、些か配慮が足りなかったのかもしれない。

それでも、今は勝負に徹させてもらう。

反省はその後でと心中に収め、私は決着をつけるべく、鷹揚にかまえて奴の方へ歩き出す。

「は、はははは、ハハハハハッ！」

自分の隣りにある形崩れた木を見やり、平賀は歓喜の声を出した。予想外の私の切り返しから運よく助かった――そんな安堵感を内に抑えられず、こうして表へと溢れ出てしまったのだろう。

額に手を当てて狂ったように空を仰ぎ見て笑っているが……。

「くそがあああつ！ 悪あがきを、悪あがきをしゃがってええええっ！」

やはり、次に抱く心情は屈辱か。怒りの形相で立ち上がり、平賀は怒鳴り散らした。こめかみから青筋を浮き上がらせ、歯を剥き出したまま軋りを立てる。

並みの者ならば奴の怒気に吞まれて怯むのだろうか。私からすれば、実に好い気味だ。もっと怒らせてやろうか？

「悪あがきをしているのは、あんたでしょうに」

平賀との距離を縮め行く合間、私は奴の怒声を芝居掛かりな口調で嘲弄してやった。

「許さん。絶対に許さん！」

すると力いっぱいに右手を斜めに切り、ヘビ面は悔しさを露骨に表へ出す。

ジェーンもこれが初めてなのだろう。これほど怒りを露わにする自称エリート姿を見るのは。切迫した面立ちで平賀と、奴との距離を詰めていく私を見据えていた。

――事の成り行きを懸念する眼差しで。

「ふん。だったらどうなのよ？」

奴との差は残り四メートル程。此処がベストな立ち位置だ。

ここらで私は足を止めて、豪胆な振る舞いで返事を返してやったが。それに対して平賀は、こちらを鋭く睨み付けて『黙れ!』と吼えてくる始末。

声色から憎悪、殺意が含まれているのが感じられる。

——まったく、見栄も外聞も無いわね。

あんまりの呆れに思わず溜め息が出てきたわ。何だか見てるのも不快になってきたし……私刑執行といきましようか。

「殺してやる……殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺すぶっころ——」

「耳障りよ爬虫類野郎。あんたが死ぬ」

奴の壊れたように反復する声を無理やり遮断した私は。同時に左手の親指を首もとで横に切って、返答共々に不快感を示した——が、この動きに込められている意図は、挑発だけではない。

これは、最終フェイズ移行への“合図”でもある。

大木の内部で生きていた僅かな残り火が、地面へと移り平賀を囲うように円陣を描き出す。

「こ、これは……」

危険を感じたのだろう、動揺を隠せずに慌てて平賀は陣からの脱出を試みるが、時既に遅し。

円陣に沿って回る炎は次第に勢いと回転速度を増し、巨大な火柱として立ち上る。そうして炎の防御壁は瞬く間に完成し、平賀は中へ閉じ込められる形となった。

防護術式——火陣かじんごほうえん護法円。

防護術式と名の通り、これは限定された範囲や対象を護るために使う。火の属性を付加した私オリジナルの防壁妖術だ。

いちいち陣を描かないと発動できないが、替わりに並大抵の攻撃

は、火柱に触れただけで灰にしてしまう威力を持つ。これは内側も同様であり、こうして捕獲に使うのも有効である。

「ここまでは、王手といったところかしら」

「馬鹿な、こんな術が仕掛けられていたなんて、知らなかった。淡紅眼は見せてくれなかったぞ！」

「当たり前よ。だってあんた。私が作った術式の陣に目もくれなかったでしょ？」

「じ、陣だと。そんなもの、何時描いた！」

やれやれ、馬鹿はこれだから困る——と、私は肩を竦めて挑発を演出し、炎の渦の中で困惑する間拔けに答えてやった。

「あんたがテレキネシスとかいう念力で操ってた銃で、私を追いかけ回して乱射してたの……忘れたの？」

私の問い掛けに、思い出したと平賀の眉がぴくりと動く。

「まさか、まさかあの時に！」

平賀の察する通り。あの時、私は追い掛けてくる銃から逃げるとみせて、奴の周りを駆け回って円を描いていた。

ぶっ放していた銃弾の刻んだ弾痕が、陣を描く線となっていたのだ。

「最初から、この術式で身動きを封じるのが狙いだったのよね」

こうして逃げ場を奪えば、未来予知とか見切りも関係無く、私刑に処することが出来るしね。

「最初から……だと。それなら、淡紅眼の力でこの未来を見通せたはずだ！ それに私が見た未来は、あなたが私を大木へ追い詰め、そこから——」

「だから、いちいち回りくどい戦いをしていたのよ」
愉快的気持ちのせいか、言葉の後にうっかり笑みが零れてしまった。

そんな私を見やり、平賀は有り得ないと言わんばかりの顔で、身

をふらつかせて指差す。ここらで、奴は私の作戦の全貌が読めてきたのだろう。そう、全ては――。

「まさかあなたは、この未来を悟られぬように、私を誘い込んだというのか！」

私の描く未来絵図通り、事は進んでいた。

淡紅眼が真実を映し出す目だと、平賀は最初で自慢げに言い張っていた。だが、そんなものは奴自身の過信による、空虚な戯れ言に過ぎない。

いつの世も、真実は隠蔽されるものだ。

そして未来など、変えようと思えばいくらでも変えられる。淡紅眼が見せるのは、飽くまでも『このまま行けば』の光景であり、必ずしも決定されてはいない。この最大の要点に、私は狙いを付けた。初手で奴を罠に嵌めようとしたら、その時点で未来を淡紅眼に見透かされてしまう。

ならば長期戦を行うことで、平賀の力を徐々に弱らせて行き。隙が生じたところで隠してあった、予定シナリオへの扉を開く。

それが今まで行った戦いの全てだった。

「苦労したわよ。あんたがなかなか強いし淡紅眼もウザいから、短期戦での決着は無理だったのよね」

けれど、こうして巧妙に事は運んだ。

最大のポイントは、淡紅眼の効果範囲が視界内だったということだ。

最後の大木が倒れて、平賀が仕掛けられている陣へと逃げるように仕向けられたのも。常に私を対象に定めて淡紅眼を酷使し、後ろの大木にまったく関心を抱かなかったからだ。

文字通り奴の“盲点”が、この未来を引き寄せた。

「結局は、淡紅眼をあてにし過ぎたあんたが招いた未来ってことよ」
「ぐ……だが、この術式は防御壁。私を囲んでいるということは、私を守る形にもなって——」

強気に出ていた平賀だが、語りの途中でその減らず口が開いたまま停止する。

これから自分に降りかかる脅威を、淡紅眼で知ってしまったのだろう。次第に表情が青ざめていく。

既に理解しているならば、勿体ぶる必要はない。私の脳裏に浮かぶイメージを現実にするため、そろそろ実行に移すでしょう。

「ふふっ。散々私を苛立たせた罰を、これから受けてもらおうよ」
炎を纏った左手を顔の高さで翳して、私は奴に私刑執行の判決を言い渡す。

「見せてあげるわ。私が持つ本来の炎をね」

「や、やめろ」

震えた声を発する平賀を無視して、私は体内の潜在妖力を解放し始めた。

胸の鼓動が高鳴り、身体中を血液の如く駆け巡る妖気が、ざわめき出してきた。

私の闘志に呼応し、ざわめく妖気は徐々に躍動感を高めていく。そうして抑えきれなくなってくると、朱色の妖気が旋風を模るよう放出され、私の左手の炎と共に変色を始める。

離れて私を見ているジェーンも、これからその力を味わう平賀も、解き放たれていく妖気を前に戦慄きだす。

私達兄妹は力を解放していくと、こうして特有の色へと変化を起す。

烈狐丸兄さんは太陽を司る黄金。

絶狐丸兄さんは闇を象徴する漆黒。

そして私は、この兄達とは対照的な色。満月を司り、暗雲を切り裂き煌めく“白銀”へと変わり行く。

「ハアアアア」

覇気を声に発して、私は屈むように姿勢を下げて空を仰ぎ見た。左手の白い炎は私が妖力を一点に集約するに連れて、烈しく燃え盛っていく。

攻撃の準備は完了した。後は、放つだけだ。

「ま、待ってください！ 私の負けです！ 降参しますから攻撃を、攻撃を止めてください！」

自分に戦意はもう無いと両手を振って哀願するが。命懸けの戦いで命乞いほど見苦しいものはなかりうに。

今更どう足掻こうが、知ったことではない。寧ろ、そのみっともない様をもっと見せてみると私の加虐心が燃えてくる。

許しを請う者も徹底的に虐げる。それが私のサディズムだ。

「これで――」

狙うは防壁の伸びる先。この防御壁、実は頭上はがら空きになっている。そこへ高火力の炎を放り込めば、いったいどうなるかは見当が付くだろう。

それが解っているからこそ、炎を投げ入れる姿勢に入った私へと、必死な形相で平賀は制止を訴えたが――。

「詰み”よ」

情けの間髪を容れず。私は大振りに炎を、火柱の頂を目掛け放った。

「ヤメロオオオッ！」

純白の火の粉を散らし、炎は真っ直ぐ天へと突き進んでいく。そして火柱を越える高さまで達した頃、私は左手を炎へと翳し、念力による遠隔操作で急停止させた。

上空で待機させた白い炎は、揺らめく姿から球状に変化する。

天へと突き進む火柱の先に、白銀の満月が光り輝いている幻想的な光景を前に、ジェーンは心を奪われ、平賀は恐怖に駆られていた。

「く、来るな」

空を見上げて口にする、奴の怯えた声に合わせ、私は勢い良く左手を下に振り下ろす——と、私の意思を受け入れた満月は光の残像を残し、高速で平賀に襲い掛かる。

「来るなああっ！」

火柱の内側を落ち行く白炎は、閃光を想わせる勢いで地表へとぶつかり、火柱の中心部で白色の光りを眩く放つ。遅れて、この辺一帯を轟音が劈いた。

圧倒的な光と音の蹂躪が平賀を悲痛な叫びごと飲み込み。爆炎は火柱の中で激しく暴れ回る。

防護術式は、長くは保ちそうにないわね——。

眺めていた私だったが、頃合いと読んで左手を火柱へと翳し、天へと思い切り振り上げた。

白炎は私の手の動きに従い、火柱から打ち上がり放射線の軌道を描きあげ、遂には蒼天の彼方へと煌めきを残し去っていった。

火柱の方も効力を失い。薄れゆく灯火は上風により緩やかに流される。

熱気を含んだ暖かい風が、優しく私の肌を撫でた。

「これが、私の炎術奥義——爆火閃^{ばっかせん}」

一言、呟き座間に円の形で焦土と化した陣を見やると、平賀が熱さを訴え、頭を抱えてもがき苦しんでいた。スーツの所々には焼け跡が、肌には火傷の痕が窺えた。

派手な技のわりにこの程度で済んでいるのは、奴のスーツと肌に耐熱策が施されている可能性と、私が威力を抑えたのが理由と思われる。

爆火閃を最大火力で、それも火陣護法円の中に落とさなかったら、間違いなくこの辺一帯は焼け野原と化していた。その惨事を未然に防ぐため、範囲制限と威力収縮の役割を火陣護法円に担わせた……

のだが。火陣護法円が従来の爆火閃を耐え凌ぐには無理があるため、
こうして威力の半減を図ったわけだ。

そんなおかげで平賀は灰になる運命を免れたようだが、生憎ながら私刑の時間は続いている。これからが地獄だということを、奴は
思い知るだろう。

それにさっきから、私の内で奮え立つ獰猛な野生の血が、もどかしく急かしている。

そろそろ、この欲求を、衝動を我慢するのは止めにするでしょう。
残忍な血の囁きに従い、私は素早く奴の懷まで潜り込み、その左目に親指を突っ込んだ。

目元からピュッと噴き出た血が、私の口元や頬に付着するも、構わず奥へと指を潜り込ませていく。

「ギィアアアッ！」

奥まで達したところで、私は淡紅眼を勢い良くえぐり出してやった。より苛烈な痛みを与えるには、こうする方が良いから。

ああ、興奮してきた。

肉を、骨を擦る感触が、私の中で疼く加虐心に刺激を与える。苦痛に拍車が掛かった奴の悲鳴は、不細工な金切り声を想わせる。でもそれが私にとって、最も心地良いメロディーとして耳に響く。

「目があっ！ 私の淡紅眼がああっ！」

左目を押さえこんで苦悶の声を荒げる平賀を横目に、私は淡紅眼に着いた血をペロリと一舐めして、心からの艶笑を浮かべた。

「あんたのじゃない……あいつの眼よ」

第二十一話『彼女の正義』

真夏の炎天下にも負けない熱気が、涼しかったはずの森の中を粘り気強く漂う。無色炎、火陣護法円、爆火閃という炎三昧な技の連用による影響が起こした、この場だけの温暖化。

まるで私達を囲っていると想わせる程に、周りの草木は蜃気楼の歪みで広がっている。

「ぐう、ああああアッ！」

もどかしげに頭を振り回し、しかし苦悶に左目を押さえ、呻きと共に鮮血を撒き散らす平賀。

悶絶壁地もんぜつびやくじとも形容出来るその様は、長らく観ていると恍惚に心を塗り潰されてしまいそうだ。

「まだまだ終わりじゃないわよ。そらっ」

眩きさまに炎を宿した左手で平賀の両太股を切り裂き、機動力を奪う。

追撃に尻餅をついた奴の、細く尖った顎を蹴り上げた。玉子が割れた様な効果音に、骨を打つその感触が私の爪先へと滑らかに伝う。自分が履く黒のレザーブーツを見やると、赤い液体が点々と付着していた。

蹴った際に奴の口から噴き出たのだろう。

「ふ、ふはは」

——何て、醜貌かしらね。

口から溢れんばかりの血をだらしなく顎先まで滴らせ、私から情けなく地を這って平賀は逃げる。その醜くて無骨なハイハイには、失笑を禁じ得ない。

「ひ、ヒイイイ！」

逃がすつもりはない。

数歩であっさり追いついた私は、奴の束ねられた後ろ髪を掴み取り、アキレス腱を鋭利な刃物と化した尻尾で切断。より一層の痛み

を加えてやった。

甲高い絶叫が森中を駆け巡る。大口くらいの断面積から、血は止め処なく溢れ出す。それを押さえて転げ回る爬虫類面の都合などいざ知らず。姿勢をへの字にしてうずくまった辺りで、がら空きの脇腹に集約した一発を蹴り込んだ。

右の肋骨を粉碎した時の響きと感触は、女の細腕にしか満たない枝をへし折るのにどこか似ている気がする。

「お、ごお……ああ……ッ！」

今にも目が飛び出してしまうのではと思わせるほどに見開いた平賀。奴は毒針を打ち込まれた青虫のようにピクピクと痙攣を起こし、乾いた土に血と混ざり合った涎を染み込ませた。

「まだよ、まだまだ」

これくらいじゃ足りない……それどころか、もっといたぶり尽くさないと気が晴れない。

いや、寧ろもっと暗雲に曇り、より深い闇を視界いっぱいに生み出してしまいたい。そんな気分だ。

「ほら」

右手を踏み砕く。

「ほら、ほら——」

次は左肩を足で押さえつけ踏み砕く。泣こうが喚こうがお構いなしに。

「や、やめッ！」

何度も何度も何度も踏む。地面に亀裂が走ろうが、手足が変な方向へ曲がろうと、折れようともう止められない。

「ほらほらほらほら！ もっと良い声で鳴きなさいよ！ ククク——アッハハハハッ！」

ゾクゾクする。もっと堪能しなきゃ、こいつが壊れていくのを。

苦痛と恐怖に歪んでいくのをねっ！

そうだ、闇だ——私の本質は闇であり、負の魂こそが力の源。愛別離苦は愚か、一切皆苦すら生ぬるい。阿鼻叫喚をも超える苦痛へと変えて相手に叩きつける。これこそが私が望む最大の嗜好、最低を極めたサディストの頂。

私があの子と同じく嗜虐の精神を内に秘めていること、それは否定しない。

例え自虐的思考を省いたとしてもこれは紛れもない事実だし、理性を保ちつつ野性をさらけ出したままこんなことを冷徹に行える。この時点で、やはり私は寧ろ悪狐なのだろう。

『天狐は神聖たるものだ。美狐、お前はあの子と違うと語るが、このままいけば負の闇に堕ち、いずれは邪神となる。あの子以上の悪に成りうるぞ』

『それは、稲荷大明神としての警告かしら？ 私はあるなら神々の眷属になった覚えはないわよ』

『稲荷神としての警告ではない。お前の過去を知る者としての忠告だ。お前が闇に堕ちれば悲しむ者がいることを知れ。それでも闇に堕ちるならば、せめて負の闇ではなく、全てを暖かく包む正の闇となれ』

あの男は、稲荷大明神は昔、天狐の歳となる前の私にそんな言葉を残していた……けれどもこれが自分の個性であり、本性だと自負しよう。

玉藻前そのものと一緒と思われるのは否定する……が、数千年も遠い昔から続いている略奪。更には支配、反逆を繰り返したこの血統だけは素直に認め、受け入れることにしていた。

どうせ血の宿命を受け入れるならば、あの子とは違う別次元の悪に堕ちることを望んで。

それなのに――。

『違う。あなたは本当は優しい妖狐よ。誰よりも、傷みを知っている』

――何であんたは、私をそんな奴だと思っていたのかしらね？

暴虐に飢えていた私を、腐っている私を眼に焼き付けたのに。

いえ……違うわね。私はあの娘を突き放したかったから、そうしていたのかもしれない。私とは真逆の心を持つ、太陽の化身とも想えたあの娘。彼女を前にして、私という闇が浄化されてしまいうような錯覚に見舞われた。だからこそ、彼女を頑なに拒んでいたのだと今になって思う。

けれど、あの娘は逃げなかった。

忘れられない。憂い顔で凜として私を見つめる眼差し。それでいて本当は恐いくせに、震えながらも私のために逃げなかったあの娘。彼女の澄んだ琥珀色の瞳が……。

「……」

どれくらい惚けていた？

どうしてだろうか。私の初めての親友だったあの娘を思い出した瞬間、平賀の首筋に突き立てるはずだった私の左手は、意識とは裏腹に指先が届くところで止まっていた。

光我の時もそうだ。

命を殺めようとしたら、時々あの娘の顔が鮮やかに、そしてゆらゆらと脳裏を過ぎる。

でも、私が光我が死ぬと思った際、助けに駆け出した一番の理由。

今なら何となく解る。あいつの眼が、あの娘の眼と——ッ！

銃声が思考の制止を訴え、熱い物が背中から腹を突き抜ける刺激を覚えたのは、丁度平賀の首を跳ねようとしたこの時だったと思う。お腹をさすってみれば、どろりとした生暖かい私の血が、左手に艶めかしくべたついていた。

痛い……けれど、これも高まる狂気の鎮静化の一助になっているのかもしれない。不思議にも私の心は今、ふわりとした柔らかい安堵感に包まれていた。

「もう、止めろ」

後ろを振り返った。視界に入ったのは、拳銃を両手に握り締めたジェーン・ドウ、彼女だった。

艱苦な表情を浮かべて佇んでいる。銃口からは煙を漏らし、微弱に震えながらも私に照準を定めていた。

「やり過ぎだ！ 平賀から離れる妖魔！」

怯えている。私が恐いから？

だったら……彼女の蒼い瞳に写る私の姿は何？

もっと狂おしく笑っていると思っていた。

もっと加虐に飢えた顔をしていると思っていた。

もっと病的なまでに悦で濁った眼をしていると思っていた。

けれど違っていた。彼女の瞳に写る私は、妙に穏やかな表情をしている。金色に輝く瞳は満月に負けないくらいの、曇り無き煌めきを放っていた。

これが私？

違う、違うに決まっている馬鹿らしい。一体いつからナルシストになったのよ私は？

だいたい、あいつはビビっているじゃないの。だったら——。

『美狐は、自分自身を判ってないんだよ。自分を見ようとしないうら、自分を知るのを恐れているから、そこから逃げているから判らないの。だから、自分から目を背けないで、自分をしっかり見て』

私の瞳には――美狐、あなたは どう写ってる？

「……あんたには、私がこんな風に見えていたのね」

「平賀から離れろって言ってるんだ！」

形容し難い複雑な心境から発した私の呟きなど聞こえるはずもなく、ジェーンは相変わらず言葉を繰り返していた。そういえば、あんたもこの女と同じ目つきをしていたっけ。それも、今と似た状況だった。

私があんたを狙った刺客を半殺しにして、止めを刺そうとした。

あの時、あんたもこの女と同じように止めに入ったのよね。

その行動があまりに不可解で、私は怪訝に眉を顰めてこう口にしたのを覚えている。

「理解に苦しむわね。自分を殺そうとした奴を助けようだなんて」
我知らず、昔あの娘に問い掛けたことを今、ジェーンにも私は訊ねていた。

「そんなやつでも、同じ退魔師で仲間だ！ 私は、どんなに悪人でも、死にたくないと言っている人を見殺しにはできない！」
地べたに力無く転がっている平賀を見た。虚ろな表情で『こんなところで死にたくない』と、微かに聞き取れる音量で呻いていた。

死にたくないと言う者を見殺しにはできない――あの娘も言っていたわね。

だけどこの女とあの娘では、状況はそっくりでも、立ち位置は全

く別。

「邪魔するって言うのなら、容赦はしないわよ？」

消えかけていた狂気を蘇らせ、私は妖気を体内から解放する。そして、一步一步ジェーンへと足を運び出した。

ハッと戦慄くと慌てて撃ち始めたが、弾を避けるのも面倒くさい。歩みを止めることなく、丁重に一発一発を尻尾と左手で叩き落として距離を詰めて行く。それを目の前にしても、ジェーンは後退をしなかった。人は焦り出すと判断力を失ってしまう。例えば逃げるべきだと頭では解っていても、竦動が足を絡め捕り、身動きが出来なくなるものだ。

「足が震えているわよ」

「う、うるさい！」

不安を振り払うように叫ぶのも束の間、ジェーンと私の距離は、もう一步でも踏み出せば密着出来る程にまで達していた。

銃口が私の左胸に食い込む。このまま撃てば彼女が優位に事は進むだろう。そんな思考が浮かぶはずだが、ジェーンは引き金を引かなかった。

もつとも、こちらは引いた瞬間に喉をかつ斬るつもりだが――本能的に結末を察しているのか、彼女の表情は躊躇いに汗を滲ませた。「逃げたらどうなの、今なら見逃してあげるわよ？」

お互いの視線が繋がった時、私は囁いた。嘘ではない。この女を殺す気は微塵も無いのだから。ただ、それでも戦意を示すならば、先程言った通り容赦はしない。

私の視線から全てで無いにせよ、意思は伝わっているはずだ。どれだけ汲み取ったのかは解らないが、ただ彼女は私から目を背けて俯き、そのまま黙りこくるだけだった。

永久を感じてしまう程の長い沈黙が、私とジェーンの空間を支配した。

「逃げない……」

ぽつり呟けば、顔を上げて私ともう一度目を合わせた。何故なのか、先程の迷いと怯えが嘘みたく消え失せている。

「ここで逃げたら、私は平賀の言う通り、本当のクズになってしまう」

未だに生暖かいはずの空気が、ひんやりと涼しさ取り戻した。

いや、違う。これは……寒気？

「何よりも私は、助けたいと思っている自分の気持ちに、嘘をつきたくないんだ！」

この力、この威圧感、私が出会ってきた者とはまるで質が違う。それに……何なのこれは、虹色の翼？

ジェーシンの背中から朧気に現れた翼は、少しずつだけと実体化し始めようとしている。そしてこれは霊圧と言えば良いのだろうか？ けれどこれは人の気力というより、どちらからと言えば神々の持つ、神聖な力に近いものを感じる。

変わった感覚だ。重圧とは違う。重苦しいのではなく、まるで光我や烈狐丸兄さん同様に、弾けるような激しい真っ直ぐな気迫。それでいてあの娘のように健気な目つき——何よりもこのセリフ、あの娘と全く同じだ。

「ふ、ふふふ」

まさか、二度もそのセリフを聞けるとは、思ってもみなかったわ。

「アッハハハハッ！」

「な、何だ。何がおかしい！」

「参った」

「ハッ？」

私は一旦深呼吸を行って肩の力を抜いた。そしてもう一回だけ、

今度は口調を強めて言った。

「参りました。私の負けよ」

放出していた妖気すら収めた私を、ジェーンはぼっかりと口を開いたまま見入っていた。

怪訝と呆気を入り交じらせた面立ちで。

「納得がいかないって面しているわね」

「あ、当たり前だ！ ど、どういうつもりだ！」

あんたにビビったからってのもあるけど、あの娘と重なって見えたから戦う気が失せた……何て言えるほど私は素直に本心を語れる性分ではない。だから問いには答えず、話の方向を逸らすことにした。

「敗者は勝者に従うのが道理。ま、そういう訳だからこのアホをぶっ殺すのは止めにしておくわ。こいつがまたけしかけて来るってんなら、二度目は保障しないけどね」

「何でまた……」

クイツと顎で私が後ろで不様に伸びている平賀を差して告げると、私の左胸に押し込んでいた銃を力無く下げてジェーンは聞きてくる。あちらにも戦意が失せたのか、既に背中の翼は消滅していた。

「別に、気まぐれよ。私は気分屋なの。だからやらない」

“それだけよ”と付け足し、むず痒くなった頭を掻きながら私はジェーンから背を向けて歩き出す。未だ血の水溜まりを維持している、切断された右腕も回収して。

随分と時間を喰ってしまった。とりあえず、腕は行きながらくっつければ問題ないだろう。半妖体を維持したままってのは少々面倒だけど、四の五の言ってる余裕も無いわけだし、さっさとあいつらを追わないと――。

「お、おいっ！」

そんなことを考えていた時、ジェーンに後ろから呼び止められた。

「まだ何か用？」

見れば何だかまごついた様子。言葉を探しているのか、素直になれないやんちゃ坊主みたいにもじもじと可愛らしい仕草を見せてつけて――。

「あの、その……右腕は、大丈夫なのか？」

ふざけたことをぬかした。

上目遣いを加えての余りに意外な言葉に、私は一瞬耳を疑ってしまった。

「……プッ！ アッハハハハッ！」

駄目だ、腹が痛い。只でさえ腹部は傷だらけだったのに、何て可笑しなことを口走るんだかこいつは。

腹を抱えて笑い散らす私にジェーンは、ばつが悪そうにムツとした表情を作る。

「な、なんだよ」

こっちが何なんだと訊きたいくらいだ。

「まったく、面白いわよあんた」

敵の心配をする退魔師なんて初めてだ。

けれど、こういう奴も悪くないかも。

人間も妖怪も、もう少しこんな奴が増えれば、この星も安泰なのにね。

ただ眉を顰めて、ジェーンは私を見据えていた。柄にもなく我心に呟いていた私の心中など理解出来ず、疑問符を脳裏に並べているのだろう。

そんな彼女に「じゃあね」と軽く手をひらりと振って別れの挨拶を済ませ、私はこの場を後にする。

光我達が進んだ森の奥へと向かって。

私が去り行くまでずっと、背中を撫でる彼女の視線を受けながら。

第二十二話『ピンク色な思考 前編』

木々に一つずつ×印がされた獣道。

それぞれに、微かだが白鬼の妖力がこびりついている。これがあるということは、光我達を通ったのだろう。この先にわいらの住む洞窟があると、その道順を教えるために。

「ふう、やつとくっ付いたわね」

それを辿る間に私は、切断された右腕の修復を済ませていた。

とはいえ、まだ完全に神経が繋がっていない。もう少し時間が掛かるだろうが、合流する頃には完治しているはず。

懸念することでもない。あるとすれば、わいらをあいつらがちゃんと抑えているからだ。

わいらに關しての情報は、あまりにも乏しい。私も言い伝え程度にししか聞いたことがない。しかし実体を眼にせずとも、妖気だけで一級品だと知らしめる上級妖怪なのは確かだ。

そんな妖怪を、光我と白鬼だけでどうできるのか？

出来る……と、思いはする。発展途上のレベルだが、光我と白鬼は強い。並みの妖怪が束になって掛かろうと難無く返り討ちに出来るだろう、それだけの實力は備わっている。

それに白鬼の望みは、あくまで暴走と思われるわいらの鎮静化。倒したい訳ではない。だから過度な戦闘は要求してない。私が平賀達を引き受ける際、光我と共に向かわせるのに白鬼が異論を唱えなかった理由は、そこにあると思う。

けれど……胸騒ぎがする。

『何て言うか、正気がなくて、意志が感じられなくて。思い切って言えば、“誰かに操られてる”と言った様子でした』

操られている——白鬼が口にしていたあの言葉が、どうにも引く掛かる。

仮に操られているとして、そのわいらの目的は？

工事を止めること？ 違う。それならば白鬼に注意を引かれる事は無い。工事妨害を命令されていたら、無視して現場に直行するはずだ。

それでも洗脳の可能性を差し引けない理由がある。不可解にもわいらの進行ルートが統一していることだ。

白鬼から聞いた話では、通った道を何回も往復しているらしい。この妙にパターン化された行動。にもかかわらず見境の無い破壊の矛盾は……もしや、洗脳が不完全故に暴走しているとか？

単なる憶測だけど、この可能性はあり得なくも——ッ！

「う……ぐっ！」

こ、こんな時に呪いが。やっぱり長時間の、それも許容量のラインを越えた妖力開放には、無理があったの？

早めに、この半妖体を解いておくべきだった。

「ウアアアアッ！ ぐ、うう……は、あああ」

く、苦しい。妬み、怒り、悲しみ、憎悪が——あいつらが私の心の中で、暴れている。魂を貪り尽くそうと、内側から蠢いている！

「グアアアッ！」

畜生があ——喚くな、黙れッ！ 黙れ黙れ黙れ！ 大人しく

私の中で眠っているおおッ！

「はあ——はあ——ッ！」

胸をかきむしろうと、うずくまって押さえつけようが、痛みの引く気配はまるでない。あいつらが暴れるように、私も痛みを紛らわすため、周りの木々に拳をがむしやりに振り回した。

叩き込まれた大木は、まるで手応えなく破片を飛び散らせて横転する。割り箸並みの脆さを感じた。壊すつもりで殴ってはいないの

に。

長い間、力を大きく解放する機会がなかったから、未だ感覚が掴めずにいる。制御が、利かなくなっている。

「くそ……う、アアアアッ！」

足が体を支えきれない。四つん這いの姿勢で、私は必死に痛みを堪えた。呪いの激痛から逃れる術は、今のところ人間の姿に戻るだけ……。

人間姿の私は、強力な呪術の変化によるもの——絵本などで魔法使いや神などが対象をカエルやロバなどの動物に変えたり、または自身を巨大なドラゴンへと変身させたりと描写がある。呪術の変化は、それに近い性質を持つ。

別の自分に変化する術。分かり易く言えば、これは『私がこのまま人間だったらの姿』へと変える呪い。生憎ながら私は、術式から原理まで、詳細の多くは知らない。

何故ならば、私は術を編み出した訳でも、掛ける側でもなく。掛けられた方なのだから——

私は絶狐丸兄さんと共に生を授かり、物心が付いた頃、この術を玉藻前に掛けられた。あの女の真意は不明だが、大体の予想はつく。

この変化の術は、リミッターだ。

天狐は時を経て、成長して成る姿のはず。けれど私と絶狐丸兄さんは、生まれた時から既に天狐の姿だった。

赤子の天狐、とでも言えば良いのだろうか。尻尾も、体毛も瞳の色も全て、天狐そのものだった。故に私達は、異端の天狐と呼ばれていた。

神狐計画——それはあの女が別世界の自身の存在と、未来を予期していた事に深く関係する。どういう経緯からなのか、玉藻前は既に自分の結末を知っていた。どの並行世界でも、全てが敗北の未来だと。

だからあの女は逃れる為に手を打った。自分が生き残る未来を、自分が勝利する歴史を創る為に。

その礎となるのが神狐計画。生まれた時から強大な力を持つ子を産み、自身の周りを蹴散らす破壊神に、自身の盾となる守護神に育て上げるものだった。

我が子を産む。そして育て上げる……何故、このような回りくどい方法を選んだのか、残念ながら真意は不明のままだ。あの女は最期まで語らなかった。

この計画は皮肉なことに、最初の子である烈狐丸兄さんで、脆くも亀裂が生じてしまう。父親である男が、産まれて間もない兄さんを連れ去り、数年後には烈狐丸兄さんが玉藻前の野望を阻止する障害となったからだ。

あの女も只では転ばない。事態を想定し、対策を練っていた。対、玉藻烈狐丸にも、計画の代わりにもなる二体目、玉藻絶狐丸の出産を——しかし、追い打ちを掛けるように、更なる誤算が生まれてしまう。

本来産まれるはずもなかった規格外の命。私の存在だった。

あらぬ方向へと傾く運命に、自分に最も近い存在である私の誕生に危惧の念を抱き、玉藻前は保険を掛けた。それが呪術による変化けれど呪術というだけあり、この変化には別の力も含まれていた。

それは本来持つ私の妖気、潜在能力を抑えつけ、あらゆる呪法もろとも封印するというもの——

「う……うう……あ」

唇から涎が溢れ出し、脂汗と交わってだらしなく頬を伝う。情けないことに、それを拭える気力も無い。歪曲する木々に、緑の葉がぼやけて雲と交わる青空……視界も悪い。

股の辺りで生暖かい水気が広がっていく。脱力感が体を縛り付けて、自由が利かない。痙攣を起こしている。そして未だに痛みも引かない。今の仰向けになった私のあられもない姿は、無様としか言いようがない。

「……最……悪……よ」

妖気を解放するということは、力と共に呪いも解いてしまうということ。

私の体と魂は、二つの呪いで板挟みとなっている。

力を取り戻そうとすればするほど、変化の呪いは解け、封印が効力を失い、あの娘の代わりに引き継いだ呪いが、私の魂を蝕む。

玉藻前に掛けられた忌々しい呪いが、皮肉な事に私の命をつなぎ止めてくれている。癩に障るが、この呪術には感謝せねばなるまい。

痛みが……引いてきた。

肉体が軋みを上げている。耳と尻尾に、鋭く尖る爪と歯が、徐々に引っ込んで行く。人の形へと戻る――

呪いを封印するには、何もしないこと。体中の力を抜く、妖気も解放せずに。どれだけ苦しくても。死を受け入れるかのように、痛みも羞恥心も全て飲み込んでしまえば、心地よい解放感が訪れる。

「でも……馴染めない……わね」

自尊心もズタズタに切り裂かれてしまった。誰にも見られてないのが唯一の救いか。いや、もう見られていようがどうでも良い。この脱力感、恥じらう気も、意思すらも失せてしまう。

「だからって……呑気に寝転がっても、いられないわよね」

歯を食いしばり、私は気怠い体を引き起こした。最初は足取りが悪く、何度となく転びかけるも、どうにか持ち直して歩調を取り戻す。

上半身の調子も確かめるべく、最初はゆっくりと、そして素早く機敏に動かして確認してみる。よし、問題ない。右腕の神経も既に繋がったし、傷も完治している。

平賀戦の疲労はまだ残っているけど、これなら問題ない。それに先の気怠さが嘘だと思える程、体も軽い。感覚も取り戻してきたし、体調も良好だ。

けれども……このままでは、私は弱体化を辿る一方だ。呪いをどうにかしない事には、真の力の解放もままならない。私が力を取り戻す手段として、今のところ兄さん達の力が必要だ。

一刻も早く、兄さん達の所在を突き止めなくては――

「……さてと、急がないとね」

どちらにしても、この事件をさっさと済ませて、兄さん達の所在を知っている可能性がある白鬼と、崎原から情報を得るしかない。一刻も早く事を終わらせる。それが一番の近道だ。

「美狐ちゃん！」

と、走り出そうとした私に声を掛けてきたのは――崎原亮。背後から聞こえたが、切羽詰まった声から、何やら慌てた様子。

「君の悲鳴が聞こえたから、何かあったと思って来たんだけど。大

丈夫——って！　ちょ、美狐ちゃん」

振り返った私を見るなり、崎原は顔を赤くして目を背けた。

「どうしたのよ？」

「い、いやいや、どうしたのじゃないって！　む、胸。胸ッ！」

両手を私に翳して首を振り回し、崎原は言う。

「胸？」

んん？　ああ、平賀の攻撃でシャツは胸元が破けて、右胸は完全に肌をさらけ出していたんだっけ。出血を塞ぐ為に尻尾で覆っていたけど、今は傷もすっかり塞がり、尻尾も引っ込めたから無防備。なるほど、崎原の慌て様はそういうこと。

「でも、あんたって、ウブなの？　私と風呂入ろうとしたくせに？」

「いや、あれは冗談に決まっているでしょ。美狐ちゃんにその気があったなら喜んで入るけど」

入るのかよ。何て性欲に従順なやつだ。男のそういうところは、どうにも理解できない。こいつとか、見ないよう顔を背けている振りして、ちゃっかり私の胸をさり気なく見ているし。

「あのさ、性欲を持て余す暇があるなら、シャツを脱いでくれない」「えっ！」

何故か驚く崎原。シャツを脱ぐのにそれほど抵抗があるのだろうか？

「だ、駄目だ美狐ちゃん！」

いきなり私の両肩に手を乗せて、何時になく真剣な表情を見せた。こんなになんで拒絶を示している。何があるというの？

こいつの真剣さが私にも移ってしまったのか、緊張が走った。

次の言葉を待つ私の瞳をじっと見据え、小さく溜め息を漏らすと、崎原は遂に口を開いた。

「ここでの野外プレイは、流石に危険だと思うんだ」

危険なのは、お前の腐った脳みそだ。

「死ねッ！」

金的蹴りを叩き込むと、崎原はくぐもった奇声を上げ、急所を押さえてへの字に倒れ込んだ。

「な、何故に……」

「何、勘違いしてんのよ。私が脱いでって言ったのは、着る為に決まってるでしょ」

「な、何ッ！ 俺のシャツを着けるだって？ そういうプレイが好みな——あうエイッ！」

突っ張ったままの尻に、妖気を集約した蹴りを炸裂させた。意味不明な言葉を発すると、泡を噴いて崎原は白目向く。

「いい加減にしないよ。死にたいの？」

「ま、マジで死ぬかも……」

まったく、どこまでピンク色な思考なのよ、こいつは。

「このままだとあんたも目のやり場に困るんでしょ？ だったら上着を肩に掛けてやるのがフェミニストってもんでしょうが」

「そ、それもそうだけど、美狐ちゃんも恥じらうどころか隠そうともしないから、やはりここは見るべきなんじゃないかと思ったんだ。フェミニストとして」

意味が解らない。その理屈の何処にフェミニストらしさがあるのだろうか？

「不純なだけでしょうが。フェミニズムの欠片も無いじゃないの」「判ってない。美狐ちゃんは何も判ってないぜ！」

すつくと立ち上がるなり、崎原は額に指を押し付け、やれやれと頭を振るう。判りたくもないわ。

「目の保養にもなる君のおっpusッ！」

これ以上、セクハラトークを許したら暴走しかねない。いや、既にギアが入り始めているからこそ、今すぐサイドブレーキを掛けてやるべきだろう。そんな訳で先手必勝。言い切る前にボディへ全身全霊の掌底を放った。

第二十三話『ピンク色な思考 後編』

「うう、ひどいや美狐ちゃん。俺は単に美狐ちゃんの美しさを説こうと……」

腹部をさすり、走りながらぶつくさと釈明求める崎原を、私は黙れと眼でねじ伏せた。しかしそれ以降も私が着ているぶかぶかのワイシャツを見やり、『これで下が無かったらなあ』と、変態は懲りもせず名残惜しげに愚痴を零す。

「あんたさ、自分がもし女に女性用のブラウスだけを着けてとせがまれたりしたら、嬉しい？」

「当然！ 嬉しいに決まっているっ！」

さも当たり前に言い切った。精神論を説こうとした矢先、まさか鼻から挫くとは――流石に胸張って言い切られると、異を唱える気も失せてしまう。

「……聞いた私が馬鹿だった」

もう諦めよう。こいつは末期の患者だと思って扱えば……それで良い訳ないけど、構うのも面倒臭い。

「いやいや、美狐ちゃんは馬鹿じゃないさ。俺が馬鹿なのさ」

自覚しているのなら、もう少し人としてのモラルとデリカシーを持って、馬鹿。人じゃない私より駄目ってどうよ？

「しかし、スーツの下にワイシャツ着ないと、何かスースーするね」

「何、当たり前のこと言ってるのよ。だいたいねえ、あんたのシャツ臭いのよ」

「そんなあ。出掛ける前にもちゃんとファブリーズは使ってるよ」
いや、その後であんたの体臭が染み付いてちゃ意味無いでしょ――
「そう私が言葉を返すなり崎原は沈んだ表情で『脇、臭くてすんません』と、手を重ねて謝ってきた。

やはり悪臭の原因は脇か……どうにかしたいけど、平賀戦で化粧

品を含め、ウエストバックの中身は滅茶苦茶な有り様だった。

仕方なくボロボロの上着とブラも纏めて燃やして処分したし、代わりの着替えも持ってない。ああもう、こんな事なら下着もろとも着替えを持って来るんだった。

変態の臭いと、自分の血や汗やら汚れが染み付いて異臭が酷い。本気で生理が止まりそう。もう思い切って素っ裸になりたいくらいだ。

ぶちまけたい文句は沢山あるけど、どうしようもないので我慢するしかない。とりあえず、少しでもこの憂鬱な気分を紛らわせる為此いつに今までの経緯を伝えておくか。

「なるほど、だいたい分かった。しかし美狐ちゃんも流石だね、平賀翔平を倒しちゃうんだから」

「そんなに凄い奴なの？ エリートを気取ってたけど」

訊ねる私に、崎原は珍しく神妙な面立ちで頷く。

「聞いた話なんだけどさ、あいつは七年前に中国で成体の麒麟きりんを捕獲したことがあるらしいよ。しかも一人で、自身は無傷でね」

麒麟——それは中国古代から存在する神獣とも、聖獣とも呼ばれる生物。

容姿は確か……体は鹿、尾は牛、ひづめは馬、額は狼を象り、頭には肉に包まれた一本の角がある。更に黄色の体毛とその背には五彩の毛を生やすと聞く。普段は非常に穏やかで優しく、足元の虫や植物を踏むことさえ恐れるほど殺生を嫌う性質を持つ。

その鳴声は音階に一致し、歩いた跡は正確な円になり、曲がる時は直角に曲がるのだと。

実際にその力は凄まじいと聞く。怒り狂った麒麟が村一つを消滅させたという伝説を、知り合いの土地神が熱心に語っていたのを覚えてる。そんな大物をあいつが捕獲するとは……なるほど、エリ

ートを自称するだけの実績、技量を持ち合わせている訳だ。

ま、結局は私に惨敗したけどね。

あの無様な姿を思い返すと、笑いが込み上げてくる。こちらを見て訝しがる崎原に笑みを隠すことなく、私はふと思った疑問を問い掛けた。

「んで、あいつが捕まえたって聳孤か炎駒？ それとも索冥か角端かしら？」

麒麟とはいえ、土地神じこじんの伝説（戯言）並みに強いやつと戦ったとも限らないだろう。ま、今挙げた種類を捕まえたなら感心するけど。「え、なにそれ？」

「なにそれって、あんたね……」

こいつ……本当に退魔師なの？ まさか麒麟に雌雄の区別があるのも、全く知らないとか言うんじゃないでしょうね？

流石に疑わしく思えてきた。考えてみれば、この男には謎が多い。退魔師のくせに妖怪や神獣などに関する事柄の妙なところを知らないし。私ですら警戒を抱く威圧感を、時折だけで見せ付ける。そして掴み所のない、雲を連想させる個性。

得体の知れないもどかしさが、どうにも苦手意識を芽生えさせる。どうしてもこいつとは波長が合わない。こいつにとって当たり前な味覚が、私には苦味となる。

安易に飲み込める質じゃないのよね、私は――

もう少し、こいつの事が解れば接しようもあるってのに……って、何でこいつとの付き合い方を考えているんだか。

けれど光我といい、ジェーンといい、近頃は念頭を離れない人間が増えてきた。思えば、崎原の明るく奔放なところは何となくあの娘にそっくりで。ジェーンの信念は、あの娘の意志と重なる。

そして光我は、昔の私とよく似ている。周りを見ようともせず、突っ走ろうともせず妄執にとらわれて、暴力に餓えて自棄になって

いた頃の私に。

こいつらが気に掛かってしまうのは、過去に置いて来てしまった“思い出”と、現在^{いま}もみつともなく引きずり込んでいる“咎”と被るから……なのかもしれない。

「美狐ちゃん。どうしたの？」

「……別に」

「そう？ 何か思い詰めた感じだったよ」

心配そうに見詰める崎原だが、白鬼の時も然り、やはり誰かに氣遣われるのは好ましくない。余計な親切、大きなお世話。現在^{いま}になっても煩わしく感じてしまう。だから私は『何でもない』と、押しのける気持ちで声を強め、言葉を返す——と、ここで私達は足を止めた。

目的地に着いたのもあるが、もう一つは洞窟の光景に問題があったからだ。

「酷い有り様だねえ……」

「みたいね」

わいらが暴れ出したのだろう。崎原の言うとおり、酷い有り様だ。入口が半壊して半分は瓦礫に埋まっており、その付近も滅茶苦茶に荒らされている。地は抉れ、人の胴よりも遥かに太い木が、幾つも無惨にへし折られていた。荒らされたポイント全てに妖氣がこびり付いている。わいらの妖氣が。

「……美狐さん」

岩影から、かすれ声が私を呼ぶ。聞き覚えがある、子供の声。そう、白鬼の声だ。見れば岩に背を預けて、ぐったりと腰を下ろしていた。眉間から血が流れ、頬には擦過傷が痛ましく刻まれている。

大凡の見当は付くが、事の顛末を知るに越したことはない。

「何があったの？」

私は問い掛けてみた。するとうなだれていた頭を仰ぎ、弱々しげな瞳をこちらに向けて白鬼は語り出す。

「わいらが、わいらが工事の方へと向かってしまいました」

目で南西を、石岡達がいる作業場を差す。見れば樹木が方角に沿って、根こそぎ倒されている。わいらがまっすぐ進んだのが窺える。厄介だ。大木を薙ぎ倒して蹴散らす程の怪物が作業場に突っ込んだりしたら、どういう結果になるのかは目に見えている。深刻な被害及び死傷者が出るのは確実だ。

「光我さんが今もわいらと戦っているはずです。僕は見てのとおりこの有り様で……」

その先を口に告げるのも歯痒いのか、白鬼は瞼を伏せて悔しげに俯いた。自分が力不足だということを痛感しているのだろう。歯を噛み締めて、握り拳を震わせている。

「光我の奴。無茶しなけりゃいんだがなあ。よし、急ごう。美狐ちゃん」

懸念を呟き頭を搔くと、崎原は行動を開始するが。その前にやることがある。

「ちょっと待ちなさい」

私は崎原のスーツの襟首を掴んで制止を掛けた。走り出した瞬間に掴まれてしまったからか、締め上げられる形となり、崎原は喉から奇妙な呻きを漏らしてひっくり返った。

「な、なにすんの美狐ちゃん！」

咳き込みながら、馬鹿は下から恨めしげな目線を送りつけるが、知ったことではない。それよりも――

「まずは白鬼の介抱と、私の服の問題が先よ」

「後者がおかしくない？ 優先順位に入れるのはおかしくない？」

「うるさいわね、あんたのシャツが臭くてたまらないのよ。おっさん臭くて」

涙目で『おっさん臭い……』と、跪く崎原を無視して、私は白鬼へと向きを替えた。

「と、いうわけだから白鬼。あんたの服を借りるわよ。脱ぎなさい」
少なくとも、白鬼の山伏装束の方がマシだ。わいらとの戦いで少々破けているようだけど、悪臭はしないし素材も良い分、着心地は良さそうだ。そういう訳で服を寄越せと命令したのだが。

「えっ！　ぬ、脱いでって。そ、そんな、美狐さんが実はシヨタコンだったなんて」

何をどう聞けば、そういう答えに行き着く？

「あんた。頭大丈夫？」

「だ、駄目ですよ野外プレイだなんて！　それも人前でだなんて」

「ちよつと……」

「そ、それに僕もいきなりだと心の準備が」

こいつの脳みそもピンク色か。それともわいらとの戦いで頭を強く打ち付けてしまい。それが原因で、思考がショートしているのだろうか？

出来れば後者であってほしい。

親近感を得たのか、私の後ろで崎原が『仲間だ！』とでも言い表すかのように、サムズアップサインで爽やかな笑顔を浮かべていた。とりあえずウザいから、鼻先に裏拳を叩き込んでおく。再度奇妙な呻きを上げて、変態は後頭部から岩盤に突っ込んで岩に埋もれた。

「そ、それでも美狐さんが良いと言うのなら……」

自業自得とはいえ悲惨な目にあっている崎原など眼中に無く、白鬼は照れくさそうに山伏装束の帯を緩め、半分だけ右肩をはだけさせた。

唇を手で覆い、白鬼は言った。

「初めてなので……優しくしてくださいね」

語尾にハートマークでも付いてしまいそうな艶めかしい声で、な

よなよしく白鬼は寝そべる。雪の結晶みたく煌めく白髪と、ミルクプリンのように艶やかで柔らかそうな肌が、うなじが、嫌に目を引く。紅いつぶらな瞳を潤ませ、懐いた子猫みたいな媚びた眼差しには、怖気が走る。様になっているから余計に質が悪い。

「脱げッ！」

さっさと剥ぎ取って着替えよう——そう襟を掴んだら。

「いやああん！ 美狐さんのエッチイイ！」

こいつ……もう頭にきた。

「そう、死にたいのね。あんた」

もういい、もう十分。これ以上語ることは無い。私は有無言わずに白鬼の両足を掴み上げた。

「ギアアアアッ！ や、やめ、やめてください美狐さん！ ちょっと魔がさしたただけなんです！ ちょっ——電気按摩は——殆どでんきあんまの生物に有効のおおっ！ 必殺技ああッ！」

数分後。

「や、優しくしてって言ったのに……ガク」

一滴の涙を零し、白鬼は意識を失った。心なしか、ふんどし一丁で大の字に果てた白鬼の表情はどこか満足げだ。鼻血をぽたぽた垂らす崎原が羨ましそうに見ていたが、その興味はあっさりと私の方に向く。

「エクセレントッ！」

山伏装束へと着替える為に脱いだ私の裸体を見るなり、変態はまたもやサムズアップサインと爽やかスマイルを浮かべた。今度はより鼻血を噴き出すというオプション付きだ。黒のビジネススーツがより深紅に染まっているわよ。この馬鹿。

「ううむ。美狐ちゃんって何を着ても似合うねえ。今度は巫女服も着てみてよ。美狐ちゃんだけに似合うよきつと」

鼻血を垂らしながら、腕を前に組んで変態はシックに笑う。目が妖しげな輝きを放っている。いくらイケメンでも、これは誰もが『うわあ……』と引いてしまうだろうキモ面だ。それにしても私の名前と巫女服を掛けるとか、本当に馬鹿じゃないの。

「おっさんから“おやじ”に降格ね」

「おやじッ！　ちよっ、巫女と美狐ちゃんを掛けたのが原因？　てゆうか降格なの！　妻子いそうなのに、おっさんより格下なのッ！」
「おやじギャグはおやじ同士でかましとけば良いわ。とゆうか近寄らないでくれない。おやじ菌が移るから、呼吸も止めて。空気が汚れる、環境汚染よ」

煙たげに手で払う動作を見せ付けてやると、崎原は目元から大量の涙を流す。

「あら、嬉しいのね。流石はフェミニストにして変態。罵られるのが好きなのね」

「鬼だよ美狐ちゃん。鬼すぎる」

「鬼じゃない。狐よ」

軽く鼻で笑ってやると、流石に堪えたのか変態は憂鬱に沈む。もつと虐めてやりたいが、今はそんなことをしている場合じゃない。先にも言った通り、白鬼の介抱が先だ。

「わいらを追いかけるにしても、白鬼はこんな状態だしね」

「トドメを刺したの美狐ちゃんだよね？」

「口は禍わざわいのもtotっていうわよ？」

「すみません」

睨めば声のトーンを頭と共に下げて変態は謝るが、それはもういい。今はとつとと行動を開始しなければならない。ここは二手に分かれるのが一番だ。役割分担は既に決まっている。

「私がわいらを追う。あんたは白鬼の介抱と、周辺の作業員の避難を済ませてから来て」

妖怪の保護は支魔の仕事だし、何よりも私なんかより崎原の方が作業員達に話を通しやすい。この状況で最も適している役割だ。私の方は、今の状態では多少手こずるだろう。けど、ちょうど良いハシデだ。問題はない。わいらの相手は私がする。

「わかったよ。くれぐれも油断はしないようにね」

白鬼を背負い、崎原は懸念を声に含ませた。まったく、誰にモノを言ってるんだか。

「私を誰だと思ってるの？ 玉藻美狐よ」

簡単にくたばるはずが無かろうに。

「ははっ、余計なお節介か」

「そういうことよ。あんたは自分のやるべきことを済ませなさい」
笑ってみせた私につられたのか、崎原も安心したとばかりに楽しそうな笑みを浮かべて、洞窟^{こく}まで着た道に戻り行く。それを見送ってから、私も駆け出した。

その先にわいらがいるであろう、倒された木々の方角へと。

第二十四話『いがみ合い』

ただひたすら、私は駆け抜ける。わいらが通った道をなぞり行く。奥に進むに連れて惨状が増している。わいらが通った影響で大きな波を描いているこの地形は、どこか土砂崩れの跡を彷彿させた。

「近い……」

進めば進むほどに感じられる。奴の気配が次第に大きくなっていくのが。妖気を解放して半妖体で戦闘に入るべきか……いや、可能な限り温存しておこう。この先に何があるか解らない以上、最悪の事態を予期して対応できるよう最低限に力を留めて行動した方が良い。決して利口とは言えないが、現状を確認してからでも動ける分、リスクは抑えられるはず。

駆け抜けた先、芝草生い茂る広場へと出た私は、遂にわいらの姿を肉眼で補足した。大型トラックをも優に凌ぐ、ずんぐりとした牛のような体躯に、太く鋭い鉤爪を持った前足。聞いた通りの姿だ。しかしもっとも私の目を引いたのは、わいらの存在ではなく場の状況である。

左右から来たと思われる前足の一撃を、両腕で受け止めている光我。その後ろには戸惑うジェーンと石岡。光我はともかく、何であの二人がここにいるのだろうか？

「お、お前……」

問い掛けるジェーンに振り返り、光我は氣取ったように短く笑って呟いた。

「女のくせに身を挺しておっさんを守るたあな。あのトカゲ野郎とは違って、テメエはまともな退魔師らしいな」

「あ、当たり前だろ。人々を妖魔から守るのは退魔師の使命だ。というか、男女差別するなよお前！ “女のくせに” ってなんだ！」
ぎこちなかったのもあつと言う間。すぐさま怒りに変えて顔を真っ赤にするジェーンだったが――

「わかったわかった。ま、嫌いじゃねえよ、そういうのはな。悪かったな。さっきは馬鹿女つつつてよ」

「えっ？ あ、ああ……」

と、今度は頬を赤く染め上げて、照れ隠すように光我から目を逸らす。どういうラブコメ展開だ。まあ、だいたい状況は掴めてきた。わいらが運悪く遭遇した石岡を襲い、それをジェーンが阻止しようとする無謀にもわいらの前に立ちはだかったところ、光我が割り込んで助けた――と、言うわけね。

「おい、そういえばお前。名前は？」

「え……あ、ジェ、ジェーンだ」

「ジェーン。おっさん連れて下がれ。俺がこいつの注意を引き付けてる間になッ！」

攻撃を受け止める体勢から光我は、一瞬にして身を屈める。唐突に起きた拮抗の喪失により、前傾に体重を乗せていたわいらはバランスを崩してしまう。前足の鋭い鉤爪を間抜けにも空振り、クロスさせている間に、光我は一気に力を開放し、霊力を集束させた拳を降りてきたわいらの顎に目掛けて叩き込む。

わいらの頭部が弾けるように跳ね上がった。光我自身が屈んだことにより、拳を振り上げる勢いが生まれ、わいらも姿勢を崩して前のめりに倒れかけていた――これら二つの要素が一つに纏まり、見事なカウンターアタックが成立している。

「オラァッ！」

立て続けに光我は、わいらの顔面に乱打を放つ。乱打と言っても一発一発に捻りを加え、重心もしっかりと確保している。無駄のない拳の嵐だ。叩き込まれる毎にわいらの顔が左右上下に激しく揺れ動いた。象牙のように立派に尖っていた顎の牙はへし折れ、闘牛の

ような形相はみるみるうちに変形していく――と、ここで光我は一旦攻撃を止めて後ろに右足を持って行き、前屈姿勢で腰を捻る。次の瞬間、こちらにも風圧が届くほどの凄まじい速度で、上段の回し蹴りを眉間にぶち込んだ。

鞭のしなりを想わせる鋭い音が響き渡り、同時にわいらの頭部が空を仰ぎ、前身がふわりと浮き上がる。

血飛沫が、眉間から噴き出した。

あの巨体を軽々と浮かせる蹴りとは……ほんと無茶苦茶な馬鹿力だ。その光景を前にして、今日まで“人間の常識”に捕らわれていた石岡とジェーンは逃げることを忘れ、人間離れた光我の戦いに加えて息を呑む。

「す、凄い」

「人間か、あいつは」

賛辞か、畏怖か、それとも唾然か、おそらくは全てなのだろう。

光我を見据えたまま二人は呟いた。けれど、わいらと対峙している本人からは余裕が感じられない。戦局は如何にもあいつが圧している構図だが、それにしては妙だ。

何故、光我の衣服は所々が切り裂かれ、薄皮一枚とはいえ傷を負っている？

疑問の解消は悪態付く光我の目線の先、わいらの方にあった。

殴られた傷や痣が、映像の巻き戻しを行うように癒えていく。私の使う自己再生に似ているが、全くの別物だ。妖気の流動に変化がまったく無い。

私の自己再生が肉体活性、自然治癒の補助に妖気を回すものに対して、わいらの自己再生は術式などを駆使してではなく、最初から肉体に刻まれたプログラムとして作用している。

早い話がマニュアルとオートの違いなのだが……これがまた厄介だ。一々術などを使わずとも、放っておけば瞬く間に傷が塞がってしまうのだから。いくら光我の攻撃に威力があらうと、どれだけダメージを与えてもこれではジリ貧だ。

とはいえ、何か変だ。私も人と比べるまでもなく怪我の治り、疲労の回復は早い。けれどこいつのは回復速度が極端で、無理矢理な感じがしてならない……そういう存在と口にしてしまえばそれまでだが、こいつは本当に“それ”に分類されるのか？

などと考えている間にわいらの傷は完全に癒えて、折れた歯も元通りになっていた。

「くそつたれが。歯まで生え替わりやがって、サメかよテメエは！」
苦しげに吐き捨てる光我の都合などお構いなく、わいらは反撃へと移る。先程やられた分の倍返しとばかりに、前足の鉤爪をしゃにむに振り回す。苛立ちに舌を鳴らしつつも光我は左右から襲い来る攻撃を紙一重に躲し、防御の際も鋭利な爪先が当たらぬよう円を描くように攻撃を素手で受け流すなどして、巧みな所作で対応する。現状を保ちながら、光我は横目にジェーン達を一瞥した。

「おい、ジェーン。いつまでボケツとしてやがる！ さっさと逃げろっつただろ！」

不意に怒鳴られて、呆然としていたジェーンは我に返った。

「え？ いや、お前が言ったのは“下がれ”だろ？」

「逃げろって意味で言ったんだよ！ マジで馬鹿かテメエは！」

「馬鹿馬鹿言うなッ！ お前がちゃんとそう言わないから悪いんだろが。バカッ！」「んだとテメエ！」

まったく、見てらんないわね。今度はカップルの痴話喧嘩？

まあ、どちらにせよ、わいらに対する不可解な点は倒した後で調べれば済むことだ。このままだと光我也長くはもたないだろうし、そろそろ乱入するとしましようか。

「やっぱりテメエは馬鹿女で十分だ！」

「私が馬鹿女なら、お前は超無神経なバカだ！」

ジェーンが言い返したその瞬間、光我は油断して右脇腹に一撃を貰ってしまった。すかさず二撃目が逆方向から、それも頭を目掛けて襲い来る――が、それよりも速く私がわいらの脳天へと、左手から飛び蹴りをかます。

「どっちもバカでしょ」

「なッ！」

私が両膝と右腕の三点着地を決めると同時に、わいらも芝生を抉り散らせて仰向けにひっくり返る。巨体の倒れた影響で鈍い音が辺り一面に広がり、僅かに地面が揺れ動いた。

「主役の登場を盛り上げるには、ちょうど良いタイミングよね」

「美狐ッ！」

「ま、私には役不足な相手だけど」

軽く前髪をかきあげて一言余裕を告げてみれば、周りが私に釘付けとなる。

「何でお前がここに？」

と、ジェーンが問い掛けるが、それはこっちのセリフだ。まあ、おおかた平賀を応急処置して、助けを呼ぼうと工事の方へ向かってたらこの場で鉢合わせたって流れでしょうけどね。

「何しに来たんだよ糞狐。つうか、テメエの着ているその服。白鬼のじゃねえか」

加えて光我も同じようなことを口にするし。まったく――

「あんたらは自分で事情を察することも出来ないの？　ほんと馬鹿ね」

『なッ！』

私が返すなり、二人は激昂の声をハモらせた。単細胞なのもまったく同じだわ、こいつら。

「怒ってんじゃないわよ。そんなことより、まずはアレを何とかするのが先でしょ」

怒りの矛先はわいらに向けてちょうだい――と、私が付け足した言葉を耳にして、光我とジェーンは顔を見合わせた。そしてわいら

に視線を戻す。今回の事件の元凶はこいつだ。そう、こいつをどうにかしなければ何も解決はしない。くだらない喧嘩をしている場合ではなからうに。

こいつを止められるのはこの場に立つ自分達だけだと、二人は噛み締めたことだろう。表情からも意志が汲み取れた。

「光我、ジェーン。私の話を聞きなさい。あいつを確実に倒す方法がある」

私だけで倒すことは可能だけど、白鬼はわいらの殺害ではなく、わいらを止めることを目的としていた。ならば確実な手段でわいらを沈黙させた方が良く。気乗りはしないが、体力温存、リスクの減少を考えると、私達で力を合わせて戦うのがベストだ。

だが……

「ふざけんなッ！」

私の案を聞くなり、光我が憤慨して喚き散らした。

「誰がテメエと一緒に戦うかよ！ あんな奴、俺一人で十分だ」

「あんたねえ……いくら私が気に入らないからって、そんなんじや勝てる戦いにも負けるわよ」

「うるせえ黙れッ！ 冗談じゃねえぞ。俺は言ったはずだぜ、テメエなんか信用できねえってな！」

光我は私を忌々しげに睨む。指を差すなり疑念を……いや、敵意剥き出しに言葉を叩きつけてきた。まったく、ここに来てこいつはまだ言うか。似すぎじゃないの、昔の私に——くだらない理由で周りを目の敵にして、重要な局面でプライドやポリシーも捨てきれない意地っ張りなところが。

烈狐丸兄さんや稲荷の馬鹿神は、昔の私に対してこんな苛立ちを覚えたのかしらね？

しょうがない。今こいつを加えて戦闘を行っても状況が悪化するだけだ。光我の電撃の力はわいらを止めるに適している。けれど、今こいつにそれを話したところで馬の耳に念仏だ。頑なに私の言葉を拒絶するに違いない。

ダメージも残っているんじゃ、私の案も実行できない——ここは、私一人でわいらの相手をして、ジェーンと光我には控えてもらうか。考えを固めた私は光我の懷まで踏み込み、掌底を鳩尾に放つ。唾液を吐き出し、光我は胸を抱え込み膝を突く。

「て、テメエ」

光我が手を地に置いて、私を仰ぎ見る。『遂にやりやがったな』
とでも言いたそうに歯軋りを立てて、怒りと苦悶に表情を歪めていた。

「お、おい。何してんだあんた！」

「何てことしているんだお前ッ！」

流石に私の取った行動が腑に落ちず、石岡とジェーンから口々に文句が飛び出す……が、今は話している時間も勿体無い。構わず私は自分の口に手を突っ込み、青い液体を含んだボトルを喉から通して引きずり出した。それを目の当たりにした三人は言葉が失っていた。

顔を強ばらせて私を見ている。

失礼な奴らだ。しょうがないだろうに、このボトルに入っている液体は貴重で、ウエストバックに入れるわけにもいかなかったのだから。割れた際の事も考えると、自分の腹の中に保管していた方が一番効率がいい。

「ほら、光我。受け取りなさい」

目を丸くしている光我にボトルを投げ渡す。受け取った光我は訝しげにそれを見やると、私に『これは何だ?』と問い掛ける。

「神活水——しんかつすい早い話が回復薬よ。かなりの貴重品でそれ一本しか持ち合わせていないわ。さっさと飲んで身体を休めてなさい。私が時

間を稼いでおくから」

「なっ、テメエどういうつもりだ！」

「ジェーンは光我と同じく待機。石岡は安全な場所まで逃げなさい。出来れば崎原の変態野郎を呼んできて。いいわね？」

念を押すように有無言わず指示を与え、私は既に起き上がってこちらに向かって来るわいらに手を翳し、集束した炎弾を放つ。回復力があるとはいえ、いきなり顔面に灼熱の炎をぶつけられれば、たまったものではないだろう。

獣の悲鳴にも似た、野太い唸り声を放ち、わいらは頭を振り回して暴れ出した。

この合間に私はわいらの頭上を飛び越えて後方に回る。ついでにその途中、空から拡散させた火の雨を背中へと降らせた。苦痛に拍車が掛かり、わいらの絶叫が空気を震わせた。それに合わせて弓なりに背を沿わせ、あたふたと身を小躍りさせた。

「ふん。無様ね」

ようやく火傷が癒えてからわいらは、自分をこんな目にあわせた犯人を、背後に佇む私を捉えた。目つきが『殺してやる！』と私に訴えている。そんな奴の憤りと殺意を寒気にして受けつつも、私は右手を差し出して指を引いて『さっさと来い』と挑発を示す。それにしても何故だろう。

不思議と、こう殺意を向けられると笑みが漏れてしまうのは。

怖いと言うよりも、わくわくする。

「さあて、どれほどのものか見せてもらおうわよ」

燃え盛る炎を両手に生み出し、私はわいらへと駆け出した。

第二十五話『数百年後に知る答え』

玉藻烈狐丸という男は、昔から気に食わない奴だった。活心不殺かつしんふさつとか訳の分からない信念を持ち、烈火神破拳れつかしんはけんなどとインチキ臭い格闘技を駆使して敵を殺さず倒し、その心を救う。そんな反吐が出る程甘くて、それでまた私を苛立たせる熱を胸に宿していた。

初めは、気に食わない理由が私の“相手を虐げる、奪う、殺す”を信条としていた生き方を否定している、侮辱されている気がしたから、と感じていた。

『止める美狐。オイラは、お前や絶狐丸とも戦いたくない。母上を止めたいだけなんだ』

『黙れ』

『母上のやろうとしていることは間違っている、だから』

『だから何だ？ 私はあの方にさえ認めてもらえればそれで良い。烈狐丸。お前を殺せば、きっと母上は私を認めてくれる。もう、兄上のおまけ扱いされずに済む。娘として認めてもらえる』

今思えば、あの時の私は大馬鹿者で。お世辞にも純粹とは言えず、劣等感故にただ自分の存在をあの人に示そうと、躍起になっていた。情けない話だが、あの頃の私は百年近く生きたというのに、まだ甘えたいという幼さが抜けきっていなかった。

愛情を、欲していた。自分の価値を求めていた。

残念ながら、あの女から愛を注がれたことは一度も無く。最期まであの女は、私に対し憎しみを、殺意を抱いていた。だからこそ私を使い、烈狐丸兄さんとの相討ちを狙い、そのかしたんだと思う。結局、あの女の甘い言葉に惑わされた私は、思惑通り烈狐丸兄さんと死闘を繰り広げてしまい。最終的にはお互いが膝を突き、深手を負うまでに局面は達した頃、機に乗じてあの女は手下を率いて現

れた。

私達を包囲し、崖のところまで追い詰めてから、あの女は表情を嬌笑に歪ませた。この瞬間を待ち望んでいたとばかりに。

『母上、何故です。何故私まで！』

『母上？ 貴様を娘などと思ったことは一度もないぞ。まあよい。虫酸の走る貴様の声を耳にするのも今日が最後となろうよ。さよならじゃ美狐。これで漸く貴様も、邪魔な烈狐丸もろとも葬る事ができる』

『そ、そんな。私は、私は今日まであなたの為に！』

『殺れ』

『待つて！ お願いです。待つて母上——』

崩れ行く大地。闇へと落ち行く私の姿を、あの女は満たされた笑顔横にして眺めていた。どれだけ手を伸ばしても、届くことがないのに、私は必死に血に塗れた手を伸ばし続けた。

道具としてしか見られていなかったのに、それでも彼女の愛があると信じて貢献してきた結果。この瞬間あっさりと見限られ、切り捨てられた。それでも、私には何も無かったから、ただ手を伸ばすしか出来なかった。

誰でも良いから、私の手を掴んでほしい。誰か助けてと、心で悲鳴を上げながら、ただ手を伸ばすしか。

こんな私を救う者など、味方など、誰もいないというのに。

そんなどうしようもなく哀れで、救いようのない私の手を掴んでくれたのは——

『美狐！』

他でもない。一番憎んでいた異父兄妹の、烈狐丸兄さんだった。

『やめろ。離せッ!』

『離さない!』

『貴様まで……落ちる』

『落ちないッ! 必ず、お前を救ってやる!』

『何でだ。何でそうまでして』

私は何度も殺そうとした。聞く耳を持たず、戦いを挑んだ。怨嗟の言葉を幾度となくぶつけてきた。それなのに烈狐丸兄さんはどうして私を敵として見ないのか、ずっと理解に苦しんでいた。

兄が、この言葉を口にするまでは――

『お前はオイラの妹だ! それ以上の、それ以外の理由なんて、必要ない!』

金色の瞳はあの女とは真逆の、慈愛に満ち溢れた純粋な輝きを宿し、私を映し出していた。

皮肉にも程がある。私を本当に愛してくれていたのは、一番最初に愛をくれたのは、他でもない。この兄だったなんて。

『死なない。お前を死なせない。オイラが、必ず救ってみせる! 必ずだ!』

あの時、心の奥底で凍り付いていた何かが溶けて、それが涙となり目許に溢れた。くしゃくしゃになっているであろう、自分の顔を隠すことすら出来ずにいる私は、這い上がろうと、先の見えない天の光を睨む兄に目を奪われていた。

絶対に諦めたりはしない。挑戦に闘志を燃やす優しき瞳を前にして、私は気付いた。気に入らないと思っていた兄への苛立ちは、劣等感からの嫉妬だったのだと。

羨ましかったのだ。兄の、孤独でも一人で困難に立ち向かえる勇

気が。誰とでも手を取り合い、どんなに惨い仕打ちを受けようとも許してしまう。その雄大かつ寛大な心が。

私の持っていない。決して手に入らない“強さ”を持っていたから。だから私はこの兄を妬んで、逆恨みして、八つ当たりをしていたんだと矮小な自分に気付いた。だから、そんな私を許すどころか愛してくれていたこの兄に、涙したのだと思う。

けれど私は素直になれず。その後も相変わらずの態度で兄に接した。まあ、当の本人はとっくの昔に私の心境の変化には気付いていたけど、素直になるにはやっぱり私には抵抗があった訳で。あの娘に出会うまではずっとこの調子だった。

こんな経緯から、烈狐丸兄さんとはちょっとばかりぎこちない兄妹関係を築いて行くのだが。そんな兄は時折、不可解な言動を示す事があった。

これは助けてもらった借りを返そうと、烈狐丸兄さんが玉藻前の罠により窮地に追い込まれた際、私が駆け付けた時の事だ。

『美狐。お前、助けに来てくれたのか？』

『勘違いするなよ烈狐丸。私は、借りを返しに来ただけだ』

『借り？』

『そうだ、借りだ。何度も言わせるなよ』

私は殺気を放ち、凄みをきかせることで気恥ずかしさをごまかしていたが。お見通しだったのか、烈狐丸兄さんはプツと噴き出すと、腹を抱えて笑い出した。

『貴様……何が可笑しい』

そんなに素直に助けに来たと、口に出来ない私が滑稽に見えたのだろうか？

そう思っていたが、この後に烈狐丸兄さんが発した言葉を聞いて、別の意味が込められていることに気付いた。

『いや、面白くってさ』

『面白い？ フン……訳の解らんことを』

『いや、いつか解るさ。お前にも』

いつか解る……か、それまで私が生きている保証など無いというのに。未だ解らず記憶の片隅に、今日までこびり付いている。

それにしても何でまた、わいらとの戦闘中にこんな過去の記憶が過ぎるのか。

まあ、そんなことを考えてもしようがないんだけど——ああ、そういうえば、光我を助けた時の構図が、あの時の烈狐丸兄さんと私にそっくりね。

ふと、後ろでジェーンに支えてもらっている光我を見た。相変わらず私を憎らしげに睨んでいる。腹を押さえているあたり、理由は先程の掌底にあるようだ。

とはいえ謝る気は毛頭ない。聞き分けのないあいつが悪いのだから。それに、こっちはこっちで忙しい。

「チッ……危ないわね」

わいらが吐き出してきた溶解液を右手に纏う炎——瞬間的に高めた火力——で焼き払う所作で蒸発させ、続けて来る突進を跳躍して避けた。空中で宙返り、すれ違い様に背中へと炎を浴びせてやると、再度苦痛の鳴き声を仰ぐように放ち、私へと振り返る。怒りの形相に凄みが増していく。

「ワンパターンね。平賀の方が難易度高かったわよ？」

先程から、溶解液と突進の繰り返しだ。何度も躲す、翻弄する、

当てるのループは闘牛士の気分させるが。マタドールの役は光我に担ってもらう。

平賀戦の負担が大きかったのか、思った以上に身体の疲労が濃い。わいらの意識を断ち切る一撃を放てないこともないが……駄目だ。私が戦い始めてから、何者かの視線を感じる。深手を負っているとはいえ、光我ですら気配を掴めていない手練れだ。

現状で何もせず、ただ傍観に徹しているこの感じは、赤マントの時を彷彿させる。

白鬼の言うとおり、やはりわいらは操られている可能性がある。そして私の推測、『わいらの洗脳が不完全故の暴走』という線も窺える点から、経過観察中とも考えられる。だとすれば対象はわいらか、私か、或いは両方なのか。今のところ見当が付かない。故に傍観者との戦闘も考慮に加え、力の解放は極力避けておくべきだ。

光我やジェーンもいるが、飽くまでも自分の身は自分で護る。それが戦いの鉄則だ。確かに一人では限界もある。補えるパートナーは、やはりいた方が幾分マシとなるだろう。それでも、一人でも成し遂げないといけない事があるからこそ、私は“仲間”というものには期待も信頼もしない。

お互い利用し合うくらいが、丁度良い。

さてと、見れば光我も使えるくらいには回復したようだし、さつさと働いてもらいましようかね。

などと思っていれば――

「なッ！」

頃合いなのは、傍観者も一緒のようだ。私が行動に移ろうとした矢先、足下に紋章陣が血色の淡い光となり浮かび上がった。

いつからそこにあった？ いやしかし、この術式は過去に見覚え

がある。西洋儀式魔術。クロウリーの六芒星に近い。紋章陣の先から生命の気配がする。気の流動を感じるということは、これは降魔術か。嫌な予感の的中し、紋章の中から二体の巨大な蛇が現れ、私の肢体にキツく絡みついてきた。

手足は勿論のこと、首にも巻き付いている。拘束するつもり？

「ぐ、あぁッ！」

じゃない。へし折る気満々じゃないのこいつ！

糞がっ！　こんな時に――

「邪魔すんなっ！」

不本意にも、力を解放した私は巻き付いた蛇の胴体を力任せに引き千切り、噛み付こうとしていた頭は蹴り飛ばしてやった。傍観者がいるであろう、気配がする森林の奥へと。

くそっ、よりにもよってこのタイミングは最悪じゃないの。見ればわいらは目の前まで突進をかまして来ているし、こっちは回避したくても解放した力の反動で身体が反応してくれない。

このままでは食らってしまう。ガードしても耐えられるのか？

四の五の言っても始まらない。どっちにしろ選択肢は一つだ。私は急ぎ胸を守るように両腕で壁を作り、前屈立ちで身構えた。同時にわいらは頭から、私の胸元を目掛けてぶつかって来た。どちらが押し負けるかは考えるまでもない。私の身体はボールのようにはね飛ばされ、余儀無く地面をバウンドする破目に陥った。

バウンドの途中で地面に手を付き、勢いと反動を利用して私は空中に跳ね上がる。そのまま数回転してから着地を決めた。草地を擦り、千切れた草や葉が巻き上がる最中、膝を突いたまま私はわいらへと目を向けた。

見れば既に加速を付けて、こちらに向かって来ているではないか。しつこい。こっちは体力的に切り返しが利く状態ではないのに、

容赦ないわね——などと舌打ちをしたところで、この危機を回避できるはずもない。だから私は炎を再度両手から放ち、身構えた。一か八か、相打ち狙いで迎え撃つ覚悟で。

その時だ。わいらの前に何者かが立ちふさがり、両手で受け止めた。引きずるように後退し、足下の草地を僅かに盛り上げて抉り出してしまっても、眼前でわいらの突進を差し止めた。

「あんた。どういうつもり？」

突進を止めた張本人である光我に、私は問い掛けた。相変わらず不機嫌そうな顔をこちらに向けて、への字にした口を開く。

「どういうつもりだあ？ そりゃあこっちのセリフだ。ジェーンから聞いたぜ。テメエ、あの爬虫類野郎に結構ダメージ貰ったんだってな？」

光我がわいらから手を放すと同時に、ジェーンがわいらの目に鞭を打つ。再生力のあるあいつでも、高圧電流を纏った鞭を叩き付けられれば堪ったもんじゃない。

痛みで顔を振るって呻くわいらに、光我が追加の右ストレートを放ち、スナップをきかせた。

「通りで動きがぎこちねえはずだぜ。ふざけやがって、テメエが一番弱ってるくせに。俺に余計なもん渡してんじゃねえよ」

悪態付く光我の隣りにジェーンが駆け付け、私に懸念の眼差しを送りつけた。

「おい、大丈夫か？」

「一応はね」

まったく、こいつらに助けてもらうとは、私もまだまだ未熟ね。礼は、言っておくべきかしら？

そんなことを思っ二人に目をやると、鼻を鳴らして光我は言い捨てた。

「勘違いすんなよ美狐。俺は、あの時の借りを返したただけだからな」
「借り？」

もしかして、初めて光我と出会い、戦った時の事を言っているのだろうか？

「そうだ。借りを返したただけだ」

私がポカンと光我を見ていると、続けてジェーンも気恥ずかしげに前へ出て言う。

「私も同じ理由だ。敵であれ、何だかんだで私もお前に助けてもらったしな」

借り？ 助けた？ ……なるほど。そういうこと。

「フ、フフフー」

「どうした？」

「アツハハハハッ！」

なるほど、なるほどね。確かに面白いわ。嗚呼、本当に面白い。思わず腹を抱えて笑っちゃったじゃないの。

「な、何がおかしいんだ？」

烈狐丸兄さんの言葉の意味が、今になって漸く理解できた。兄さんは、私に恩を売った覚えはなかったんだ。ただ、当たり前のことをしてただけで。それを私が勝手に借りだと思い込んでいたから、今まで恩を返そうとしていたのが滑稽に見えたんだ。確かに、馬鹿らしいわよね。助けたつもりすらないのに、相手の方はずっと恩を受けたと思い込んでいるのだから。

「訳解んねえぞ、テメエ」

「いえ、ねえ。面白くってね」

「何が面白いんだか……」

哑然とする二人に、私は兄さんと同じ言葉を返してやった。

「いつか解るわよ。いつかね」

やはり、この後の反応はあの頃の私と同じで、二人はお互いに顔を見合わせて怪訝に眉を顰めた。ま、私だけ長い間思い悩んだのも癪だし、あんたらも自分で答えを見付けることね。

「さてと、早速だけど。あんたらを利用させてもらうわよ」

「おいおい、お前さっきは協力しろみたいなこと言ってただろう」

「私からすれば、どっちも似たようなものよ」

口にすると、表情を曇らせるジェーンの後ろで、光我がふざけるなど反抗的な態度で私を睨む。まあ、利用するって言われて納得する奴はいないか。

でもね――

「予め言っておくわよ。私は、一度利用すると決めたら最後まで使い切る。絶対に捨て駒になんて使わず、有効に活用する」

だから、誰も途中退場はさせない。全員生存で勝つ。そう付け加えて自分の意思を告げると、ジェーンはそれなら悪くないと笑みを浮かべ、光我もばつが悪そうに舌打ちをしつつも、了解の意を示した。

「言い出した以上、テメエも途中でリタイアすんなよ」

「誰にもの言ってるんのよ」

「お前にだろ」

横からジェーンが余計なツッコミを入れてくれたおかげで、奇妙というほど和やかな雰囲気にも包まれるも、それはわいらの咆哮によって掻き消された。

「さてと、それじゃあ反撃といきますかね」

気を取り直し、私達は身構えた。

わいらの唸り声を、第二ラウンドの合図にして。

第二十六話『カリスマ女狐』

「あんた達、準備はいい？」

後ろの二人を見やり、確認をとってみると――

「ああ、大丈夫だ」

「フン……俺はとっくに始めてる」

ジェーンは鞭と銃を両手に了解を示し、光我は既に右腕を抑えつけ、靈気を集約していた。よし、これなら作戦を決行できる。

「んじゃ、始めるわよッ！」

各自散開――私がわいらを目掛け、ジェーンは右手に回り込み、光我はその場に待機する。

作戦の内容はこうだ。光我が靈力の集束を終えるまで、私が先程と同様、わいらの注意を引く囷役を担う。ジェーンは私と光我の支援に回す。

「ほらっ、こっちよノロマッ！」

先手は私が貰う。牽制に炎を浴びせてから顔面へ飛び蹴りをかまし、そのまま蹴った反動を利用して空中に舞い回転を決めて着地。先ずは、敵意の矛先をこちらに向くよう仕向ける。狙い通り奴は私を睨み、咆哮を上げて飛びかかって来た――って、そんな動きも出来たの？

まるで蛙だ。確かに後ろ脚は妙に長いと感じたが、あの巨体を助走無しにふわりと浮かせるなど、無茶苦茶も良いところだ。

ちい――だったら、その下を潜り抜ければ良い話でしょ。

幸いにも奴の飛んだ高さがそれなりにあり、その隙間へと滑り込み、擦れ違う形で回避を済ませた。スライディングで後方に回ることに成功した私は、わいらが着地した瞬間を狙って駆け出し、背中へと飛び乗り手を押さえつけて、そこから火で炙る。奴の悲鳴もとれる唸りが空気を震わせた。

体を無造作に振り回し、私を振り落としてやろうとわいらは暴れ

まわる。生憎、私も落ちてやる気など更々無い。しっかり足場を固定し、熱を上げてゆく……のだが、ここで私はあることに気付いた。疲労故に火力がいつもより低めとはいえ、肉も焼き尽くし灰と化させる私の炎を諸に受けているにも拘わらず、奴の焼けただれた皮膚は凄まじい速度で再生を繰り返す。明らかに光我の攻撃を受けた時よりも性能が上がっている。

くそ、気休めにしかないわねこれ。ライターで湖を蒸発させるくらい、無謀な挑戦ね。

他を模索してみるしか——なんて思っている時間すらあいつは与えてくれない。突如として背中から骨が、針となって突き出て来た。それも私を目掛けてだ。

何の前触れも無い、いきなりの攻撃に判断が間に合わず。飛び退こうとはしたものの、脇腹と左腕を貫かれてしまった。

「いっ痛ッ！」

それだけでは飽きたらず、続けて髪の毛に似た触手が生え、私を囲う。

「きしょ……」

嫌に脂ぎった艶を放つ触手だ。不快感を覚えずにはいられない。思わず口に出してしまった。癩に障ったか、触手は私を突き刺す骨の針を辿って、私に絡み付こうと這い上がってくる。瞬く間に手足に、そして首に巻き付き締め上げる。

引きちぎって脱け出せないかともがき始めた私に対し、触手は情緒なく攻め立てて来る。これも針の形状へと変わり来襲。片方は股下から、もう片方は頭部へと狙いを定めて。

口にしろ、下にしろ、こんなものに貫かれるのは御免を蒙る、冗談にも笑えない。

「み、美狐ッ！」

強張った表情でジェーンが私の名前を叫ぶ。ん、そういえば初めて私の名前呼んだわねあいつ。ま、そんなことよりも――

「躲さないとねッ！」

先ずは股下の方、左足の方は締めが甘い。ならば触手こいつを引き千切ると同時に、後ろへ身を退く。結果、どうにか軌道から逸れて串刺しは免れたけど、胸元にかすって衣服が破けてしまった。白鬼には悪いけど、こればかりは仕方ない。

次に来るのは頭部を目掛けての触手だ。こいつは、避けられない。最初に去なした股下から来た触手が邪魔で、体勢を変えられない。直撃する。

だったら、受け止める……歯でねッ！

触手の先端が口まで来たところで噛み付く、すれば鈍くて硬い金属音が歯の間で奏でを散らす。どうにか受け止められた。うえ、苦い、舌触り最悪。吐き気がする。もうこんな所、さっさと脱け出さない。

噛み千切り、熱を集約した高温の手刀で八つ裂きに、最後には振り払う。触手と骨の棘を蹴散らして拘束を解いた私は、すぐさま跳躍して第二波の攻撃を退けた――が、わいらはそれも見越していたのか、着地予定ポイントに向かって突進し始めた。

けれどそれも私の計算に入っている。

「ジェーンッ！」

合図を声と目で送りつけた。

最初は眉を顰めたジェーンだが――自分の役割を思い出したか、キッと鋭い眼光を燃やす。

「任せろッ！」

既に握り締めていた二つの獲物。その一つをわいらの手前へとぶん投げ、そのままターンを決めて左手に握る銃を突き付ける。照準

は、先程投擲した卵形の金属の塊だ。

銃口が火を噴き、乾いた音が弾けた。わいらの手前で爆発が起きたのはその後で、奴が怯む間に私は着地を終え、距離を取る。

どうにか窮地を脱したが、まだ油断は出来ない。それにしてもわいらの変異が気になる。戦闘が長引くに連れてオプシヨンが追加されてないか？

思えば、最初は再生能力だけだったのが、今では触手を生やし、骨を突き出したりと、だんだんゲテモノらしさが強調されてきている。単に外見だけの变化に非ず、身体能力そのものまで上がっている。

一刻も早くあいつを沈めないと、先が危険だ。しかしあれを止めるには、内部にダメージを与えるのが効率的。あるいは完全に滅すというのが理想だが、それは出来ない。白鬼の意思を汲み取るにしろ、私や支魔の都合にしろ、こちら側は損するだけだ。

よって後者は除外して、前者の案を執行することとなった。その要となるのが、靈気を雷の力に換えて戦える光我だ。私があいつの口内に高密度の炎弾でも放り込めば勝負は着くのだが、殺すのではなく、意識を断つとなれば光我の電撃が適している。

外部から内部へと攻撃を浸透させる光我の攻撃ならば――そういう訳で光我は靈気集束に時間が必要だからと、待機に移していた。頃合いだと思うのだが、どうだろうか？

ジェーンの傍へと立ち、確認を取ってみれば、光我の左腕から蒼く眩い光が放たれていた。ん、左腕？ 先程は右に靈気を集束していたはずじゃなかったっけ？

まあいい、眼光一点に凝らしてわいらを睨んでいるのは、準備ができた証拠だ。

「美狐ッ！ 来るぞッ！」

判ってるわよ、わいらが溶解液を吐きかけていることくらいね。
寧ろ今、危ないのはあんたでしょうに。

「お、おい、何するんだ？」

いきなり胴から持ち上げられて不可解を抱くのは判らなくもないが、説明している時間も、する必要もない。

「飛ぶわよ」

「へっ？ う、うわぁッ！」

宣告通り跳躍、わいらの溶解液を躲す。対してわいらは、空を仰ぐなり触手を伸ばして私達を捕獲しようと目論む。ざっと四十、数が多い。四方から来るし、ジェーンを抱えて炎は使えない。疲労した身体では、片手で全てを払いのけるのは無理ときた。

ならば――

「ちよつと借りるわよ」

「え、スタンウィップをか？」

ジェーンが握り締めていた鞭を取り上げ、透かさず最初に迫り来る触手を薙払う。第二陣も縦に振るい切り裂き、ラストの全方位からの刺突攻撃には、螺旋階段を描くよう鞭を振るって球体状に身を囲み、高圧電流をフルにしてバリアを作り上げ、防御を試みた。

触れた触手は読み通り感電し、火花を散らして墜ちて行く。

「凄い……」

私の腕に収まっているジェーンが、感慨無量の様子で呟いた。

「つて、お前。武器を扱えるのか？」

「当たり前でしょ、銃器も暗器も達人以上よ」

「それなのに、なんで武器を使わないんだ？」

お前ほど鞭を使えた人間は紅蓮にはいなかったと、言葉を付け足しながらジェーンが問い掛けるなか、相変わらず容赦なくわいらが骨の針を飛ばして来る。まったく、こんな状況で話し掛けて来る余裕があるなんてね。肝が据わっているわよあんた。

「私にとっちゃ武器なんか飾りよ。私のバトルスタイルに武器は邪魔なのよ」

とりあえず回答しながら私は、手前の太枝に鞭を巻き付けてグリップに付いている収納機能を作動させた。すれば伸びていた鞭のワイヤーは強い力で私達を引き寄せる。先程の平賀戦の際にみせた、尻尾による遠心力を利用した回避と要領は同じだ。

一回、二回と回転を加えて勢いを乗せ、そこで鞭を手放す。まだ続いていたわいらの攻撃が、私達のいた大木を貫き、菓子を割るくらいのも容易さでへし折ってみせた。威力が実証された分、余計に当たりたくない。準備も整ったし、そろそろ閉めに入ろうか。

着地を決めて安全圏を得た今、作戦決行の合図を指鳴らしで送った。

わいらの背中の爆発――無色炎同様、透明化させた妖気のマーキングで発火現象を引き起こす――を皮切りに、光我は駆け出す。

「決着つけてやるぜ」

走る。草を抉り出す勢いで。

進む。風を切り裂く速さで。

迸る。左腕に紫電を纏わせて、疾風迅雷の如しと、光我は雄叫びを発して突き進んで行く。

それを阻止しようとはかりに、地面に“あれ”が浮かび上がる。

私の時も邪魔しに現れた六芒星の紋章陣。あちら側も頃合いとみた訳ね。また蛇でも召喚するつもり？

「危ないッ！」

一度その眼に記憶したジェーンも、思わず警告を声を出す。が、光我は既に紋章陣に足を踏み入れてしまった。

あの時の状況を再現しようとはかりに紋章陣は妖しげな光を放ち、その姿を露わにする。今度は蛇ではなく鮫だ。しかし得体がはっきりしない、言うなれば鮫を模した影と表現すべき物。それが足下から飛び出して巨大な顎を開け、瞬く間に光我を丸呑みにした。

ショックのあまりにジェーンが小さく悲鳴を漏らすも、次に見せるのは眼を丸くさせた阿呆面。理由は、食らったと思われた敵の攻撃を煙みたく透け、それを意に介さず駆け抜ける光我の姿にあった。

「何で光我の姿が……ホログラムみたいにすり抜けて？」

「そう」

「え？」

「正確には、幻よ」

鏡花水月の如く、幻視の効果を催す妖術を光我に施しておいた。

「そんなもの、一体いつ？」

「あんた。本当に馬鹿ね。私の戦いをけっこう見たくせに……判らないの？ 光我を殴ったあの時よ」

思い出したのかアツと声を上げて、ジェーンはポンと手のひらに拳を載せた。そう、聞き分けが無い光我を殴ったのは、何も本人を黙らせる為だけではない。真意は、あいつの服にも妖氣のマーキングを付けておくこと。

「私の付けた妖氣のマーキングは、何も発火現象を起こすのが能じやない。こういう蜃気楼のような幻視効果も出せるのよ」

「あ、でも」

そうね、まだ敵は諦めてない。新たな紋章陣を作動させている。

それも、今度はより手前、光我に当たるポイントとタイミング。初見で見極めるとは、なかなかどうして、やるじゃないの。

けどね――

「しつこい奴は、嫌われるわよ」

私の方が、一枚上手だってこと、その身で判らせてあげるわ。

マーキングした対象は、まだ存在する。そう、あんた目掛けて蹴り飛ばした蛇の頭がね。

パチンと鳴らせば、ほら、爆発する。

「な、何だあれ？ 遠くで爆発したぞ」

その茂みから移動をしてないのが奴のミスだ。見渡しが良く、狙い目も付けやすい位置なんでしょうけど、逆に相手に疑われれば身動きが利かない場所でもある。

「紋章陣が……消えたッ！」

結果、こうして裏目に出た訳だ。あれで倒せたってことはないんでしょけど、怯ませるには十分。邪魔も消え、わいらも合図の際の起爆攻撃で動きに隙が生まれた。

後は、あんた次第よ。

「決めなさい。光我ッ！」

言われねえでも判ってるぜ糞狐——そんな生意気な返事を顔に書き留めて、光我は踏み込んだ。わいらの直下へと。

『喰らいやがれ。雷龍爪ッ！』

迸る稲妻が、斜め一閃にわいらを切り裂いた。

第二十七話『決着の後に…弐』

一閃——切り裂く光が視界を遮る。それは一瞬の出来事。下から斜めへとなぞった雷龍の爪は、わいらの顎から眉間を切り裂き、稲妻は体を伝い、迸る。感電した体は激しい痙攣を起こす。

「効いたかッ！」

「いいえ」

まだよ。あいつの目は、意識はまだ生きている。空を仰いで浮ついた目をしていたわいらが、唐突に目下の光我へと視点を落とす。感じるのは怒り……反撃が来る。でも、あんただってこれで終わりじゃないんでしょ？ 光我。

「へッ！ 誰が——」

不敵に笑う光我の右手が稲光を放つ。誇らしく、したたかに。歩幅を広げて攻撃の姿勢を作る。そう、喻えるなら発射台。特大のミサイルを撃つ発射台だ。

「一発つつったよ」

左手はあくまでも牽制。やはり最初から右を決め手にしていたか。フラグを組み立てる役割として左手にも力を溜めていた訳だ。

馬鹿にしては用意周到じゃない。少しは評価を上げてやるべきかしら？

『喰らいやがれ。紫電拳ッ！』

見事に炸裂するアッパークット。紫に輝く拳がわいらの顎を突き上げた。放たれた電撃が脳天を駆け抜け、彼方へと昇る。わいらの意識どころか、命までかっさらったのではないかと疑う怒濤の一撃。けれど、まだ足りない。ふらついてはいるも、朦朧とする意識を保っているようだ。一度ある事が二度あり、そして二度ある事は三度ある。それでも後一押しだ。

ならば三度目の正直と行こうではないか。

「決めるわよ。ジェーン」

肩に手を置いて光我の傍に向かうよう指示を与え、私は駆け出す。一瞬戸惑うも、彼女も急ぎ私に続く。

正面から風が吹く、来るなど私達を責め立てる。止めてくれと宥め賺す。そんなわいらの悲痛な叫びを比喻して感じなくもない。もしそうなら、私が返せるメッセージは一つ。

安心なさい。これで終わらせる。

助走を加えて勢いを備え、私は跳んだ。可能な限り脚のバネに力を入れ、限りなく高く、大空へと。下を見れば疾走を決め込むジェーンの姿が――到達までの距離は、もう少しといったところか。

光我はというと、もう一発顎に叩き込もうと姿勢を低め、右拳を握り締めていた。霊力を集束する余裕が無いから、力任せの一撃に賭けるつもり？

何にせよ、これで決めないと後が無い。だからこそ今、私は身を回転させて勢い付け、急降下している。かざぐるま風車よりも速く、風を切り裂く速さで落ち行く。狙いは眉間だ。

極限に達した速度による一撃――喰らってみろッ！

意気軒昂の唱えと共に踵を振り下ろす。踏み潰す形で眉間に踵がめり込む。下の方では光我が拳で、到達して隣に立ったジェーンは上段蹴りでわいらの顎を突き上げる。サンドイッチ、トライアングル、ハンバーガー、まさにそれらを表現するような、痛烈な挟み撃ちが完成していた。

くぐもった呻きを洩らし、わいらの目がぐるりと上を向く。確信を得た私は思い切り踏みつけて跳躍、宙返りを決めて離脱と着地を済ませて振り返った。光我とジェーンもこちら側へと素早く後退り、崩れ落ちるわいらを目にしていた。

「やった……のか？」

「まだよ。仕上げが残ってるわ」

わいらに歩み寄りながら妖気を若干解放、炎を纏った右手で印を描き、術式を発動。蒼白に浮かび上がる印契を圧縮、吸引。右手に染み込ませて、わいらの額へと判を押すように掌底を打ち込む。

鎮火する音を残し、わいらの額に当てた炎は火の粉を散らして消え去った。

「これで、終わりよ」

「何をしたんだ？」

「催眠術をかけたのよ。寝ている奴を一生目覚めさせなくする術をね」

この術式は、呪術の類に入る。腕に自信のある術者でなければ解除できない。強力な術だが難易度が高く、下手をすれば反動により自分が夢の世界へと旅立つ。そんな危険を伴う悪質な代物だ。

もつとも玉藻前の呪いを宿した身だから、私が術の反動で自滅するなどまず有り得ないため、そのような懸念は無かったりする。

「むう……」

呪術とかの話にいまいち免疫がないのか、内容を聞いてもジェーンは難色に眉を顰めていた。と、それはさて置き、まずこいつよりも問題は――

「光我、手を見せなさい」

私達の後ろで、苦悶の表情を浮かべて腕を押さえつけているこいつだ。さっきから枯れ葉を踏みしだくような音がすると思えば、やっぱり負担が大きかったか。右腕はもちろん。それに縋るように握り締める左手も放電し続けている。

「お、おい。大丈夫なのか？」

んなわけないでしょうに。完全に麻痺して暴走しているわよ。まったく、筋肉を酷使すれば肉離れや断裂するのは当然で、それは靈力や妖力など気の制御も同様だったのに。

筋肉なるぬ靈力の酷使。長時間の収束維持が原因だろう。この場合なら、そう、喻えるなら足が攣る状態、腓返りしむらとも呼ばれている

症状を味わっているところか。

まあ、けっこう深刻だし、放っておけば本人もタダでは済まないでしょうしね。

「仕方ないわね」

「んだよ糞狐、俺にさわんじゃ——ッ！」

私が次に取った行動は、余程有り得ないものだったのだろう。驚愕のあまり、目を丸くしていた。けれど私が取った行動は、飽くまでもその電気を散らす両手を握るだけの行為。端から見ればただ手を繋ぐようにしか見えなくもない……激しく流れては散らす放電と、眩い雷光さえなければ。

「そんな目をしてんじゃないわよ。まったく、こっちはビリビリ痺れてたままないってのに」

「馬鹿かテメエはッ！ 離セッ！ 感電してんだろがッ！」

「馬鹿に馬鹿を言われる筋合いはないわよ。あんたの霊力を分散させて和らげるから、黙ってなさいよ」

「ふざけんな。馬鹿を言われる筋合いねえなら、テメエに助けられる筋合いもねえんだよッ！」

助けれる筋合いはない……ねえ。まったく、本当に馬鹿なやつ。

「忘れたのあんた。私は、あんたらを利用する前に言ったはずよ」

一度利用すると決めたら、最後まで使い切る。絶対に捨て駒になんて使わず、有効に活用する。だから、誰も途中退場はさせない、全員生存で勝つ。私は確かにそう告げた。

「あんたがぶっ倒れたら、宣言通りにならないでしょ？ それにね。あんた私を誰だと思ってるの」

玉藻美狐よ——その程度で死ぬような、柔な生き方はしてないのよ。

「だから、あんたの心配は余計なお世話よ。分かったら、黙って終わるのを待ちなさい」

珍しく懸念を向ける光我に笑顔で返してやると、遣り切れないとばかりに表情を歪ませて齒軋りを立て、そっぽむくなり光我は苛立

たしげに呟いた。

「うるせえよ……心配なんぞ、してねえんだよ。自意識過剰もほどほどにしとけてんだ……糞狐」

ふん、減らず口を叩くじゃないの。まあ、礼を言われるよりも幾分マシな返事ね。

何て思っていれば、痛みも引いてきた。どうやら光我の暴走した霊力も安定し始めてきたらしい。迸る光を放っていたその手は、次第に落ち着きに治まりつつある。

そろそろ、手を放しても大丈夫ね。

「どう？」

「何ともねえよ。みりゃわかんذار」

余計な真似をとばかりに手を振り払って、光我は両腕を胸元に組んで横を向く。

どんだけ嫌ってんだこいつ。そんなに私を視界に入れたくないか。まあ、本当はそんな風には思っていないでしょうね。

「おい、助けてくれたのに礼くらい言ったらどうだ！」

ムツとした表情にしてジェーンが光我の態度を咎めたが、それは私が制止させた。

そう、何で光我がこんな素っ気なく振る舞うかは、解っているから――

「良いわよ。照れてんのよこいつ」

一瞬何を言われたのか解らなかったのか、二人は目を丸くして沈黙に。次には理解したジェーンがにやけて納得を示した。

「なんだ。そうなのか、クールぶっててもやはり子供なのだな」

「ぶっ飛ばすぞテメェらッ！」

噴き出す笑いが私とジェーンの間で溢れるのを目の当たりにして、顔を朱に染めた光我はがなる。握り拳に稲妻を纏い、怒りを露わにしていた。

ふふ、意外とからかいやすくて面白い奴だ。

「そう怒るな、悪かったから」

苦笑に変わったジェーンの謝罪を聞いて怒りも薄れたのか、グツと堪えるように奮える右拳をポケットへと回し、光我は溜め息混じりに後頭部を左手で乱雑に搔いて、ばつが悪いといった表情のまま判ったと許しを出す。

「ま、何にしても。目的は達成されたわね」

「うん、凄いなお前ら……あんな怪物を相手にして、殺さず倒すなんて」

うつむき加減に、ジェーンが呟いた。まるで他人事みたいに言う。それなりと戦果を上げていたくせに。

私がそれを口に出そうとした矢先――

「何他人事みたく言ってるんだ？ テメエもあいつ沈めた数に入ってるんだろが」

ずいっと歩み寄るなり彼女の肩に手を載せ、光我が鼻で笑う。皮肉ではなく、どこことなく穏やかに宥め賺す感じで。

「え？」

「最後のあの鋭い蹴り、なかなか良かったぜ」

すかした態度で笑みを浮かべたまま、光我はジェーンを通り過ぎ、わいらの様子を調べに向かう。そんなあいつの背を眺めて、ジェーンは頬を赤らめた。

ふむ。これって――

「恋する乙女の顔ってやつ？」

恋愛フラグが立ったか。

「ウワッ！ ち、違う。何言ってるんだお前は。というか、いつ近付いた？」

あんたが気が付かなかっただけでしょ。まあ、それはそうと、私から言わせてもらうことがあるのよね。

「雑魚にしては役立ったわ。平賀はあんたのことを使えないって言

ってたけど、なかなか使えるじゃないの」

「お前は一言多いな。私を褒めたいのか？ 貶したいのか？」

「そうね。どちらかといえば、貶したいを通り越して、虐めたい」
思わずにやけてしまった私を見据えて、ジェーンの表情が蒼白に染まり、身震いを起こした。

「やっぱりお前は最低だッ！ この性悪女ッ！」

自分の体を抱き締めてバックステップを決め込む。そんな彼女の後ろで、光我がまた呻き声を上げた。今度は腹を押さえて蹲うずくまっている。

ああ、なるほど――遂に現れたか。

「ぐ、うああ」

「お、おい。大丈夫か？」

急ぎ光我の傍に駆け寄り、その身を支えてやるジェーン。妖怪、人間問わず、弱っているなら誰にでも献身的な看護に当たる、その姿勢は良いことだが。だからといってこの症状が良くなることなど、まず有り得ない。寧ろこの場合は、被害が及ぶ前に退避した方が賢明だ。

この症状には心当たりがある。何せ原因は私にあるのだから。

「アレが効いてきたみたいね」

「アレ？」

「何だアレって」

光我に飲ませた回復活力剤、神活水の効果だ。稲荷大明神が発明したあれには、とある問題が纏わりついていた。あまりに効き過ぎて安全性もあるが故に、副作用にも似た嫌な効果が。

私でもアレには抗えない。その効果というのが――

「下剤効果よ」

それも、峻下薬【※強い作用を呈する下剤】並みの破壊力。

「なんだとオッ！」

驚愕の事実_に声を荒げる二人。苦悶に汗を滲ませる光我の目つきが、鋭利な刃となる。威圧しようと睨み付けているのだろうが、残

念ながら腹を押さえ込んでの内股姿勢があまりに滑稽なため、笑いの方が込み上がってしまう。

「テメエ、俺に飲ませた理由はまさかッ！」

「んふふ、そのまさかだったりするけど？」

だから飲まなかったのだ。副作用が無かったら迷わず私が飲むに決まっているだろうに。今頃になって気付くとは、愚かな。

「殺すッ！ 殺してやるテメエッ！」

「無理よ。前回同様に、今のあんたなんて指一本で殺せるわよ。それよりも早く用を足しに行ったらどう？ このままだとあんた死ぬわよ。社会的に」

指差し告げる私に畜生めと、怨嗟の言葉を残して光我は重い足を引きずり、工事の場所へと戻り行く。ご愁傷様。しばらくはトイレットペーパーと睨めっこでしょうね。

「鬼畜だ……」

茫然と光我を見送りつつ、ジェーンは私を一瞥して言葉を絞り出した。お褒めの言葉として受け取っておきたいけど残念。私は――「鬼畜じゃない、狐よ」

第二十八話『魔女とフェミニスト』

「ん？ 着信だ」

日曜日に放送される某国民的ヒーローの着うたが、鬱陶しく熱いフレーズを叫んで急かす。催促されてジェーンは、腰のポーチからケータイを取り出した。

若妻かこいつは？

まだ十代にも見える若い女性が、着信音を特撮ヒーローものにするのと思うのだが。そんな私の呆れを知るよしもなく、彼女はボタンを押して着信を受け取り、スピーカーに耳を当てた。

「私だ……ん？ な、本当かッ！ 分かった。すぐに駆けつけるッ！」

切迫感溢れる面立ちでジェーンは通話を切ると、私に強張る表情を向けた。

「どしたのよ？」

「仲間がやられた。何者かに襲撃を受けたようだ」

「……仲間って、平賀じゃないの？」

私の問いかけに、ジェーンは首を横に振る。聞けばやられた仲間は待機させていた救護班だと。

紅蓮にはエージェントと連携し、バックアップするサポーターが数名同行していた。救護班の半分は平賀を救助し撤収、ジェーンと合流する為に待機していた残りのメンバーが狙われたらしい。

「私はこれから確かめに向かう。すまないが、わいらは――」

「ああ、行きなさい行きなさい。あんた、いてもいなくてもあんま変わらないし」

手で払う仕草も加えて返答を出してやると、ジェーンは不快感を露にする。

「お前なあ……」

もう少し柔らかい言葉は無いのか？ そんな不満を目線で送るも、

結局は溜息付いて諦めた。ふん、判っているじゃないの。私がそんな気遣うタイプじゃないって。

「でもま、怪我しない程度に頑張んなさい」

「あ、ああ」

この返答は意外だったのか、頬を赤らめて戸惑いを見せた。去り行く時の様子は、どこか嬉しそうだったが。ま、それはどうでもいいとして。

光我也ジェーンも去ったし、そろそろいいわね。

「出て来たらどう？」

居るのは解っている。わいらを操り、止めようとした私達の妨害を企てた輩の気配が、今もこちらに視線を凝らしているのが。

気配が動く。緩やかに、草が生い茂る林の方からそいつは姿を現す。

「ふふん。なかなかどうして、やるわねえ」

パツと見た印象は、いかにも怪しい感じ。頭のテングロンハットにしても、襟を立てた漆黒のロングコートを羽織り、内には黒のノースリーブに下はダメージジーンズというこの格好は……。

「何とも奇抜なファッションね」

ロングコートとテングロンハットが特にバランスを壊しているような……それはともかくこの女。顔立ちが日本人とも結び付かない輪郭、目鼻立ち。褐色の肌に琥珀の瞳からしても、異国の人間であると分かる。

だけど、それは外見だけであり、身に纏うものが妖気に等しい。

“人の皮を被った何か”であることに間違いない。

どちらにせよ、警戒するに越したことはない。

「そうかしら？ 周りからは美しいって誉めてもらったわよ」

「それは格好じゃなくて顔の事だと思うけど？」

「そう？ まあ、奇抜といえばあなたのもそうだと思うけど」

これは白鬼の服よ——と、言葉を返そうか迷ったが、どうせこれからボコボコにする相手だ。一々下らない会話も交わすだけ時間の無駄だしね。

「単刀直入に聞くわよ。あんたがわいらを操っていた張本人？」

無視して問い掛けてみれば、この女は人差し指を唇に当てて首を傾げる。

「さあ？ どうしてそんなこと聞くのかしらね」

根拠は？ 何て遠回しに質問を質問で返して白を切るしら。ふん、今更って感じもするけどね。尻尾を簡単には出さないといえれば当然か。ま、根拠とまではいわずも、思うところはいくつかある。

検証第一は、白鬼の証言によるわいらの迂回ルートと、洗脳の不完全説。

証言通りわいらは誰かの意思に沿って移動していた。しかしわいらは洗脳がまだ完全ではなく、本能的な行動が目立っていた。

思い至る理由は食事にある。

洗脳されたわいらに食事を命令する理由があるとは思えない。ワンプターンな行動に関しても、白鬼の誘導に掛かったのも不完全故だと説明出来る。

検証第二は、わいらとの戦闘中に起こった突然変異と、どうして不完全の洗脳だったのかについて。

まるで気が熟したとばかりに、わいらは工事の方向へと移動を開始した。阻む光我と白鬼すらも押し退けて。

これについては、今まで洗脳していた本人が不在の為、命令内容も単純だったからで。決行したのは洗脳が完全となり、明確な指令が下されたからと私は睨む。

あの場に応じた戦闘中の状態変化や攻撃方法、そして召喚魔法で

私達の邪魔をしてきた事が十分な裏付けとなる。

「それで、何であんたがその犯人なのかだけど。あんたの帽子。蛇の革が引っ付いているのよね。あんたの召喚したあれがね」

ハッと驚いて、女はテンガロンハットに手を添えてしまい。そして気付いた。クク、間抜けめ。

「鎌をかけたわね？」

「引っ掛かる奴が悪い」

納得がいかないと、口を悔しさに歪ませる女に、私は続けて揺さぶりをかけた。

「ついでに聞くけど、わいらの行動はあんたの術式と関係してるの？」

質問に対し女の表情がより険しくなる。ビンゴ、当たりのようね。もうひとつの憶測が、今確信に変わった。

わいらの行動、その真意は。この女の術式が地に紋章陣を描き、発動させるものだったことを照らし合わせて見当がついた。この考えに至るきっかけとなったのは、平賀との戦闘中に私が発動させた、火陣護法円の手順にある。

崎原の車、グロリアの窓ガラス越しに見た森の惨状と、平賀の攻撃を利用して陣を描いたことを思い出すと、わいらの行動から一つの可能性が導き出された。

「わいらは、何らかの術式を完成させる為に動いていたんじゃないの？」

召喚か、転送か、或いは変換が目的なのか。それについては判らない。何か巨大なスペルを、陣を描こうとしていたのではなかろうか。

高い斜面から眺めて、それらしい感覚を抱いたのだが。さて、その答えは如何に？

「ふふ、うふふ」

何かを悟るような艶笑を浮かべ、女は切れ長の目を細めた。平賀

を思い出す。いや、あれよりも爬虫類を彷彿させる目付きだ。

次に見せたのは拍手喝采。女はさぞ満足そうに手を叩く。

「ブラボー。噂通りね、ミコ・タマモ」

「噂通り？」

「ええ、あなたけっこう有名よ。世界中から注目されてるわ。もつとも、それは危険視だけだね」

「ふん、そいつは光栄ね。でも、あんたの目的は私じゃないでしょ？」

まあねと、女は肩を竦めた。そして、手元に太陽の形を先端部に付けた杖を一瞬で召喚し、手前で回転させて構えに入る。やる気？

「わいらは返してほしいのよね。まだ利用価値あるから」

「そう……そういえば、あんたにはもうひとつ質問があったのよ」

赤マントとの関連性について、調べてみたかった。わいらと赤マントには似たような点があったから。問い掛けてみれば、最初は何の話かと眉を顰めるも、どうやら心当たりあるようで、『あれのことか』とひとり納得に頷きを見せる。

「確かにあれは私のサンプルだけど、もう関係はないわよ」

「どういうことよ？」

「盗まれたのよ。あなたのお兄さんがリーダーの組織、羅刹党にね」
羅刹党、兄さん……まさかッ！

「隙ありよ」

く、しまった。あまりにも意外な答えを耳にしたから……思索に走ったのが仇となったか。

女は私の動揺を狙って杖をこちらへと翳す。正面に淡く光る紋章陣——アंकに植物が絡み付いた図——が浮かび上がり、次の瞬間には雪崩を想わせる勢いで紫の炎が放たれた。躲せないし範囲も広い。ここは、防御するしか——そう身構えた時、私に当たる直前で炎は掻き消された。

あの変態フェミニストの手によって。

「呼ばれて飛び出てババババーン！ ふふん。ヒーローは何時だった

てヒロインがピンチに現れるものだよね。美狐ちゃんやああああッ！」

余計な真似をしやがって、何が“呼ばれて”よ。呼んでないっての、この馬鹿は。憤りから、思わずコブラツイストを極めてしまった。

ちなみにコブラツイストはフェイクで、崎原の叫ぶ理由は尻を抓られているのが原因だったりする。

「み、美狐ちゃんギブ！ 胸当たってるよ、美狐ちゃんの胸当たってるよ！ つうか何で俺コブラツイストかけられてるの！ 俺助けたはずだよね？」

「助ける何て言っていないでしょ。そんな暇あったら、私が食らってる間にあの女攻撃しなさいよ」

せっかくの不意打ち出来るチャンスが、勿体無いじゃないの——なんて付け足してあの女を指差した私を、崎原は目を丸くして見る。

「なによ？ その目は」

訊ねるなりこの馬鹿、笑いやがった。火で炙ってやろうかこいつ？

「いや、やっぱりあの娘の言うとおりでなあって思ってたね」

「あの娘？」

「君の初めての親友さ」

嘘……でしょ？ 何でこいつが、あの娘のことを——くそ、どいつもこいつも。今日はいろいろと衝撃の事実が多くて、頭こんがらがるわね。

ああ、もういい。とりあえず、今は目の前の問題から片付ける。

こんな時にあれこれ考えてもしようがないし、後で整理すれば良いか。今一度、弛んだ心に活を入れて気を引き締めよう。

「美狐ちゃんは周りに厳しいようで、自分に対しては何倍も厳しいってあの娘も言ってたけど……まあ、悪いね美狐ちゃん。俺はフェミニストだから」

女の子は助ける、例え拒絶されても。そして囧にするくらいなら、自分が囧になる。などと、自分のフェミニズムを私に伝えて崎原は

前に出る。

私を護ると示すように、右手を水平に伸ばして。

まあ、悪い気はしないけど、年下に護ってもらうほど柔な生き方はしてないわよ、私はね。自分の身は、自分で護る。だから崎原の腕を払い前に、隣に立った。

「美狐ちゃん」

「あんたには聞きたいことが沢山あるけど。まずは、こいつから済ませるわよ」

「ああ、そうだね」

仕返しはしないとね。戦う姿勢に入った矢先、女が崎原を見て歓喜の声を出す。

「あらあら、久しぶりね。アガレスちゃん」

「相変わらずだなランダ。俺はアガレスじゃないって前にも言わなかったか？」

知り合いなのこの二人？ それにアガレスとランダって聞いたことが……。

「そうだったわね。じゃあこう呼んだ方が良いかしら、ジョニー・リード大尉」

くすくすと含み笑いを決めて問い掛けるランダに触発されたか、崎原からどす黒い妖気が溢れ出した。意外だ。平賀や私の嫌味や凄みも軽く流すこいつが、こんな簡単に憤怒を露にするとは。それだけの因縁がある相手ってこと？

「崎原亮。それが、今の俺の名前だ。次からはそう呼びな」

「そう、じゃあ彼にも伝えておくわね」

指鉄砲で射つ仕草を見せて言う彼女に、崎原は目を剥いた。今度こそ、怒りをはっきりと表情に出して発した。

「来てるのか？ あいつが」

「私が居るのよ。嘘を付く理由があるとでも？」

眉間に深く皺を刻み、ランダを睨んだまま崎原は動けずにいる。

先程の私と同じだ。このままだとまた隙を突かれ兼ねない。故に一発、軽く鳩尾に肘を入れた。

「み、美狐ちゃん？」

「考えるより、あいつを捕まえた方が手っ取り早いでしょ」

「……そっか、そうだね」

私もあいつから聞き出したいことがある。普通に話して口を割るような相手じゃなさそうだし、捕まえて吐かせた方が楽だ。

「ううん。まいったわね。さすがの私でも、あなた達を相手にするのは厳しいから——」

逃げるとするわ——そんな言葉を合図にして、ランダは杖を地に突き刺した。紋章陣が浮かび上がる。転移魔法でおさらばする気？

「逃がすと思うかい？」

「思わない。だから、わいらは諦めるわ」

テンガロンハットを目深に被り、含み笑いを決め込むランダ。

あの笑みの意味は、言葉はいったい……諦める？ まさかッ！

振り返って見れば、案の定わいらに異変が起こっていた。体内から、口や目から僅かに光が漏れている。中から力の膨張を感じる。間違いない、爆発させる気だ。ランダに炎弾でもぶっ放して止めさせるべきか？ 無理だ、相手がそれを視野に入れてるに違いない。無駄な行為で終わるのが目に見えている。何よりも、あのフェミニストが背後の緊急事態に気付いてなかった。

「亮ッ！」

だからなのか、それは分からない。この時私は、咄嗟にあいつに飛び掛り、覆い被さる形で押し倒した。爆発から護るために。

そして次の瞬間だった。爆発が、その炎と風が私の背中を襲ったのは——

第二十九話『終わりと始まり』

最悪だ……背中を炙られるとは。諸に食らってしまった。

地面に落ちる際、フェミニストにクツションを担ってもらった……が、火に耐性がある身体とはいえ、やっぱりこっちの方がキツイ。崎原には可能な限り火が回らないよう、妖気で包みコーティングを施した。故にコイツの身体には火傷一つ負わずに済み。代わりに妖気を回せなかった私の服は焦げて、背中と太ももは丸出しに。うつ伏せで崎原の胸に顔を埋めている私だが、火傷の痛みを身を起こせずにいる。

ほんと、いろんな意味で最悪だ……。

「美狐ちゃんッ！ しっかりしてくれ美狐ちゃんッ！」

わいらを諦める——ふと、あの言葉が脳裏をよぎる。あの女はただ利用価値があると言っていた。

奪われれば今後の行動に支障が出る、知られたくない“何か”がわいらには隠されていたのだろう。だからランダは、奪われるくらいならと予め仕込んでいた爆弾を作動させた。

その何かについては大方見当が付く。操作と洗脳。そして兵器に関する事だ。

赤マントをサンプルとランダは口にしていて。つまりあの女は、先に述べた事柄の研究と実験を行っていて、わいらはその成果の一つだった——という線で考えるのが妥当か。

まあ、あの女の下らない企みやバックにいる者など、私にはどうでもいいことだ。こちらの障害になるなら纏めてぶっ潰すつもりではあるけど。

そんなことよりも——

「美狐ちゃん！」

今はこいつが――

「美狐ちゃー」

「うぜえッ！」

頭を勢いよく振り上げて、崎原の顎をはね上げた。唐突に訪れた衝撃により崎原は、顎を押さえて苦悶の呻きを漏らしている。

まったく、めちゃくちゃ揺さぶりやがって……傷に響くっつの。

「あんたねえ、こういうのは刺激せずにとって教わらなかったの？」
身体を起こして顔を覗くと、馬鹿は目に涙を溜めて私を見詰めていた。けっこう効いたみたいね。ふん、いい気味だわ。

「よかった……」

「ん？」

目元を覆うように額に手を添え、崎原は安堵の溜め息を漏らした。
そんな安心して何が良かったんだか……。

「美狐ちゃんが無事で、よかった」

崎原は呟いた。全然無事じゃないんだけど、そんな心配されると
つつこむ気も萎えてくる。

思えば今の体勢も、普段のコイツなら下品な冗談の一つや二つや
らかしそうなのに……まあ、それはそれでウザったいけど、これが
意外にも思えるわけで。

やっぱり調子が狂う。

とりあえず本人が落ち着くまで様子を窺うことにした矢先――

「美狐ちゃん」

額に載せた手を下げて、崎原は愁いに眉を寄せて、私に言った。

「もう、あんな真似は止めてくれ、頼む」

後悔、喪失感などの負の感情が、沈痛な面立ちからひしひしと伝
わってくる。

「嫌なんだ、もう。俺の所為で女性が傷付くのは、また守ることができなかったなんてこと……絶対に嫌なんだ」

この時、私は崎原が何故ここまで取り乱したのか、常にフェミニストを気取るのか、こいつの本音を、心の奥を垣間見た気がした。トラウマから逃げる為か、それとも向かい合う決意の表れか……どちらにしても、こいつも半端ない覚悟で何かを抱えているのだろう。

光我が昔の私に似ているなら、コイツは現在いまの私に似ている……コイツはあの娘のことを知っている。だから何となくだけど、分かる。コイツも、あの娘に出逢えたおかげで今の自分になれたのだと。

とはいえ、やっぱりコイツの言い分を聞く気にはなれないのよね。

だから――

「予め忠告しておくわ、亮」

目と鼻の先まで顔を寄せ、お互いに瞳を、視線を繋いで私は、自分の意思を述べた。

「私はね。奪われる側でも、守られる側でもない。奪う側であり、守る側なのよ。そこんところ、しっかり覚えててちょうだい」

「美狐ちゃん……」

「つまり、あんたと同じ立場ってことよ」

綻びている私の表情が、崎原の蒼い瞳に映っていた。鏡を見ての作り笑いとは、ひと味違う素の笑顔――こんな飾り気無しに笑った自分を目にしたのは、あの娘の瞳を覗いた時以来か……。

互いに見合わせていると、崎原はその瞳を閉じて穏やかな微笑みを浮かべた。

「わかったよ美狐ちゃん。ところでさ……」

「なに」

「その……顔近いし、この体勢は……ちょっと大胆だね」

頬を赤くして、崎原は私から顔を背けた。私だって好きでこの体勢になっている訳じゃないが、まあいい。とりあえず身体も動かせるくらいには回復したし、そろそろ起きるとしますか。

なんて時に、近付いて来る気配が――

「さ、崎原さん」

「な、なにやってんだ糞狐」

横から声がしたから振り向けば、顔面蒼白の光我と白鬼が呆然と立ち尽くしていた。いや、まあ白鬼は元から白いけど。

光我はどちらかといえば、用を足した後故にそうなっているのだろう。お腹を押さえていた。

白鬼はふんどし一丁で、身を抱いて何故か内股で立っている。右手は口元を覆い、衝撃的なものを目にした様子だった。

というか……何このベタ過ぎるタイミングは？

崎原はといえば、蒼白を通り越して顔面が崩壊を起こしている。

「うおおあああッ！　ち、違う！　断じて違うぞお前らッ！」

慌てて身を振り起き上がりとする崎原。けれど覆い被さる私が邪魔なので、それが叶わない。せめて空いている両手だけでもと、否定の素振りを振るって示す。

「う、羨ましいですッ！　僕も美狐さんを抱き枕にしてみたいですよおおッ！」

とんでもない勘違い＋願望が、瞳を潤ませた白鬼の口から出たのだが、聞かなかったことにしとく。

「糞狐、テメェ崎原さんに色仕掛けして何企んでやがる！」

コイツはコイツで面倒くさいし。私を睨んで指差すな。

「まったく……喧しいったらありやしない。ねえ？」

立ち上がり、私は崎原に手を差し伸べた。戸惑う表情は意外そうに沈黙へ、次には喜びの笑みへと染まる。そうして私の手を、崎原

は掴んだ。

二人の誤解に対して私達は適当に話を付け、この地を後にした。後始末は支魔が担うそうだ。場合によっては支魔がこの地を買い占める筈と、崎原が曖昧に呟いていた。

そういえば石岡だが――彼は今の仕事を辞めて、父が現在営んでいる祖父の農家を継ぐそうだ。今回の事件で決心がついたんだとか。自然を壊すよりも、育むことに残りの人生を使いたいと、きっかけを作ってくれた白鬼や私達に礼を述べていた。

これで少しでも失われつつある自然が戻れば良いが……まあ、そう都合良くはならないだろう。人間のエゴはそれ以上なのだから。それでも僅かな変化は大事だ。石岡のような自然を愛する人間がいるなら、まだ救いようがあるのかもしれない。今後に幸あれと祈っておこう。

帰り道、私はグローリアの窓越しに景色を眺めていた。行きと帰りでは、来た時とはまた違う印象を覚える。

思えば、この一日でいろいろな事があった。

何故か自分も支魔に入りたいと、付いてきた白鬼。

退魔組織紅蓮――変態爬虫類野郎の平賀に、あんばんたんで本当にイギリス人か疑わしいジェーンとの出逢い。

そしてランダと赤マントにわいら。羅刹党に絶狐丸兄さん。崎原から得た情報。

収穫も十分にあったけど……謎も多く残された。ひとまず帰ったらゆっくり身体を休めよう。情報の整理はそれからだ。平賀に殺された悠と、その子供達の供養も忘れてはならない。

やれやれ、問題は山積みね――

「美狐さん。大丈夫ですか？」

などと一息したところで、隣に座る白鬼が問いかけてきた。心配そうにこちらを見詰めている。ちなみにまだふんどし姿だ。

服を返してほしいと求めたところを私が睥睨してやると、白鬼は涙目で『なんでもないっす……うう』なんて諦めるように項垂れていたっけ。

「何が大丈夫、なのよ？」

「え、いや、なんか顔色が悪いような気がして」

「別にあんたが気にする必要ないでしょ、肌まで真っ白なあんたに言われたくないんだけど」

「すみません……真っ白くてすみません」

また、しょんぼりと顔を俯ける。まったく、このヘタレめ。キツく言うとすぐこれだ。威圧されて尻込みする子犬みたいで、虐めたくなるじゃないの。

「まあ、心配いらないわよ。気にかけてくれてありがとう」

私から礼を貰えたのがそんなに嬉しいのか、満足げに白鬼は胸を撫で下ろしていた。

心配いらないか……実際のところは、そうでもないんだけどね。

視界が霞んできたわ。

崎原と白鬼が会話を弾ませる間にグローリアは峠を下り、都市に入る頃には月が夕焼け空にうつすらと浮かび上がっていた。

「着いたよ美狐ちゃん」

「ええ……」

石造りの階段を上る先には、旅館が見える……それを買占めて改装した自宅。私と、心花の家だ。

「美狐ちゃん。君をスカウトしようと訪ねた理由も、あの娘についても、近いうち詳しく話すよ」

光我達を置いて、私を玄関まで送ると同行した崎原が発した。私としても、そうさせてもらうつもりだ。受け答えついでに別れを告げて、私は帰宅した。

「お帰りなさいませ、美狐様」

ただいまと口にしたら、心花が笑顔で迎えてくれた――が、怪訝に細い眉をハの字にする。

「どうしたんですその格好？ 服も変わっててボロボロですけど」

「まあ、いろいろあってね。今日はゆっくり湯につかせてもらおうわ」旅館を改装したこの家には、当然ながら露天風呂がある。普段はシャワーだが、今回は湯につかりたい。用意に時間は掛かるかと思いきや、心花が既に準備してあると、嬉しそうに微笑んだ。

「先に入ってて良い？」

「はい、着替えは私が持ってきますね」

「ごめんね心花。何から何まで」

「いえ、今日は一緒に入りたかったですから」

本当にありがたい。感謝の代わりといってはなんだけど、後で背中を洗ってあげよう。

斯くして私はシャワーを浴びている訳だが、やっぱり疲れた身体にはちょうど良い。湯の雨が、肌に優しく降り注いで気持ち良い。

緊張が解けて、ほっと溜め息が漏れた。ふと傍にある鏡に目をやると、身一つ纏わぬ私の姿が映っていた。まあ、入浴中だし当たり前であるが……見れば傷は既に癒えていた。今日一日で腹を貫き裂かれたり、腕を千切られたりと、散々な目にあったのが嘘のようだ。外見こそは心花と大差ない年端もいかぬ女の子だが、出ているところは出て、締まるところは締まっている。心花が見る度にプロポーズンが羨ましいと口にしたたり、入浴中に後ろから抱き着くなり胸を揉む時がある。

その度に私が無反応でいると、何故か不満な顔をしていた。いたい私に何を期待しているのやら――

「ウツ……ぐツ……ッ！」

痛い……やっぱり、限界だったか……。

鏡には、胸を押さえてつけて苦悶を露にしている私の姿が、はっきりと映し出されていた。しかしそれもぼやけつつある。私の視界が、意識が薄れて来ている。

「ぐ……ああ……」

いつの間にか、うつ伏せになっていた。シャワーの、水滴が床を、私の身体を打つ音だけが響く。

「み、美狐様ッ！」

最悪だわ。よりによって一番見せたくない相手に、こんな醜態を晒すなんて……。あんたにだけは、心配掛けさせたくなかったのに。「し、しっかりしてください！ 美狐様、美狐様ぁッ！」

泣いている姿は、やっぱりあの娘に似ている。

ねえ、美花。^{みはな} やっぱりこの娘は、心花はあんたと同じだわ――

初めて会った時の美花も、^{あんた}この心花と同じように、傷付き倒れた私を泣きながら揺すっていたわね。

あの時……あんたを突き放すようなこと言ってしまったけど、本当はすごく嬉しかったわよ……。

「しっかりしてください――美狐様ああッ！」

私は……もう二度と失いたくない……。

今度こそ護る……その為に……兄から力を奪い……私の呪いを……封印を……解き放つ……。

今度こそ……あいつを……ぶっ殺す――必ず殺してやる。

あの糞野郎を。

第三十話『追憶』

闇を駆け抜ける。道はいつまでも黒に染まり、先は見えてこない。しかし解る、この先に私が助けたい、救いだしたいと願う娘がいると――

「……ん」

木造廊下の先に佇む影、三人の虚無僧。否、法力僧だ。

「行かせぬッ！」

「去れい化け狐！」

靈力を流し込んだ錫杖を斜めに構え、阻む姿勢をみせる。くそ、何も知らない馬鹿共が……。

「邪魔をするな坊主どもッ！」

突っ切ろうとした私に対し、中央に立つ虚無僧が垂直に錫杖を降り下ろす。頭部に当たる手前で、私は踏み込んだ右足を軸に旋回して回避、そのまま懷に潜り込み肘を鳩尾に、腰が折れて顎が落ちたところを掌底で突き上げた。

倒れる仲間にも介すことなく続けて襲い来る虚無僧共を、私は容赦なく殴り飛ばす。炎を纏った拳をぶちこまれた拍子に天蓋が灰になるが、有り様など知ったことではない。奴らに構わず私は馳せる。

通路を終えて出た場所は広間。しんめいづくり神明造特有の殺風景が広がる床に、全身紺色の和服を纏う男が胡座をかいていた。暗闇でも煌めく水色の髪が、そよ風に靡く。見つめる先は風の方角。視線を追ってみれば、階段を上る先にある金剛力士像が雄々しく対に佇むのが目についた。

像の間に在るのは鏡、空間の歪曲を魅せる鏡だ。あの形状、真経津鏡かがみと似ているが、あの鏡は空間を歪曲させる現象を生み出す力な
ど持ち合わせていない。この鏡の概要と用途は別にあるようだ。

「よお、やっぱ来たかよ雌狐」

鏡を眺めていた男は立ち上がる。餓狼の口みたく歪ませて、紫電の眼差しを私に叩き付ける。ふざけやがって、今頭に來ているのはこっちだというのに。

私の内心の悪態など知る由もなく、奴は煩わしさを切り捨てるように首を振り、まあいいやと呟いて私に身体を向けた。

「美花は何処……」

「そろそろ儀式は完成する。喜べよ、今日は俺様が復活する最高の記念日さ」

私の質問を無視して男はこちらへと歩き出す。手をひらひらと振りながら。

「ヒヒ、永かったぜえ……神々共が俺様の送り込んだ“破壊”を潰してく間、コイツらをカモフラージュに俺様はチョロチョロ暗躍していた」

「美花は何処」

私も前に出た。透かさず質問を送る。

「だが、それも今日で終わる。世界中の神は、俺様が復活した瞬間、今まで護って来た地球ほしの生命すべてを敵に回すッ！」

声を高めて男は語る、下らない戯れ事を述べて止まない。欲望且つ狂喜を、両手を伸ばして表現している。

「美花は何処ッ！」

互いの距離が詰まって行くに連れて輪郭が、見据えたくもないあいつのくそつたれた面がくつきり見えてきた。

「ヒヒハハッ！ 爽快だろうぜこの瞬間んッ！ あいつらどんな面あ、すんのかなあ？ ヒヒハハッ、ハアッハハハハッ！」

何がおかしい、いい加減にしやがれ生ゴミが……さっきから無視してんじゃねえ。

「美花は何処だっつってんだ糞野郎ッ！」

沸点を越えた私の心は、憤怒は表へと溢れでた。自然と声にも怒気が籠もる。

「るせえぞ女色狐がッ！ テメエそれしか言葉知らねえのか安本丹ッ！」

互いに憎悪を、目と鼻の先で睨みぶつけ合う。

どちらが最初だったかは判らない、そんなことは気にする必要もない。とにかく、ただ私はこいつを殺したくて堪らないから、だから拳を振るった。

『死ねッ！』

互いに憎悪を籠めてぶちまけ、闘志の火が、爆発的に心を燃やす。私の炎拳が奴の頬に、逆に奴の貫手が私の鳩尾に突き刺さる。

私の意思を体現するかのように、爆炎が奴の頬を燃やし吹き飛ばす。その拍子に私の鳩尾に刺さった奴の手が抜き取られる。鮮血が潮吹くように出た。心臓に傷を付けられたか……けれどそんなこと、今はどうでも良い。

あいつを殺すッ！ 美花を救う。それ以外はどうでも良いッ！だから駆ける。一発でも多く叩き込んでやる為に。

「オオオオッ！」
私は突貫する。

「ヒヒハハッ」

引き抜いたあいつの手は私の血に塗れている。それをニヤリと、

焼けただれた顔を不敵に歪めて舌舐めずり、付着した腕の血を舐めた。

気色悪い、私の血を舐めるな。不愉快だッ！

「死ねッ！」

「デメエがなッ！」

奴が手を振り上げた、次に起こるは鎌鼬現象。私は右にステップを、回避を決めて一氣に間合いを詰めた。

「デメエ」

難色強張るあいつの鳩尾と金的に山突きを打つ。下半身の急所は確実に潰した。身悶えする間も与えることなく私は追撃を行う。旋回により遠心力を味方に付け、円盤投げの要領で炎を奴に放つ。

至近距離で着弾した炎は、奴の上体を容赦なく吹き飛ばす。上体の和装が火の粉となって散り、袴だけとなり男の細身が露となった。似合わぬ程に筋が浮いて頑強さが際立つ肉体には、火傷の痕がない。だが、想定内だ。

狙いはダメージではなく、隙を生み出す為の牽制。こいつを決める為の目眩ましだ。

「幻影乱舞……つつたか？」

既に二桁を超える数の私が包囲する中で、あいつは緊張を見せる様子もなく、寧ろいい加減にしろと相変わらず煩わしさを顔に浮かべている。

「しゃらくせえッ！」

あいつを囲うように光が浮かぶ。同時に幻体全ての私の顔手前で空間に亀裂が走る。瞬時にそれは開き、拳が飛び出た。幻体は全て頭が消し飛び消滅、本体の私はガードしたが、それが仇となりバレー隙となる。

「見つけタァッ！」

卑下た笑みを浮かべて、血走る眼が私を捉えた。焦りが鼓動を強く波打つ。そんな中で先程の幻体を蹴散らした空間の亀裂が、私の

身体の至るところ手前に出現した。

「ヒヒハハハッ！」

見れば奴の手前にも空間が歪に捻れ、黒い静電気を帯びた穴が螺旋を生じて在る。奴が拳を突っ込むと、それが私の右頬の亀裂から穴が開き、拳が飛び出す。

思い切り殴られた。それを皮切りにあいつは一気にスパートを掛けて来る。

「オララララヒヤッハハハハッ！」

穴の中に神速を想わせる乱打を放つ毎に、小刻みに私の身体が震え、血を撒き散らして悲鳴を上げる。区切りの一撃が鳩尾に決まり、押さえたまま腰がくの字に折れた私の顔面に、容赦ない渾身の拳が飛ぶ。

諸に受けて鼻が拉げ、水を叩く音と鼻血の溢れが重なり弧を描く。私の身体は天井に叩き付けられた後、受身も取れずに崩れた天井の破片と共に床へと落ちた。

「まだだぞ女色狐ッ！」

天井が壊れて露になった夜空、その無数に星が存在する黒い世界から、一つだけ朱に光を放つ凶星。

一際大きな朱の星……だんだん大きくなって……こちらに来了。

「流星落とし」

あいつが呟いた。不気味にも木霊が室内に響く。

流星落とし——そういうことか。

「ぐちゃぐちゃに肉片散らしやがれやッ！」

調子に……乗るなッ！

頭上左右に手を付き、私は足から跳ね起きる。身を逆立ちにして、同時に来襲してきた真っ赤なそれを蹴り飛ばした。焰が激しく轟きと共に散らす。そのまま貫け。

「なッ——ゴヘアッ！」

一直線に奴の腹に風穴を空けて、隕石は壁を壊して遠くで爆発を起こす。この建物の外、深緑の地を紅蓮に染め上げた。後ろの惨状

にも劣らずの痛手を抱えて、奴は憎らしげに発した。

「て、テメエ……妖気を足に回して、反射の効果を」

ええ、施したわよ。悪いとは思わないけど、そんなこと言っている余裕も、隙として見逃すつもりはない。

唇を紅く塗らす鼻血も、今は気にならない。一気に畳み掛けてやる。頭に浮かぶのは、胸に集まるのはお前に対する殺意と憎悪だけだ。

間合いは取った。くたばれッ！

手始めに膝を蹴る。折れる感触を確かに、続けざまの回し蹴りを頸椎目掛けて打つ。怯んだところで、脳天に踵を降り下ろし、そのまま地面に叩き付けて頭を踏み潰すッ！

土下座を強制させた。

「ガッ——」

これで、トドメを決めるッ！ 後頭部から拳で潰してやるッ！

「いい加減にしろヤッ！」

矢先、足を掴まれて翻り宙吊りにされた。同時に背中に打突の刺激が走り抜けた。堪らず悲鳴を上げたが、私が死ぬまで止めるつもりがないのは分かっている。

背中の肉を抉る痛覚。爪を食い込ませ、力任せに肉を押し広げて行くのが嫌でも伝わる。左足首にも圧迫感がある。締め付けると言うより、握り潰し千切る。そんな殺意が暴力となり宿っていた。

だからといって、このまま殺られるつもりは毛頭ない。私に四つの尻尾があることを忘れたか、生ゴミッ！

「ぐっ」

突き刺す。四尾全てを上体に、どこに刺さったかは判らないが、足を掴む手が弛んだ今なら脱け出せる。

「離せッ！」

蹴りを入れてそのまま離脱を図り、床を屈んだ姿勢で滑って再び

奴と相對。右目と左肩、右胸と脇腹に刺し痕が目立つ。先程の尻尾によるものか。何にせよ動きが鈍い今が好機。

今度こそ、決めてやる。

そう足首の痛みを堪えて駆け出した刹那――

「させるか糞がッ！」

奴がこちらに左手を翳し、空間の亀裂がまた眼前に現れたが、無駄だ。開く前に握り潰す。そして、こちらから閉じるッ！

奴の方を見遣れば、右の五指が有らぬ方向へと曲がりくねっていた。おそらく私が強制的に空間を閉じた為、障壁が生まれたのだろう。思い切り壁を指で突いた故の結果というわけだ。変形した指はまるで蛸の足を彷彿させる。慌てた様が実に滑稽で、好い気味だ。そのまま醜い様を晒して、死ねよ。

「オオオオオッ！」

勢いに乗った今なら、殺れる。この炎を纏った手で、爪で、その胴体を八つ裂きにしてやるッ！

奴の顔は、強張っていた。迫り来る私に吞まれたのが直に伝わった。勝ったと確信を抱いた……が、ここで私は勝機を切り捨てた。

あいつの後ろにいる、彼女の姿が目に入ったから。

「美花……」

何時から居た？

あの娘は何時から階段にいた？

「美花ッ！」

叫んだ私の方を見向きもせず、悠然たる足取りで登って行く。行き先は鏡の歪か？

「ひ、ヒヒハハハ……時間切れだよ糞狐」

「時間切れ？」

焦りを隠したつもりで横目に奴を凄んでみせたが、怖じける様子はまるでない。寧ろ私をざまあみろと罵っているかのように、勝ち

誇った笑みを浮かべている。

「儀式は終わったのさ。ミハナは自動で、自分の意思関係なく完全体の俺様の核となる」

「なっ」

私が驚愕を隠せないでいる間も、美花は階段を上がって行く。早く、助けに行かないと。

「させると思つか！」

再生した。損傷した身体を完全に完治させて、奴は立ちはだかる。邪魔をしゃがって――

「どけッ！」

「おっと――」

爪撃が躲され、腹部に膝を入れられた。後退りを余儀なくされてしまった。

「くそっ！」

悔しさが込み上げて来る。目の前なのに、こいつが邪魔をして通れない。私とこいつの力の差が開かない、抜けず拮抗する。

炎と空間が、妖気と神通力がぶつかり合う。そんな中で、美花は目もくれずに登って行く。

くそ、くそッ！ どけッ！ どけえッ！

畜生め、何で倒せない。くそ、どうすれば倒せる。

『……美狐』

戦いの最中、美花がぼつりと呟いた。けれど確かに、私の耳に届いた。

『ごめんね、私の為に』

命を掛けてでも助け合う、仲間よりも強い絆、それが親友――私にそれを教えてくれたのはあんたよ、美花。

『私を救おうとは、思ってたはだめ』

知るかッ！ 救いたいから助ける。今回ばかりは、あんたの意思は聞かない。私の我儘を優先する。

『私は悪だった。悪だったのよ美狐。あなたにいつも偉そうに説教していたけど……私はそれ以下の――』

違うッ！ あんたは悪じゃない！ 悪は、私やこいつのような奴を言うのよ、あんたは違うッ！

私のような生きる価値も無い愚物を救った。生き方を見失った私に、道を創ってくれた！

『美狐……』

帰るわよ美花。村のみんなは死んだ。

私が不甲斐ないばかりに、みんな護れなかった。

私を家族として慕ってくれたみんなはもう……この償いは必ずする。だから、だからあんなだけはいなくならないで。

私にはもう、あんたしか護るものがないのよ。

『でも、無理だよ』

「美花ッ！」

もう、鏡まで……ダメッ！

「行っちゃ駄目よ美花！」

「おっと、隙だらけだぜ」

「ぐ、アアッ！」

くそ。土手っ腹を貫かれた。口内に血が広がって――けど、おかげで吹っ切れたわ。もう、迷いも痛みも、切り捨ててるッ！

「どけッ！」

密着したなら、こいつは躲せない。頭は両手で掴んだ。殺れる。

爆ぜろッ！

「ッ！」

吹き飛んだ頭は脳髓を撒き散らして、首筋から噴き出す血は倒れた拍子に瞬く間に床へと円形に広がる。どうせ再生するんだろうが、無視だ。

奴が刺した腹の右腕を引き抜かず切断して、腹に抱えたまま階段を駆け上ることにした。余裕がないのだ。形振り構っている暇はない。

間に合え――

『美狐……』

見えて来た、後少し――

『今までありがとう』

振り向いた。微笑んでいる、手を伸ばせば――

『そして、さよなら』

お願い。この手を、この手を掴んで――

「美花ああああッ！」

あの日、私は彼女も救えなかった。本当に大切なものは、失って

から気付く。

「ヒヒハハハッ！　これで、これで漸く。俺様の……否、私の悲願が果たされる」

無くした時、漸く理解した。私が欲しかったものは、本当は何だったのかを。

『狐の異物よ、今まで我に逆らった罪は重い。故に、我が手でそなたを摘もう』

「黙れ……」

『凄んでも無駄だ。我が世に解き放たれた以上、新世界が——』

「黙れつつってんだ愚物が」

だから許せなかった。だから私の中にある何かが崩れ去り、心の奥底で暴れだしたのだと思う……嫌、解ってはいた。

こいつは何時も、出てこないよう扉に鍵を閉めていた。そいつが今、扉を蹴破ろうとしている。本来の私へ目覚める為に。

「何の罪もない命を弄び、幸せを奪いやがって……お前は殺す。私の手で殺す」

視界が血の色に染まり、発した言葉を最後に――

『死んで詫びろ、糞野郎ッ！』

あの日、私は覚醒した。

第三十一話『辛い優しさ 前編』(前書き)

イラストの練習をしているこの頃です

> i 2 9 6 8 1 — 2 9 1 <

第三十一話『辛い優しさ 前編』

眩しい……そう思って目が覚めた朝。最初に映ったのは、見馴れた我が家の天井と輪形の蛍光灯。見渡せば心花と一緒に撮った写真が立てられた戸棚。部屋から廊下を越えた先には、池や苗木の囲う庭がある。自分でデザインしておいてなんだが、相変わらず殺風景だ。

私は一体？ などと考えるまでもない。自分の身に何があったか、その後どうなったのかはだいたい察しがつく。

妖気の消費、ダメージの負いすぎ、力の解放などが原因で疲労がピークに達した。その過労により倒れた私を彼女、心花が運んで介抱してくれた。

そんなところだろう。

「はあ……情けないわ。ほんと」

額に手を当ててみると濡れタオルがあった。冷気は残されておらず、私の体温から熱を吸収したのか、随分と温くなっている。

そんな濡れタオルを見詰めていると、『あっ』と驚きの声が横から耳に入ってきた。声の方を向けば、廊下にぽつんと立つ心花の姿が。

「美狐様。気が付いたんですねっ」

両手に膳を持ったまま問い掛ける心花に、頷くことで大丈夫と伝える。ずっと心配していたのだろう、それを聞いて今にも泣き出しそうな顔で「良かった」と、心花はほっと安堵の息を漏らす。

憂いを帯びていた表情も穏やかになって心花は、断りを入れて私の傍へと腰を下ろした。畳に置いたお膳の上には、見覚えのある消しゴムのような白い粒が。

ん？ 私の記憶が正しければあれは――

「タオル。後で替えましょうね」

「え、ええ」

怪訝を覚える矢先、私の額からタオルを取る心花だが。安心した笑顔がまた憂いに染まる。太股に折り畳んだタオルを置き、白い粒の方に手を伸ばして言った。

「心配したんですよ。美狐様、凄いうなされていたんですから……熱もありましたし、死んでしまいうんじゃないかって……とても、怖かったです」

手に持つ粒を握り締めて、心花は沈痛な面立ちを俯ける。影を纏い震えているこの娘の姿は、見ていて心が痛む。強く、私を叱り付けるかのように鼓動が波打つ。

分かっている。伝えるべきことは一つだ。

「ごめん心花。本当に迷惑をかけたわね」

ちゃんと笑えているだろうか？ 私が元氣だということを示すことで、少しでも不安を取り除いてあげたいのだけど……そう思い、心から感謝の気持ちを伝えてみた。すると頬を紅く染め、手と首を大袈裟に振っては謙遜する心花。

「いつも迷惑かけているのは私の方ですし、謝るのは……私の方ですよ」

「そんなことないわよ。あんたが私を介抱してなかったら、本当に死んでたかもしれないんだからね」

それに何だかんだで家事もしっかりやってくれているし、心花には迷惑どころか、逆に世話になっていくくらいだ。謙虚なところもいが、もう少し自分に自信を持つてほしい。

しゅんと俯く心花を、しみじみと見詰めていたら――

「稲荷大明神様から頂いたこのお薬があったからです。これがなかったら、どうなっていたことか」

顔を上げて効果の程が良かったと微笑み、先ほどから気になっていた白い粒を見せた。

それよりも心花は今、なんて言ったのかしら？

あれ？ おかしいわね。私の聞き間違いじゃないなら、稲荷大明神って言葉が出てきたんだけど。眉間に人差し指をぐりぐり挿じ込んで怪訝を唸らせてみたが……現実逃避しても仕方ない。観念した私は、もう一度だけ心花に確認をとってみた。

出来れば聞き間違いでありますように、と切に願う。

「稲荷大明神様からですよ。大明神様が、もし美狐様が過労などで倒れたりしたら“迷わず使え”と」

願いは叶わず。笑顔で最悪の返答をくれたよ、くそつたれ。聞き間違いじゃなかった。そうであってほしかったのに。

「ど、どうしたんです美狐様？ 何か不機嫌そうですけど」

額に手を載せ、思わず悪態付いてしまった私に懸念を送る心花。

別にあんたが悪い訳じゃない、あいつの薬ということが問題なのだ。前回光我に渡した神活水を初めに、あいつの開発する薬は効力に比例して副作用も半端ない。それもろくでもないものばかりだ。

薬物にも耐性をもつ私ですら、あいつの開発する薬の副作用には耐えられず、ひどい目にあったものだ。

「さあ、とりあえずお薬を」

口に出すなり心花は、私の胸元まで被さる毛布を取り、そのまま着ている浴衣の帯を外し始めた。

い、嫌な予感がする。

「み、心花。何してんの？」

「何って、お薬を入れるに決まっているじゃないですか」

いや、それは分かる。何で脱がすのかを聞いているんだけど、そして何で下着つけてないのかな私？

それでもって下から脱がそうとしているのは、まさか……薬って座薬？

「腹這いになってもらっていいですか？」

当たりか。ならば――

「断る」

「え、でも、これは」

知っている。だから――

「断固拒否する」

急ぎ起き上がって逃走を図る私だったが、立ち上がろうと手を畳について力を入れた瞬間。何故か意思が伝達されずガクンと肘が折れ、前のめりに倒れ込んでしまった。

そして図らずも心花の要望通り腹這いの――否、それよりも情けない“への字”姿勢を晒すことに。

何故そうなってしまったのか、真相を探る暇も無く。

「逃がしませんよっ」

後ろからがちりと掴まれてしまった。あれだ、昔、悪戯やらかした子供が尻叩きされる時のあの体勢。

「ちょ、心花」

う、動けない。しかも力が入らない。これって、万事休す？

「入れますね」

「お願い、まっ！」

抵抗も虚しく、事は終わった。

後で知ったことなのだが。私が寝ている間、心花は既に一回薬を投与していた。この薬の副作用は一時的興奮を引き起こし、後に弛緩するものだった。

早い話、安定剤と活力剤ってところのこれだが、悪夢を見る程うなされる興奮状態、それに陥るってのは安定剤としてどうなんだろう。

その後に訪れる弛緩も、どちらかといえば麻痺に近い。リラクセ

ーション反応にしては荒療治を通り越して悪質だろう。かなり矛盾している。

が、前述の通り概要は回復を目的とする医薬品。効果は確かであり、驚くことにたった一日で体調は良好へと向かった。この調子ならすぐに街中を歩けるだろう。しかし心花はそれをよしとしなかった。

「駄目ですよ。明日まで安静しててください」

「もう大丈夫よ。風呂に入るわね」

「だめです！」

せめて家での行動は自分の意思でと訴えたものの。

「入る必要ありません。私がタオルで拭きます。あと着替えも用意しますから。さ、そこで寝てください。熱や病気は治りかけが危ないんですからね」

無理やり布団に押し込まれ、諭された。完全に病人扱いだ。確かに薬の副作用の影響もあってか、いまいち力が入らない。それでも入浴や食事くらいは出来る。にも拘らず、介護精神全開の心花は、私の世話をしようと頑なに拒んだ。

「はい……分かりました」

下手に抵抗すると布団に縛り付けられそうな勢いだった為、不本意ながら折れることにした。

誰かにケアされるなんて、美花の時以来か……過去に於いて烈狐丸兄さんにも看病してもらったけど、あれは今でも羞恥心を拭えずにいる。

気を許した兄妹とはいえ、異性に身体を拭かせるのは些か躊躇いがあったのに、あの兄はまるで関心なくやりやがった。ただでさえ崩れかけていた、僅かな乙女心が完全に砕け散ったのも、今では甘酸っぱい良き思い出。

「はい、身体拭き終わりましたよ」

「……ありがと」

こうして身体を弄られて動じなくなったのも、苦い経験の賜物か。

何だか悲しさ通り越して笑いが込み上げてくるわ。

苦笑もまた束の間、着替えが終われば食事の時間。これも心花が面倒を見ることに。

「はい、あーんして」

言われた通り口を開けば、塩味薄いあつあつのおかゆが舌に乗せられる。口内に熱気が広がってゆく。熱い食べ物も好みではあるが、心花のおかゆは熱すぎる。椀の中で気泡が生まれては破裂を繰り返す様は、まるで白いマグマだ。

私みたく火の耐性がなかったら、顎を抱えてのたうち回っているだろう。意味もなく崎原の奴でイメージしてしまった。そんな私の内を知る由もなく、心花はせっせと口の中へ運ぶ。あの、もう少しペース落としてほしいんだけど……。

「それじゃ美狐様。ゆっくりしててくださいね」

完食したことに満足したのか、心花は活気溢れる様子で食器を片付けに出て行く。独り残された私は、あの娘の張り切り具合にただ呆れ、溜め息を漏らすしかなかった。

「それにしても、随分といきいきしているわね」

その分、空回りしている気もするんだけど、本人が良いなら大丈夫か。

初めて出逢ってあれから四年。心花は今年で十七歳になる。思えば初対面は最悪だった。私を恨み、拒絶していた。それが今じゃあ私をこうして慕ってくれている。

その辺の女の子とさほど変わらなかった言動も淑やかになって、いつの間にか人を様付けで呼ぶようになってしまった。

ほんと人は変わる。いや、これは進化、成長と言うべきなのだろうか？

ま、何にしても――

「私に死ねば良いのに、何て言ってた頃が懐かしいわ」

この時は、稲荷の薬の所為で感覚が鈍っていたこともあった。けど、それでも口にすべきことではなかったのに、ぼつりと漏らしてしまった。

湯飲みが割れるまで。心花が廊下に佇んでいたことに気付けずに。

「心花——ッ」

「え……あ、ご、ごめんなさい」

動揺を隠せず、心花は慌てて割れた湯飲みの欠片を拾う。

「……手伝う？」

「い、いいです。お気遣いなく」

控えめな口調の中には、明らかに『来ないで』と突き放そうとする意思が孕んでいる。陰湿な雰囲気包む部屋で私はただ、かける言葉もなく、この娘が黙々と片付けるのを見ていることしかできなかった。

やがて全て拾い集めて心花は、哀しげに俯いたまま私に背を向けた。

「美狐様……ごめんなさい」

去り際の呟きを、私は聞き逃さなかった。

「あ、心花。待ちなさいッ！」

私の制止を振り切るかのように、心花は行ってしまう。廊下に広がるお茶をほったらかしたままで。

あの様子だと戻って来そうにないわね。

まさかあの娘が、今日まであの日の事を引きずっていたなんて……いや、元々繊細で傷付きやすい娘だ。過去にぶつけた怨嗟の言葉も、未だ罪として心に抱えているのかもしれない。

もしかすると、倒れた私をあんなに心配していたのも……あの日の罪悪感から？

「どっちにしても、話さないと駄目よね」

話すことでしか分かり合えないこともある——烈狐丸兄さんや美花から教わった事だ。大分良くなった身体を起こし、私は心花を追

うことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0055d/>

妖狐玉藻伝-幻惑の美狐-

2011年9月16日03時31分発行